

博士論文

論文題目 李喬文学と“台湾意識”の形成——フォークナー、安部
公房の受容と“歴史素材小説”創作をめぐって

氏 名 明田川 聡士

目次

凡例	6
序章	7
第1節 李喬と台湾近現代史	
第2節 先行研究及び問題提起	
第3節 研究方法及び論文構成	
第1章 李喬『結義西来庵』における抗日表象の重層性 —— 1970年代官製文学の中での抵抗と台湾意識の再編成	24
はじめに	
第1節 『結義西来庵』の背景	
1. 李喬と西来庵事件	
2. 官製文学としての『結義西来庵』	
第2節 抗日表象の中華民族意識への接続	
1. 歴史描写の偏重性	
2. 民族と抗日への傾斜	
第3節 『結義西来庵』と台湾意識の再編成	
1. 余清芳による抗日とアイデンティティの探求	
2. 1970年代台湾社会と台湾基督長老教会	
小結	

第2章 “虚構”の想像と創造

——李喬『寒夜』三部作におけるフォークナー作品の影響を中心に

50

はじめに

第1節 日本語経由でのフォークナーの受容

1. 台湾におけるフォークナー
2. 李喬と日本語訳フォークナー作品

第2節 『寒夜』三部作におけるフォークナー作品の影響

1. 蕃仔林とヨクナパトーフア
2. 物語の時代性、地域性及び普遍性

第3節 『寒夜』三部作における台湾本土的テーマの展開

1. 構築される共同体意識
2. フォークナーからの脱離

小結

第3章 李喬の短編小説「小説」と1960年代台湾文学界における安部公房の受容

——台湾文学における1960年代実存主義運動から1980年代民主化運動への展開

78

はじめに

第1節 李喬と実存主義

1. 1960年代の台湾文学界と実存主義
2. 李喬の安部公房への接近

第2節 李喬の短編小説「小説」と安部公房『砂の女』

1. 「小説」におけるシーシュポスの表象
2. 『砂の女』の実存主義的作風

第3節 戒厳令下の台湾と安部公房作品の受容

1. 台湾における安部公房作品の熱狂的歓迎
2. 問い直される主体的実存

小結

第4章 李喬『埋冤 1947 埋冤』における孤児意識からの脱却

——二二八事件をめぐる歴史描写と戒厳令解除後の台湾社会との関係から 103

はじめに

第1節 “二二八小説”の誕生とその展開

1. 二二八以降白色テロ下での二二八小説
2. 美麗島事件以降における二二八小説

第2節 『埋冤 1947 埋冤』での二二八をめぐる歴史描写

1. 李喬と二二八
2. 二二八の写実的描写と戦後台湾社会への通底

第3節 孤児意識からの脱却とその超克

1. 台湾人と孤児意識
2. 1990年代前半の台湾社会と族群の融和

小結

終章	137
第1節 李喬文学における“歴史素材小説”の意義	
第2節 本論の研究成果	
第3節 今後の研究課題	
注釈	143
主要参考文献	201

凡例

- (1) 引用文の仮名遣いは、旧仮名遣いを含め、すべて原文のままとした。
- (2) 引用文の旧字体は、人名を除き、新字体に置き換えた。
- (3) 引用文の文中を一部省略する場合は、三点リーダー2字分（……）で示した。
- (4) 引用文の原文に三点リーダーがある場合は、その上に「ママ」とルビを振った。
- (5) 引用文の中で言葉を補う場合は、亀甲括弧〔 〕と「一筆者注」という表記で、これを示した。
- (6) 引用文の文中に段落替えや行替えがある場合は、全角斜線（／）で示した。
- (7) 原則として、注釈で示した原文中に異体字がある場合は、すべて正字に置き換えた。
- (8) 注釈で示した原文中に簡体字がある場合は、表記の際にすべて繁体字に置き換えた。
- (9) 原則として、本文中のかぎ括弧「 」は引用を、引用符“ ”は強調を示す。但し、本文中でのかぎ括弧「 」が、作品名を示す場合もある。なお、原文中に引用符“ ”が存在する場合は、その引用では山括弧〈 〉に置き換えた。また、作品名中にかぎ括弧「 」が存在する場合は、それを二重かぎ括弧『 』に置き換えた。
- (10) 本文及び注釈中では、引用表記のかぎ括弧「 」の直後にも、適宜日本語訳を示した。
- (11) 原則として、本文中では李喬作品の書名（あるいは作品名）の直後に邦訳書名（あるいは邦訳作品名）を示した。既訳が存在する場合を除き、これらはすべて拙訳によるものである。
- (12) 固有名詞のルビは、客家語・台湾語（福佬語）・北京語・日本語等を適宜振った。
- (13) 原則として、引用文の原文に漢数字がある場合は、アラビア数字に置き換えた。

第1節 李喬と台湾近現代史

台湾は1895年の下関条約（馬関条約）で清朝から帝国日本に割譲され、第二次世界大戦の終結によりその統治が終わるまで、およそ半世紀のあいだ日本の殖民地統治下にあった。第二次大戦後は中国国民党（以下、国民党と略す）による統治が開始されたが、国共内戦の影響下で三十八年を越える長期戒厳令が敷かれ、事実上の一党独裁が続いてきた。戒厳時期には、政治活動はもとより市民の言語や思想、行動に至るまで幅広く監視、統制され、戦後台湾社会は言わば国民党による再殖民地化によって代行的に日本統治からの脱殖民地化が行われたのである。

このように二重の被殖民の歴史を抱えた二十世紀台湾社会に生を享け、日本統治期から国民党統治期に至る社会状況の変化を経験しながら、台湾が抱える重層的な近現代史の様相を文学作品として描き出したのが、現代台湾文壇を代表する客家人作家・李喬（1934-）である¹。その代表作『寒夜』三部作（1979-81）は、清末から日本統治期終焉まで半世紀の台湾史を描き出した壮大な大河小説であり、台湾文学における古典的作品として知られている。李喬は実質的な第一作である短編小説「酒徒的自述」（酒好きの自叙、1959）を創作して以来、すでに短編小説230編以上を発表し、中・長編小説18作を刊行してきたが、その旺盛な創作活動は今日に至るまで続いている²。李喬の小説は、台湾近現代史の流れを描く大河小説以外にも、政治的禁忌を衝き台湾社会の啓蒙をはかる政治小説、歴史的抗日義士の生涯を描く伝記小説、同時代の社会現象を題材とする写実主義小説、中国民間説話の翻案小説、伝統的な大衆向け読み物である武侠小説、作者自身を物語の中に取り込むメタフィクション小説など、創作内容はバラエティに富む。その一方で、小説創作のほかにも文学評論や文化・社会批評の書籍も多く刊行するなど、その文芸活動の領域は幅広い³。こうした長年にわたる多種多様な創作活動の結果、李喬は2006年に台湾文化界における最高位の褒賞のひとつである国家文芸賞を受賞した。その受賞理由に、李喬の「作

品は生活及び族群の起点から出発し、創作は台湾という共同体での生活や歴史的內包、人間の本性にある普遍性と獨創性に向かって広く推し及び、その作品は多元な文化的意義を備えている」⁴と明記されたように、李喬の文学作品の特色とは、台湾に生きる庶民の姿を台湾近現代史の壮大な流れの中で描出することであり、その作風は台湾の歴史的展開と不可分な関係にあったと言える。

李喬は日本統治期後半にあたる 1934 年に、新竹州大湖郡大湖郷香林村（現、苗栗県大湖郷静湖村）で、抗日左派の活動家であった李木芳（?-1964）とその妻の葉冉妹（?-1965）の三男として生まれた。台湾中部に位置する当地は、客家人の多くが暮らす山間部の集落であり、清代には“蕃仔林”と呼ばれ、原住民族の生活区域に隣接した辺境地帯であった。李喬本人によれば、自身の生まれた場所は苗栗県内で最も貧しい集落に該当するという⁵。台湾では十七世紀初頭にオランダ人が南台湾を統治した頃には、中国大陸から閩南系漢族（福佬人）を中心とする台湾への漢人移住が開始しており、その後鄭氏三代による統治を経て、清朝統治期には大陸からの移民数が急増した。清代には広東からの台湾移住を禁止する政策が採られたために、広東を拠点とした客家人の移住は福佬人よりも大幅に遅れ、後発の客家系移住者の一部は、“蕃界”と呼ばれる原住民族の生活圏と隣接する山間部に危険と隣り合わせで土地を求めざるを得なかったのである。蕃仔林——よそ者の土地——とは、清代以来その地に移住した客家人が、辺境に位置する自らの土地を呼ぶ際の呼称でもあった。

若林正文『台湾抗日運動史研究 増補版』（2001）は、日本帝国主義の台湾統治史が台湾人の抗日運動の展開と表裏一体の関係であったことを説き明かしているが⁶、李喬が幼少期を過ごした家庭環境もこうした抗日運動の歴史と無縁ではなかった。台湾では日本の殖民地統治が始まって以来、武装抵抗による抗日運動が頻発したが、1915年に台南で起きた漢人による最大にして最後の抗日武装蜂起である西来庵事件を分水嶺に、抗日運動は台湾文化協会や台湾農民組合を中心とする合法的な抵抗活動へと変容してゆく。こうした日本統治期の抗日運動史とは、李喬自身も深く関係していた。かつて父親の李木芳は台湾

農民組合の大湖支部長をつとめた時期があり、苗栗地方の抗日運動では中心的な人物でもあった⁷。『寒夜』三部作の第二部『荒村』（1981）で台湾農民組合大湖支部の幹部として躍動する劉阿漢は、まさに作者自身の父親をモデルとしている。但し、台湾農民組合は結成以来破竹の如く同伴者を増やしたが、二一二事件（1929）で台湾全島の拠点が一斉に摘発されてからは地下組織化し、1930年代初頭には活動を停止してしまう。李喬自身の回想によれば、幼少時に父親は抗日運動のために絶えず家を空け、母親が一人で留守を預かる姿を常に見てきたという⁸。李喬は蕃仔林で不在の父親に代えるかのように、原住民族であるタイヤル族の頭目や中国大陸から渡台してきた唐山人の老人と触れ合いながら成長したのであり、そうした幼年期に経験した記憶の数々を、「阿妹伯」（阿妹おじ、1962）をはじめ、「鹹菜婆」（漬物ばあさん、1967）や「山女」（山の女、1969）など初期の短編小説の中で繰り返し描いていった。

このように台湾の近現代史と密接に関係する生活環境や家庭情況が、李喬の個人的内面に与えた影響は大きく、それは創作の面でも作者自身の特色として現れてゆく。李喬は1954年に台湾省立新竹師範学校（現、国立新竹教育大学）を卒業後、金門島での空軍兵役を終え、1960年代には苗栗県内の小中学校で国語教師をつとめながら本格的に創作活動を開始するが、その際には自身と馴染みの深い“蕃仔林”を主要舞台とする一連の短編小説を創作し、それらは後に作品集『山女—蕃仔林故事集』（山の女—蕃仔林の物語集、1970）にまとめられている。

そうした中で、李喬の文学に対する意気込みを決定付けたのは、文芸誌『台湾文芸』で発表した短編小説「那棵鹿仔樹」（あの梶の木、1967）による第三回台湾文学賞の受賞であった。同作は1960年代半ばにおける急成長する台湾経済の裏に垣間見える農村の都市化の陰に着目した物語であり、当時台湾で普遍的に見られた農村地区の社会現象を写実的に描き出している。ここで李喬は台湾文学賞の受賞にあたり、「わたしはより一層ひたむきに、より一層文学の開墾に忠誠を尽くし、老いて死ぬまで続けたい」⁹と自身が生涯にわたり作家として精力的に創作してゆく決意を初めて公然と表明したのである。こうして

李喬は文壇登場後まもない 1960 年代後半にかけて、第一作品集の『飄然曠野』（曠野にひとり、1965）をはじめ、『恋歌』（1968）、『晚晴』（夕晴れ、1968）、『人的極限』（人間の極限、1969）など、自身の個人作品集を次々と刊行していった。梅遜編『作家群像』（1968）でも、「創作に従事した時間は短いが、成果はいっそう非凡で、いっそう輝かしい」¹⁰ 青年作家として評されたように、李喬は 1960 年代を通して台湾の本省籍若手作家を代表する一人として認知されていったのである。

やがて 1970 年代に至ると、李喬の作風は台湾社会の時事的問題を小説の題材へ積極的に取り込む傾向が、従来よりもいっそう強くなってゆく。短編小説「人球」（人間のボール、1970）では、都市に生きる現代人の鬱屈とした心理状況を巧みに描き出し、「捷克・何」（ジャック・ホー、1972）や「孟婆湯」（孟婆神の薬湯、1972）ではベトナム戦争の影響下に組み込まれてゆく台湾社会の様相をえぐり出すなど、李喬は小説創作でもって当時の世相に対して痛烈な批判を加えていった。

こうした社会派作家としての台湾社会や民衆に対する強烈な関心は、1980 年代以降に李喬が発表する一連の政治小説にも通底しているように思える。1970 年代末には、首長選挙での不正投票に端を発した二二八事件（1947。以下、二二八と略す）以来の民衆暴動である中壢事件（1977）、民主化を求めてデモ行進する市民と当局が正面から激しく衝突した美麗島事件（1979）など、台湾社会を揺るがす大規模な政治事件が相次いで発生したが、李喬はこれらの政治事件と正対することで、現前の台湾社会に対する関心を台湾の歴史的展開に対する関心へと伸張させてゆくのであった。本論で詳述するように、李喬は 1970 年代末から 80 年代にかけて、『結義西来庵』（西来庵結義、1977）や『寒夜』三部作など台湾の近現代史に取材した長編小説を相次いで発表してゆくが、台湾の歴史を辿りながら執筆する作者の創作姿勢の背後には、こうした現代台湾社会に向けた作者自身の熱情的で真摯な眼差しが無視できなかつた。そして、そのような李喬の創作姿勢は短編小説「小説」（1982）や「告密者」（密告者、1982）、「泰姆山記」（泰姆山の記、1984）など、後に作者自身の代表的ジャンルとして定着する政治小説の中でも、過去の歴史を仮借しながら

現行の国民党専制政治を否定し厳しく糾弾する形で現れてゆく。1980年代において、李喬は文学評論「台湾文学正解」（台湾文学の解釈、1983）の中で、「いわゆる台湾文学とは、即ち台湾人の立場に立ち、台湾の経験を描く文学である」¹¹と定義したが、彼が目指した「台湾人の立場に立ち、台湾の経験を描く文学」とは、まさに台湾史の「およそ四百年来の、大自然との格闘と妥協の経験、反封建、反迫害の経験、及び政治的殖民、経済的殖民に抵抗し、民主的自由を獲得する経験」¹²を具象化させながら、台湾人である「彼らの苦難や危うい境遇、希望、及び民主的自由を追求する奮闘の目標に共鳴し、同一性を認め、肯定する」¹³文学作品であった。台湾の人々が絶対的権威に抗い、民主的自由を獲得してゆく壮大な台湾近現代史の流れを、李喬は自らの作品中で物語化することを宿願としたのである¹⁴。

以下、本論を論述する前に、その予備的段階として、次節において李喬作品に対する文学研究の現状を俯瞰し、それらの問題点について提起したい。

第2節 先行研究及び問題提起

李喬の作品をめぐる文学研究は多岐にわたる。これは前節で述べたように、李喬の著作数自体が多く、その作風は幅広くバラエティに富んでいるためでもある。国立台湾文学館より刊行された彭瑞金編『台湾現当代作家研究資料彙集 27 一李喬』（2012）には、同書目次の一項目に「研究評論資料目録」が見られるが、そこでは李喬作品の先行研究に該当する860編もの作品論・作家論の目録が掲げられている。ここで収録対象となっている文献は、2011年6月までに台湾で発表された文学評論や研究論文を中心に、中国や香港の雑誌・学術誌などに載せられた論考までも含む。但し、日本や欧米等で発表された外国語文による論考に関しては、その中国語訳が存在する場合を除き、原則として未採録である。

李喬の著作には、小説創作以外にも『台湾人的醜陋面』（台湾人の醜悪さ、1988）や『台湾運動的文化困局與転機』（台湾運動の文化的苦況と転機、1989）、『台湾文化造型』（1992）、『文化心灯—李喬文化評論選粹』（文化の心霊—李喬文化評論精選集、2000）、『文化、台

湾文化、新国家』(2001)、『李喬文学文化論集』(2007)等、社会評論や文化批評に関する著述も多く、上記に挙げた先行研究の一部はこれらの著作までも論評の対象としている。本節では紙幅の都合により、こうした李喬の社会・文化・文学評論に対する論考を除外し、もっぱら小説創作に関する先行研究を中心に精査したい。

李喬の小説に関する作品論は、早くも彼が本格的に創作活動を開始した 1960 年代より確認できる。李喬の作品が初めて第三者によって論評されたのは、鍾肇政編『本省籍作家作品選集 5』(1965)の中で、李喬の短編小説と共に掲載された編者による短文の作家紹介である¹⁵。同選集は台湾光復二十周年を記念して、台湾での二十年にわたる中国語教育の成果を顕示するため、1965 年 10 月に台北の文壇社より刊行された。全十巻のアンソロジーには、本省人作家・詩人 168 名の作品が収録されているが、そのうち李喬を含む 41 作家に限っては、「比較的長い創作経歴を持ち、作品数量も比較的多い」¹⁶本省人作家として選出されていた。編者の鍾肇政(1925-)は上記の作家紹介の中で、李喬は「[民国一筆者注] 51 年夏に習作を開始して以来、進歩は神速で、かつて各種文芸コンクールに参加し、何度も大賞を受賞した」¹⁷と解説し、1960 年代に登場した有力な本省人新鋭作家として紹介した。また、李喬の小説中で描出される人物像が、いずれも村里の名も無い人々であることから、作者の描く「運命に左右され、黙々と現世の苦しみを堪え忍ぶ姿は、甚だ深みがある」¹⁸と論評してもいた。

こうした農村に暮らす庶民の姿を捉えた写実的で素朴な作風に対する評価は、当初より李喬の小説に対する論評の中心的内容であったようだ。例えば、同時期には葉石濤(1925-2008)も『台湾日報』に掲載した文学評論「兩年来的省籍作家及其小説」(1967)の中で、次のように李喬の作風を論じている。

李喬の文章はすでに思うがままに描き出す段階に達しており、流暢で読みやすい。なるほど彼らのような作者は根本から日本語による束縛という足かせを受けておらず、それゆえにもしも作品の中に豊富な郷土の色彩がなかったとしたら、彼が省籍作家[本

省人作家一筆者注] であると知りうることは全くできないだろう。¹⁹

葉石濤は李喬の筆致に強い関心を示し、その「豊富な郷土の色彩」を逆説的に高く評価していたと言える。さらに同文中では、前述の台湾文学賞受賞作である「那棵鹿仔樹」についても、次のように評している。

『台湾文芸』に発表した小説「那棵鹿仔樹」は、土地と故郷に対して一途な一人の年老いた農民の心理を借りて生活の中でまき起こった、さざ波を現わしている。筆の運びは客観的で、筋書きの展開は悠揚としてなめらかであり、彼が小説技巧に非常に優れた作家であることを証明している。²⁰

このように李喬の創作に対しては、彼が文壇に登場して以来、「土地と故郷」を中心にその様子を誠実に描き出す郷土作家としての評価が定着してゆくのであった。その後も1970年代末には『台湾文芸』で“李喬作品研究專輯”と題した特集記事が組まれているが、同特集でも莊園〔鄭清文一筆者注〕「作家的起源」(1978)や彭瑞金「悲苦大地泉甘土香—李喬的蕃仔林故事」(1978)などの論評で、李喬の小説における郷土性が強く指摘されていた。そこでは例えば、莊園が「李喬の故郷と幼年時代についての記述は、かなり直截的である」²¹と過去の李喬作品における郷土描写の写実性に注目し、彭瑞金は「李喬はこれからも感情の交わり合う郷土の大地を詳述するゆとりがあるだろう」²²と将来にわたり郷土を主題に創作してゆく可能性を示唆していた。

また同時に、『台湾文芸』での連載として始まった『寒夜』三部作の発表によっても、郷土の写実的描写に加えて、作風に内包される台湾の土地への慈愛に対する評価も確立してゆく。例えば、謝松山「簡介『寒夜三部曲』」(1982)は、同三部作では「台湾の悲惨な歴史的命運がわかるだけでなく、この土地に暮らす人々が、直面した苦悶や深い悲しみの根源を理解することもできる」²³と論評し、とりわけ第一部『寒夜』(1980)で描き出

されるように「土地で生まれ育った人が、郷土を愛し土地を愛して一体となって団結する」²⁴ 姿には深く感動を覚えると記し、李喬による台湾の土地に対する郷土愛に溢れた物語展開を高く評価していた。こうした点に関しては、同様に彭瑞金『台湾新文学運動 40 年』(1991)でも、次のように論じている。

李喬は、1977 年に『寒夜』三部作を創作し始めた。……李喬は、台湾の開拓に渡って来た漢族移民と、台湾という土地の複雑な感情を描くことに重点を置き、彼等の土地に対する気持ち、土地と移民たちの生死をかけた密接な関係を描いた。移民たちは、土地のために生き、土地のために戦い、圧迫に抵抗し、郷土を防衛し、異境にあっても土地のことを忘れない。『寒夜』三部作は、本土回帰の願望を明確に打ち出した。²⁵

同書で彭瑞金は物語中で前景化された台湾の土地と民衆の密接な連繫に注視し、李喬は『寒夜』三部作の創作でもって言えば作者独自の文学的境地である「土地・母親・生命を核にする文学観を確立した」²⁶ と指摘してもいる。このように台湾における土地との関連から、李喬の作品を読み込もうとする視角は、その後も李喬研究の中心的論点の一角を占めていたのである。

ところで、1980 年代に至ると、台湾の言論界や思想界では“台湾結／中国結論争”が巻き起こるが、李喬の小説も当時台湾社会で勃興した台湾意識というナショナリズムと共に解釈されてゆく。台湾ではすでに 1970 年代末には、内政的には中壠事件や美麗島事件、さらには林義雄宅惨殺事件（1980）等、社会を揺り動かす政治事件が頻発し、外政的にも米国との断交（1979）や中国共産党による和平統一工作の開始（1979）等の外交的変動が重なり、社会状況はいっそう不安定化していた。こうした不確実な社会背景をもとにして、言論界や思想界では知識人を中心に“台湾・台湾人意識”と“中国・中国人意識”をめぐって大きく対立し、複数の激しい論争が交わされてゆく²⁷。李喬も“台湾結／中国結論争”では代表的論者の一人であり、彼は台湾の自主性と歴史的固有性を強く主張しながら、葉

石濤や彭瑞金、宋冬陽（陳芳明）ら『台湾文芸』や『文学界』を基盤とする論客と共に、台湾意識に根差した“台湾文学”を台湾社会に浸透させていった²⁸。そのような流れの中で、李喬自身の小説もまた、“台湾・台湾人意識”を喚呼する論客たちの言動と大衆の情感を繋ぐ媒介として見なされていったのでもある。例えば『寒夜』三部作は、作中で描かれてゆく漢人の開拓移民による台湾という土地に対する感情の発露から、ただの小説としてではなく、社会で誕生する新たな台湾本土主義者の世代全体に思想的影響を与える重要な作品として、市民の間で読み継がれてもいた²⁹。そしてこうした“台湾・台湾人意識”を強く牽引する李喬作品に対する評価は、李喬研究全般の中心的解釈としても位置付けられていった。その後も、二二八を描いた代表作『埋冤 1947 埋冤』（1995）に関して、宋澤萊が「我々に与える最大の啓示は台湾人が『台湾意識』を打ち立てなければならないと指し示したことにしくはない」³⁰と断言したように、李喬作品に対する文学研究は常に台湾ナショナリズムと表裏の関係をなしてゆくのであった。なお、この点に関しては、台湾のみならず中国の論者も同様に観察しており、朱雙一『台湾文学創作思潮簡史』（2010）では、『埋冤 1947 埋冤』が「90年代台湾政治文化思潮の脈動や変遷と緊密に関係している」³¹として、台湾社会における台湾意識の浸透と、それと同時に歩を進めるかのように受け容れられてゆく李喬作品との繋がりについて注視している。

但し、上述のとおり、李喬の作風は多元的であるため、こうした台湾の土地への関心や勃興する台湾意識に対する貢献という作品研究の視角は、李喬作品を解釈する際のひとつのフェーズに過ぎないことは言うまでもない。例えば、鍾肇政『『飄然曠野』裡的李喬』（1966）や鄭清文「李喬的『恍惚的世界』」（1974）、花村「試評『痛苦的符号』」（1978）が、作中におけるモダニズムの技法について論じたほか、中国の民間説話「白蛇伝」の翻案小説である『情天無恨—白蛇新伝』（情欲の境地に恨み無し—白蛇新伝、1983）を評した彭瑞金「人、妖交纏，仏法解不開的人間情欲」（1996）や遊女を主人公とする長編小説『藍彩霞的春天』（藍彩霞の春、1985）について論じた歐宗智「小説哲学的建構—談『藍彩霞的春天』反抗意識與象徵意義」（2001）では、伝統的価値観と宗教観に反発する物語展開から、

作者の強烈な反骨精神を浮き彫りにしている。また、葉石濤「大河小説的種籽—短評『告密者』」（1985）と彭瑞金「歴史文学的掙扎與蛻變—拒絶在虚構、真実間擺盪的『埋冤 1947 埋冤』」（1995）では、実際に起きた歴史的史実の仔細を創作というフィクションの中で如何に処理しているのか、という点について考察が加えられている。

一方、李喬の小説における客家というエスニシティの問題について考察した論考は、台湾の大学機関で審査された修士論文の中に散見される。黄琦君「李喬文学作品中的客家文化研究」（2003）や王志仁「台湾客家小説移民書写之探究」（2009）、楊素萍「李喬『寒夜三部曲』之客家女性形象研究」（2010）は、いずれも台湾文学研究所や客家文化研究所等に提出された学位請求論文であり、エスニシティの視角から李喬作品を解釈している。李喬の作風と“客家”との関連は非常に重要であり、それに言及せずには李喬文学の本質を考察するには不十分であるが、本論では紙幅の都合上、客家というエスニシティの視角からの考察に限っては、先行研究の学術成果を援用するに留めたい。なお、台湾での博士論文には、黄小民「歴史的謊言・郷土的真實—李喬小説創作研究」（2012）があるが、同論考は目下、李喬文学研究に主眼を置いた唯一の博士学位請求論文である。

これら複数の修士・博士論文の中では、李喬の人物面に関しても論述が割かれているが、李喬という作家像を全面的に考察した本格的な伝記研究としては、許素蘭『給大地作家書—李喬』（2008）が挙げられる。同書のほかにも、李喬自身による回想記や第三者によるインタビュー録などは、これまでに 220 編余り発表されており、とりわけ作者本人が著わした前者は 100 編ほどにのぼり、これらの文献も李喬に関する文学研究には必要不可欠な参考資料のひとつであることに違いない³²。

さらに李喬の小説は、原作の発表後にテレビドラマや映画、歌仔戯、オーケストラなどで翻案された回数が少なくないことも特徴的であった。例えば『寒夜』三部作では、2000 年に台北の河洛歌仔戯団が『寒夜』を翻案した「台湾、我的母親」という歌仔戯の演目を上演したことをはじめ、2002 年から翌年にかけては公共電視台が『寒夜』と第三部『孤灯』（1979）を改編して、『寒夜』及び『寒夜続曲』という連続テレビドラマとして放映し

ている。また、2008 年秋には劇作「情帰大地」（情は大地に帰す、2008）を原作とする客家語映画『一八九五』（洪智育監督）が封切られ、2012 年夏には苗栗聯合民族管弦樂團によって『寒夜』の物語展開をイメージした管弦楽曲のコンサートが台北の国家音楽庁で催されている。近年では、こうした李喬による原作とその後の翻案作品を比較した研究も増えており、それらの代表的な論考には、柯孟潔「河洛歌仔戯劇本『台湾，我的母親』之研究—以小説『寒夜三部曲之一寒夜』與黃英雄『台湾，我的母親』及河洛歌仔戯舞台演出本『台湾，我的母親』之探討」（2006）をはじめ、楊淇竹『跨領域改編—「寒夜三部曲」及其電視劇研究』（2010）、黃惠貞「母土與父国—李喬『情帰大地』與『一八九五』電影改編的認同差異」（2010）などが挙げられる。

以上のように、李喬の小説に関する先行研究は多種多様であり、物語描写の郷土性をはじめとする多くの論点は、すでに李喬研究における重要な確固たる視角として定説化している。だが、それらの先行研究を俯瞰してみると、逆に依然として着手されていない論点も明らかである。簡明直截に言えば、そこでは概して以下の二つの問題が見受けられる。まず外国文学との影響関係の問題である³³。従来、李喬作品の主題や登場人物、あるいは物語展開の象徴性などに対して焦点が当てられることが多かったが、その反面、李喬作品が外国文学・映画等を含むほかの文化的テキストから如何なる影響を受けてきたのか、という問題に関して考察した論考は寥寥たるものであった。とりわけ近代文学以降の文学作品においては、既存のテキストから受ける影響作用は決して無視できない要素と見なされているが、李喬研究ではその点に関する先行研究が皆無であったと言える。次に、主題の重層性に関する問題が挙げられる。従来、物語の写實的描写や土地への慈愛、絶対的権力に抵抗する反抗精神など、ひとつの作品を特定の視角から読み込む論点が李喬研究の定説となる傾向にあったが、それは恐らく李喬作品の一面を精察したに過ぎないのではないだろうか。言うまでも無く、小説中では重層的に主題が語られている場合が多く、その傾向は創作の自由において政治的制約が課された文化環境の下では、特に潜在的に実行されていた可能性が高い。そうした意味では、戒嚴時期に創作活動に従事した李喬も例外ではな

く、その点も等閑に付すことは出来ないはずであるが、先行研究で言及されることは稀であった。

本論では、上記の二点を考慮しながら、李喬が台湾近現代史の展開に題材を得て創作した代表的四作品——『結義西来庵』、『寒夜』三部作、「小説」、『埋冤 1947 埋冤』——を中心に考察する。これら李喬の作風を特徴づける諸作品を、外国文学からの受容論と主題の重層性という視角から検討することで、従来は指摘されることのなかった李喬文学の本質を衝く新たな一面を提起したい。

第3節 研究方法及び論文構成

李喬は台湾近現代史に取材した自身の作品を“歴史素材小説”として位置付けている³⁴。この“歴史素材小説”という呼び方は李喬自身による独特な表現であり、本人の定義によれば、それは次のようなものである。

まずわたしは自分が書くのは“歴史素材小説”であり、“歴史小説”とは異なると考えている。“歴史小説”とは、作者がある時代を選び、当時の風習、特殊な景観を配し、ひとつか幾つかの出来事あるいは人物を中心に、歴史的で常識的な事件を主線とすることに基づいて、この事件に関する枝葉な部分の虚構を配した作品である。“歴史素材小説”は、歴史的素材の信憑性を借りて、重点は虚構の運用に置き、主題は歴史上の事件の個人的解釈をもっぱら重視しながら、歴史のベースから抜け出し文学の純粋な追求に帰してゆくのだ。³⁵

李喬によると、“歴史素材小説”はいわゆる歴史小説とは異なり、歴史の枠組みを仮借しながら、作者自身による「歴史上の事件の個人的解釈」を主題として追求した作品である³⁶。そこでは「歴史上の事件の個人的解釈」がもっとも重視されるゆえ、“歴史素材小説”としての李喬の小説中では、作者自身の信条や思想が強く反映されている場合が多い。

そうした描出の仕方は、李喬自身も自らの代表的作風として認めていた。そして上述の引用からも窺えるように、小説創作において李喬が重視するのは歴史的事件の再現ではなく、むしろ歴史的事件の展開を借りた物語中での「虚構の運用」にあった。李喬が創作の技法として、物語の虚構化を強く意識していたであろうことは、彼自身が著わした文学評論『小説入門』（1996）における以下の一段からも、容易に推定できる。

小説を創作する上で、「虚構」（fiction）の概念は非常に重要だ。虚構の完成は、もっぱら想像力の発揮による。「想像」とは、単刀直入に言えば、つまり現実世界の「心理的再構築」であり、心理的再構築とは、つまり発明や想像という心理活動の現象である。それゆえに、想像力とは、即ち創造力であり、文学においては創作力なのだ。³⁷

以上の理由から、李喬作品を読み解くには物語の「虚構性」に注視しながら、歴史的事実は如何に虚構化されているのか、それら虚構の中で作者の信条や思想は如何に表現されているのか、という点を中心に分析する必要がある。

ところで、言うまでも無く台湾文学においても、小説の物語内容と創作当時の社会状況は極めて密接な関係にあった。陳芳明『後殖民台湾』（2007）では、台湾文学史を考察する上で留意すべき点を次のように挙げている。

文学の歴史的解釈は、作家と作品が頼りにして育んできた社会を抜きにして構築されることなどあり得ない。戦後台湾文学史の評価と解釈も、台湾の歴史的な発展の脈絡に置いて取り扱うべきである。³⁸

ここで陳芳明は、戦後台湾文学の流れを考察するには、作家が作品を創作あるいは発表した時代的背景、及び当時の台湾社会の歴史的展開を十分に意識した台湾文学研究が必要であることを指摘する。こうした研究方法は、従来の台湾文学史研究にあっては常套的な

手法とも言える。例えば、葉石濤『台湾文学史綱』（1987）をはじめとして、彭瑞金『台湾新文学運動 40 年』、あるいは陳芳明『台湾新文学史』（2011）等でも、文学作品と台湾社会の動向という両者の関連性に対する視角は決して看過されていない。なぜならば、それは陳芳明が『台湾新文学史』の中でも指摘したように、台湾文学は二十世紀を通して連続的に二つの政治的絶対権力の干渉下に置かれていたゆえ、「文学作品を芸術面から分析するだけではなく、作家や作品が身をおいた当時の時代や社会との関係にも意識的に注意を払う必要がある」³⁹からであった。

こうした視点は、台湾文学史の研究に留まらず、個々の作家による各々の文学作品を考察する際にも有効であることは言を俟たない。前節で述べたとおり、本論では李喬の“歴史素材小説”である四作品——『結義西来庵』、『寒夜』三部作、「小説」、『埋冤 1947 埋冤』——を中心に考察を試みるが、このような場合でも個別の作品内容と台湾社会の関係性が重要な視座となることに変わりはない。そのため本論では、李喬が創作時に如何なる時代的・社会的背景の下で、何故に過去の歴史的事実を題材にした“歴史素材小説”を創作しようと試みたのか、という点も含めて検討してゆきたい。なお、藤井省三『台湾文学この百年』（1998）では、台湾の歴史とは明清二代以来続く移民による歴史でもあり、二十世紀台湾における“国語”とは、戦前の日本語にしても戦後の中国語にしても外来政権が持ち込んだ言語制度であるという⁴⁰。それゆえに、本論では国民党を頂点とする権威主義的な戦後台湾社会の中で、李喬が如何にしてこうした外来政権がもたらした“国語”を駆使しながら、自身の小説を通して同時代に生きる台湾人読者に対して社会変革を訴えてきたのかにも注目したい。

但し、こうした時代的・社会的背景を観察する共時的な考察に頼るだけでは、李喬作品の核心を捉えることは難しいだろう。かつて李喬自身が『埋冤 1947 埋冤』の自序において「小説の創作に従事し、偶然にも台湾の歴史に入り込み、この変化がわたしの文学の風格を変化させた」⁴¹と述べたことから明らかなように、長年の創作活動の中で生じた作者自身の葛藤、あるいは時代の変容に応じた作風の多岐化や収斂化など、李喬の創作経験全

体を視野に入れた通時的な考察も欠かせない。それゆえに本論では、上述した四編の「歴史素材小説」を軸に、物語の虚構性に注視しながら、李喬の作品と戦後台湾社会の発展という双方の関係を共時的、かつ通時的な分析でもって考察したい。以下、本論における論文構成を示す。

第1章「李喬『結義西来庵』における抗日表象の重層性— 1970年代官製文学の中での抵抗と台湾意識の再編成」では、李喬による最初の“歴史素材小説”である『結義西来庵』における抗日表象の二面性について検討する。『結義西来庵』は李喬が初めて台湾近現代史の展開に取材して創作した長編伝記小説でもある。同作は日本統治期の最後にして最大の漢人による抗日武装蜂起である西来庵事件を実写するかのよう描き出した作品だが、一方では1970年代末台湾という中国意識が強制されていた時期に、台湾の光復節を祝賀する国民党独裁政権の刊行物として出版された官製文学という側面も持つ。本章では、代表的な抗日武装蜂起を描いた『結義西来庵』における物語の複層性に着目し、作中では如何に台湾人の抗日表象が重層化してゆくのか、李喬自身のアイデンティティ再編成の過程や1970年代当時の台湾社会の変容、とりわけ現代台湾社会での政治的変化をリードする一角となった台湾基督長老教会による一連の政治的行動の影響などを参照しながら考察してゆく。

第2章「“虚構”の想像と創造—李喬『寒夜』三部作におけるフォークナー作品の影響を中心に」では、李喬の代表作『寒夜』三部作における外国文学からの受容について検討する。前節でも述べたように、現代文学ではその創作の場において外国文学からの影響関係は無視できないのだが、ことさら李喬研究に限っては、従来そうした論点を検討する先行研究は皆無であった。本論でも指摘するように、李喬は創作に際してはアメリカ人作家のウィリアム・フォークナー (William Cuthbert Faulkner, 1897-1962) の代表的作品を日本語訳のテキストで受容しているのだが、従来の研究でそれらの事実に関して論証がなされたことはなかった。本章では、第1章で論じた李喬の創作過程における“歴史素材小説”

の誕生に関する問題を前提として、そうした独特な創作手法が李喬自身の内面で如何にして確立してゆくのかという点について、李喬のフォークナー文学の受容過程を分析すると共に考察する。

第3章「李喬の短編小説『小説』と1960年代台湾文学界における安部公房の受容—台湾文学における1960年代実存主義運動から1980年代民主化運動への展開」では、第2章で論じた李喬の小説における外国文学からの受容の問題——フォークナー作品からの文学的影響——という論点を受けて、李喬作品における外国文学からの影響の領域をさらに拡げて検討する。本論で詳述するように、李喬は古今東西の書物を渉猟する豊かな読書歴を持っているのだが、日本の安部公房（1924-93）からも深い影響を受けていたことは全く知られていない。本章では、従来の先行研究では指摘されることのなかった1960年代以降の台湾文学界における安部公房受容状況を検討しながら、李喬自身による安部文学の受容過程を分析する。また、日本近現代文学において代表的な実存主義小説とされる安部の代表作『砂の女』（1962）の物語展開が、1980年代の文壇で台頭した台湾政治小説の代表作とも言える短編小説「小説」に対して与えた影響を思想面からも考察してゆく。

第4章「李喬『埋冤 1947 埋冤』における孤児意識からの脱却—二二八事件をめぐる歴史描写と戒厳令解除後の台湾社会との関係から」では、第1章から第3章にかけて考察した李喬自身のアイデンティティ再編成の過程と、それに伴う創作表現の変化に注視しながら、長期戒厳令が解除（1987年7月15日）されて民主化達成を目前に控えた1990年代前半に、李喬が如何なる理由から『埋冤 1947 埋冤』を創作し、当時の台湾社会で何を問題提起しようとしたのかを明らかにする。同作は、台湾現代史における最大の禁忌とされてきた二二八を史実の展開に即して実録の如く描き出した長編小説であり、従来はその物語の仔細な写実性にばかり注目が集中していた。だが、上下巻で構成される同作は、上巻で台湾社会での省籍矛盾の根源である二二八という歴史的事実を可視化する一方で、下巻では寓意に富んだ虚構性の目立つ物語が展開されてゆく。本章では、こうした物語の重層性を検討しながら、戒厳令解除後の時代背景下で李喬の信条や思想が同作の創作に及ぼ

した影響と、彼が同作を通して現代台湾人に喚起した社会的意義について考察する。

第1章

李喬『結義西来庵』における抗日表象の重層性

—— 1970年代官製文学の中での抵抗と台湾意識の再編成

はじめに

葉石濤『台湾文学史綱』(1987)は、日本統治期台湾新文学の台湾人作家による“抵抗”精神を認め、殖民地統治下の様々な社会的背景と連動した反帝国・反封建の写実主義的作風こそが、当時の大きな文学的特徴であったとする⁴²。一方、陳芳明『台湾新文学史』(2011)では、台湾新文学の“抵抗”精神が戦後の台湾人作家の創作に対しても影響を与えたことを指摘する⁴³。1960年代以降に台湾文壇で活躍する李喬も同様に、台湾の政治や社会に対する文学を通じた抵抗を模索してきた。李喬も頼和(1894-1943)や楊逵(1905-85)、張文環(1909-79)、龍瑛宗(1911-99)、呂赫若(1914-51)、鍾理和(1915-60)、吳濁流(1900-76)、楊華(1906-36)などの創作に言及しながら、台湾新文学での創作活動とは被殖民者の苦悶や鬱憤を表現するための手段であったと見なし⁴⁴、さらに『寒夜』三部作をはじめ、短編小説「小説」や『藍彩霞的春天』などの自作で、絶対的権威や伝統的陋習に抗い奮闘する台湾人の姿を描いてきた。

このように李喬が弱者の抵抗を描いた創作のひとつに、1977年10月25日に出版された『結義西来庵』がある⁴⁵。『結義西来庵』は1915年に起きた日本統治期の漢人による最後にして最大の抗日武装蜂起であった西来庵事件を描いた、書き下ろしの長編伝記文学であり、李喬が李能棋という自身の本名で発表した作品でもある。後述の如く、『結義西来庵』は当時の蔣経国行政院長の号令で編纂された『近代中国叢書・先烈先賢伝記叢刊』(以下、『伝記叢刊』と略す)の一冊であり、言わば典型的な官製文学である政府刊行物として出版された。但し、後に李喬自身が、同作は「わたしの一生に対して決定的な影響を生んだ」⁴⁶と語ったように、その創作経験は“歴史素材小説”を中心とする李喬自身の創作

姿勢にも大きな影響を与えていた。

だが、李喬が『結義西来庵』の「序」で「〔同作では創作を一筆者注〕フィクションをもって処理することはもはや忍び難く、その勇氣も失われ、如何ともできなかつた」⁴⁷ と記し、官製文学という枠組みの中で抗日武装蜂起の事跡を記録として描いているためか、同作は「李喬の第一作目の歴史小説」⁴⁸ と見なされながらも、従来十分に考察されることは稀であった。李喬作品と作家像を詳細に紹介する許素蘭『給大地作家書—李喬』でさえも、「文学的完成度から言えば、『結義西来庵』は後の『寒夜』三部作と『埋冤 1947 埋冤』とは比べものにならない」⁴⁹ が、「その後『寒夜』三部作を創作するには大きな助けになった」⁵⁰ と評価するに留まる。ただ、こうして李能棋という本名で出版された『結義西来庵』が、重厚な李喬研究の襍の中に隠れるように見落とされたことは決して偶然ではなかった。後述のように『伝記叢刊』では、李喬のほかにも鍾肇政や朱西甯など著名な台湾人作家も創作に関与していたが、これまでの台湾文学研究では鍾・朱両氏による同叢書中の作品が注目されたことは皆無であったし、そもそも『伝記叢刊』の存在自体が無視されてきたとも言える。前述の葉・陳両氏による著作をはじめ、従来の台湾文学史に関する論考では、『伝記叢刊』については一切論述されていないのだ⁵¹。

但し、台湾で 1960 年代初頭に伝記雑誌『伝記文学』を創刊した劉紹唐が証言するように、伝記文学とは史学及び文学と密接な関係を持ちながら、それ自体の特徴と重要性を備えた文学ジャンルであるとも言える⁵²。伝記文学が純粋な小説創作でないことを理由に作品自体を看過することはできまい。しかも「一人の伝記作家が誰かの伝記を執筆する時、ある種の主観的色彩を帯びることは免れがたい」⁵³ と劉紹唐が言うように、伝記文学では作者が機械的に事実の断片を繋ぎ合わせて創作するわけではなかった。そこには作者自身が作品に秘めた創作上の仕掛け、さらには信条や思想さえも垣間見えることだろう。本章では、従来ほとんど議論されなかつた『結義西来庵』に焦点を当てる。『結義西来庵』で実写の如く描写される西来庵事件での抗日武装蜂起の物語を読み解き、同作における台湾人による抗日表象の重層化について、李喬自身のアイデンティティ再編成の過程や 1970

年代当時の台湾社会の変容を参照しながら考察したい⁵⁴。

第1節 『結義西来庵』の背景

1. 李喬と西来庵事件

西来庵事件とは、日本統治期台湾の抗日義民である余清芳（1879-1916）を首謀者とする抗日武装蜂起であり、余清芳事件とも呼ばれる⁵⁵。当時、台南市街には西来庵という廟宇があり、余清芳や同じく抗日思想を抱く羅俊（1855-1915）、江定（1866-1916）らが蜂起を謀る密議の場となっていた⁵⁶。西来庵での謀議が検挙された後、余清芳らは台南山間部の噍吧嘰（現、台南市玉井区）^{タバニー} 一带に潜伏し、日本人官憲を相手に激しいゲリラ闘争を展開した。その際に台湾総督府（以下、総督府と略す）が制圧のために多数の地元住民に対しても無差別虐殺を加えたために、別に噍吧嘰事件（タバニー事件）とも呼ばれる⁵⁷。一説によれば、西来庵事件に参加した義民数は10,000人に達し、烈士者は3,000人、無辜の女性や子供も3,000人超が犠牲になったという⁵⁸。事件後、被告人として逮捕・起訴された者は1,957名に上り、その内866名に死刑、453名に懲役刑が下された⁵⁹。「世界の裁判史上にない残酷な記録」⁶⁰となった判決は、台湾人を戦慄させ、内地社会にも大きな衝撃を与えた⁶¹。武者小路実篤は文芸誌『白樺』に掲載した随筆文「八百人の死刑」（1915）で、「自分は新聞を見てみてふと欄外に台湾の土人が八百人程死刑になることを読んだ。随分ひどいと思った」、「数百人を死刑に処して平気でみられる人間の顔が見たい気がする。数百人の裁判が一寸の間に完全に行はれると云ふことは誰が信じられやう」と判決に疑念を呈し、「人道上の問題だ。どうにかしてやつて彼等を死の恐怖から助けることは出来ないだらうか。出来ないと云ふのは日本の恥ぢではないだらうか」と総督府の姿勢を非難した⁶²。西来庵事件は殖民地統治期における抗日運動の分水嶺となり、事件後はそれまで続いた武装抵抗が杜絶し、台湾議会設置請願運動や台湾文化協会の啓蒙活動に代表されるように、台湾人知識人が主導する合法的な抵抗運動へと変わっていったのである。

周婉窈『図説台湾の歴史 増補版』（2013）によれば、西来庵事件をめぐる言説は霧社

事件よりも相対的に少なく、事件自体が中国では伝統的な下層階級による易姓革命であることも理由となり、現在では西来庵事件は人々に忘れられてしまった感が強いという⁶³。だが、西来庵事件発生当時、台南の新化公学校に通学していた楊達は、当局の軍隊出動の様子を目撃し、実兄も軍夫として徴用されたために、西来庵事件は一生涯記憶に残る印象深い出来事となったと証言している⁶⁴。同時代的に西来庵事件を直接経験した楊達にとって、それは自らの政治的・文学的原点となる重大な歴史であり、発生から七十年近く経過した後でも決して忘却の彼方に置き去りにすることはできなかったのである⁶⁵。一方、『結義西来庵』が発表された1970年代末当時の台湾社会でも、西来庵事件は依然として台湾人の記憶に残る歴史的イベントであり続けた。例えば、『中国時報』（1976年10月25日）では、光復節前夜を記念して台湾省文献委員会が噶吧嘰の山中で開催した台湾史跡研究会の様子を報道しているが、同記事では余清芳ら義民の抵抗を「正義のために身を犠牲にした凄惨な壮挙」⁶⁶と讃えている。また、当時の台南県政府は同事件の烈士者を顕彰するために、1977年4月に台南県南化郷（現、台南市南化区）で“噶吧嘰起義抗日烈士紀念碑”及び“抗日義士忠魂塔”を建設し、1981年5月には台南県玉井郷（現、台南市玉井区）に“抗日烈士余清芳紀念碑”を設置してもいた⁶⁷。1970年代末の社会的コンテクストにおいて、西来庵事件とは「日本人が台湾同胞を追い立てて大いに肆に虐殺したことで名高い」⁶⁸歴史的イベントであったのだ⁶⁹。

ところで、1930年代生まれの李喬は、楊達のように西来庵事件を同時代的に経験したわけではない。但し、李喬は抗日左派の活動家として知られていた父親の李木芳から、幼少の頃より西来庵事件の詳細について繰り返し聞かされて育ち、事件の顛末は李喬自身に強烈な印象を残したという⁷⁰。このように李喬は父親の影響から西来庵事件を間接的に知り得ており、事件に対する関心は非常に高かった。それゆえに李喬は現在まで半世紀以上続く創作活動の中でも、「早くからその題材〔西来庵事件を指す一筆者注〕を探り、小説に書こうという意欲」⁷¹に溢れていたのであろう。例えば、『中華日報』で発表した短編小説「流転」（1972）では、西来庵事件での当局の住民に対する虐殺が挿話的に語られ、

台湾人の怨念が彷徨しながら日本人への復讐を果たしてゆく様子が描かれている⁷²。ここから李喬が西来庵事件について、『結義西来庵』の創作以前より関心を寄せていたことが推定できる。また、李喬は『結義西来庵』の自序で、余清芳が率いた抗日武装蜂起を「台湾の抗日史上、とりわけ特別な意味のある」⁷³、「最も意義深い偉大な革命行為」⁷⁴と記してもいた。こうして西来庵事件は李喬にとって恰好の文学的題材となり、自身の創作活動に「決定的な影響を生んだ」という『結義西来庵』の下地となったのである。

2. 官製文学としての『結義西来庵』

『結義西来庵』は、1977年10月25日に台北の近代中国出版社より『伝記叢刊』の一冊として出版された。“先烈先賢伝記叢刊”という叢書タイトル及び光復節と重なる出版日からも、同書出版の政治性が容易に察し得るが、そもそも『伝記叢刊』は国民党中央委員会党史会（以下、党史会と略す）の出版計画による官的色彩の強い刊行物であった。版元は党史会所属の出版社であり⁷⁵、党中央がこの年の光復節祝賀を前に鍾肇政をはじめとする十名の台湾人作家や大学教員を招聘し、台湾の歴史に貢献した台湾人に関する伝記叢書を刊行させた⁷⁶。この時『伝記叢刊』として取り上げられたのは、丘逢甲（1864-1912）、姜紹祖（1875-95）、連雅堂（連横、1878-1936）、蔡惠如（1881-1929）、羅福星（1886-1914）、翁俊明（1891-1943）、丘念台（1894-1967）、黄朝琴（1897-1972）ら八名の台湾知識人・抗日運動家、そして西来庵事件と霧社事件（1930）という二件の日本統治期における代表的抗日事件である⁷⁷。台湾にゆかりのある歴史的人物を選定し、“近代中国叢書”として伝記化することには、1970年代に“中華民国台湾化”を推進していた蔣経国の“文化建設”や国民党の文芸政策の変化との関係も窺える⁷⁸。後に李喬が証言したように、『伝記叢刊』は当時の蔣経国行政院長の号令の下で開始された出版事業でもあった⁷⁹。1977年1月に党史会主任委員の秦孝儀（1921-2007）は、前述の十名の作者を一斉に招聘して執筆に取りかかせ⁸⁰、この時に創作された『伝記叢刊』の一部は早くも同年10月には書籍化された。当時の台湾読書市場では、欧米の著名人に関する伝記の翻訳が圧倒的多数を占めてお

り⁸¹、台湾の郷土と関係の深い人物が最初に伝記化されたのは、羅福星の没後六十年を記念して出版された羅秋昭『羅福星伝』(1974)⁸²であったという⁸³。その後まもなく、前述のように台湾人の事績を取り上げた『伝記叢刊』が登場し、以後1990年代半ばに至るまで、同叢書は三ヶ月に一冊のペースで十数年にわたり継続的に刊行された⁸⁴。その結果『伝記叢刊』は、1980年代以降に台湾で突如出現した“伝記文壇”を席捲したのであった⁸⁵。但し、1980年代に入り『伝記叢刊』が「民国初年の〔中国一筆者注〕大陸での革命烈士を描き始める」⁸⁶と、台湾人読者には馴染みの薄い「これまでに聞いたことも無い革命烈士が主人公となり」⁸⁷、同叢書の志向性は大きく変わり、一般読者には歓迎されなくなってゆく。そのため『結義西来庵』は、台湾の“伝記文壇”で台湾人を描いた数少ない伝記文学のひとつと言えるのであった。

『結義西来庵』の梗概は、次のとおりである。1915年の陰暦3月、迎神の儀が行われる西来庵近隣には余清芳の精米店があり、その地下室では羅俊や江定ら多くの男たちが台湾各地から集結していた。やがて彼らは西来庵に移動し、主神の五福大帝の例祭日に決起することを誓い、王爺の前で義兄弟の契りを結ぶ。そして余清芳と江定は台湾南部で、羅俊は北中部で決起の準備を始めるが、彼らの行動は当局に探知され、同年6月には警察の捜査が台湾全島へ及んだ。羅俊を含む二百人以上の同志が逮捕されると、摘発を逃れた義民たちは噍吧嘰の山中へ逃げ込む。こうして余清芳は山中で仲間を従えながら、自身を大元帥とする“大明慈悲国”を打ち立て、逆に派出所や駐在所を急襲しては日本人官憲と家族らを殺害していった。噍吧嘰では制圧のために陸軍と警察の大部隊が投入され、同年8月には日本統治期の「抗日革命事件の中で、最も大きく、壮烈で、悲壮な一戦」⁸⁸が終わった。物語の結末では、多数の一般人が惨殺された事実が伝えられると同時に、台南の臨時法院での判決内容が叙述され、西来庵事件の首謀者たる余清芳が処刑されるまでを描いてゆく。

前述のように、李喬は早くから西来庵事件についての関心が高く、事件に関わる小説を執筆する意欲も旺盛であり、『伝記叢刊』の出版計画が持ち上がる以前から題材の収集を

始めていた。当時台湾では台湾省文献委員会が、総督府の公文書である『台湾総督府公文類纂』を中国語訳して編纂した『余清芳抗日革命案全档』（以下、『革命全档』と略す）を刊行していた⁸⁹。後に『革命全档』の編訳者である程大学は、その内容をもとに西来庵事件や余清芳について「最も完備した専門書」⁹⁰と称される『台湾先賢先烈專輯—余清芳伝』（以下、『余清芳伝』と略す）を出版している⁹¹。李喬は『余清芳伝』の典拠ともなった『革命全档』を中心に、西来庵事件に関する資料を収集した一方で、『伝記叢刊』の作者として招聘に応じた後は自ら古戦場となった台湾南部にも出向き、事件の生存者や遺族を含む関係者にインタビューを繰り返しては口述記録を取った⁹²。『結義西来庵』は脱稿まで二年半に及ぶ周到な取材期間を経て創作され⁹³、民衆の口証から余清芳の婚姻状況を明らかにするなど、先行資料には記述のない事実にも多く言及している⁹⁴。こうして李喬は、自ら収集した複数の資料を駆使して、西来庵事件の顛末を歴史的事実に即した物語として叙述しようと試みたのであった。

ところで、1977年から91年まで刊行され続けた『伝記叢刊』の諸作品については、出版後に書評等で論評されることは極めて稀であった。著名作家の作品では、鍾肇政『丹心耿耿屬斯人—姜紹祖伝』（1977）⁹⁵あるいは朱西甯『表率群倫的林子超先生—林森伝』（1982）⁹⁶などが挙げられるが、いずれの作品も出版後の反響はなかった。これはまさに劉紹唐が言うように、従来「真に文学研究に従事する者は」⁹⁷、「伝記文学が真の文学であると認めなかった」⁹⁸からであろう。前述の如く、葉石濤や陳芳明ら複数の文学史家が『伝記叢刊』を“台湾文学史”の中に位置付けてこなかったという事実は、劉紹唐の証言を裏付けるものと言えるのかもしれない。但し、『結義西来庵』は当初こそ反響が皆無であったが、彭瑞金「読『結義西来庵』」『民衆日報』（1978年10月21日）をはじめ、丘秀芷「結義西来庵—噍吧嘰事件」『中央日報』（1978年10月25日）、沈明進「評李喬的『結義西来庵』」『中央日報』（1979年3月4日）、花村「談李喬『結義西来庵』一書裏調子的運用」『中外文学』（1979年10月）など、刊行の翌年以降に同作をめぐる論評の発表が集中している。着目したいのは、沈明進や花村の評論題目からも窺えるように、この時点で『結義西来庵』は

すでに“李喬”の作品として見なされていた点である。“李能棋”という本名で出版された『結義西来庵』には、作者紹介に関する記載さえ見られなかったが⁹⁹、確かに『結義西来庵』は出版の翌年には“李喬”の作品として認知されていたのである。後述のように、李喬は1978年1月から『台湾文芸』で『寒夜』三部作の第一部『寒夜』を連載し、同年4月には『民衆日報』でも同三部作の第三部『孤灯』を連載しており、『結義西来庵』は『寒夜』の作者が描き出すもうひとつの「[台湾の一筆者注] 歴史を背景に書かれた小説」¹⁰⁰として期待されていたのであった。そのため必然的に『結義西来庵』をめぐる文学的評価は、作中での歴史描写の問題に集中した。花村は前述の論評で、次のように論じている。

この本は確かにきちんと周到に余清芳、羅俊、江定らの不遇や行動を描き出し、侵略者に制圧された一般庶民が感じた心情を描写しながら、また噍吧咩事件の発端と結末、それが台湾五十年の占領期において持つ歴史的意義も概括している。¹⁰¹

花村は、作者が義民の様子と殖民地統治下での台湾人の心境を活写し、西来庵事件の歴史的意義さえも詳細に描き出した点に注目し、「内容の面では、他人に容喙させる余清芳地はどこにも無い」¹⁰²と高く評価した。こうした歴史描写に関しては、沈明進も同様に「[物語は一筆者注] 縦の方向では事件の一部始終を詳しく論述し、横の方向では烈士者となった組織の諸成員の心情を代弁している」¹⁰³と好意的に批評する。また、『結義西来庵』と同時期に『伝記叢刊』での創作に関与した丘秀芷によれば¹⁰⁴、同作は「完全に史実に基づき、虚構のひとかけらもない」¹⁰⁵描き方であるという。このように官製文学として誕生した『結義西来庵』は、作品の発表当初から西来庵事件の全貌を史実に即して克明に描く「大型のルポルタージュ」¹⁰⁶として認識されていたのであった。

第2節 抗日表象の中華民族意識への接続

1. 歴史描写の偏重性

一般的に、伝記文学は叙述対象の偉人を必要以上に美化し、特定のシンボル像を産み出す傾向が強いと言われるが¹⁰⁷、党史会による『伝記叢刊』もこのような伝記文学の典型例であった。官製文学である『伝記叢刊』は、作中の主人公が党への忠誠を誓い、国家を愛し、中央を擁護する姿勢を強く見せている¹⁰⁸。それでは『結義西来庵』では、物語で表現される政治性は如何に表現されているのだろうか。前節で述べたように、花村は『結義西来庵』の物語内容を肯定的に評価していたが、その一方で「形式の面では、議論すべきところがかなりはっきりしている」¹⁰⁹と次のように論評してもいた。

作者は羅俊に対してできるだけ詳細に書き、あろうことか全体の三分の一余りの紙幅を占めている。だが噍吧咩事件は何千何万という人が起こした事件であり、それに情況と理屈から言えば、本当の発起人と指導者は、確かに余清芳だ。余清芳のいた西来庵は革命運動の揺籃の地であり、余清芳を首謀に、江定や羅俊へ連絡が回ったのであり、余清芳は義軍統領の大元帥で、彼によって檄文が飛ばされ、天下に告げられた。それゆえ、噍吧咩事件の進展から言えば、主題は余清芳をめぐるべきでありそうしてこそ完璧であると見なせよう。¹¹⁰

花村は『結義西来庵』で羅俊の描写が「全体の三分の一余りの紙幅を占めている」点を指摘し、西来庵事件で余清芳が「義軍統領の大元帥」として行動した史実に鑑みれば、物語の多くで余清芳を描かずに羅俊に焦点を当てることは主題から外れていると批判した。このように『結義西来庵』については、事件の全貌が活写されているという評価の一方で、描写内容に偏重が見られるとも指摘されていたのである。ここで挙げられている羅俊とは、前述のとおり余清芳と共に抗日武装蜂起を主導した義民統領の一人である¹¹¹。史実の上で、羅俊は幼少より書房に通い、総督府の始政開始直後には、抗日分子の掃討を目的として台

湾人紳商が当局に設置を求めた「反民族的な買弁家的組織」¹¹²の保良局で書記をつとめていた。だが、羅俊はまもなく抗日運動へ加わり、決起が失敗すると密かに対岸の華南地方へ渡り身を潜める。そこで羅俊は日本の殖民地支配に抵抗して中国大陸の原籍へ戻った数多くの台湾人と出会い、自身でも辛亥革命を目の当たりにすることで台湾の解放を願うようになった。そして余清芳の蜂起計画を知ると、羅俊は中国大陸から台湾へ戻り西来庵を訪ね、余清芳と義兄弟の契りを結び、西来庵事件を引き起こした。李喬は『結義西来庵』でも、抗日決起に失敗し台湾と中国大陸の間を行き来する羅俊の姿を描いたが、着目したのは、物語の中で幾度も叙述される羅俊の視線を通して見た清末中国の様子である。

頼秀〔羅俊の偽名一筆者注〕、47歳。彼は“台湾の名医”、それに加えて“台湾の名士”という肩書きでもって、〔医者としての一筆者注〕技量を持ちながら各地をさすらい、世間をわたり歩いた。以後七年の間、彼は福建や浙江、広東、広西を歴遊し、嶺南各地の古刹や名所、海岸沿いや内陸の要所で、政情や風習、人々が生活に苦しむ姿を黙々と目にした。彼の心中が悲愴感で溢れていたのは、彼が熱血漢であったためだが、この時の祖国大陸ではまさに義和団事件が勃発し、八ヶ国連合軍の騒乱を引き起こし、続いて日露戦争が開戦し、わが東北の辺地が戦場と化したためでもあった。清朝政府の腐敗は、もはや完全に露呈しており、祖国大陸も、同様に列強による領土の蚕食と併呑の局面に立たされていたのである。

ただ1905年、光緒31年、孫中山先生が結成を企てた革命団体——中国同盟会が、凍てつく寒さの、長い長い夜が続く祖国に、一筋の希望をもたらしたのだ。¹¹³

『結義西来庵』では清末中国の荒んだ状況と、その時代に孫文が結成した中国同盟会に対する期待の双方が描き出される。日本統治下の台湾と同様、清末中国も「同様に列強による領土の蚕食と併呑の局面に立たされていた」のであり、孫文の中国同盟会の誕生こそが「長い長い夜が続く祖国に、一筋の希望をもたらした」。そして目覚めた羅俊の抗日意

識は、辛亥革命後の中華民国の誕生により、台湾解放に向けた大きな期待へと変わってゆく。

最も彼〔羅俊—筆者注〕を奮い立たせたのは、1911年（宣統三年）10月10日に、孫中山先生の率いる革命軍が武昌で決起し、清朝を倒し、中華民国が誕生したことである。……中華民国の誕生こそが彼に無限の希望と鼓舞をもたらしたのだ。¹¹⁴

列強に蹂躪された台湾と「祖国」の現状に失望した羅俊に、「無限の希望と鼓舞をもたらした」のは、孫文が導く革命軍による破竹の進撃であり、「中華民国の誕生」であった。

『結義西来庵』では、中華民国の建国こそが台湾を日本の殖民地統治から解放する最大の原動力として描かれてゆく。もっとも周知のとおり、武昌蜂起は中国各地の革命軍による蜂起に拍車をかけて中華民国を誕生させたが、革命勢力自体は依然として脆弱であり、中国革命に成功したとは言い難い¹¹⁵。建国直後に臨時大総統の座は袁世凱へ移譲され、南京臨時政権が消滅し、孫文は日本へ亡命した。言うまでもなく、国民党の官製文学として出版された『結義西来庵』では、こうした革命に内包される否定的側面については一切描いていないのである。従来『結義西来庵』は、西来庵事件を史実に即して描く「大型のルポルタージュ」として見なされていたが、その内実においては、実質的な政府刊行物であることが歴史描写の偏重に繋がったことは否定できなかった。

『結義西来庵』における歴史描写の偏重性は、台湾と中国大陸との紐帯を強調する物語展開からも窺い知ることができる。西来庵での密議で余清芳を囲むのは、羅俊に同行して華南地方より渡台した男たちであり、彼らは国民党の前身組織である中華革命党が送り込む工作員として描かれている。男たちは「中華革命党の命を奉じて、台湾へ来て皆を助ける」¹¹⁶ のであり、物語では西来庵事件が「中国大革命の一環、一筋の支流」¹¹⁷ として位置付けられてゆく。ここでは辛亥革命の台湾への伝播が繰り返し強調され、中華民国による中国統一こそが台湾人に「無限の希望と鼓舞」を与えると言説化される。それはあたかも

国民党が台湾を日本の殖民地から解放し統治する政治的正統性を呈示するかのようでもあった。

『結義西来庵』では、こうした中華革命党が派遣する工作員の一人に林資鏗（1878-1925年、字・季商、号・祖密）という人物を登場させている。史実では、林資鏗は台湾五大家族のひとつである霧峰林家の末裔であり、父親の林朝棟は劉銘伝の側近として、山地開発に伴う樟脳経営を担っていた¹¹⁸。日本の殖民地統治開始後、林資鏗は父親と共に原籍の漳州へ戻り、1915年には中華革命党へ入党し、自身の潤沢な資金で孫文の革命を強く援助していった。そして林資鏗は孫文の信頼を得て、閩南軍司令に命ぜられた。李喬は『結義西来庵』の自序でも、林資鏗を重要な「革命同志」¹¹⁹と見なし、「羅氏と林季商の関係は、とりわけ重要である」¹²⁰と明記していたが、物語中では次のような対話を設定している。

「頼先生〔頼秀、即ち羅俊の偽名—筆者注〕、ここは原籍の場所ではありますが、でも、我々は台湾でも先祖代々やってきました。我々は〔台湾に—筆者注〕戻って革命のために奮闘すべきなのです。」

「そのとおりだ！林先生、わたしは……」老人の心中は感激し、言葉にならなかった。

「あなたは気概のある人で、わたくし林もそうです。わたしは力を尽くして台湾の同志が国土を回復してくれるのを手伝います。」

「わかった！」彼はさっと立ち上がると、口振りは朗らかで毅然としていた。手を差し出して林祖密と一度きつく握手を交わした……¹²¹

『結義西来庵』では、物語の実質的主人公である羅俊が林資鏗との対話を重ね、台湾での抗日運動へ参加する決意を固めてゆく様子が描かれる。李喬は羅俊を孫文と関係の深い林資鏗と結び付けることで、「中華民国政府、中国国民党と台湾の抗日革命が直接関連しているという重要な史実」¹²²を説き、台湾と中国大陸の間で繋がる強い紐帯を表現しよう

とした。だが、実は林資鏗の事績は、西来庵事件の中心的要因ではなかった。西来庵事件に関する「最も完備した専門書」であるはずの『余清芳伝』でさえも、事件における主要な革命同志の一人として林資鏗の名前を挙げていない¹²³。また、李喬が『結義西来庵』を創作するにあたり参照したという『革命全档』でも、林資鏗に言及するのは同書全八冊のうち計五頁ほどに相当する尋問調書のみであり、林資鏗は当局から取り調べを受けた千名を超える義民の一人に過ぎなかった。李喬自身も『結義西来庵』の自序で、林資鏗の生涯が今後さらに進んで研究されることを期待したいと記したように¹²⁴、同作の創作当時は依然として林資鏗の西来庵事件への関与は詳らかではなかったようだ。李喬は物語中で余清芳ではなく羅俊に焦点を当てて描写するのと同様、史実の展開から逸脱しない範囲で、意識的に西来庵事件という日本統治期の代表的抗日事件を中華民国や国民党、あるいは“祖国”としての中国大陸に接続させて描いたと言えよう。前述の如く、これまで『結義西来庵』は史実に忠実な作品として評価されてきた。だが、実際には『結義西来庵』は官製伝記文学という枠組みの中で、作者自身による歴史の再解釈を経て誕生した物語であったのだ。

2. 「民族」と「抗日」への傾斜

こうした中、李喬は『結義西来庵』の自序において西来庵事件で羅俊が果たした意義に関して次のように記し、羅俊の物語を描き出す必要性を示唆している。

〔西来庵事件は一筆者注〕 三方面の反日勢力の大団結であったとわかる。余清芳は、一般民心の自衛本能である暴力に対する抵抗を代表し、江定は、地下の武装勢力の火種を代表して、羅俊は民族意識に基づく大義ある抗日だ。このように見ると、羅俊こそが本当の意味での彼らの統領であったが、残念なことに大旗を掲げる前に敵手に落ちてしまったことには、切齒扼腕させられる。¹²⁵

李喬が『結義西来庵』で意図して物語の中心に羅俊を据えたことは、「民族意識に基づく大義ある抗日」を語るためであった。このように李喬は“民族”と“抗日”をハイライトに、西来庵事件の物語を描き出そうと試みたのだが、それは同作の発表が1970年代であるという時代的意味合いも大きかった。蕭阿勤によれば、1970年代における台湾人の中での日本統治期に対する集団的記憶の基調とは、国民党が主導する中国民族主義を起点として、台湾と中国大陸の関係を確固として繋ぎ合わす歴史叙事モデルであったという¹²⁶。そして1970年代当時は、省籍にかかわらず台湾人が抱える抗日の経験こそが、過去の歴史に対する集団的記憶の中核を担っていたのである¹²⁷。

台湾社会では1970年代に、日本統治期の文化や芸術、歴史が繰り返し再評価されてゆくと、そうした事例でも同様のことが言えた。例えば文学では、民族の自立や抗日を謳った日本統治期の台湾新文学が再評価され、それは自らの出自である“中国”にアイデンティティを求める強い姿勢として、台湾人読者の間で共感されていった。蕭阿勤はその典型例として、1976年に楊逵の短編小説「圧不扁的玫瑰花」¹²⁸が日本統治期の台湾人作家の作品として、初めて中学国語教科書の教材に採用されたことを挙げている¹²⁹。主人公の数学教師の視線から描かれる帝国日本の殖民地統治に対する批判的隠喩と“祖国”中国に対する民族意識の強さは、当時の台湾社会で大いに注目された。この時期には同時に楊逵以外の作家でも、頼和や呉濁流、張深切（1904-65）、楊華、呉新榮（1907-67）、張文環、巫永福（1913-2008）、呂赫若、鍾理和などの描き出す物語が民族意識や抗日意識といった視点から歓迎され、彼らは台湾新文学を代表する台湾人作家として再評価されていった¹³⁰。ほかにも、陳少廷『台湾新文学運動簡史』（1977）が戦後初めて文学史論の範疇において日本統治期台湾人作家の文学活動を取り上げ¹³¹、鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集』（1979）はこれら台湾新文学の諸作品を収録した全八冊の叢書として刊行されていた¹³²。

同様に、歌謡界でも1970年代は民族と抗日という二つの切り口を通して、日本統治期の流行歌が再評価された時代でもあった。陳培豊によれば、日本統治期の台湾語流行歌である「望春風」（1933）や「雨夜花」（1934）、「農村曲」（1937）などは、李双澤（1949-77）

や黄春明（1935-）ら台湾人作家の言説によって、戦前の台湾人による日本の殖民地統治に対する抵抗歌という位置付けで再評価されていったという¹³³。このように民族と抗日が結びつく 1970 年代の時代背景の中で、日本統治期の台湾語流行歌は、台湾人が日本帝国主義に抵抗して“祖国”への復帰を願い民族を謳歌した歴史的な証しとして解釈されていたのである¹³⁴。

要するに、1970 年代末に発表された『結義西来庵』は、「同胞に対する、祖国に対する、民族に対する愛と思いやり」¹³⁵に溢れた“抵抗”の物語として評価されたが、そこでは国民党の息がかかった官製文学としての出版背景に基づき、中華民国や国民党の政治的正統性が代弁されると同時に、当時の台湾社会で瀰漫した台湾人の民族意識や抗日意識への関心を巧みに酌み取りながら、台湾人読者の集団的記憶を呼び起こす仕掛けが仕込まれていたと言えよう。だが、さらに興味深いのは、次節で詳論するように李喬が描く『結義西来庵』の中での抗日表象には、こうした概念とは別の角度から接続する“台湾意識”という描出さえも垣間見える点なのである。

第 3 節 『結義西来庵』と台湾意識の再編成

1. 余清芳による抗日とアイデンティティの探求

ところで、李喬が政府刊行物である官製文学の創作に関与したのは、『結義西来庵』が初めてではない。早くには 1971 年に台湾省政府新聞処より『省政文芸叢書』（以下、『省政叢書』と略す）の一作として長編小説『山園恋』（山園の恋）¹³⁶を出版し、1978 年にも同叢書の中で長編小説『青青校樹』（仰げば尊し）¹³⁷を発表している。『省政叢書』とは、台湾省政府による台湾建設を宣伝するための官製文学である¹³⁸。『山園恋』では原住民の青年夫婦を主人公に山地社会の経済発展を題材にし、『青青校樹』では高校教師を中心に充実した学園生活の模様を描いている。但し、これらの作品では表層的には台湾省政府の政績を賞讃しているかのように見えるが、実は李喬は物語の形式を借りながら、主題に関連する様々な社会的問題さえも提起していた¹³⁹。次章で詳論するように、1970 年代とは

李喬自身の創作姿勢が大きく変化し始めた時期でもあり、台湾社会の時事的問題を積極的に題材へ取り込み、自作では盛んに社会批判を展開していった。李喬は『省政叢書』という政府刊行物の出版に関与したが、そこでは御用文学の創作に没するのではなく、自身の信条を物語に託していたとも言えよう。

それでは、同じく官製文学である『結義西来庵』では、作者自身の個人的信条や思想は如何に表現されていたのだろうか。前節で論じたように、『結義西来庵』では羅俊にまつわる描写が物語全体の大部分を占めていた。だが、物語では西来庵事件の首謀者たる余清芳の存在が完全に看過されたわけではなかった。そこでは同事件の顛末が描かれると同時に、その伏線として台湾割譲以来の義民による抗日運動の模様も叙述されてゆく。台湾割譲直後には余清芳も「異族の残虐で勝手気ままな横暴振りを目の当たりにし」¹⁴⁰、「密かに武装抗日の義民団体に加入した」¹⁴¹ のであり、李喬は余清芳が抗日運動へ加わる姿を描きながら、当時の台湾の様子を次のように述べてゆく。

裕福な人々は、妻を携え子を連れて閩南や広東の原籍に戻ることができるが、圧倒的多数の台湾人は皆大陸へ戻る手立てがなく、台湾は彼らが根を下ろして育った場所、血肉の繋がりのある場所であり、たとえ離れることができたとしても、誰が甘んじて離れようか？

こうして、もともと至る所で次々と湧き起こった、始末しきれず鎮圧できない抗日の烽火であったが、この特別な年に、義民義軍が、嵐のような勢いで現れて前の屍を乗り越え後から続き、台湾全島が揺れ動いたのである。¹⁴²

ここで李喬が描き出す台湾とは、台湾人が「根を下ろして育った場所、血肉の繋がりのある場所」であり、それは帰属意識を求めた郷土というルーツでもあった。このような台湾に対する帰属意識は、物語の実質的主人公である羅俊が検挙されて以降、余清芳にまつわる描写の中で如実に表出してゆく。例えば、噍吧嘰の山中で大明慈悲国大元帥に推挙さ

れた余清芳が掲げる大旗には、『日本の侵略者は立ち去れ、我らに国土を返せ』、『我らの台湾を守れ、我らに祖国を返せ』、『我らと侵略者は、俱に天を戴かず』¹⁴³ といった標語が並び、西来庵事件をめぐる義民の言動の裏側に貼り付く強い台湾意識が現れていた。そして当局の制圧を受けてから噍吧哖での抗日運動とは、もはや辛亥革命の影響下での“抵抗”ではなく、余清芳ら台湾人自身が自らを頼りに郷土を守る“抵抗”へと変容してゆく。

余大元帥の訓話は、とても簡単で、わかりやすかった。彼は言った。

「俺たちは生きていけない、だから立ち上がり反抗するのだ。俺たちは統治者が日本の奴らだから反抗するのではない、日本の奴らは漢人ではなく、俺たち漢人を生きていけなくさせる、俺たちはだから日本の奴らに反抗するのだ。

……

俺たちは孤独ではない、全台湾の人々が立ち上がって応じてくれるはずで、大陸の祖国は俺たちを支援してくれるはずだ——いまは連絡が途切れているが、一度繋がれば、兵力や火器が運ばれてくるはずだ！……」¹⁴⁴

これら余清芳の言動では、台湾の郷土を防衛するために抗日運動を起こす大義が語られるが、その一方では台湾と「大陸の祖国」との紐帯がすでに「途切れている」ことが逆説的に暗示される。そして余清芳らは「大陸との通信が途切れ、人的支援、火器の供給、いずれもが道を断たれてしまう」¹⁴⁵ ことで噍吧哖にて敗壊し、「台湾が日本に占領された五十年間の、抗日革命事件の中で、最も大きく、壮烈で、悲壮な一戦」¹⁴⁶ は終幕する。前述のように、『結義西来庵』では羅俊の中華民国に対する憧憬や辛亥革命の台湾への伝播に対する期待を中心に、台湾と中国大陸の強い結び付きが象徴的に叙述されていた。だが、物語の展開は羅俊が検挙された後に一転し、余清芳ら義軍一統が「大陸の祖国」から支援を受けることなく瓦解してゆく模様が描かれてゆく。このように『結義西来庵』では、余清芳の抗日武装蜂起が失敗し、彼らが捕捉され処刑されるまでの過程を描くことで、台湾

と中国大陸との連絡が断絶し、台湾人が自らの運命を決断してゆく姿を強く印象付けていた。それはあたかも台湾が将来的に背負うことになる歴史的・政治的宿命を予言するかのようでもあり¹⁴⁷、『結義西来庵』の物語は台湾と中国大陸の間で結び付く民族の連帯という虚構さえも解体してゆく。『結義西来庵』で描かれる余清芳の抗日表象とは、もはや羅俊の言説に代表される中華民族の団結ではなく、台湾を中心とする帰属意識、郷土回復の探求へと変化してゆくのであった。

それでは何故に『結義西来庵』では、羅俊を主人公に台湾と中国大陸の紐帯を主題として描きながら、一方では余清芳を軸に台湾の“祖国”からの離脱という対極的な言説を用いたのだろうか。前述のように、李喬は『結義西来庵』の創作にあたり『革命全档』を中心に資料を収集したほか、西来庵事件での生存者や遺族など関係者からも口述記録を取り、二年六ヶ月に及ぶ長期取材を実施した。その時の体験は『結義西来庵』の自序においても、次のように記されている。

八冊の巨大な档案の三百万字近くに及ぶ史料〔『革命全档』一筆者注〕を詳細に読み込み、さらには台南・高雄の二縣市四村を訪ね、伝承を仔細に調べあげ、逸話を収集し、生き残りの古老を訪ね、古戦場を弔い、死者の遺影を仰ぎ見て、忠魂塔〔前述の抗日義士忠魂塔一筆者注〕の骨倉に入り、刀や銃弾の跡が未だに残る烈士の遺骸を目の当たりにした後で、筆者はフィクションをもって処理することはもはや忍び難く、その勇気も失われ、如何ともできなかった。¹⁴⁸

この記述だけでは、李喬が台湾南部の取材経験で何を感じ得たのか具体的に窺い知ることとはできないが、李喬はその後も繰り返し同様の見解を述べている。それが最も詳しく叙述されるのが、『幽情』三部作（2010-13）の第一部『咒之環』（呪いの環、2010）の自序である。「『わたし』は何者なのか？『わたし』とは誰なのか？」¹⁴⁹と自らのアイデンティティを探求する印象的な書き出しで始まる同序文は、次のように記されている。

わたしは高さ1メートル50センチほど、四方を囲む壁からは20数センチほどの隙間しかない巨大な“骨倉”の前に立った。

形の整ったあるいは形の無い骸骨やされこうべ、頭蓋骨、椎骨、二の腕や下膊の骨、太腿やすねの骨、肋骨、裂けてばらばらになった骨盤の骨……すべてが灰色だった。分厚い埃に……分厚い歴史に覆われて沈殿していた……

……

わたしは比較的整ったされこうべを持ち上げた。右側のこめかみ部分に人差し指大の小さな穴が空いていて、左のこめかみには拳骨くらいの大きさの穴が空いている。そうなのだ、銃弾が右のこめかみから入り、精確に左のこめかみを突き抜けて近くの肉骨で破裂したのだ……わたしは見えた、わたしは本当に見えたのだ。わたしがそこにいるのを！

わたしはすぐに1915年と1976年の間で身動きが取れなくなった。

1915年のわたしが、そこにいる。わたしのされこうべは1976年のわたしの掌で見つめられている……わたしは自分が見えたのだ、わたしは自分を探し出したのだ。

それならば、わたしは誰なのだろうか？わたしとは何者なのだろうか？¹⁵⁰

李喬は『結義西来庵』での取材を通じて、台湾が抱える歴史の重厚さを改めて自覚し、「わたしは誰なのだろうか？わたしとは何者なのだろうか？」と自身のアイデンティティを強く問う体験を得たのである。そして李喬は『結義西来庵』を創作してゆく中で、自らの帰属意識を台湾に求めてゆく。この点に関しては、自伝的評論『我的心靈簡史』（わたしの靈魂の履歴書、2010）でも、次のように述べている。

この伝記小説『結義西来庵』の創作は、わたしを蛹化させ羽化させ、一人の“台湾小説家”を確立させた。

……

わたしはよく振り返るのだが、もしも『結義西来庵』での何重もの鍛錬、史料の吸収とフィールドワークでの辛抱、及び“台湾人意識”の涵養を経験しなければ、わたしは台湾歴史シリーズの作品を書くことはできなかつただろうと。¹⁵¹

『結義西来庵』での創作経験は、李喬自身に“台湾人意識”を強く自覚させる契機となった。李喬は『中国時報』のインタビュー記事「個人反抗與歴史記憶」（個人的反抗と歴史の記憶、1998）でも、『結義西来庵』の物語と台湾に対する帰属意識の関係、その後自らの創作理念の変化について語り、同作を創作する過程で体験した台湾意識の再編成こそが、自分自身の創作姿勢に対して大きな影響を及ぼしたことを証言している。

この全ての経験〔西来庵事件についての取材経験—筆者注〕はわたしに二つの重要な啓発を与えまして、一つはどのように実際の接触や実証を通じて、文字資料を文学に転化させるのかということですが、〔文学的—筆者注〕技巧の上ではわたしは乗り越えることができました。二つ目は台湾の歴史とその後皆さんが語る“台湾意識”に対して、わたしは比較的深く精通したということです。¹⁵²

李喬は『結義西来庵』発表の直後にも、短編小説「尋鬼記」（亡霊捜しの記、1978）で、“わたし”を主人公にしながら忠魂塔の骨倉での感慨をメタフィクションの形で表現しており、その体験が如何に李喬に対して強烈な衝撃を与えたのか推察できる¹⁵³。次章で詳論するように、代表作『寒夜』三部作では、長期間の資料収集とその実証を経て、作者自身による歴史解釈により作品が編み出されていったが、『結義西来庵』での創作体験とはそうした“歴史素材小説”を産み出す直接的要因であった。そして『結義西来庵』における余清芳を軸とした台湾への帰属意識、郷土回復の探求といった物語展開とは、これら李喬による台湾意識の再編成をめぐる体験で得た感慨の投影でもあったと言える。

2. 1970年代台湾社会と台湾基督長老教会

一方、『結義西来庵』での抗日表象をめぐる台湾意識の描き方は、1970年代当時の台湾社会の変容から影響を受けた可能性も考えられる。『結義西来庵』発表の1977年には郷土文学論争が起きているが、当時李喬は同論争に関与しておらず、李喬が深く関係した『台湾文芸』の本土派作家たちも論争については基本的に沈黙を保つたままであった¹⁵⁴。『結義西来庵』における郷土文学論争からの影響については、今後の詳細な研究に俟つところだが、同作に対しては1970年代初頭より続いた台湾基督長老教会（以下、長老教会と略す）による一連の政治的行動の影響も見られるのではないだろうか。

長老教会とは、台湾最大のプロテスタント教派であり¹⁵⁵、その信者の大部分を本省人が占める「台湾の土壌に根づいた教会」¹⁵⁶である。台湾での宣教は十九世紀半ば以降より始まっている。台南では1865年にイギリス長老教会のマックスウェル（James Laidlaw Maxwell、1836-1921）により、また淡水では1872年にカナダ長老教会のマカイ（George Leslie Mackay、1844-1901）が宣教を始めた。その後、長老教会は日本統治期には二十世紀初頭をピークに、カトリックや日本人教会を凌ぐ圧倒的な勢いで信者数を増大させた¹⁵⁷。戦後も長老教会は台湾宣教百年を祝う教会倍加運動などで信者数を増加させ¹⁵⁸、その規模は1970年代末には、台湾における全プロテスタント教徒の八割を占めるまでに至ったという¹⁵⁹。

「台湾のキリスト教史は、その悲劇的な政治史を反映する」¹⁶⁰とまで言われるように、台湾におけるキリスト教の宣教と台湾社会の歴史的・政治的展開は切り離して考えることができない。長老教会による宣教も、このような台湾近現代史の展開と密接に結び付いている¹⁶¹。こうした中で、言わば台湾の歴史を背負う長老教会が、政治的禁制が長らく続く国民党統治期の戒厳令下でも信者同士で連携し合い、1970年代には「約20万人〔の信者—筆者注〕と全国1,008の教会を擁する〔台湾—筆者注〕最大の合法的結社」¹⁶²として活動していたことは看過できまい。

周知のとおり、1970年代には台湾をめぐる国際情勢が急展開し、1971年にはニクソン・ショック、中華人民共和国の国連加盟決定と続き、中華民国政府は国際政治の表舞台から姿を消した。こうした中で、長老教会は1971年12月に“台湾基督長老教会対国是の声明與建議”（以下、国是声明と略す）を發表する。“国是声明”では、ニクソン大統領が中国大陆を訪問することに強く警戒し、国際世論が主張する台湾の共産党政権への併合や台北・北京両政府の直談判などは、台湾に暮らす人々の人権と意志を黙殺し、彼らを売りわたすことに他ならないと世界へ向けて主張した¹⁶³。注目すべきは、このとき同時に国内へ向けては、徹底的に内政を革新し、台湾の国際的な名声と地位を維持するために、中央民意代表の全面的改選を強く要求したことである¹⁶⁴。当初、“国是声明”は政治行為ではなく信仰に基づく宗教的告白であると表向きには主張されたが¹⁶⁵、台湾社会の民主と自由を謳い、中央民意代表の全面改選を提議する要求は、青年知識人が集結し改革言論を繰り返した『大学雑誌』で、1971年10月に發表された“国是諍言”を彷彿させる政治的声明とも言えた。

こうした長老教会による台湾の内政改革と国際的地位の維持を訴える宣言は、“国是声明”後にも繰り返される。1975年11月には、同年1月に当局が台湾語のローマ字聖書を没収したことに抗議し、長老教会は“我們的呼籲（われわれの呼びかけ）”を表明した¹⁶⁶。

“我們的呼籲”では、台湾語聖書の使用許可を求めて宗教信仰の自由を主張する一方で、キリスト教徒の政治的責任として¹⁶⁷、台湾人が自らの運命を決定する権利の保障と民主的で公正、廉潔な政府への変革を強く要求している¹⁶⁸。また、1977年8月には“台湾基督長老教会人権宣言”（以下、人権宣言と略す）が發表されている。同年6月には、アメリカのカーター大統領が中共との国交正常化交渉の開始を決断したが¹⁶⁹、それを受けて“人権宣言”では、台湾人民の安全と独立、自由のために台湾の将来は台湾住民によって決定されるべきと高らかに謳い、「台湾をひとつの新しく独立した国家」¹⁷⁰として認知するよう、アメリカを中心に世界へ向けて強く主張した¹⁷¹。このように長老教会は、台湾をめぐる国際情勢や内政事情の変化に応じて、戒嚴令下にもありながらも一連の政治的声明を發表

し続けたのであった。それは世界に対して台湾人の自決権を尊重し、台湾を「新しく独立した国家」として認めるよう求める先駆的主張であり、台湾意識の強い表出とも言えた¹⁷²。

李喬はこのような台湾社会の政治的変容の中で、1970年代を通して長老教会が宣言した三度にわたる政治的声明に対して、無関心ではなかった。確かに李喬は今では敬虔なクリスチャン作家として知られているが、本人はキリスト教の洗礼を受けたのは1994年であると述べている¹⁷³。「わたしは五十歳以後に基督神学に触れた」¹⁷⁴という李喬自身の言葉を勘案しても、『結義西来庵』発表の1970年代末では、創作に対するキリスト教の宗教的影響は限定的であった可能性が高い。李喬は1960年代初頭に台湾文壇に登場して以来、宗教的関心はむしろ仏教思想へ傾斜していたのであり、まさに葉石濤が言うように、李喬は「仏教哲理の影響を比較的深く受けた作家」¹⁷⁵として見なされていた。当時は李喬自身も、壹闡提の筆名で「簡介『金剛経』」（「金剛般若経」の紹介、1972）¹⁷⁶や「浅談仏経読法」（仏典の読み方早わかり、1973）¹⁷⁷など仏典に関する論評を多く発表し、さらには仏教学者である紀野一義（1922-2013）による日本語の著作を翻訳していたことから¹⁷⁸、仏教に対する宗教的関心の高さを認めることができよう。但し、一方では李喬の配偶者である蕭銀嬌（?-）が、早くには李喬自身よりも二十年以上も前に洗礼を受け、長老教会の敬虔な信者として長年活動し続けてきたという事実も軽視できまい¹⁷⁹。しかも、李喬は1970年代には台湾の社会的事象を積極的に題材へ取り込み始めたのであり、社会変革を訴え続けた長老教会の活動にも注視していた¹⁸⁰。李喬は「台湾社会で重大事件が起きた時、立ち上がり“強烈に反応した”のはキリスト教であり、とりわけ台湾基督長老教会であった」¹⁸¹と、長老教会が戒厳時代に果たした政治的役割を高く評価していたのである。

もつとも、言うまでもなく西来庵事件とキリスト信仰については大きな接点がない。むしろ西来庵事件と直接関係するのは王爺信仰である¹⁸²。余清芳ら事件の中心人物はいずれも西来庵の敬虔な信徒であり、西来庵の主神こそ王爺信仰では代表的な神祇である五福大帝であった¹⁸³。こうした西来庵事件における王爺信仰の重要性については、『結義西来庵』の中でも描写されている。『結義西来庵』はその冒頭から、「民国4年（西暦1915年）4

月 16 日、旧暦 3 月 3 日。この日は台南市西来庵で、五福大帝の序列三位である“宣靈公”劉元達尊神の誕辰であった¹⁸⁴ という一文で始まり、物語展開と王爺信仰の強い関連性が示唆される。余清芳ら信徒は、「西来庵では陰暦の毎月 3、6、9 日には必ず“降筆”〔占い一筆者注〕を行う」¹⁸⁵ のであり、日頃から五福大帝に対して抗日決起の成否を占っていた。

王藍石老拳人は筆生〔タンキーが話す意味を記録する者一筆者注〕の役目を負い始めた

……

……老拳人は鬚をつまみ、大喜びした。「五帝爺〔五福大帝一筆者注〕は仰る、大事は、実行可能なり！」

また尋ねた。抗日は、成功するのか？

線香の灰の上に、横に三線、縦に一線を引いた。

老拳人は言った。「これは王の字じゃ。王とは、天下の向かうところなり。〔それに必要不可欠な一筆者注〕三者とは、天・地・人なり、天・地・人とは“三才”を言う、三つを繋げれば王じゃ、王とは、天下を支配することなり、抗日は絶対に成功する。」

また尋ねた。抗日は、どこから始めればよいのか？¹⁸⁶

このように『結義西来庵』では、西来庵事件での余清芳らによる抗日武装蜂起そのものが、台湾の土着宗教である王爺信仰に委ねられていることを描いてゆく。物語で象徴的に描出されるのは、王爺信仰の下で台湾の民衆が結集し、総督府という絶対的権力に対して強く“抵抗”してゆく姿であった。

李喬がこうした『結義西来庵』の物語を、台湾「最大の合法的結社」である長老教会が政治的声明を繰り返した 1970 年代に創作したことは、決して偶然ではないだろう。物語と現実の間には、総督府による強圧政治、蒋介石・蔣経国を頂点とする独裁政治という社会的背景の差異は見られるが、双方に共通するのは宗教的關係で繋がり統治権力に対して

あくまでも“抵抗”してゆく民衆の存在である。『結義西来庵』では、王爺信仰を抛り所とする民衆蜂起を物語ることで、絶対的な統治権力に対する民衆の集団的抵抗の現実性を示唆し、それは同時代においてキリストの教えのもとに団結し国民党に抵抗してゆく、長老教会二十万人の信者たちの姿へと大きく反転してゆく。つまり『結義西来庵』の物語展開とは、逆説的ではあるが、現行の政治体制に異議申し立てを行い、「台湾をひとつの新しく独立した国家」として認知するよう国際社会に訴えてゆく、言わばもうひとつの台湾の土着宗教である長老教会の行動に対して、大きな期待を寄せるかのようでもあった。前述のように、李喬は戒嚴時期における長老教会の政治的役割を高く評価していた。李喬は長老教会による台湾意識を掲げた一連の政治的声明に触発されるかのように、余清芳を中心とする台湾意識の高揚と統治権力への抵抗というテーマを、『結義西来庵』の物語で力強く描き出そうと試みたのである。

小結

本章では、これまで十分に議論されなかった『結義西来庵』を中心に、作中で描かれる抗日表象の重層性について考察した。『結義西来庵』は、実質的には政府刊行物である『伝記叢刊』の一作として出版された経緯もあり、従来論評では西来庵事件の史実を如実に写し出すものとして評価されてきた。だが、実は『結義西来庵』は李喬が史実の枠組みの中で西来庵事件の歴史を再解釈し意図的に改編した物語であり、そこには中華民族意識と台湾意識という二面性が内包されていた。作中では、西来庵事件の中心的義民である羅俊の物語を描くことで、中華民国や国民党による日本の植民地支配への抵抗と台湾統治の正統性を代弁してゆくが、それは 1970 年代当時の台湾社会で瀰漫した“祖国”に対する民族意識という台湾人の集団的記憶を呼び起こす言説とも化していたのである。

その一方で、『結義西来庵』では李喬が取材経験の過程で獲得してゆく台湾意識を基盤とする自身のアイデンティティの再編成が、余清芳を中心とした義民による抵抗の物語の中でも顕在化していたことも軽視できなかった。さらに、そこでは同じく 1970 年代の台

湾社会で三度にわたり政治的声明を発表し、「台湾をひとつの新しく独立した国家」として認知するよう強く主張した長老教会、並びに同教会が強く推進した台湾社会の政治的变化に対する大きな期待さえも窺えた。李喬は『結義西来庵』を創作するにあたり、官製文学という枠組みをしたたかに借用しながら、西来庵事件における義民たちの抗日表象を軸にした物語を描き出したが、そこで重層的に描き出されるのは作者自身のアイデンティティ再編成に基づいた内容であり、台湾人が絶対的な権力に対して“抵抗”してゆく主体的な姿だったのである。

“虚構”の想像と創造

——李喬『寒夜』三部作におけるフォークナー作品の影響を中心に

はじめに

李喬の代表作『寒夜』三部作（1979-81）は、作者自身の両親を主人公のモデルとして、客家の一族を中心に清末から日本統治期終焉までの半世紀を描いた大河小説である¹⁸⁷。李喬は『寒夜』三部作の発表でもって1981年に第四回呉三連文芸賞を受賞した。当時の台湾における二大紙『中国時報』と『聯合報』では、呉三連文芸賞受賞の報道、作者及び作品に関する紹介が掲載され、李喬は同三部作によって台湾読者にその名を遍く知らしめたと言える。本論の序章でも述べたように、『寒夜』三部作は大陸から台湾に渡り新天地を開拓した漢人移民による、台湾という土地に対する複雑な感情を描出した作品と評価されるが¹⁸⁸、その一方でとりわけ戒嚴時期にはただの小説としてではなく、言わば新たに出現する台湾本土主義者の世代全体を教育する一冊の重要な教科書として読み継がれたのである¹⁸⁹。

但し、このような台湾近現代史の展開をなぞる『寒夜』三部作であったが、李喬は決して史実に忠実な物語として描いているわけではなかった。例えば、作者本人を交えた座談会の内容を記録した「縦談《寒夜》的歴史與文学」（2007）では、次のような応答が見られる。同座談会において、周婉窈は第三部『孤灯』では太平洋戦争中に南洋の戦地に送られた台湾人の若者を正規兵である志願兵として扱っているが、歴史学的に見ると正確には彼ら台湾人の身分は徴用されている軍属であり、志願兵や徴兵制による正規兵とは呼べないことを指摘した。これに対して、三木直大は『寒夜』三部作が発表された当時の1970年代末から80年代にかけての台湾人読者の意識下では、軍による徴用や徴兵の区別はつかなかったのではないかと述べ、李喬自身は三木の発言をほぼ認めながらも、このような

設定を物語中に施した最大の理由は、“台湾人の歴史記憶”の問題を描くためであったと答弁した¹⁹⁰。ここからも明白なように、『寒夜』三部作は歴史的事実に即した描写というよりも、むしろ台湾近現代史を虚構化させたものに近かったのである。

ところで、李喬は講演稿「文学與歴史的兩難」（文学と歴史のジレンマ、1986）の中で、文学と歴史の関係について次のように語っている。

文学とは歴史やこの世界の“事実”から“真実”を選び出し、“虚構”の線でもって“複合的”で“複製的”でもある歴史やこの世界を綴ってゆくものである。歴史とは文学者にとって、事件や人物を借りながら自分自身の観念を表現するところに重きを置く。かりに文学創作も歴史上の人物や事件に忠実であるとするならば、その重点は“それを再現すること”ではなく、解釈することにある。ジレンマはゆえに発生する。¹⁹¹

李喬の創作目的は歴史の中から人類に共通する人間的な事象を追求し、歴史的事実の中から真実を探り出しては“虚構”の線で繋ぎ合わせ、こうして創り出された歴史の世界を自らの信条や思想でもって解釈してゆくことにあった。それは本論の序章でも述べたように、李喬の主要な作風とも言える“歴史素材小説”が、「歴史的素材の信憑性を借りて、重点は虚構の運用に置き、主題は歴史上の事件の個人的解釈」¹⁹²に置かれて創作されていることと矛盾しない。『寒夜』三部作に代表される“歴史素材小説”を構成する礎は、まさに豊かな想像力により“虚構”の物語を想像し創造してゆくことにあったと言える。

それでは、こうした物語の虚構性を重視する李喬独特の創作観は、一体どこから生まれたのだろうか。それに関する考察の一環として、本章では特に『寒夜』三部作における外国文学からの受容の問題という視角から読み解いてみたい。近年、李喬は講演等において、ウィリアム・フォークナー（William Cuthbert Faulkner, 1897-1962）から受けた文学的影響に言及することが少なくない¹⁹³。『我的心靈簡史』でも、『寒夜』三部作は「最初に書く際にフォークナー作『響きと怒り』（*The Sound and the Fury*）から啓発を受けた」¹⁹⁴とよ

り直截的に影響について述べているのだが、従来それらの関連性を論証した先行研究は見られなかった。以下では、李喬の読書歴におけるフォークナー作品の受容過程を明らかにすると共に、李喬が強く意識した物語の虚構性という点に主眼を置き、『寒夜』三部作とフォークナー作品との影響関係について考察する¹⁹⁵。

第1節 日本語経由でのフォークナーの受容

1. 台湾におけるフォークナー

李喬は1984年に北米台湾文学研究会の招聘により渡米し、シカゴで講演した際、「響きと怒り” “八月の光” はわたしが平素最も敬服する作家 “ウィリアム・フォークナー” の偉大な作品です¹⁹⁶ と述べた。こうしたフォークナーに対する直截的な言及は、『重逢—夢裡的人』（再会—夢のなかの人、2005）でも「ウィリアム・フォークナーはわたしが唯一上限をつけずに、あらかじめ前提をつけずに最も敬服する作家である¹⁹⁷ と繰り返されている。フォークナーに対する強い関心は、『寒夜』三部作執筆以前からすでに生じていたようであり、李喬は1974年に洪醒夫（1949-82）のインタビューに応じた際、自身の創作における外国作家の影響について次のように答えていた。

私はただウィリアム・フォークナーに惚れ込んできました。誰かの影響を受けたのかどうか、これは私にははっきりとしません。¹⁹⁸

また、李喬が鍾肇政へ宛てた書簡（1976年1月13日付）には、次のような一段が見られる。

人に笑われるのですが——わたしの全ての学習経験から言えば、純文学作品は、わたしは実に読んだことが非常に少なく、いくらか“フォーワナ”について真剣になって以来、近年ではなおも読むのが本当に“怖い”のでありまして、わたしは読んでみる

と、“フォーワナ”の亡霊がわたしのこれからの作品すべてに悉く覆いかぶさろうと
しているのがわかるのです。¹⁹⁹

これらの記述から、李喬はすでに 1975 年前後にはフォークナー作品より決して少なく
はない文学的影響を受けていたものと推定できる。後に李喬は書評を中心とする月刊誌『新
書月刊』で、李喬「小説人『応読書』書単」（小説好きが“読むべき”図書リスト、1985）
を発表し、中国の詩文や白話小説などの伝統文学から源氏物語やフォークナー、ガルシア
・マルケスなど海外の古典・現代文学に至るまで、古今東西にわたる数多くの作品を自身
の推薦図書として紹介した²⁰⁰。だが、それにもかかわらず、国立成功大学での講演稿「我
的文学行程與文化思考」（わたしの文学への道のりと文化的思考、1990）では、これまで
自らの創作に対して最も強い影響を与えた作家として鍾肇政、鄭清文（1932-）、フォーク
ナーの三作家の名前を挙げるに留めている²⁰¹。1970 年代より現在に至るまで、李喬は一
貫してフォークナーに言及し続けているのであり、このような事実は李喬の小説における
フォークナー作品の文学的影響が、ほかの如何なる海外作家からの影響よりも強いことを
十分に示唆するものと言えよう。

ところで、台湾の読書界では「現代アメリカ作家中最も創造力のある作家」²⁰²と称され
るフォークナーの作品は如何にして受容されてきたのだろうか。戦後台湾文学において現
代主義（モダニズム）の最盛期は 1960 年代であったが、その萌芽は早くも 50 年代初頭
には現れていた。陳芳明によれば、1950 年代という台湾で反共文芸政策が高度に支配した
時代において、現代主義はそれを迂回する方法により発展し、初期の段階（1953-56）で
は紀弦（1913-2013）や林亨泰（1924-）らの紹介によるフランス現代主義が栄える一方、
後期の段階（1956-60）には文芸誌『文学雑誌』などの紹介によるアメリカ現代主義が徐
々に優勢を占めたという²⁰³。その後は東西冷戦の影響下で、台湾の政治や経済、軍事面
での対米依存が大幅に増大した結果、台湾社会では親米文化が急成長し、1960 年代を通し
てアメリカ現代主義は台湾文化界に大きな影響力を及ぼし続けたのであった²⁰⁴。

こうしてアメリカ現代主義の潮流が台湾の文化界全体に浸透する中、1960年代までには出版界でパール・バックやヘミングウェイ、マーク・トウェーン、スタインベックなどのアメリカ現代文学が、旧訳の再版を含めて次々と翻訳出版され、同時にそれらの作品を専門的に紹介する文芸誌や翻訳者、評論家なども出現した²⁰⁵。だが興味深いことに、その反面、フォークナーの作品に限っては、1960年代に至っても台湾で出版されることは非常に稀であった。フォークナーはすでに1949年にノーベル文学賞を受賞しており、当時の台湾出版界の関心が低かったわけでは決してない。台湾での紹介が難航した理由は、その翻訳し難いフォークナー独特の文体にあったのである。かつて国立編訳館職員や国立政治大学教授を歴任し、台湾では著名な英米文学翻訳家でもある何欣（1922-98）は、1970年にフォークナーの中編小説「熊」（"The Bear"）を翻訳出版した際、その「訳者序」においてフォークナー作品を中国語へ訳出する難しさを次のように述べていた。

ウィリアム・フォークナーは二十世紀の偉大な小説家の一人であるとかねてから見なされ、彼の評判もつとに国内読者がよく知るところとなっているが、しかし彼の作品が国内に紹介されることは却ってまだまだ少なく、ほとんどゼロに近いほど少ない。これは決して翻訳の仕事に従事する方々が怠けているからではなく、彼の文章が実に訳しづらいからであり、原文の風格を保ったままにできる中国語に訳すことがほとんど不可能なところもあるのだ。²⁰⁶

このように台湾におけるフォークナー作品の翻訳紹介は、ほかのアメリカ人作家の作品よりも十年以上も遅れ、沙文淵訳『野椰』（*The Wild Palms*、野性の棕櫚、1960）²⁰⁷、何欣訳『熊』（1970、73年）²⁰⁸、黎登鑫訳『熊』（1979、86、93年）²⁰⁹、杜若洲訳『野棕』（*The Wild Palms*、1976）²¹⁰、黎登鑫訳『声音與憤怒』（*The Sound and the Fury*、響きと怒り、1979）²¹¹など、1970年代に至ってようやく徐々に中国語訳が刊行されるようになったのである。

2. 李喬と日本語訳フォークナー作品

それでは、李喬自身は如何にしてフォークナーを受容してきたのだろうか。李喬『重逢—夢裡的人』の中での記述によれば、フォークナー作品に「初めて触れたのは何欣教授訳の『フォークナー短編小説選』」²¹²であったという。これは前出『熊』の訳者でもある何欣が翻訳した『佛克納短篇小説選』(1959)²¹³であり、同書には「愛密麗的玫瑰花」("A Rose for Emily" 、エミリーへの薔薇、1930) や「夕陽」("That Evening Sun" 、あの夕陽、1931) など、フォークナーの代表的短編小説が収録されている。また、同書の巻頭には作者についての簡単な伝記が載せられており、そこではフォークナーは「不朽の名著“響きと怒り (The Sound and the Fury)” を書きあげ」²¹⁴、「“サンクチュアリ (Sanctuary)” 出版後、すぐにセンセーションを巻き起こした」²¹⁵ と紹介されている。李喬がこの『フォークナー短篇小説選』を実際にいつ頃どこで読んだのかは定かではないが、巻頭の伝記でも言及されている『響きと怒り』や『サンクチュアリ』等、フォークナーの代表的長編小説に対して大いに関心を寄せていたことであろう。こうした李喬のフォークナー作品に対する注目に関連して、以下に挙げる壹闡提の筆名で発表した文学評論「我喜愛的書」(わたしの好きな本、1973) からは、すでに 1973 年頃には李喬が相当な量のフォークナー作品を読んでいたことが推定できる。

現在までのところ、フォークナーの小説には、何欣先生訳の“フォークナー短篇小説選”、中編“熊”以外、他のものはあるのだろうか？もし無ければ、実にわたしたちの読書界、また文壇にとって残念なことだ。わたしは何冊かフォークナーの日本語訳の長短編小説を持っているが、……わたしは翻訳に従事する学者の方が、フォークナーの重要著作を中国語に翻訳でき、気概があり見識のある出版社が、フォークナーの全集を出せるということを希望する、またはお願いすると言ってもよい。²¹⁶

確かに当時台湾で翻訳出版されていたフォークナー作品は、何欣訳の『フォークナー短

篇小説選』や『熊』など数冊に限られ、李喬が考える「フォークナーの重要著作」は未だ「中国語に翻訳」されていなかった。着目したいのは、李喬が実はこの時すでに「フォークナーの重要著作」を日本語訳のテキストでもって読書していたことである。後に李喬は国立台湾文学館が主催した公開対談「戯謔的笑顔・沈重的生命」（戯謔の笑顔・重厚な生命、2005）の中で、次のように述べている。

わたしはいつも冗談を言うのです、わたしは作家の中で文学作品を読むのが最も少ないうちの一人であると、言葉にしてしまうと恥ずかしいのですが、『紅樓夢』のようなものは読み終えたことがないし、作家がこのようであると非常にまずいのです、でも、ある作家の作品は除きます、それはウィリアム・フォークナーでありまして、わたしは最初無理矢理に読み始めたのです、わたしは字引を引きながら日本語のフォークナーを読んだのですが、彼の生涯の伝記から、彼の短編や長編から、わたしが受けた影響は恐るべきものでした。²¹⁷

李喬が日本語訳のテキストを通してフォークナー作品を受容していった様子は、この引用からはっきりと窺える。さらに李喬は壹闡提の署名でもって、フォークナー作品についての書評も幾つか書いていた。1972年夏には次の三編の書評を発表している。「威廉福克納的一「秋光」(上)」（ウィリアム・フォークナーの一“八月の光”〈上〉）及び「威廉福克納的秋光(下)」（ウィリアム・フォークナーの八月の光〈下〉）は、いずれも『台湾時報』に掲載された書評であり、フォークナーの代表的長編小説『八月の光』(*Light in August*) についてのものである²¹⁸。「威廉福克納的一声音與憤怒」（ウィリアム・フォークナーの一響きと怒り）はフォークナーの出世作となった長編小説『響きと怒り』についてのものであり、同じく『台湾時報』に掲載された²¹⁹。これらの書評には、それぞれ文章末の附注に次のような一文が書かれている。

本文は、高橋正雄の日本語訳“八月の光”及び大橋吉之^{マツ}作：“八月の光の解説”、大橋健三郎作“フォークナー：南部と現代”などを参照した。²²⁰

本文は高橋正雄の日本語訳“響きと怒り”と解説を参照した。(講談社版)²²¹

これらの附註を辿ると、この時に李喬が参照した日本語訳とは河出書房新社から刊行された『世界文学全集 45 フォークナー』(1961)²²²、及び講談社から刊行された『世界文学全集 41 フォークナー』(1968)²²³であったと思われる。前者には高橋正雄訳『八月の光』が収録され、その巻末には大橋吉之輔による解説が付されている。解説第三節の標題は『『八月の光』について』である。また、後者には高橋正雄訳『響きと怒り』が収録され、巻末には訳者自身による解説も付されている²²⁴。こうした李喬のフォークナー作品に関する書評の附註と実際の書誌情報を整合させて判断すれば、李喬がこれらの文学全集に収められたフォークナーの作品を読んでいた可能性は十分に考えられるだろう。それゆえ、前述の李喬が中国語への翻訳を強く望んでいた「フォークナーの重要著作」とは、これら『響きと怒り』や『八月の光』など代表的長編小説を指していると考えられよう。

ところで、1960年代半ばに研究社から出版されていた『20世紀英米文学案内』は、著名な英米作家の文学作品を特集した計24冊の叢書であり、その内の一冊には西川正身編『フォークナー』がある²²⁵。同書にはフォークナーに関する伝記のほか、『響きと怒り』や『サンクチュアリ』、『八月の光』など主要作品の梗概とその解説、フォークナー研究に関する書誌リストを収録しており、フォークナー入門書といった色合いが濃い。同時に、同書の表紙カバーは白地に青文字で“W. FAULKNER”と印字されて赤い帯がかけられ、印象深い斬新なデザインである。実は李喬は、上述の河出書房新社や講談社から発行された世界文学全集と併せて、同書も読んでいた様子である。その事実を窺わせるのが、前出『重逢—夢裡的人』に見られる次の一節である。

あの頃〔1973年頃一筆者注〕わたしの日本語書籍の唯一の供給源は鄭清文兄が代わりに買ってくれるもので、そのうちフォ氏の実弟が書いた《兄を思い起こして》（フォークナー伝）と、手引き書のような論集：《W. Faulkner》（西川正身等編著）——は鄭さんが贈ってくれたものである。フォ氏の日本語訳はわたしは大体もっている。²²⁶

ここで李喬が言及している「西川正身等編著」で「W. Faulkner」というタイトルがつき、それが「手引き書のような論集」である書籍とは、まさに前出の西川正身編『フォークナー』を指している可能性が高いだろう。その傍証のひとつとして、李喬が鍾肇政に宛てた書簡（1973年1月7日付）における次の一節を挙げることができる。

この週末、休日はとても愉快地に過ごせまして、理由の一つは今月号の“文芸”を買ってきて（差し上げましょうか？）大作“阿枝とその女房”を精読したからです。二つ目は清文〔鄭清文一筆者注〕が手紙を寄越してきて、断筆するのをやめるように言ってきたために、またやり始めたからでありまして、ほかに〔鄭清文が一筆者注〕“西川正身”編の“フォークナー”を送ってきましてので、わたしが今のところ頼んだ本はすでに揃いました！²²⁷

このように李喬は西川正身編『フォークナー』を1973年には読んでいたと推定できる。李喬はすでに1974年頃には『寒夜』三部作の骨子を構想し始めており²²⁸、物語の構想とほとんど時を同じくするフォークナーの代表作及び解説書の読書経験は、その後に始まる『寒夜』三部作の執筆に少なからぬ影響を与えたことであろう。

一般的にフォークナー作品の文学的特長は、フォークナー自身の故郷をモデルにした架空の土地“ヨクナパトーフア”を舞台とする一連の作品群“ヨクナパトーフア・サーガ”であると言われるが²²⁹、西川正身編『フォークナー』はヨクナパトーフア・サーガに関する説明の中で、フォークナーが1956年に文芸誌『Paris Review』のインタビューに応じた

内容を次のように引いている。

わたしは自分の郷土が、切手のように小さなものであっても、書くに値すること、どれほど長生きしても、とうてい書きつくすことができず、現実を虚構に昇華しさえすれば、自分の才能がどの程度のものにせよ、その才能をあますところなく使う完全な自由が持てることを知った。²³⁰

同誌に掲載されたフォークナーに対する「最もすぐれたインタビュー」²³¹と評されるこのインタビュー内容は、フォークナー作品についての解説では度々引用されるものであり、李喬自身も目に留めていたことであろう。フォークナーは自らの故郷に似せた世界を描くが、それは「現実の世界をそのまま描くのではなく、豊かな含蓄を孕んだ想像的な世界へと『昇華する』凄まじいばかりに底の深い、持続的な力を発揮する」²³² 想像力から創出されたものと言われている。眼前の光景を直に描写せず、自らの想像力を駆使して現実の状況を“虚構”の物語へと昇華させるというフォークナー独特の創作手法は、李喬の『寒夜』三部作に対して如何なる影響を与えたのだろうか。次節では、『寒夜』三部作におけるフォークナー作品の影響について具体的に考察する。

第2節 『寒夜』三部作におけるフォークナー作品の影響

1. 蕃仔林とヨクナパトーフ

『寒夜』三部作を構成する『寒夜』、『荒村』、『孤灯』の三作はそれぞれが独立した物語であるものの、登場人物や舞台背景は相互に関連性を持ち、とりわけ李喬の故郷をモデルにした“蕃仔林”という地理的空間で強く結び付いている。『寒夜』三部作の梗概は、次のとおりである。

第一部『寒夜』では、客家の彭一族が蕃仔林へ入植し開拓する様子から物語が始まり、日本への台湾割譲に対して台湾住民が激しく抵抗する模様が描かれる。一族の家長である

彭阿強は花園女（客家語で童養媳の意味）の葉灯妹や隘勇の劉阿漢らを連れて蕃仔林へ入植する。だが、開拓に励む一族の行く手には台風をはじめとする自然の猛威や地主による経済的搾取という障害が立ちはだかり、彼らの開墾は想像以上に困難を極める。そして日本人の異民族による台湾統治が始まり、劉阿漢は生存してゆくために抗日ゲリラへと加担する。

第二部『荒村』では、台湾文化協会や台湾農民組合による社会運動の史実が物語の題材に使われ、1920年代における苗栗地方一帯での民族運動とそれに伴う抗日運動を背景に描いている。劉阿漢と彼の三男である劉明鼎は、二林事件（1924-25）や中壠事件（1927-28）など政治事件に関与して抗日運動を展開する。だが、台湾農民組合は二一二事件で壊滅的打撃を受け、台湾農民組合大湖支部長として活動していた阿漢も山中で捕捉され、獄中で激しい拷問を受けた末に薬物を投与されて死んでゆく。

第三部『孤灯』では、劉阿漢の六男である劉明基を中心に、南洋で台湾人青年が体験した太平洋戦争の様子が描出される。フィリピンのルソン島で敗戦を迎えた劉明基は、日本人や台湾人の兵士らと共に故郷への生還を目指す。彼らは敵軍の襲来を避けて山中に潜みながら撤退するものの、地元ゲリラの急襲やマラリア、飢餓などに阻まれて、同行者は次々と落伍してゆく。物語の大部分はフィリピンを舞台に展開されるが、作中の台湾人青年は蕃仔林から出征し、南洋から蕃仔林への生還を目指したのであり、蕃仔林はその求心的位置付けによって物語の中心へと象徴化されていた。

このように『寒夜』三部作では蕃仔林あるいは苗栗という空間が、物語の中心的舞台になっている。本論の序章でも述べたとおり、李喬は“歴史素材小説”における虚構の運用を重視していた。それゆえ『寒夜』三部作で創り出される蕃仔林という地理的空間、あるいはそこで躍動する様々な登場人物とは、それらのモデルとなる対象が確かに実在するとはいえども、それはただの現実描写や伝聞の記録では決してなく、李喬の手によって技巧的に虚構化されて生まれたものだと言えよう。こうした物語の虚構性に関する考えを、李喬は確かに『寒夜』三部作を創作した際に強く認識していたようである。『寒夜』三部作

で呉三連文芸賞を受賞した後に応じた宋澤萊のインタビューに対し、李喬は次のように応じている。

わたしが孤灯を太平洋戦争まで書いた時、〈FICTION〉に対してわたしはより深く悟りまして、いわゆる人の“想像力”というものは実にたかが知れたものであり、小説は必ずや数多くの真実の“点”の上に築きあげなければならず、“虚構”とはただひとつの線であり、真実を繋ぎ合わせれば、このようにして小説になるのです。²³³

『孤灯』は三部作の中で最初に脱稿し刊行された作品であるゆえ、こうした“虚構”に対する認識は、その後続く『寒夜』や『荒村』の創作にも必然的に反映されていたであろうと考えられる²³⁴。つまり、李喬は『寒夜』三部作の創作では物語の虚構性を強く意識していたのであり、そこに現れる蕃仔林という舞台は、李喬の生まれ故郷であり実在する苗栗の蕃仔林という場所をモデルに想像され、創り出された地理的空間と言えよう。

一方、本章で『寒夜』三部作の比較対象に挙げる『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929) 及び『サンクチュアリ』(*Sanctuary*, 1931)、『八月の光』(*Light in August*, 1932) はいずれもフォークナーの代表作であり、前述のとおり、李喬が『寒夜』三部作を創作した際にはすでに閲読していたと推定される作品でもある。これらはいずれの物語でも、二十世紀初頭のアメリカ南部ミシシッピ州に位置する架空の地理的空間“ヨクナパトーフア郡”、及びその中心地“ジェファソン”の町が舞台に設定されている。

こうしたフォークナーによる長編小説三作の梗概は、次のとおりである。

『響きと怒り』では、ジェファソンの没落旧家コンプソン家の迷走ぶりが描かれる。物語冒頭の語り手である三男のベンジーには知的障害があり、彼は最愛の姉であるキャディと過ごした思い出に耽る。その十八年前、妹キャディを偏愛する一方でハーヴァード大学に入学したコンプソン家の長男クエンティンは、キャディの処女喪失を知ったことによる動揺から妹との近親相姦を幻想し、入水自殺を遂げていた。その後キャディは複数の男性

と関係を持ち、私生児の娘ミス・クエンティンを生むが、やがて成長した彼女も母親同様に奔放で、学校を抜け出しては男と駆け落ちを繰り返す。

『サンクチュアリ』では、弁護士ホレスとミシシッピ大学の女子大生テンブルが、ギャングのポパイが引き起こす殺人事件に巻き込まれる。テンブルはボーイフレンドと野球場へ向かう途中で自動車事故に遭遇し、プランテーションが廃墟となったオールド・フレンチマン屋敷に助けを求める。屋敷ではポパイらが密造酒を製造しており、やがてポパイは手下のトミーを射殺してトウモロコシの穂軸でテンブルをレイプする。トミー殺しのレイプ犯として無辜のグッドウィンが逮捕されると、ホレスはグッドウィンを弁護しようと奔走する。だが、結局テンブルの偽証によって死刑判決が下され、グッドウィンはジェファソンの民衆の怒りを買って、ホレスの目の前で激しくリンチされてガソリンで焼き殺されてしまう。

『八月の光』では、二十歳の娘リーナが自分を妊娠させた青年を捜すためにジェファソンへやって来るが、町では奴隷制に反対し続ける北部出身のバーデンという女性が無惨な他殺体で発見される。警察は白人青年クリスマス追跡を始め、やがて黒人の血を持つと噂されるクリスマスの過去とバーデン殺害の動機が明らかになる。一方、クリスマスが逃亡先からジェファソンへと移送されると、狂信的白人至上主義者のハインズはクリスマスをリンチするよう群衆を煽動する。その後クリスマスはジェファソンの牧師ハイタワーの家へ逃げ込むが、白人自警団のグリムによって銃撃され、ナイフで去勢されてしまう。

1897年にミシシッピ州北部で生まれたフォークナーは、五歳の時に同州ラフェイエット郡の郡庁所在地であるオクスフォードに一家で転居した。オクスフォードはその後フォークナーの生涯にわたる生活の場となり、ヨクナパトーフア郡ジェファソンのモデルでもある²³⁵。前述のとおり、フォークナーの小説には“ヨクナパトーフア・サーガ”と呼ばれるヨクナパトーフアを舞台とする物語が多く、各々の作品は密接に関連し合いひとつの壮大な小説空間を形成している。フォークナーは自身の故郷をモデルに虚構の地理的空間ヨクナパトーフアを想像し創り出し、自らの作品の中心的舞台に位置付けていたのである。

このように李喬とフォークナーの小説は、どちらもひとつの地理的空間を中心の場として創作されている。李喬の作品では“蕃仔林”あるいは蕃仔林を含む苗栗一帯であり、フォークナーの作品では“ヨクナパトーフア”あるいはその中心地ジェファソンであった。物語の舞台が作者自身にとって最も馴染み深い自らの故郷——大都市ではなく、地方の小さな村あるいは町——をモデルにしたものであり、しかもそれが単純な現実の複製ではなく、作者の想像によって創造される虚構の小説空間として意識的に描き出されているという点において、李喬とフォークナーの作品は大いに類似していると言えよう。そして、このようなフォークナーが描き出すヨクナパトーフアやジェファソンに対する李喬の強い関心は、次の二つの記述からも窺い知ることができる。

“響きと怒り”は“サートリス”及び“八月の光”（八月十八日に紹介済み）と同様、架空の“ジェファソン”の町を背景にして書いたものである。これは名門“コンプソン”家の没落を描く物語である。²³⁶

フォ氏の“真実を取り入れながら虚構を保ち”“ヨクナパトーフア郡”を創造したということが、わたしに大胆にも幼い頃の生活基盤であった“蕃仔林”でもって、李喬の“歴史素材小説”という空間全体を複製させた。²³⁷

前者は前述した『台湾時報』に掲載された書評「威廉福克納的声音與憤怒」であり、李喬は『寒夜』三部作の執筆開始よりも前に、小説空間の虚構性について注目していたと言えよう。また、後者では李喬がフォークナーのヨクナパトーフアから着想を得て、“歴史素材小説”における蕃仔林を創り出したことが明らかにされている。このように、李喬は『寒夜』三部作を創作する際、ヨクナパトーフアに似た虚構の地理的空間を物語の中で創造しようと、十分に意識していたのであった。

2. 物語の時代性、地域性及び普遍性

以上の考察により、『寒夜』三部作の中心に位置する“蕃仔林”という場は、フォークナー作品から着想を得て李喬の生まれ故郷をモデルにしたものである、ということも明らかにできたと思う。それは裏を返せば、『寒夜』三部作以前の短編に登場する蕃仔林と、“歴史素材小説”としての『寒夜』三部作における蕃仔林では、その位置付けが異なるということでもある。つまり『寒夜』三部作での蕃仔林は、同様にそこを主要舞台に設定する短編作品集『山女—蕃仔林故事集』（1970）など初期の作品とは、根源的に異なる虚構的世界なのである。その違いは、『寒夜』三部作以前の作品が作者個人の原体験に基づき創作された物語であるのに対して、『寒夜』三部作は李喬が執筆にあたり台湾現代史に関する膨大な史料を読み解く一方、日本統治下で苦渋の殖民地時代を経験した数多くの台湾人証言者からも聞き取りを行うなど、徹底した取材により生み出した“歴史素材小説”であることにもよる²³⁸。それゆえ『寒夜』三部作では作者の個人的な原体験という枠組みを越えた、言わば台湾という地域性あるいは台湾現代史がもつ時代性というものが強く反映されているのであった。

例えば、『寒夜』では蕃仔林の土地を彭一族が開墾してゆく顛末が描かれるが、その伏線となるのは日本による台湾統治の始まりであった。

しかし、舅御の阿強の顔色はことのほか不機嫌だったし、人華はさらに皮肉たっぷりで、人興は阿枝を連れて戻ってきていた。阿枝の初めの赤ん坊は早死にしていたが、今ではまたお腹はすでにパンパンに張っていた。いま、阿漢は彭家で、本当に余計な一人になってしまった。

この間、台湾北部の動乱の消息は絶え間なく伝わってきた。聞くところでは町の裕福な人たちは皆続々と北へ向かっていると言い、否、南へ逃げているのであり、安平や打狗一帯の港から海へ出て避難する準備をしていた。北部がすでに陥落したため、東洋の蛮人は台北城ですでに官庁を設置し執務をとり、六月十七日には“始政式”を

挙げていた。²³⁹

ここでは彭一族の家庭内の模様を描くと同時に、日本の台湾領有が着々と進みつつある時代的情況さえも叙述してゆく。このように蕃仔林を舞台に物語が展開する一方で、同時代の歴史的イベントもテキスト中に巧みに織り込まれているのが『寒夜』の特徴と言えるのだが、これは何も『寒夜』だけに特有なものではない。『荒村』では、劉阿漢や劉明鼎ら架空の登場人物が台湾農民組合という実在した社会組織に加わり、簡吉や趙港ら歴史上の人物と協力し合いながら、二林事件や中壢事件など当時盛んであった農民運動に深く関与してゆく。

趙港は黄の最も早くからの同志だった。最後に、彼らは協議したのだ、“農民党”を組織することに関する部分は詮議をやめ、組織の力を強め、影響力を広げ、抗争の実力を増してさらに多くの農民大衆に協力し援助するため、“佃農組合”を“農民組合”に改組することを決めたのだ。

——これこそが劉明鼎の当面の任務であった。“農民組合”の成立に助力するということである。

この間、明鼎は簡吉と接触する機会がとても多かった。簡吉は情熱に満ちた、義侠心に富む若者で、農民運動での理論と理想は、郭秋揚、黄、趙らと比べて飛び抜けていて、簡は見識が深く広く、明鼎が全く知らない非常に多くのことを知り、明鼎がたいそう驚くような立論と手段を、簡はいずれも十分に知り尽くし、しかも当たり前のことと見なしているようだった。²⁴⁰

周知のとおり、1920年代における抗日闘争の主体は、それまで頻発した武装蜂起から自治運動や社会主義運動などへ変化していた。前出の若林正丈『台湾抗日運動史研究』によれば、この時期に出現した諸々の運動が「植民地統治システムの“裏側に張り付く”“台

湾大”の社会統合に主体的内容を与えた」²⁴¹ という。このように李喬は、“台湾大”の共同体意識が形成されつつある 1920 年代当時の時代背景を巧みに利用し、『荒村』という物語を創り出したのであった。

但し、李喬が『寒夜』三部作で描き出す物語の本質は、台湾という枠内に留まるものではないことにも留意すべきであろう。例えば、『孤灯』では「台湾光復前後の台湾山村の非人間的な生活、及び十万の青年が南洋に戦争へ赴いた事跡」²⁴² を描いたと、『寒夜』三部作の「序」で述べられているように、作中では戦時下の蕃仔林における困窮した暮らし振り、あるいは軍属や軍夫として南方の前線基地へ送り込まれて戦死してゆく幾多の台湾人青年の姿などが語られる。しかし『孤灯』は決して台湾人だけに特有な戦争の悲劇を描き出そうとしているのではない。「わたしはもっと大きい人類共通の災難について書いたのですが、それはつまり戦争なのです」²⁴³ という李喬自身の言葉からも窺えるように、『孤灯』では戦争体験という人類の悲劇が言説化されてもいた。このように『寒夜』三部作という物語は、台湾の時代的・地域的特徴を語ると共に、「人類共通」とでも言うべき人間的で普遍的問題にも目を向けているのである。

一方、フォークナーの長編小説では何が如何に描かれているのだろうか。フォークナーの作品はいわゆる大河小説や歴史小説ではないが、ヨクナパトーフアやジェファソンという地理的空間だけではなく、二十世紀初頭のアメリカ社会における特徴的な風俗現象を題材として物語に取り込むことは特色のひとつであった。例えば、『サンクチュアリ』では物語の冒頭でホレスが泉の畔でポパイに遭遇する場面があるが、それは次のように描かれている。

「ねえ、君」と、相手の男は言った。「ぼくはホレス・ベンボーというもんだがね。キンストンの弁護士なんだよ。むかしは向こうのジェファソンに住んでいたものだ。今そこへいくところなんだよ。この郡じゅうの誰にきいても、ぼくがなんの悪気もない人間だってことをうけあってくれるよ。ウィスキーのことなのなら、ぼくは、君た

ちの仲間がどれだけ造ろうと、売ろうと、買おうと、なんとも思ってやしないよ。ただちょっと水を一口飲むために、ここで足をとめただけなんだ。ぼくのしたいことは、町に着くということだけなんだよ、ジェファソンの町へね」²⁴⁴

ここではホレスの語りを通して、ギャングのポパイがウィスキーを密造・密売している事実が明らかにされる。二十世紀初頭のアメリカでは、第一次世界大戦中の禁欲的な社会風潮などにより合衆国憲法修正第十八条が制定され、1920年から33年まで全米規模で禁酒法が施行された²⁴⁵。特にフォークナーの故郷であるミシシッピ州は、州法により全米で最も遅い1966年まで禁酒法が実施されたもいう²⁴⁶。だが、その一方で市中ではギャングら犯罪組織の手による密造酒や密輸入酒が却って多く出回るようにもなっていた²⁴⁷。

フォークナーの作品において、このような禁酒法や密造酒などにまつわる題材は『サンクチュアリ』のみに限定されるものではない。『八月の光』では、クリスマスが夜半に「町から三キロはなれた古い植民地時代の農園の屋敷のうしろ」で人々にウィスキーを売りさばく。実際、アメリカ南部社会と密造酒文化の繋がりには密接であり、森岡裕一によれば、密造酒の製造から消費に至るまでの過程は南部社会全体によって支えられていた側面があったという²⁴⁸。このように、フォークナー作品は当時のアメリカの時代的背景を巧みに利用しながら、「南部文化の一部と化した密造酒製造と販売を自然な形で作品の背景に用いている」²⁴⁹のであった。つまり、それは大橋健三郎が指摘するように、フォークナーは「完膚無きまでにリアルに描きあげた、きわめて興味深い物語〔傍点原文ママ〕」²⁵⁰を創造していたと言えるのである。

同様に、フォークナーの小説では密造酒やギャング以外にも、フラッパーという当時流行した風俗現象を描き出してもいる。サラ・M・エヴァンズによれば、断髪やアイシャドー、短いスカートなどによって活動的でしかも性的な女性らしさを強調し、ダンスホールや映画館へ出向き快楽を追い求めるフラッパーのイメージは1913年頃には作りあげられ、その後1920年代にはアメリカでの時代的象徴となったという²⁵¹。そうしたフラッパーの

イメージは、確かに『響きと怒り』では処女を喪失するキャディや奔放な娘のミス・クエンティンに、『サンクチュアリ』では活動的な女子大生のテンプルに投影されてもいた²⁵²。

このようにフォークナーの小説では密造酒やギャング、フラッパーなどの要素がアメリカにおける 1920 年代という時代性、あるいは南部社会という地域性を強く表現しているのだが、とりわけ人種差別問題は地域性の顕著な例と言えよう。南北戦争終結後の南部社会では人種隔離が南部地域全域で確立したが²⁵³、なかでもミシシッピ州は最も人種差別の激しい州であった²⁵⁴。ミシシッピ州の憲法は法律により合法的に黒人から参政権を奪い取るモデルを築きあげ、それはその後にはほかの州でも黒人から参政権を剥奪する方法の原型にもなったと言われている²⁵⁵。例えば、『八月の光』ではクリスマスの過去が語られるが、そこでは見かけは全くの白人男子であるクリスマスが孤児院の女性栄養士に「黒んぼの馬鹿！」と罵られたことが明らかにされる。また、クリスマス自身も一晩を共に過ごした女に対して、「おれには黒んぼの血がはいっているんだ」と語ったように、黒人の血統は作品主題のひとつとなっていた。そしてステッキを振りあげてクリスマスをリンチするよう興奮の中で絶叫するハインズは、日頃から黒人教会で白人種の優越性を説教する白人至上主義者であり、物語の結末で瀕死のクリスマスを去勢するグリムの信念は、「白人種はほかのいかなる人種よりもすぐれ、アメリカ人はほかのいかなる白人種よりもすぐれ」という人種論的ナショナリズムであった。田中久男の言うように、「クリスマスは、そうした激しやすい南部社会の体質の生け贄にされた」²⁵⁶ のであり、『八月の光』では南部社会そのものが描かれていた。

ただ、フォークナーが描いた物語の世界は、歴史の重みを抱える南部社会の縮図ではあったが、それは同時に人種問題や奴隷制度といった人間的道德に対する再考でもあったことは留意すべきである。それゆえ、フォークナーは田中久男が指摘するように、「南部的な国粋主義者であり、南部連合の伝承者」とされながらも、「南部的な状況の中であらわにされた人間の状況」という普遍的人間性さえも描く作家として評価されてきたのであった²⁵⁷。こうしたフォークナー文学の特色について、李喬は作品が備える地域性と普遍性の

問題を次の如く見事に看破している。

フォークナーの作品は、しばしば“地方的なもの”と見なされ、つまり私たちが言う“郷土文学”であり、これは彼が生まれ育った大なり小なりの環境が関係するのだが、彼の作品は決して“地方性”に自己限定されるものではなく、フォークナーが偉大なところは、まさにこのようなアメリカ南部の独特な自然さ、風格さ、道徳さから出発した後、現代の世界の条件に相通じ、彼のものである芸術的世界を構築しているからである。²⁵⁸

以上のように、作者によって虚構化された物語に内包される時代性や地域性、普遍性という共通項は、『寒夜』三部作とフォークナーの長編小説三作の双方に確かに認められるものであり、李喬自身もフォークナー作品のこのような特色には強く関心を寄せていた。李喬が『寒夜』三部作を創作するにあたり、フォークナーのこうした一面を強く意識していたことは十分に窺えると言えよう。

第3節 『寒夜』三部作における台湾本土的テーマの展開

1. 構築される共同体意識

前節で論じたように、物語の中心的舞台が作者自身の故郷をモデルにするという点において、『寒夜』三部作とフォークナーの長編小説三作は最大の類似を見せていた。だが、一方では、それは両者にとって最大の相異点を示唆しているようにも思われる。前述のとおり、『寒夜』三部作では彭一族が蕃仔林へ入植する場面から物語が展開されるが、この描写が意味するのは、冒頭では蕃仔林が未だ作品の絶対的中心ではないということである。そこでは彭一族が蕃仔林へ移り住む過程そのものが描かれているのであり、最初から蕃仔林という場が物語の中心に据えられているわけでは決してない。そして一族の力で形成されてゆく蕃仔林という空間は、彭阿強らが自分たちの土地を奪い取ろうとする地主を前に

して、「黙れ！ここはわしらが汗血を流して、命がけで守ってきた命の土地だ」²⁵⁹、「命は取られても構わんが、田畑は、ダメだ！」²⁶⁰と咆哮することからも窺えるように、とりわけ「土地」を媒介にして彼らと強く結び付いている。ここでは蕃仔林という土地を基盤にしたひとつの共同体意識が表出していると言えよう。

このように『寒夜』で描かれた土地を中心とする共同体意識は、やがて『荒村』では「台湾人」という呼び名で連帯感を持つ共同体意識へと変化してゆく。例えば、それは次のように、劉阿漢が台湾文化協会主催の講演会に足を運ぶ途中で、仲間らと交わす会話からも確かに看取できよう。

「阿漢兄さんも、出世したね、あんたは……」古阿龍は恐らく何かを思い出して、話を突然やめてしまった。

「出世したって？へっ、出世かっ！」

「子供たち大きくなったじゃない！あんたも大したもんだよ、生活は苦しかったけど、よくもまあ夫婦裸一貫から一家をなしたもんだね。」

「子供が大きくなったからってどうだって言うんだ？一人増えたってことは、つまり苦難にあう野人が増えたってことだ！」

「ええ……」

「人は、たぶん生まれるとすぐに苦しみを受けるんだ。」

「それは、そんなふうには言えないな——ただ俺たちだけがこうなんだ。」

「台湾人こそがこうなんだよ。」

「あいつら〔日本人の一筆者注〕だんなたちや、あいつら三本足たちは違う。」

「貧乏で苦しい台湾人こそがこうなんだ。」

「阿漢兄さん、いつになれば、俺たち台湾人は胸を張ることが出来るんだい？」²⁶¹

何義麟によれば、1920年代の台湾社会では「大戦後に高まった民族自決の思潮の影響

を受け、「台湾人」という自称が定着し²⁶²、「台湾全島の主体としての誇りと自覚を強くもつようになった²⁶³」という。台湾人意識という共同体意識が確立する時代のただなかで、劉阿漢らは自らが「台湾人」であり、内地人の「だんなたち」や台湾人の日本統治協力者である「三本足たち」とは異なる存在であることを互いに認め合う。ここに描かれた共同体意識は、もはや蕃仔林という地域に限定されたものに留まらず、広く台湾・台湾人意識へと強化されていると言えよう。

また、『孤灯』では物語は蕃仔林から地理的に離れた南洋を舞台に展開されるが、異国の地にいる若者たちの共同体意識はやはり台湾に依拠していた。それは劉明基の内面を語る次のような描写からも明白である。

彼ら一行三十数人は、サンフェルナンドの人気のない大通りを抜け、北へ向かって歩いて行った。砲声はかすかで、行く末は計り知れない。道が、常にかすかに持続的に揺れているのは、戦車によるものか、それとも大編成の爆撃機によるものなのか？

故郷は無事だろうか？

蕃仔林は辺鄙な山村だから、絶対に敵機の空襲は受けないだろうな？明基は歩きながら思った。だが、台湾島全体はどうなのだろう？²⁶⁴

劉明基の意識下に流れるのは蕃仔林の情景であり、彼は故郷に残した家族の安否を気遣うと同時に、台湾全体の現状さえも案ずる。こうした描写は、まさに台湾・台湾人意識の表出と言えるだろう。このように『寒夜』三部作では、蕃仔林という土地を媒介にした共同体意識の誕生を語り、やがては台湾を基盤とする共同体意識——台湾・台湾人意識——が構築されてゆく様子を描き出すのであった。

一方、フォークナーの長編小説三作は、確かにアメリカ南部の地域色が濃厚な物語であり、これらは三部作ではないにしても、前述のとおりヨクナパトーフア・サーガという一連の作品群を形成するものであった。しかも物語の中心に位置するのは、フォークナー自

身の故郷をモデルにしたヨクナパトーフアやジェファソンである。ただ、ここで描かれているヨクナパトーフアを中心とした南部的なる物語とは、自らが南部の白人であるフォークナーが南部という場所と自分自身との関係を自省することにより、意識的に南部特有の題材を取り入れたものでもあり²⁶⁵、南部社会の現実には深いメスを入れるという側面が強かった²⁶⁶。つまりフォークナーは、自らの価値観の上に構える南部王国が南北戦争によって崩壊してしまった事実、及び旧南部社会の原罪とでも言うべき、黒人奴隷制度という人間悪そのものに対して視線を向けていたのである²⁶⁷。

このようにフォークナーの作品が共同体への懐疑あるいは批判を行い、それが解体してしまった様子を描く一方で、『寒夜』三部作はひとつの小地域の共同体意識が誕生し、強化され、台湾大のものへと構築されてゆく一連の過程を浮き彫りにする物語であり、共同体への憧憬とその建設に主眼を置いていた。李喬とフォークナーの作品が示す作風のベクトルは正反対の方向を指していたのである。

2. フォークナーからの脱離

それでは、何ゆえ李喬はフォークナー作品では強調されない構築されゆく共同体意識という要素を『寒夜』三部作の中に取り込もうと試みたのだろうか。第1章でも述べたように、李喬が『寒夜』三部作を創作した1970年代の台湾社会は政治的変化の激しい時代であった。同三部作が誕生した由来をこうした当時の内政的・外政的変化を伴う社会状況に求めれば、李喬は戒嚴時期に史実性の強い“虚構”を利用し、台湾社会で台湾人主体の共同体意識を作り上げてゆく意義を示唆したものとも言えよう。もともと『寒夜』三部作の脱稿日から推察すると、当時の政治的緊迫を象徴する美麗島事件が創作の動機に直接結び付いたとは考えにくい²⁶⁸、李喬が『寒夜』三部作の中で小地域の共同体意識が台湾・台湾人意識へと強化されてゆく過程を描くというモチーフを得たきっかけは、確かに1970年代末の政治思潮にあったようだ。李喬は、前出の国立成功大学での講演稿「我的文学行程與文化思考」の中で、次のように明白に発言していた。

本当にわたしを成長させたのは“中壢事件”と“美麗島事件”でした。若い人たちの前で言うのをはばかったりはしませんが、わたしたちの世代では大多数が十年十五年を無駄に生きたのでして、もしも“中壢事件”や“美麗島事件”の教訓が無ければ、わたしは多分いつまでも成長しなかったでしょう！そうなのです、“寒夜”〔ここでは『寒夜』三部作を指す一筆者注〕を創作した理由である、台湾社会での重大事件の刺激によって、李喬はやむを得ず文学の束縛から文化の思考へと足を踏み出したのです。

269

こうした政治事件への言及は、1970年代当時の台湾社会の状況が李喬自身の創作に対して如何に多大な影響を与えたか、ということを示す傍証のひとつとなるであろう。ただ、その一方で別の視角から見れば、李喬がフォークナー作品を模倣しながらも祖型とは異なる独自性の強い物語を創作した理由は、何も当時の政治的情況のみに限定されるものではないはずである。李喬自身の内に秘められた作家としての大成への希求、という側面も検討する必要があるのではあるまいか。

本章冒頭で言及したとおり、李喬は『寒夜』三部作で呉三連文芸賞を受賞したが、それまでに李喬が受賞した文学賞はこれが初めてではなかった。本論の序章でも述べたように、李喬は1968年にその前年に発表した短編小説「那棵鹿仔樹」で第三回台湾文学賞の大賞を受賞している。台湾文学賞とは『台湾文芸』創刊者の呉濁流が中心となり、青年作家の小説創作を奨励する目的で設立された民間の文学賞である。当時の台湾文学賞が『台湾文芸』に掲載された小説のみを選考の対象としていたこと、その『台湾文芸』自体が「資金不足のため、冊子は薄く、見栄えもせず、原稿料も出せなかった」²⁷⁰ほど簡素な文芸誌であったことなどを勘案すれば、台湾文学賞の受賞がそのまま台湾文壇全体での李喬に対する文学的評価を意味したわけではないにしても、この時の受賞経験が李喬の作家人生の中でひとつの重要なメルクマールとなったことは確かであろう。先述のとおり、李喬は同賞

の受賞にあたり、「より一層ひたむきに、より一層文学の開墾に忠誠を尽くし、老いて死ぬまで続けたい」²⁷¹と作家としての決意を高々と唱えたのであった。

その「那棵鹿仔樹」とは、苗栗市街で暮らす語り手が自身の生まれ育った大湖こと蕃仔林に帰省する念願を果たす物語である。故郷は物質的に豊かになったが、昔ながらの農村風景が失われてゆくことに対して語り手はもどかしく思うという設定から、物語の時代背景は台湾経済の急成長と共に農村の都市化が一段と進んだ 1960 年代を彷彿させる。隅谷三喜男・劉進慶・涂照彦『台湾の経済—典型 NIES の光と影』によれば、台湾経済がテイク・オフし高度経済成長へと進むのは 1964 年であり、これ以降は国内総生産（GDP）における工業の割合が農業の割合を追い越していったという²⁷²。農村労働力の対外流出により都市部への大幅な人口移動が始まり、都市部では中産階級と都市労働者という二つの新しい社会階級が出現したのも 1960 年代半ば以降であった²⁷³。このように同作は、当時の経済成長の陰で普遍的に見られた農村地区における社会問題を写實的に描いてもいた。

「那棵鹿仔樹」で顕在化した同時代の台湾社会に対する強い関心は、その後現在まで一貫して李喬作品における重要なファクターとなる。1970 年代前半には短編小説「捷克・何」や「孟婆湯」でも、時事性を強く意識した社会問題や犯罪事件が題材に取り入れられた。両作はどちらも物語の背景に 1970 年代半ばまで駐留した在台米軍の姿が窺え、社会批判の強い小説に仕上がっている。蒋介石による軍事独裁が続いた台湾では、朝鮮戦争休戦後の 1954 年には、冷戦下での反共前哨基地としてアメリカとの軍事同盟である米華相互防衛条約を締結した。ベトナム戦争中も 1975 年まで米軍は台湾に駐屯し、R&R (Rest and Recuperation) 計画により台北市では中山北路を中心に米兵向け歓楽街が数多く設けられた。「捷克・何」では、米軍兵と台湾人ホステスとの間に生まれた混血児の捷克・何（ジャック・ホー）を主人公に、夜な夜な繰り広げられる米兵の乱痴気騒ぎを物語化することで、当時の世相を批判的に描き出していたと言える。また「孟婆湯」では、客の米軍兵に乱暴されて殺害された台湾人ホステスの劉惜青が主人公である。折しも、同作発表の前年には、実際に台中市内では米軍兵に乱暴された外省人女性が死亡しており、容疑者に対す

る量刑があまりにも軽微なことに対して市民が抗議するという社会事件も起きていた。こうした在台米軍兵による台湾人女性に対する性的暴行は 1970 年代前半を中心に台北・台中・高雄などの都市部で何件も発生しており²⁷⁴、李喬はアイロニーを込めた創作により、言わば逆説的に在台米軍及び米兵による犯罪を許す台湾社会に対して痛烈な批判を加えていったのである。

だが、当時このような現実の社会事象に取材した時事性の強い小説は、何も李喬特有の独創的な作風ではなかった。例えば、黄春明は短編小説「莎啞娜啦・再見」（1973）で当時社会問題化していた日本人観光客による台湾での売春ツアーをシニカルに描いていた。また、工場の現場労働者として長年働いてきた楊青矗（1940-）は短編小説「在室男」（1969）で多数の労働者が直面する日常の過酷な現実を描きながら資本家側の搾取を指弾し、“工人小説”と呼ばれる新たな文学ジャンルを確立するまで台頭していた。楊青矗の活躍に代表される社会派小説の潮流は、その作品の傾向が当時の李喬の作風と大きく重なるものであったがゆえに、「自らの確かな風格」²⁷⁵を追い求める李喬は自身の創作スタイルについて再考せざるを得なくなっていた。李喬は 1973 年 11 月 18 日、及び 1974 年 5 月 3 日に鍾肇政に宛てた書簡の中で、次のように胸中の苦悶を吐露している。

半年来、文壇では“社会派”が甚だ盛んに氣勢をあげており、数名のアカデミズムの大御所らが意見を出して云々と主張しましたが、思い起こせば長い間ずっと自分はこのようにやってきました（これをやり通し極めるほど価値のある新しさは何もないのでしょうか？）²⁷⁶

楊青矗さんが台頭し、“社会路線”でもって名前を知られるようになってから、わたしは次第に〔この作風から一筆者注〕退きたく思うようになりましたが、ある考えに引っぱられるところがあり、書いてみるといつも社会意識がとても重たいものでして、

.....²⁷⁷

このように李喬は 1973 年前後には、すでに創作面で行き詰まっていたのである。この点に関しては、許素蘭『給大地作家書—李喬』でも、「1974 年から 76 年の間、李喬の小説創作は、確かに山頂から谷底に向かって転げ落ちる様相を呈していた」²⁷⁸ と論じている。作家としてさらなる飛躍を望んでいた李喬にとって、これは挫折とも称すべき経験であったろう。だが、着目したいのは、同時期に李喬がフォークナー作品を受容していたという事実である。前述のとおり、李喬はフォークナーに強い関心を覚え、誰よりも詳しく知る自らの故郷を「虚構に昇華しさえすれば、自分の才能がどの程度のものにせよ、その才能をあますところなく使う完全な自由が持てる」²⁷⁹ というフォークナー独特の創作手法に開眼したのであった。

但し、この時に李喬がフォークナーの作風を模倣するに留まることなく、共同体意識が誕生し、確固たるものに強化され、台湾・台湾人意識を構築してゆく一連の過程を描く台湾本土的テーマの展開という独自性を持つに至ったことは看過できまい。李喬は前述の洪醒夫によるインタビューでは林海音（1918-2001）を例に挙げ、エッセイを書くのであれば林海音を真似てはいけない、林海音はすでに彼女自身の風格を書きあげているからだと応じ、模倣するだけでは卓抜した文章を書くことができないと述べていた²⁸⁰。李喬は洪醒夫のインタビューに応じた 1974 年 8 月には、他作家の作品を手本に模倣するだけでは小説が書けないことにすでに気づき、社会派小説の創作で挫折した反省から、「自らの確かな風格」を追求し続ける必要性を悟っていたのだと思われる。後に李喬は“歴史素材小説”と呼ばれる台湾現代史を題材にした独創性の強い作風を確立するに至るのだが、その背景では 1970 年代初期に作家としての大成を希求する過程でフォークナーに近づき、フォークナーの創作手法に影響を受け、フォークナーを言わば創作上の触媒として取り込みながら、最終的には自らのさらなる飛躍を求めて意識的にフォークナーから離れていったのであろう。

小結

本章では、李喬のフォークナー受容過程を考察し、物語の虚構性に着目しながら『寒夜』三部作におけるフォークナー作品の影響について論じた。李喬は『寒夜』三部作の創作に先駆けて、1970年代初期にはすでに『響きと怒り』や『八月の光』などフォークナーの代表作を日本語訳を通して受容していた。フォークナーが“ヨクナパトーフア・サーガ”で表現したように、フォークナー作品における最大の特徴は現実の世界をそのまま描くのではなく、奥の深い想像的な世界へと昇華させながら描出することにあつたが、李喬はフォークナーが得意とした現実の虚構化という創作技巧に深い感銘を受け、自身の故郷をモデルにした“蕃仔林”を中心に『寒夜』三部作という“歴史素材小説”を創出するに至つたのである。さらには、『寒夜』三部作は虚構化された物語ではあるものの、物語が持つ時代性や地域性を強く意識し、なおかつ多数の読者に受け入れられ得る普遍的な観念さえも取り込んでいる点もフォークナー作品からの影響と言えた。李喬は幼年期の短い間に日本語教育を受けたのあつたが、後にかつて殖民化された過去を思い出させる傷痕であるはずの日本語を武器に換え、フォークナーを創作上の触媒として積極的に受容していたという事実は大変興味深い。

一方で、李喬はただフォークナーを模倣するのではなく、『寒夜』三部作の中では土地を基盤とする共同体意識が誕生し、強化され、やがては台湾・台湾人意識を構築してゆく過程をも描き出して、フォークナー作品とは作風が指し示すベクトルの異なる台湾に根ざした独創的な物語を描き出すことにも成功した。共同体意識の構築過程が描かれる『寒夜』三部作の物語展開は、台湾の歴史や現実に向き合う李喬の真摯な態度を感じさせるということ言うまでもないが、その背景には李喬の内に秘められた作家としての大成への希求があつたということも見落とすことはできない。このように『寒夜』三部作の創作過程では、1970年代の政治的に緊迫した社会状況と共に、これまでの李喬研究では提起されることがなかつた、フォークナー作品の日本語訳による受容体験が関係していたのである。

李喬の短編小説「小説」と1960年代台湾文学界における安部公房の受容

——台湾文学における1960年代実存主義運動から1980年代民主化運動への展開

はじめに

これまで第1章及び第2章では、『結義西来庵』や『寒夜』三部作などの長編小説を中心に論じてきた。但し、序章で述べたように、李喬の小説には230編を超える短編小説が存在し、これらの諸作品も李喬文学においては重要な意味を有している。1960年代に発表した一連の“蕃仔林”を舞台とする作品群、あるいは1980年代の短編小説「小説」(1982)をはじめとする政治小説の数々は、李喬の短編小説を代表する最たるものであろう。前章では『寒夜』三部作におけるフォークナー作品の影響を考察し、李喬本人がしばしば言及するフォークナーからの文学的影響が決して作者自身の銜いでないことを論じたが、李喬による外国作家への言及は、実はフォークナーに留まるものではなかった。本節で論じるように、李喬はフォークナーと同様、カミュ (Albert Camus, 1913-60) やサルトル (Jean - Paul Sartre, 1905-80)、カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) など、欧米の実存主義作家に言及することも少なくなかった。また同様に、実存主義的作風で知られる安部公房 (1924-93) を絶賛してもいた。但し、従来の李喬研究では、作品の主題や登場人物、あるいは物語展開の象徴性などに対して焦点が当てられることは多かったが、こうした他の文化的テキストからの影響関係について考察した研究は寥々たるものであった。だが、前章で論じたように、李喬の作品でも外国文学からの受容の問題は無視できず、先行するテキストからの影響作用は李喬文学を考える上でも重要な要素であったと言える。本章では、李喬の代表的短編小説「小説」における安部公房の代表作『砂の女』(1962)からの影響を中心に論じ、かつて戒厳令下における台湾の文学界で熱狂的な歓迎を受けた『砂の女』の実存主義的作風が、李喬の創作に対して如何なる影響作用を与えていたのかを考察したい²⁸¹。

第1節 李喬と実存主義

1. 1960年代の台湾文学界と実存主義

李喬が本格的に創作を始めるのは服役解除後の1962年であり、早くもその翌年には『自由談』新年文芸コンクールに応募した短編小説「苦水坑」（苦澁の坑道、1963）が大賞作品として同誌に掲載されている²⁸²。『自由談』は民国期の『申報』「自由談」副刊の流れを汲み、1950年に台北で創刊された文芸誌である。同誌は1950年代に発行部数10,000冊を超える当時最大の民営雑誌となり、1984年に停刊するまで発行回数は400期を超えた²⁸³。また、創刊当初より編集委員には、後に『台湾新生報』や『中央日報』などで主筆をつとめる一方で、作家としても活躍する彭歌（1926-）が加わっていた。彭歌が率いる『自由談』では、文芸コンクールが頻繁に開催されていたが、それは本省籍作家が台湾文壇に足を踏み出す登竜門としての役割も果たしていたのでもある²⁸⁴。

李喬「苦水坑」は、台風の被害で耕地と住居を失った苗栗の農夫が、子供を養うために坑夫となる物語である。同コンクールでの受賞経験はその後の李喬の創作活動を支える励みにもなり²⁸⁵、前述の台湾文学賞受賞へと繋がってゆく。本論の序章で述べたとおり、1960年代後半にかけて、李喬は『飄然曠野』をはじめとして『恋歌』、『晚晴』、『人的極限』など作品集の出版を続け、本省籍若手作家を代表する一人として認知されていった。

こうして李喬が登場した1960年代の台湾文壇は、まさにモダニズム文学の隆盛期でもあった。1950年代に詩人の紀弦が提唱した現代詩運動では、中国の伝統的詩文という“縦の継承”に対して欧米の現代詩を積極的に受容する“横の移植”が謳われ、詩壇では激しい現代詩論戦が展開されたが、外国文学からの文学的影響という広義の意味での“横の移植”の概念そのものは、1960年代における小説創作の場にも大きな影響を与えていた。『現代文学』や『筆匯』などの主力文芸誌では、同人たちによる創作の発表と同時に、欧米作家やその作品、文学研究理論の紹介などが盛んに行われたのである。実は、こうした台湾文学における外国文学の受容については、李喬自身も関心を示していた。李喬は自らの台

湾文学史観を論じた文学評論「我看『台湾文学』」(わたしは“台湾文学”をこう考える、1981)の中で、国民党政権下では1930年代中国文学の大多数が禁書の扱いを受けてきたのに対して、「西洋の、とりわけアメリカや日本の文学理論と作品が絶え間なくこの長らく蹂躪された島国台湾に入ってきた」²⁸⁶ のであり、台湾文学のひとつの様相とは「それは日本・欧米の強烈な影響であり、とりわけ1949年以後の二十数年間では、台湾の文壇はほとんど全て西洋化の影響を受けた」²⁸⁷ と論じている。そして李喬の創作もまた、このように欧米や日本などの外国文学の影響を強く受けて産み出された側面もあった。李喬は自伝的評論「與我周旋寧作我」(やはり自分の選択を信じよう、1974)で、自身が創作を始めた当時の様子を次のように述べている。

わたしが習作を始めたあの何年か〔1960年代—筆者注〕は、まさにいわゆる文芸“現代化”のスローガンがとても賑やかな時期だった。……“新しい”ものに対する、わたしの原則は、絶対に知ったかぶりをしない——読んでもわからないものを、わかっているようなふりをしない、同時に知らないものを知っているふうにしなないということであり、……²⁸⁸

この引用からは李喬が台湾文壇における「新しい」側面、即ち当時の文壇にもたらされた外国の文学作品や文学論に対して関心を寄せ、それを積極的に学ぼうとしていたことが窺えよう。但し、このような李喬のモダニズム文学あるいは外国文学へと向かう姿勢は、文壇での流行に追随した結果では決してなかった。葉石濤は、李喬や鍾肇政ら本省籍作家が受けた外国文学の影響について次のように回顧している。

鍾肇政や李喬が西洋化の影響を受けたことはあり得ぬことではない、畢竟一人の作家たるもの絶えず新しい技術を吸収し、新しい創作方法を試すことが必要であって、こうしてこそ進歩できるのであり、自らの視野を広げられるのであり、これは何もおか

しなことではない。然れども彼らが西洋文学を受け入れた動機は純粹に自らの文学を豊かにし、自らの文学を刷新させるためであり、これは盲目的に西洋文学を崇めて模範として詔うこととは全く異なるものなのだ。²⁸⁹

ここでは具体的な作品名が挙げられていないが、李喬の小説の中でも「強烈なモダニズムの風格を表現している」²⁹⁰ 作品のひとつに「飄然曠野」（曠野にひとり、1965）がある。

「飄然曠野」は李喬の名を当時の台湾文学界に知らしめた作品であり²⁹¹、『中国時報』の前身である『徵信新聞報』に発表後は、『文芸月刊』など複数の文芸誌でも度々再掲された。李喬自身も「人に議論されるのが最も多く、転載されるのも最も多いいわゆる意識の流れの小説」²⁹² と称したように、初期の李喬小説におけるモダニズムの色彩が濃い作品である。作者の自伝的作品とも言える「飄然曠野」は、“僕”の視点から恋人と不治の病で死を間近に控えた母親との間で揺れ動く青年の内面を綴ってゆく。早くも同作の発表直後に、「李喬は幾度もその作品の中で様々な意識の流れの手法を掴み取りながら、実験的な運用を加え、出来映えは大変納得のゆくものだった」²⁹³ と鍾肇政が評価したように、意識の流れを巧みに用いたその創作手法は当初から高い評価を受けていた。しかし同時に、物語では、繰り返されるであろう最愛の人との別れに向き合っ人は如何に生きるべきか、という実存哲学的な問いかけが“僕”の心理描写を通して何度も繰り返されてゆくことも特徴的である。「飄然曠野」とは、孤独や不安、不条理の中で絶望的感情を抱えながら懸命に前進しようとする人間を描いた、実存主義的な作品でもあったと言えよう。

ところで、実存主義とは二十世紀において最も重要な哲学的思想のひとつである²⁹⁴。李喬は新竹師範学校在学中に、同校教員である呉顧言の影響で西洋哲学に傾倒したことが、後年の思想の発展に大きく寄与したと言われるが²⁹⁵、一方で1960年代当時の台湾文学界の潮流から受けた影響も無視できない²⁹⁶。当時の文壇ではサルトルやカミュ、カフカが大流行し²⁹⁷、『現代文学』を中心に実存主義とそれに関連した作品の紹介が頻繁に行われていた²⁹⁸。後年、『筆匯』や『現代文学』、『文学季刊』などの刊行に当時関与した何欣が、「当

時の実存主義は暴風のように、その力は抗しがたいものであるかのよう、実存主義哲学方面の著作には翻訳があり、多くの読者に好まれていた」²⁹⁹と述べ、「サルトルやカミュの作品の分析と紹介が、雑誌上や新聞副刊上に登場し、“嘔吐”や“異邦人”、さらにはカフカの小説さえ読んだことのない“文学愛好家”などは、まるで優れた作品を読んだことすらないかのようだった」³⁰⁰と言いつつのように、欧米の代表的な実存主義文学は省籍にかかわらずあらゆる台湾人作家に影響を及ぼしたのである。実際に、本省籍作家では葉石濤がカミュの諸作品を詳細に論じた「カミュ論」を発表していたし、鄭清文は日本語訳で『異邦人』を読んでいたという³⁰¹。そして李喬自身も「窮山月明」（荒涼のなかの月明かり、1980）で、自らの読書体験と実存主義の関係について次のように述べていた。

十七、八年前の台湾文壇は、まさにモダニズムの現代小説がすべてを一掃した時期だったことを覚えています。わたしもその流れには逆らえず、一時は実存哲学（実存主義）に酔いしれまして、サルトル、カミュ、ベケット、キルケゴール、カフカなどの大御所たちが常にわたしの心の原野に登場したのです。³⁰²

このように李喬もまたサルトルやカミュらを肯定的に捉えており、当時李喬が自らの文学へ積極的に取り入れようとした外国文学とは、まさにこうした実存主義を中心とするものではなかっただろうか。早くも1960年代には、李喬自身の文学観において実存主義は重要な位置づけにあったのであり、李喬はこうして海外の実存主義文学を多く受容してゆく中で、次節で論じるように安部公房の作品にも出会うのであった。

2. 李喬の安部公房への接近

これまで李喬が外国文学について言及するのは、フォークナー作品に関連する場合が圧倒的に多かったと言える。だが、李喬はフォークナーだけに関心を寄せていたわけではなかった。李喬が古今東西に渡る世界の書物を紹介した前掲「小説人『応読書』書単」では、

フォークナーの諸作品のほか、サルトル「嘔吐」、カミュ「異邦人」、「ペスト」、カフカ「変身」、「城」などの実存主義的作品も取り上げ、さらには安部公房「砂の女」や「密会」までも挙げている³⁰³。

安部公房は東大医学部在学中に実存主義的な作品として名高い『終りし道の標べに』(1948)を世に問うた後、『壁』(1951)で芥川賞作家となり、1963年には前年に発表した『砂の女』で読売文学賞を、戯曲「友達」(1967)で谷崎潤一郎賞を受賞するなど、「文学の現在の状況のひとつの極を代表している」³⁰⁴作家の一人として見なされてゆく。安部公房の作品は国際的にも高い評価を受け³⁰⁵、1957年にチェコ語に訳されて以来³⁰⁶、世界中で読み継がれてきた。沼野充義によれば、現代日本文学の中で「最も国際的によく知られ、高く評価されている作家が安部公房」³⁰⁷であるといい、大江健三郎は「ほんとうに現代作家として外国の知識人に読まれた作家は、安部さんが最初だった。そしていちばん強い印象を与えたのが安部さんだったと思う」³⁰⁸と語っていた。また李喬自身も、安部公房は「日本や世界の文壇で、特異な作家と称されるに足る、最も“想像力”に富んだ作家の一人である」³⁰⁹と述べていた。こうした国際的知名度の高さは、李喬が世界各国の文学作品を俯瞰し、そこから代表的作家の一人として安部の名前を挙げることに彼にとっては必然的な選択であった、ということを見せるひとつの論拠にもなり得よう。

ところで、李喬「人球」(人間のボール、1970)は主人公のサラリーマン男性、斬之生がベッドの上で胎児へと変形してしまう変身譚である。胎児への変形というメタファーには、生活のすべてにおいて自信を失い、現実世界から逃避したがる現代人の病的な深層心理が巧みに形象化されている³¹⁰。成人男性が体を丸めて胎児に変わるという物語展開は、青年グレーゴルが大きな虫へと化けたカフカ「変身」を彷彿させるものであり、「人球」におけるカフカの前衛小説からの影響については、従来の論述でもしばしば指摘されてきた³¹¹。だが、「人球」はカフカだけではなく、同時に安部公房からの影響も窺える。「人球」の創作経緯について、李喬は前出の『中国時報』によるインタビュー記事「個人反抗與歴史記憶」の中で、安部公房から受けた影響の強さを次のように示唆している。

わたしはカフカの『変身』、安部の『デンドロカカリヤ』（菊の一種）を読んだことがあります。『人球』を半分まで書くと、この二編が次から次へと飛び出してきて、そして書き続けることができなくなってしまいました³¹²

短編小説「デンドロカカリヤ」（1949）とは、芥川賞受賞作の『壁』と共に「日本のシュールレアリスムの最高峰に位置する」³¹³と称された安部公房の代表作のひとつである。主人公の青年コモン君は、発作を起こしてはデンドロカカリヤという「形は菊の葉に似て」見映えのしない「草とも木ともつかぬ奇妙な植物」に変身するが、稀少植物を捜し求める植物学者に採集されて植物園の温室に入れられてしまう。安部公房の作品において、変身は頻繁に使われるテーマのひとつであり³¹⁴、人から植物に変わるというこの変身譚もメタファーとして巧みに機能していた³¹⁵。デンドロカカリヤとは“極悪の人間”の寓意であり³¹⁶、悪への変形に対する否定的見解が物語を通じて明らかにされる³¹⁷。

安部公房の「デンドロカカリヤ」について、李喬は「人球」発表以前に、鍾肇政宛ての書簡（1967年10月18日付）において言及している。「この“デンドロカガリヤ”は未だ訳文が無いようですが、国民のためにまた筆を揮ってもよいのではないのでしょうか？」³¹⁸と台湾の文学界への翻訳紹介を期待していたように、李喬は1960年代にはすでに安部公房への関心を抱き始めていた様子であった。「人球」に見られる積極的な胎児への変形とは異なり、「デンドロカカリヤ」での植物への変身は主人公によって嫌悪されるものであり、両作の変身には全く正反対のベクトルが働いているが、李喬がカフカだけではなく安部作品の変身譚にも内包された寓意の運用に注目していたことは確かであろう。但し、こうした李喬の安部への接近は、変身という前衛性に対するオマージュに限定されたものではなかったようだ。前出「個人反抗與歴史記憶」で、「安部は実存主義のものを幾つか書いたことがある」³¹⁹と述べていたように、李喬は安部公房の実存主義的な寓意にも注目していた可能性が高かった。

第2節 李喬の短編小説「小説」と安部公房『砂の女』

1. 「小説」におけるシーシュポスの表象

李喬「小説」は、1982年に高雄の詩人や作家らが創刊した文芸誌『文学界』創刊号に掲載された短編小説である。主人公の曾淵旺が、時空を隔てた“あの年”と“この年”のいずれでも時の体制下で圧殺されてゆく姿を写し出す「小説」は、虚構と事実を巧みに混在させて「台湾の人々の悲愴な歴史を回想する」³²⁰ 圧巻の作と評された。1980年代初頭の台湾「国内の作品状況における新しい高峰を象徴する」³²¹ 小説の一作として、台湾の有力出版社である爾雅出版社が毎年刊行する『年度小説選』にも収録され、1992年には国立編訳館により英訳もされている³²²。

「小説」の梗概は、次のとおりである。「あの年」(那年)、曾淵旺は「台湾拓殖製茶株式会社」(臺灣拓植製茶株式會社)や「三井株式会社」(三井株式會社)に先祖代々の茶園を奪われてしまい、製茶工場の日雇い労働者にまで落ちぶれてしまう。物語の舞台は日本統治下の苗栗で、曾淵旺の姿には大資本家の下で搾取される台湾農民の姿が形象化されている。「あの年の三月十二日」(那年三月十二日)夜、曾淵旺は「文化協会」(文化協會)や「農民組合」(農民組合)の集会に参加したがゆえに、突然当局の追及を受ける。曾淵旺は「民族意識なるものに富む」(富於所謂民族意識的人)、「そういう人間では全くなかった」(他完全不是這樣)が、彼らの運動へと自ら足を運ぶようになったのは、「生きていけないからこそ、彼を生きていけなくさせる人や物事に反抗する」(只是活不下去了, 才反對害他活不下去的人、或事)しかないと思うからであった。こうして物語では生き抜くために権力に対して抵抗する姿が強く印象づけられており、それは『寒夜』三部作で描かれた李喬文学の心髄である反抗精神を継承しているとも言えた。だが、自宅から逃げ出した曾淵旺は従兄弟の牛舎に身を隠すが、「あの年の四月十八日」(那年四月十八日)に郡の警察課へ連行され、警察では「“特高”の走狗」(「特高系」中鷹犬)と呼ばれる李勝丁巡查や「台湾人がつとめる警察関係の人間で一番羽振りの良い」(臺灣人擔任警務人員中風

頭最建的一個) 鍾益紅警部補から想像を遙かに超える厳しい拷問を受けるのであった。そして、このような曾淵旺を取り巻く抑圧の状況は、日本の敗戦により台湾の統治者が交替した後も、決して好転することはなかった。「この年」(這年)、二二八を連想させる「あの荒れ狂う嵐、あの驚くべき災難」(那些風風雨雨, 那場驚人的變故)の後で、「都会やよその町や村ではどこでも“意志表示”をし」(大城市別鄉鎮都有所「表示」)、苗栗の民衆も自分たちの“意志表示”のために集まり出した。曾淵旺は自宅で小さな茶間屋を開いていたが、仲間とデモ行進に参加したことで、「この年の三月十三日」(這年三月十三日)夜に当局の戸口調査を受けてしまう。「デモに参加した人が、何人もどこかへ連れて行かれてしまった」(參加遊行的人, 好幾個不知給弄到什麼地方去了)ことを妻から聞かされていた曾淵旺は、「あの年」と同じように便所の窓から逃げ出して従兄弟の牛舎に隠れるが、「この年の四月十七日」(那年四月十七日)、ついに牛舎から連行されてしまう。そして、警察署では鍾益紅県警察局局長や李勝丁警官によって、二十年前と同じように「取り調べ、訊問、自白の強要、“拷問”」(偵訊、審問、逼供、「體刑」)が繰り返されてゆくのであった。

「小説」については、若林正文による詳細な実証的研究がある。それによれば、象徴的に繰り返される“あの年”と“この年”の事件とは、前者が左翼組織に対する全島規模での弾圧事件である二一二事件後に起きた、苗栗での農民運動を弾圧した大湖竹南事件であり、後者では明らかに二二八が想定されているという³²³。二つの歴史的イベントを交差させながらも、各々の人物と役柄を重複させることで、統治者の交替という政治的変革によっても変わることのない圧迫構造の仕組みを巧みに描き出していた³²⁴。曾淵旺が拷問を受ける際に繰り返される鍾益紅との対話には、台湾の社会構造に対する作者の抗議の声が潜んでおり³²⁵、「小説」は強烈な社会批判に富む作品となっていたのである。

だが、この物語で伏せられているのは、台湾が抱える特殊な政治的状況に対する抗議の声だけではあるまい。不条理な世界を描く作者の視線は、曾淵旺という個人の内面にも向かっている。「あの年」、曾淵旺は牛舎の中で「なんとやるせないことだ。俺はやはり俺、

牛小屋はやはり牛小屋、犬はやはり犬なんだ！」（真是無聊透頂。我還是我，牛舍還是牛舍，狗還是狗！）、「俺はなんと所在ないことか。俺は実に孤独だ。俺はなんて救いがないんだ。俺は哀れな奴だ」（我好無聊。我實在孤單。我多麼無助。我太可憐了）と嘆いたが、こうした曾淵旺のやりきれない思いは「この年」でも同様に、「なんてやるせない、なんて寂しい、なんて腹立たしいことだ、だがやるせないからってどうだと言うんだ？寂しいからってどうだと言うんだ？腹が立つからといって反抗できるのか？」（好無聊，好寂寞，好不甘心，可是無聊又怎麼樣？寂寞又如何？不甘心能造反嗎？）と繰り返される。孤独で絶望的な状況にもかかわらず生きてゆかなければならない人間の不条理さが、曾淵旺の内面を中心に淡々と描かれてゆく。そして、それは以下のように警察での拷問に臨む曾淵旺の心理的変化にも象徴されていた。

そして、彼は少しずつ努力して、信念を、忍耐力を凝らし、必ずまたやってくるに違いないあの“拷問”を引き受けるために一心に準備することを心に決めた。忍耐強く持ちこたえ、それに耐え、反抗せず、如何なる不服の色も現さず、静かに受けとめ、黙々と耐えていこうと。

彼はこう考え、このようにした。彼は自分が希望に満ちているのを悟ったのだ……³²⁶

「あの年」の拷問を前にして、曾淵旺は無抵抗を貫くことで権力に抵抗しようと試みた。が、再び圧迫の歴史が繰り返される「この年」の拷問では、もはや抵抗の気力さえも失い、次のように頭をひたすらに振り続けて諦観するばかりであった。

「ああ！」彼は思わずまた溜息をついた。

彼は溜息をつくべきではないと思った。やはり頭を振っていよう。彼は頭を振り続けた。彼は再び警察車両に押し込まれ、それは黒い垂れ幕を張りめぐらせた車で、中は真っ暗で自分の手さえも見えなかった。

だがどうでもいいことなのだ。彼は何も見ようとは思わなかったし、何も聞こうとも思わなかった。彼は瞳を閉じて心を休めた。座って吐納式気功をしようとしたが、残念ながらうまくゆかなかった。

彼に今できることは、ただ頭を振り続けることだけだった。³²⁷

ここでは不条理で絶望的な社会を生きることの無力感や将来に対する希望の喪失といった曾淵旺の内面が大きく表出していると言えよう。物語では、幾度も繰り返される統治機関による苛烈な抑圧が、現在のみならず過去や未来を含めた歴史的展開に対して何ら期待を抱かせないこともまた事実であった³²⁸。その結末は、「あの年の七月三日（内容重複につき、省略。）」（那年七月三日（内容重複，従略。）」「この年の七月五日（内容相似たるため、省略。）」（這年七月五日（内容近似，従略。）」という何も具体的記述の無い二段で終わるが、これは言わば時の繰り返しを意味する装置となって、こうした不条理に満ちた歴史の反復が将来も再三再四続いてゆくことを暗示しているのではないだろうか。

李喬は国立成功大学での講演稿「小説研究場域與現代文学理論譜系」（小説研究の領域と現代文学理論の系譜、2008）の中で、実存主義の概念についても言及したが、そこでは実存主義を「非常に偉大な思想」³²⁹と述べ、「人生実存の問題は人が自分で向き合わなくてはいけないことであり、神に任せることなどはできないのです」³³⁰、「人は自分自身で向き合っようやく真に存在したことになるのです」³³¹と苦難の中でも現実に直面することの大切さを説いていた。この発言からも李喬の小説創作と実存主義が密接に関連するであろうことは推定できるが、だが何よりも着目したいのは、李喬がこのような絶望的情况下で生き抜こうとする人間をギリシア神話のシーシュポスに擬えて、次のように述べていた点である。

最も有名なシーシュポス（Sisyphus）の神話は、ゼウスが彼にあのくぼみの中で永遠にあの巨岩を運ぶようにさせたもので、山頂まで運んでもまた押し返されますが、彼

がずっと続ける様子は、まるで無意味なまでに永遠に結果を得られないかのようです。なぜなら山頂に至り目標を達成しても、巨岩の重さで解決を得られず、山頂に至ってもまた転がり落ちてくるからです。だからどうしても無意味で、結果なんて無いのです。別の角度から言えば、岩に押しえつけられても、自分で何とかそれを運んで行き、この過程であなたは存在しているのでありまして、どうしても抵抗できない巨岩に押し返される時、尊いのは神の力を借りることではなく、あなた自身がそれを運び続けようとする事なのです、運ぶ過程で、自分が自分であること、自分が存在することを証明するのです。³³²

「小説」では、曾淵旺は拒むことのできない強圧的な政治体制の下で生きてゆくことを強いられ、国民党政権下という「真っ暗で、自分の手さえも見えない」社会では、「ただ頭を振り続けること」で自らの存在を認識せざるを得なかった。このような曾淵旺の役柄は、上述のようにゼウスに岩を山頂に運び上げるべく命ぜられた、シーシュポスの姿さえ想起させることだろう。李喬は「どうしても抵抗できない巨岩に押し返される時」、無意味であることを知りながらも自分自身でそれを運ぶという苦役の中で、「自分が自分であること、自分が存在することを証明する」と説いたのだが、シーシュポスの神話の論理とは、まさにそのような実存的緊張を描く「小説」の物語構造に合致するものであったと言えよう。こうしたシーシュポスの表象が、1960年代の台湾文学界で大流行したカミュら欧米の実存主義作家による作品の中でもしばしば表現されてきたということは改めて言うまでもない。だが、興味深いのは、前述のように李喬が世界で最も想像力に富む作家の一人と見なし、世界的な文学作品の代表作のひとつとして取り挙げた、安部公房『砂の女』においても、同様の実存主義的作風が展開されている点である。それは実存的緊張を描く「小説」の創作過程に影響を与えた海外作家の一作として、『砂の女』が存在することを示唆していると言えるのではないだろうか。

2. 『砂の女』の実存主義的作風

『砂の女』の梗概は、次のとおりである。主人公である教師の仁木順平は昆虫採集のために海岸沿いの砂丘までやって来る。そこでは「すべての家が、砂の斜面を掘り下げ、そのくぼみの中に建てたように見え」、「砂の斜面のほうで、屋根の高さよりも高く」、家屋はまるで「深い穴の底」にあるかのようだった。仁木は小柄の若い女が一人で住む「部落の一番外側にある、砂丘の稜線に接した穴のなか」の民家を案内され、「屋根の高さの三倍はあり」、「ほとんど垂直にちかい」砂の壁を縄梯子で下りて旅宿する。だが、翌日に目を覚ますと縄梯子は消えていて、砂の壁に囲まれた民家はまるで「蟻地獄の中に、とじこめられてしまった」かのようだった。頭上からは絶えず砂が降り注ぎ、砂掻きをせずには家が埋もれてしまう。仁木は部落の連中が穴の外から水や日用品を運んでくる代わりに女と砂掻きを続け、「いつまでやっても、きりなしで」、「砂掻きするためにだけ生きているような」奴隷にも似た日々を過ごす。たとえ運良く穴の外へ逃げ出すことができても、掻き集めた砂を土建会社に売却しているという部落の連中の手で、仁木は再び穴の中へ連れ戻されてしまう。こうして女と二人きりの生活が続き、仁木は穴の中で鴉を捕えるために《希望》と名づけた罌の桶を仕掛けると、桶が砂地から水を呼び込む溜水装置となっていることを知り驚喜する。やがて女は妊娠し、脱出への絶好の機会が訪れるが、仁木は水を得る方法を発見したことで、「べつに、あわてて逃げ出したりする必要はないのだ」と一人で穴に残ることを決めるのだった。

新潮文庫版『砂の女』の巻末に附す「解説」では、ドナルド・キーンが「主人公は穴に陥るが、その中での生活は読者の常識に反する不思議なものである。しかし、どんなに不思議であっても、別の次元では非常に写実的で」、「日本いや世界の真相を最も小説的な方法によって描いている」と論じたが³³³、その展開は蟻地獄のような砂の穴での女と二人きりの生活という、虚構の非現実性が非常に目立つ内容であったものの「読者は、砂の力感到に圧倒され、幻惑されつつ、この虚構をのみこんでゆく」³³⁴のであった。渡辺広士によると、このような現代寓話とでも言うべき物語は、安部公房が前衛作家へと転じる決定的転

換点となった前述「デンドロカカリヤ」を出発点に、『壁』三部作や『第四間氷期』を経由して『砂の女』まで続いてきたものであるという³³⁵。こうして『砂の女』は「発表当時から世評が高く、アヴァン・ギャルド文学最高の成果と取り沙汰され」³³⁶ たのだが、但し一方では、そこには安部公房の最初期の作品と共通する要素が潜んでいるという一面も決して無視できなかつた³³⁷。安部公房の初期作品が実存主義的作風を見せたことはすでに述べたとおりである。大江健三郎は「安部公房は、存在することの意味あいについて、この国のいかなる作家・批評家にもまして激しく問いつめつづけてきた」³³⁸ 人間であるとして、蟻地獄の中での砂搔きという終わりの無い苦役を続ける仁木順平の姿には、「もっとも実存主義的な人間の希望の底に、絶望の残響がなお鳴りつづけている」³³⁹ 様子が顕著だと述べていた。また平岡篤頼は、それは「我がはじめにあつてその我が生きているのではなく、生きている我のかたち以外に我はないという、実存主義的考え方が根底にある」³⁴⁰ とさえ断言してもいた。実際『砂の女』は、このような実存主義的傾向に関する評価に限定されず、数多くの含意を備えた「多面的なテキスト解釈をゆるす」³⁴¹ 作品として完成していたのだが、それでも砂の壁を前にした男女が終着点無き砂搔きを繰り返すという設定は「カフカの、あるいはカミュ的な世界の不条理との対決として考えることもできる〔傍点原文ママ〕」³⁴² という解釈の可能性を孕んでおり、そうした物語展開は砂との戦いを通して絶望的に発見した世界でこそ新しい自己の発見が期待できる³⁴³、とする不条理を内包する実存主義文学として読み込む余地を広く残していたのである。

以上のように、『砂の女』では「多面的なテキスト解釈」のひとつとして、実存主義的な読解を可能にしていた。台湾では1960年代以降、後述の如く鍾肇政による翻訳を中心に安部公房の諸作品が刊行されてゆくのだが、『砂の女』の台湾版中国語訳である『砂丘之女』（1967）ではまさに物語のこうした実存主義的傾向が強調され、台湾の文学界に紹介されてゆくのであった。訳者の鍾肇政は、『砂丘之女』の巻頭に掲げた解説文「安部公房與砂丘之女」で、次のように述べている。

安部は文学表現の主な力を砂と格闘する人間の精神運動に注いだのであって、策略に引っかけ砂の穴に入り込んでしまいどうにも出られない一人の人間の体験を、小説にしようとしたのではない。したがってあの教師が砂との格闘の過程を通して絶望的に発見する世界とは、それこそが現実世界の新たな一側面なのであって、我々の現実世界における具体的生活と重なり合っているのであった。我々は教師と共に格闘するが、それは我々にどのように現実世界の絶望的困難と格闘してゆくのかという方法を発見させてくれよう。³⁴⁴

鍾肇政は『砂の女』から、選択の余地など無いままに「砂と格闘する」ことを強いられた、仁木順平の絶望的心理状態を汲み取ったのであり、こうした物語展開で描かれる「砂との格闘の過程を通して絶望的に発見する世界」とは、あたかも自分たちの「現実世界における具体的生活」を捨象したものであるかのようにさえ感じていた。それゆえに鍾肇政は、『砂の女』は「どのように現実世界の絶望的困難と格闘してゆくのか」という精神的な解決策さえも示してくれると述べていたのでもある。そして着目したいのは、このように『砂の女』で表現された実存主義的作風に対して関心を示したのは、訳者の鍾肇政ではなかったことだ。台湾で『砂丘之女』が刊行された直後には、葉石濤も次のように論評していたのである。

『砂の女』であの囚われた博識な教師と女は砂の脅威の中で暮らす、仮にいつも絶えず砂を掻き出さなかったとしたら、砂によって埋没されてしまう危険があった。あの絶えず滑り落ちてくる砂はシーシュポスの大きな岩と同じなのである。こうして、永遠に休みのない砂掻きの仕事こそが、彼らに生存の意識を与えるのである。³⁴⁵

葉石濤は、砂の穴での仁木順平の絶望的境遇から「シーシュポスの大きな岩」を連想し、「永遠に休みのない砂掻きの仕事こそが」、「生存の意識を与える」手段であると、鍾肇政

と同様に物語の実存主義的傾向に注目していた。そして鍾・葉両氏と同じように、前述の如く 1960 年代にはすでに海外の実存主義文学に深く親しんでいた李喬もまた、シーシュポスの神話を念頭に置きながら『砂の女』の実存主義的作風に強く魅了されていたのである。李喬は 1967 年 4 月に『砂丘之女』が出版されると、直ちに鍾肇政に宛てて書簡（1967 年 4 月 13 日付）を送り、次のように述べていた。

あなたが翻訳なさった“砂の女”を何度も読みました。もしも“先に”カミュ“異邦人”が無かったとしたら、砂〔砂の女—筆者注〕の作品は実に最も造詣が深い作品なのでしょう——わたしは“砂〔砂の女—筆者注〕”は、恐らく“異〔異邦人—筆者注〕”を改善し意味を推し広めたものではないだろうかと言いたいのです……³⁴⁶

李喬は刊行されたばかりの『砂丘之女』を「何度も読み」返しては、『異邦人』を「改善し意味を推し広めたもの」と安部公房の作品をカミュ文学の系譜に位置づけていた。1960 年代の台湾文壇で、最も大きな影響力を持っていた海外作家の一人であるカミュを愛読していた李喬であったが、カミュの実存主義的な諸作品に対する文学的関心からは『砂の女』への共感さえも産まれていたと言えるのではないだろうか。もっとも『異邦人』の“正確な注釈”あるいは“哲学的翻訳”などと呼ばれる、カミュの随筆「シーシュポスの神話」で中心となるシーシュポスをめぐる不条理の論理は、そのまま『異邦人』の主人公ムルソーの境遇に当てはまるわけではなかったが³⁴⁷、前述のとおり李喬はシーシュポスの神話に見られるような苦役の中で「自分が自分であること、自分が存在することを証明する」という実存主義を尊んでおり、『砂の女』の物語からも同様にシーシュポスの表象を読み取っていた可能性が高いと考えられよう。このように李喬「小説」と安部公房『砂の女』の両作を繫索するのが、まさに実存哲学という思想の一端を表象するシーシュポスの神話の論理なのであった。

第3節 戒嚴令下の台湾と安部公房作品の受容

1. 台湾における安部公房作品の熱狂的歓迎

それでは何故に、1960年代に台湾文壇を席捲した実存主義文学、そして実存哲学の一端を表象しているとも言えたシーシュポスの姿さえも連想させる安部公房『砂の女』が、1980年代初頭発表の李喬「小説」に影響を与えたのか。実は、この点は台湾の文学界における安部公房作品の熱狂的な受容状況や戒嚴時期の禁制的とも言える政治状況と深い関わりがあった。

本章の第1節で述べたとおり、1960年代の台湾文壇では欧米の文学作品が盛んに流入していたが、中国語での翻訳作品に限っては、海外の現代文学の紹介は発行部数の限られた文芸誌や同人雑誌を中心に行われていたために作品数が多くなく、かの『現代文学』『外国作家特集』でさえも掲載する翻訳作品自体は極めて限定的であった³⁴⁸。それは日本文学についても同様であり、台湾では川端康成のノーベル文学賞受賞（1968）や三島由紀夫の自決（1970）以前に、彼らの作品は基本的に知られていなかったという³⁴⁹。東洋人としてはタゴール以来となる半世紀振りのノーベル文学賞受賞となった川端康成の快挙を讃えるかのように、台湾の読書市場では川端作品の人氣がにわかに出始め、川端人氣は台湾の文学界における日本文学翻訳ブームの先駆けとなった³⁵⁰。こうした1960年代末における台湾での川端康成作品の歓迎振りについて、鍾肇政は『世界文壇新作家』（1969）の中で、次のように述べている。

川端康成がノーベル賞を獲得した後で、この文壇では“川端旋風”が巻き起こった。彼の作品の翻訳や逸話の報道、作品の出版などが次から次へと続き、賑やかさを極めた。それに連帯するように、日本文学は改めて我々文壇の注目を浴びたのである。³⁵¹

この“川端旋風”を迎えて、台湾の読書市場では三島由紀夫や夏目漱石、芥川龍之介、井上靖など日本の近現代文学の訳本が大量に出版されてゆくのであった³⁵²。川端作品を始

めとして数多くの日本近現代文学の翻訳を手がけてきた李永熾（1939-）も指摘するように、台湾社会では国民党によって“祖国”復帰後「最初の二十年は文学、文化の面でほとんど日本と断絶し」³⁵³ ていたが、「一九六八年になり、めでたくも川端康成がノーベル文学賞を受賞すると、台湾では川端旋風が現れ、台湾の日本文学に対する態度はようやく改まった」³⁵⁴ のである。

但し、安部公房の作品はこの時期の鍾・李両氏が指摘する“川端旋風”に乗ずる形で台湾へ紹介されたわけではなかった。例えば前述のように、すでに1967年4月には台北の純文学月刊社より純文学叢書の一冊として、台湾で初めて翻訳された安部公房作品である『砂の女』の中国語訳『砂丘之女』が出版されており、同書は台湾の文学界で好評を博していた³⁵⁵。「世間を一時騒がせた安部公房の作品“砂丘之女”」³⁵⁶ は、「一時期販売された後ですぐに絶版となった」³⁵⁷ ほどの好調な売行きであったという³⁵⁸。先に挙げた鍾肇政による解説文「安部公房與砂丘之女」では、日本では「1947年より安部は文壇で最も特異な、また最も重要な作家の一人」³⁵⁹ であり、「今では彼はすでに世界の文壇から矚目されている人物で、それを否定する余地はない」³⁶⁰ と解説されており、台湾の文学界ではすでに1967年の時点で、安部公房は世界的に重要な日本人作家として紹介されていたのである³⁶¹。初版絶版後には、新版として鍾肇政・劉慕沙訳『砂丘之女及其他』（1975）³⁶² が発売され、同書も「依然として売れ行きは好調で、この本〔『砂の女』一筆者注〕が人々に歓迎されたことは明らかだった」³⁶³。こうして台湾では、『砂の女』は1967年の中国語訳出版当初より熱狂的とも言えるほどの受容が見られたが、さらに1970年代に入ると安部公房の翻訳作品は、鍾肇政訳『燃燒的地図』（燃えつきた地図、1977）³⁶⁴、魏明果訳『跳蚤奔月』（月に飛んだノミの話、1978）³⁶⁵、劉慕沙訳『夢幻兵士』（夢の兵士、1978）³⁶⁶、鍾肇政訳『箱子裏的男人』（箱男、1979）³⁶⁷ などが立て続けに刊行され、「安部公房というこの日本の著名作家は、ここ〔台湾一筆者注〕ではすでに馴染みのないものではない」³⁶⁸ 状況を迎えていったのである³⁶⁹。

それにしても、台湾では何故これほどまで安部公房の作品、とりわけ『砂の女』が熱烈

に歓迎されたのであろうか。その理由は台湾の国家体制や社会状況と密接に関係していたようである。そもそも『砂の女』は 1964 年にアメリカで英訳されて以来、今日に至るまで約 40 ヶ国語で翻訳出版され³⁷⁰、欧米主要各国を中心に世界で幅広い読者層を獲得しているのだが³⁷¹、その中でも冷戦期の旧ソ連や東ドイツ、あるいは旧チェコスロヴァキアやポーランド、ルーマニア、ハンガリー、旧ユーゴスラヴィアなど東欧の旧社会主義国家、さらには台湾や韓国、メキシコなど事実上の一党独裁や開発独裁が長らく続いたアジアやラテンアメリカの国々の大衆から非常に好意的に受け入れられたことは注目に値する³⁷²。それは三島由紀夫の作品が、旧ソ連や東欧ではほとんど紹介されなかったのとは極めて対照的であった³⁷³。『砂の女』の社会主義体制下あるいは独裁体制下での大流行は、言うまでもなく各国読者の強い共感に支えられたものであり、その共感とは彼ら自身が身をもって体験してきた二十世紀現代史の悲惨な実状に切迫したものであった、ということは軽視できまい。例えば、『砂の女』ポーランド語版の翻訳者であるミコワイ・メラノヴィッチによれば、「砂穴の中での男の生活は、常識から全くかけ離れたものである」ように見えるが、それは「二十世紀、この世に存在した、死の強制収容所での苛酷な生活をさえ連想させるものである」という³⁷⁴。ポーランドでは第二次世界大戦中にドイツと旧ソ連によって国土を分割占領され、終戦後は社会主義政権による事実上の一党独裁体制が続いていたが、ポーランドの読者たちは「直ちにこの作品を自己の孤独や社会的禁制の実存的比喩として受け止めることができた」のであり、「安部の一連の作品は大変なじみやすい傑作になった」のであった³⁷⁵。ポーランドの人々は、「畏にかかった動物のように自由のためにもがき闘う」仁木順平の姿に自らを投影し、穴の中で砂を掻く行為とは「あのシジフィアのむなしい労力のようなもの」の如く思えるが、「逃げ道を獲得しないまま、嫌悪に満ちた新状況を受諾しなければならなくなる」現在を生き抜くには、「自分のために新しい存在の理由・目的を発見しなくてはならない」と解釈したのである³⁷⁶。自由無き暮らしの中で、生存のために自己の存在を見つけ出そうとする『砂の女』の物語が、社会主義国家や独裁政権下に生きる人々によって特に肯定的に受け入れられたということは決して想像

に難くないだろう。ニュアンスに富み多様に解釈できる『砂の女』の物語に、人々は原作では決して前景化されていない、社会主義国家の全体主義社会や独裁体制下での権威主義社会の寓意を読み込んだのであった³⁷⁷。沼野充義は「どんな作品であれ、外国語に訳された際には、程度の差こそあれその外国の文化的コンテクストに応じて再解釈され、変形される。それは外国での受容の宿命であって、原典の“歪曲”だと言ってめくじらをたててもしかたのないものかもしれない」³⁷⁸と述べるが、まさに『砂の女』はこうした「外国の文化的コンテクストに応じて再解釈され、変形される」糊代を広く残していたと言えよう。

そして、このような「外国での受容の宿命」は、台湾における『砂の女』の宿命でもあった。前述のとおり、1967年に刊行された『砂丘之女』は「世間を一時騒がせた」ほどの人気作品であったが、台湾の1950、60年代とはまさに政治的・社会的禁制が続いた時代である。1950年代にピークを迎えた白色テロでは地下共産黨員やその関係者らの摘発だけでなく、国民党による政治弾圧は原住民族の自治要求運動や党国体制内での権力闘争、特務機関同士での闘争などにも及んでいた³⁷⁹。当時の台湾社会では、戒厳執行機関の台湾警備総司令部を頂点とする「政治的異見者を効率的に監視し威嚇し抑圧するシステム」が至る所で何重にも周到に張りめぐらされ、「政治を危険なものとし見なし有効な反抗は無理である」と見る深い『退出』の態度を台湾住民は身に付けざるを得なかった³⁸⁰。そして蒋介石は国民大会第三次会議（1960）で動員戡乱時期臨時條款を修正させ、中華民國憲法が定めた総統三選禁止の規定を凍結させて終身総統の地位を固め、自らの独裁的権力を法的に確立させていったのである³⁸¹。こうした国民党による一党独裁体制に対して、党内外の自由主義的知識人が集った政論誌『自由中国』では、一党支配を批判して民主化を要求するだけでなく、国会のあり方や党がコントロールする軍隊の国軍化、救国団の活動が浸透した教育の正常化など様々な改革を主張したが、1960年に『自由中国』は発禁処分を受け、主幹の雷震（1897-1979）を含む多数の自由主義者が逮捕されてしまう（雷震事件）³⁸²。また、1964年には党国体制に反旗を翻して“台湾人民自救宣言”を起草し、民主国家の建設を主張した彭明敏台湾大学教授らが政治警察に検挙されるという事件も起きて

いた（彭明敏事件）³⁸³。国民党が知識人の政治的異見者を排除しながら日増しに強める独裁体制に対して、一般大衆が「有効な反抗」を示すことなどは不可能な状態であり、人々はこのように非常に禁制的な 1960 年代の政治状況下で『砂の女』を貪るように読んだのであった。現に早くも『砂丘之女』出版直後には、仁木順平の姿に共感を覚えるという内容のコラムが以下の如く『徴信新聞報』に掲載されている。

“純文学”第4期に、鍾肇政さんの訳した“砂の女”があるが、すごく良い作品だ！特にこの場でみなさんに推薦し紹介したい。……“砂の女”の中には風変わりな、ぼんやりしてはっきり見えない世界があるが、象徴の意味に満ちている。……時には、わたしは思うのだ、畏にかかった男の主人公はもしかしたら独裁暴政下の人々で、周囲の状況の巨大な圧力が、彼らに次第に人間らしい尊厳や反抗の意識を失わせていることを象徴し得るのではないかと。³⁸⁴

ここでは、穴に陥った主人公が終わり無き砂搔きを続ける様子は、「独裁暴政下の人々」が「次第に人間らしい尊厳や反抗の意識を失」ってゆく象徴として解釈されている。上述した二件の政治事件のように、1960年代の国民党による独裁体制下で政府批判を試みることは容易でなく、それは自らの身を危険に晒しかねなかった。ただ、その後に同コラムを載せた『徴信新聞報』が当時の検閲によって処罰を受けた形跡は見られない。そうだとすれば、この時すでに中国ではプロレタリア文化大革命が始まっており、検閲の実施機関であった台湾警備総司令部は、これを共産党政権下での毛沢東の独裁政治を批判する文章として認識したのではないだろうか。然れども、台湾の読者は“象徴”の意味をそのようには読み込まなかったはずである。人々は先に挙げたポーランドでの受容状況と同じように、安部公房が描き出した砂と格闘する仁木順平の姿に自分自身を投影させて、国民党による独裁政治下での現実の絶望的社会を生き抜くために、不条理や苦難の中でも自らの実存を意識する必要性を悟ったのではないだろうか。

2. 問い直される主体的実存

やがて台湾社会は、1970年代の政論誌『大学雑誌』や党外人士らの登場によって政治・社会改革の機運が高まり、美麗島事件を経て1980年代の民主化運動へと前進するが、美麗島事件は民主化を求める党外人士に対する弾圧事件という枠に留まらず、その後の台湾の政治的・文化的潮流にも決定的な影響を与える重要な事件となった³⁸⁵。それが及ぼした影響は1980年代の言論界や思想界でも明らかで、台湾文壇では“台湾”と“中国”、“主体”と“従属”、“民主”と“支配”、“抵抗”と“収用”などの文化的ヘゲモニーの対立構造が浮き彫りになってゆく³⁸⁶。そして、この時期に台頭した政治的・社会的タブーに挑戦する政治小説や政治詩も、美麗島事件後の社会や文壇の変化から産まれてきたものであった。李喬自身も果敢に政治小説を創作し発表する一方で、『台湾政治小説選』（1983）³⁸⁷を編集するなど、文学と政治の関係について深く関与していった。但し、こうして1980年代の台湾社会では、言論の自由が徐々に拡がりつつあったとはいえども、戒厳令下ではそれが未だ完全に回復されたわけではなかったことも確かである。例えば、李昂（1952-）は旧家の女性を主人公にして、国民党政権下での台湾の半世紀を描き出す『迷園』（1991）を1986年から創作し始めたが、政治的な題材の処理については非常に神経を尖らせた、と語ってもいた³⁸⁸。

このような美麗島事件後における「時代の産物」³⁸⁹として誕生するのが、前述『文学界』であった。『文学界』は「題材が少し敏感な作品であるがために、発表の場所が無い」³⁹⁰秀作を積極的に採用しては掲載し、その後に戒厳令が解除されて文学そのものの社会に与える影響力が変化するまで、「それらの作品を収録することで、台湾文学の避難港」³⁹¹の役割を果たしてきた。そして『文学界』創刊号に掲載された李喬の「小説」とは、まさに時局批判のトーンを多分に含む物語だったのである³⁹²。過去、現在、未来と繰り返される曾淵旺を取り巻く抑圧の描写に、台湾の不条理な社会構造を維持してきた国民党政権に対する強烈な批判が組み込まれていたことは、すでに述べたとおりである。さらには、李喬

が「小説」を創作する前年に完成させていた『寒夜』三部作との関連も無視できなかった。

『寒夜』三部作の『荒村』では、日本統治下の台湾人警官として鍾益紅や李勝丁が登場するが、彼らの『荒村』での役柄は「小説」の物語の中でのそれと見事に重なり合っていた³⁹³。

「小説」が『荒村』の一部を敷衍させた作品であると見なすことが可能であるならば³⁹⁴、前章で論じた『荒村』が『寒夜』三部作の中で見せた台湾・台湾人意識の構築というテーマは、「小説」でも姿を変えて表出していたことであろう。前述のとおり、李喬は不条理に満ちた歴史の反復という台湾社会の絶望的情况をシーシュポスの神話に擬えたが、悪政の中で苦しみがき続けながら自らの実存を問い続けるという実存主義的描出は、読者に対して台湾人としての主体的実存を問い直し、問い続ける重要さを説き示すディスクールであったと言えるのではないだろうか。事実、李喬は『文学界』停刊に際して寄せた「文学界的未来」（文学界の未来、1989）と題した文章で、次のように台湾人の“存在の意義”について述べていたのである。

二十世紀最後の二十年は台湾の島が運命を決定づける分かれ目の時であり、台湾文学の新たな高峰もこの時に創造される。今日、台湾人として、とりわけ文化人・文学者として、非常に非常に求められているのは、慎重かつ周到に、謙虚だが卑下せずに、自らの立場であらゆる“存在の意義”についてもう一度考え直すことである

——生命や幸福、台湾、台湾語人、族群、民族、歴史、国家、台湾独立、台湾の“中国”への合併（統一というのは、事実にはそぐわないのであり、“合併”とだけ言える）、文化、文学など、すべてを“考え直し”、その“存在の意義”を考えることである。

試みに世界の主要民族を顧みて概観してみると、歴史の重要な節々でこそ、現実から出発し、あらゆる存在の意義についてもう一度考え直し、その後に行動を以てあの“新しい存在の意義”を成就あるいは完成あるいは実現することができるのであり、それこそまさに新しい時代の誕生の日なのだ。³⁹⁵

李喬は「台湾人として」現実を直視し、「自らの立場であらゆる“存在の意義”についても一度考え直すこと」、そして「“新しい存在の意義”を成就あるいは完成あるいは実現すること」の必要性を説いているが、こうした信念の根底にあるものは、李喬自身がシーシュポスの神話について言及した際に述べた「どうしても抵抗できない巨岩に押し返される時」、「自分が自分であること、自分が存在することを証明する」という実存主義的思想であることは言を俟たないだろう。また、それら実存の問題は、「生命や幸福、台湾、台湾語人、族群、民族、歴史、国家、台湾独立、台湾の“中国”への合併、文化、文学など」日常の諸問題と関わる自らの“台湾意識”に密接に関連していた。「小説」とは、こうした李喬が考える実存の問題を台湾の読者が容易に理解し得る歴史的な寓意でもって説き明かすという言説でもあったのではないだろうか。同時に、それは実存主義的思考方法を読者に示すために、『砂の女』という文化的テキストを部分的に翻案したものであり、作者自身の実存的思想さえも盛り込んだ作品であったと言えよう。

小結

鍾肇政の翻訳による安部公房『砂の女』は、川端康成のノーベル文学賞受賞をきっかけとした日本文学ブームよりも先に台湾の文学界へ紹介されていた。前述「安部公房與砂丘之女」では、現実世界の絶望的困難を生き抜く実存主義的な作風が注目されていたが、同解説中の鍾肇政による記述の一部が大江健三郎による安部公房作品の解説「安部公房案内」の一段を参照していることは明らかであり³⁹⁶、鍾肇政が当時の日本語書籍を通じて安部公房の実存主義的作品を積極的に受け入れようと試みていたことが窺える³⁹⁷。但し、戒嚴令下で反共準軍事独裁という政治体制にあり³⁹⁸、白色テロの記憶も生々しく残る1960年代台湾社会で、かつて日本共産党の黨員文学者として活躍した経歴を持つ安部公房の代表作を翻訳紹介するということは、いかに勇気が必要な決断であったかを忘れてはなるまい³⁹⁹。白色テロのために自らも下獄した経歴を持つ葉石濤は、「安部公房は明らかに絶対に〔左派だ一筆者注〕」⁴⁰⁰、「君も迂闊すぎる」⁴⁰¹と鍾肇政宛ての書簡（1967年2月19日付）で

注意を促し、鍾肇政は「でもわたしが思うに、ただ ism [コミュニズム—筆者注] に近いだけであって、ist [コミュニスト—筆者注] では決してない、さほど問題にはならないよね」⁴⁰² と鄭清文宛ての書簡（1967年2月3日付）では意見を求めている。1960年代の台湾で安部公房の作品を実名で翻訳紹介するということは、ほかの現代日本文学の作品を翻訳することとは事情が異なり、訳者自身の身に危険が迫る可能性を抱えた命がけの翻訳作業であったのだ。

そして戒厳令下の台湾社会では『砂の女』が熱烈に歓迎され、台湾の読者は主人公が砂の壁と向き合う絶望的な物語を国民党による独裁政治下での現実の実存的比喻と見なし、その象徴の意味を読み込んだのであった。李喬はこのような『砂の女』の実存主義的作風に強い共感を覚え、それを作品の真義として捉えた。1960年代の台湾文学における実存主義運動の中で、李喬は不条理や孤独、不安といった実存の問題に正面から向き合ったが、こうした文学体験を経て安部公房の作品に出会い、『砂の女』を受容していったのである。そして美麗島事件を経て1980年代に至るまでの台湾社会の民主化運動の展開に我が身を投ずることで、李喬は実存の問題を自らの主体性を獲得するための有効な手段へと読み替えていき、“歴史素材小説”という枠組みの中でそれを語ることにより、台湾社会で国民一人一人に向かって自分自身の主体性獲得という意義を問い続けてゆくのであった。「小説」の物語とは、従来の研究で論じられてきたように強烈な時局批判を内包するだけではなく、同時に読者に対してこうした「存在の意義」について意識させるための仕掛けが巧みに施されてもいた。李喬は1960、70年代に台湾の読者によって愛読された『砂の女』を、実存主義的思考方法を読者に提示するための文化的テキストとして部分的に翻案し、「小説」という自らの代表作を創作するに至ったとも言えよう。

李喬『埋冤 1947 埋冤』における孤児意識からの脱却

——二二八事件をめぐる歴史描写と戒嚴令解除後の台湾社会との関係から

はじめに

1947年2月27日夕刻に台北の大稻埕で発生した二二八は、台湾現代史の歴史的転換点である⁴⁰³。長年二二八について調査・研究を続けてきた張炎憲によれば、「二二八事件は第二次世界大戦後に台湾へ最も深い影響を及ぼし」⁴⁰⁴、「今なお台湾での多くの政治的社会的問題は、なおもこの事件に源を発している」⁴⁰⁵という。台湾社会でのエスニックな対立感情は二二八を起因として生じたものであり、二二八をめぐる台湾人の歴史認識の違いは、現今の政治・社会問題とも密接に関連している⁴⁰⁶。後述のように、かつて戒嚴時期に二二八は人々が語ることの許されない政治的禁忌であり、その記憶は統治者側によって強制的に封印されてきた。だが、台湾社会における民主化の進展に伴い、こうした政治的禁忌は民衆の間でも徐々に解消されていったことも事実である。人々が忌憚や警戒心を拭い去り、二二八について語り始めるのは、実に戒嚴令解除以後のことであったが、とりわけ台湾文学界では1980年代初頭より作家や詩人の多くが、自身の創作を通してこうした政治的禁忌の超克を目指してきたのである。李喬もその一人であり、1995年に出版された代表作の長編小説『埋冤 1947 埋冤』（以下、『埋冤』と略す）⁴⁰⁷は、刊行当初より物語「全体を二二八事件に焦点を合わせて描いた歴史小説」⁴⁰⁸として大きな反響を巻き起こした。

李喬は『埋冤』を脱稿するまでの間、約十年にわたり国内外の文献を渉猟し、現場での周到な実地検証、及び120人以上にのぼる二二八被害者へのインタビューを実施した⁴⁰⁹。同書巻末の「後記」によれば、「実際に執筆した時間は約三年半だが、資料収集やインタビュー、口述記録等に十年前後費やした」⁴¹⁰という。執筆時間を遙かに上回る長期間の取材活動の末に脱稿された『埋冤』は、1990年代初頭に台北と高雄の日刊紙で連載後、単

行本として自費出版された⁴¹¹。同作は、李喬自身が「書店によって商業的に売り叩かれることを望まず」、「市場を経由せずに売り出し、専門業者を通さずに取次販売した」という⁴¹²。1990年代半ばの台湾ではすでに出版不況の兆候が現れていたが⁴¹³、私家版として頒布された『埋冤』は上下両巻を通じて計1,200ページ余り、約70万字の大部の著作にもかかわらず、刊行半年後には増刷され、累計3,000セット以上を売り上げた⁴¹⁴。同書出版の年には、台湾ペンクラブと台湾教授協会、台湾教師連盟が共催する“1995『本土十大好書』”（1995年本土十大良書）の一冊として推薦を受けるなど⁴¹⁵、1990年代台湾文学を代表する一作と言えた。その後も、『埋冤』は2006年にも行政院直属の文化建設委員会が実施した“全国閲読運動”（全国読書フェア）の指定図書に選出されるなど、台湾社会への浸透の程度が窺える⁴¹⁶。

先述のように、台湾文学界では民主化が進展する1980年代より、二二八を題材にする小説の創作や発表が繰り返されてきた。今日では二二八は、「台湾文学におけるひとつの古典的題材」⁴¹⁷として目され、特にその歴史的事件をモチーフにした小説は“二二八小説”と呼ばれている。二二八小説に関する研究論考も、各作品の書評等まで含めると膨大な数にのぼり⁴¹⁸、本稿もそれら数多の先行研究の恩恵に浴してはいるが、とりわけ『埋冤』に関する論考の多くは、作者が二二八の状況を文学作品の中でどれほど歴史的事実に即して実写したのか、という点に議論が集中していた。二二八が戒厳令下では長期にわたり政治的禁忌とされ、その歴史的事実さえも語られていなかったという事情に鑑みると、こうした論点は確かに正鵠を射るものではあるが、実は『埋冤』ではそれだけがテーマ化されていたわけではない。作者自身が「文学作品として見ると〔二二八を写實的に描いた一筆者注〕上巻は下巻のための壮大な序文である」⁴¹⁹と言明したように、下巻で描かれる二二八後の物語展開も決して無視できないように思われる。また『埋冤』の発表は、従来の李喬による“歴史素材小説”の創作意図を見ても明らかなように、同時代的に進行する現代台湾社会の諸問題との密接な関係さえも示唆しているように思われる。ほかの李喬作品と同様、『埋冤』でも作品の創作・発表時期と同時代の台湾社会の趨勢との関係は無視できな

い。

本章では、まず二二八を主題にした小説である“二二八小説”の展開を追いながら、1980年代以降の民主化への進展の中で、李喬が二二八に対して如何に向き合ってきたのかを探る。さらに『埋冤』における主要人物の形象に注視し、李喬が二二八を主題とする創作を行うことにより、戒嚴令解除後に生きる台湾人読者に対して何を喚起しようとしたのかを考察する。また、従来は多くの二二八小説で省籍矛盾の描写を前面に押し出すことにより、二項対立な物語展開に終始してしまうことが否めなかったが、『埋冤』では二二八小説が抱えるこうした創作上の隘路を如何に解消したのかという点にも注目したい。

第1節 “二二八小説”の誕生とその展開

1. 二二八以降白色テロ下での二二八小説

二二八小説の代表的作品を選出した作品集には、林雙不編『二二八台湾小説選』(1989)⁴²⁰をはじめ、許俊雅編『無語的春天—二二八事件小説選』(2003)⁴²¹、曾健民・横地剛・藍博洲編『文学二二八』(2004)⁴²²等が挙げられる⁴²³。これらの選集はいずれも、最も早い時期に発表された二二八小説として、呂赫若「冬夜」(1947)⁴²⁴及び丘平田(蘇新、1907-81)「農村自衛隊」(1947)⁴²⁵を収録する。両作は共に二二八直前の1947年2月に、当時の言論界で最も強い影響力を持つ刊行物のひとつであった楊雲萍主編の文芸誌『台湾文化』に掲載された。いずれも二二八の惨状を直接反映した作品ではないが、その物語展開は台湾人の“祖国”復帰への期待が幻滅へと転じる鬱屈とした社会的気運を描き出しており、二二八発生前夜の台湾社会の様子を十分に把捉した両作は、二二八小説の濫觴と目すことが出来る。

周知のとおり、二二八では本省人エリートの多くが無差別に殺害され行方不明になったが、同時に目立ったのが言論メディアに対する甚だしい政治的弾圧であった。二二八後には民営紙最大の『民報』や左派系『人民導報』、夕刊紙最大手『大明報』などの主要新聞社をはじめ、そのほかにも新聞社八社と出版社一社が、政府批判の記事を掲載したことを

理由に警備総司令部より閉鎖や発行停止の処分を受けた⁴²⁶。台湾省行政長官公署（以下、公署と略す）の機関紙『台湾新生報』でさえも本社幹部が相次いで失踪するなど、二二八直後の台湾社会では、官民を問わず当局による激しい言論弾圧が繰り返されていた。台湾では日本統治期に総督府の監視下で言論に対する厳格な統制が敷かれたが、戦後は国民党が検閲制度の台湾への適用を見送るなど一定の言論空間が保たれていただけに⁴²⁷、こうした二二八での活字メディアに対する弾圧は、台湾社会が手に入れた言論自由に対する大きな打撃となったのである。

但し、こうして台湾の言論空間が遮断され閉塞化する中でも、一部の作家や詩人は文筆を通して、二二八やその背景に潜む社会的問題を告発しようと試みていた。楊逵は早くも二二八発生直後に台中で抗議の宣伝ビラを撒き⁴²⁸、台北での混乱が台湾全島へと拡大した翌日の3月2日には、自身が副刊主編をつとめていた『和平日報』の号外で「大捷之後」と題したオピニオンを發表し、台湾民衆の理性的な団結を強く訴えていた⁴²⁹。また、楊逵は“一読者”や“台中区時局処委会稿”の署名にて、「二・二七惨案真因—台湾省民之哀訴」（1947）⁴³⁰を書いてもいた。前者では「政府はなんと頭隠して尻隠さずで、事もあろうに〔台湾という一筆者注〕宝庫を滅茶苦茶にし、この汚れ無き土地を汚職官僚や腐敗軍人が跋扈する地に変えてしまった」⁴³¹と陳儀公署行政長官の悪徳を強く罵倒したが、掲載先の両紙はいずれもその後当局によって廃刊を強いられている。

一方、二二八の翌々月には国民党の党営紙である『中華日報』でも、二二八を主題とする小説が掲載されていた。夢周の短編小説「創傷」（1947）⁴³²は、台湾島内で發表された二二八を直接描写する小説としては、現在確認できる中で最も早い時期の作品である⁴³³。殴打される外省人の新婚夫婦と彼ら二人を匿う本省人の父子を中心に台北の騒乱が描き出され、陰惨を極めた歴史的イベントについて、作者は官製メディアという制限の枠内で可能な限り事実を描いている。もっとも「創傷」が紙面で發表された時点では、南京の蒋介石が派遣した軍隊による武力掃討はすでに終結し、農村や山間部では残党勢力を徹底的に検挙する清郷計画が実施されており、現実には作中では描かれない無差別に虐殺された本省人

犠牲者の方が大多数に上っていたのである。同作の作者については長い間不詳とされてきたが、朱雙一の研究によれば、福建省出身で“祖国”復帰直後の台湾文壇で活躍しながらも二二八後に大陸へ戻った楊夢周（1924-2011）であるという⁴³⁴。楊夢周が台湾に滞在した時期は1946年夏から二年あまりに過ぎなかったが、彼はこの期間に数多くの作品を集積的に創作していた。二二八前後の一年間でも、『中華日報』をはじめ、『台湾新生報』や『自強報』等の主要新聞を中心に70編あまりの作品を発表している⁴³⁵。楊夢周が渡台後に一貫して描いてきた陳儀政府の「政治的弊害と官僚による腐敗した統治を指弾する創作主題」⁴³⁶は二二八での動乱後も健在で、小説以外にも散文「難忘的日子！」（1947）⁴³⁷など、二二八に言及しながら台湾の政治的現状を徹底的に批判する文筆活動を展開した。

この時期にはそのほかにも、伯子「台湾島上血和恨」（1947）⁴³⁸や歐坦生「沉醉」（1947）⁴³⁹、同「鵝仔」（1948）⁴⁴⁰など、香港や上海で刊行されていた文芸誌でも二二八を直接の題材とする小説がしばしば発表されていた⁴⁴¹。伯子については依然として作者不詳であるものの、作中で活写される本省人の心理描写と頻出する台湾語の語彙などから、二二八後に離台した本省人の可能性が高いと推察され⁴⁴²、歐坦生は二二八の直前に渡台していた福建省福州出身の外省人作家・丁樹南（1923-2009）の本名である⁴⁴³。これらの作品はいずれも、物語中で陳儀政府や外省人に対して本省人が抱えた憤怨を躍如として描き出していた。

このような二二八への直接的言及、あるいはその要因である陳儀政府の悪政や省籍矛盾の実態を暴き出す主題は、日本語で創作された呉濁流『夜明け前の台湾』（1947）⁴⁴⁴や同『ポツダム科長』（1948）⁴⁴⁵、さらには『台湾新生報』に中国語訳で掲載された葉石濤「三月的媽祖」（1949）⁴⁴⁶の中でも看取できる。呉濁流や葉石濤など日本統治期から創作活動を続けてきた本省人作家が物語中で言及する二二八には、歴史的事件の告発という側面だけではなく、日本の殖民地支配から脱した本省人市民全般に見られた“祖国”に対する過大な期待の転倒さえも強く表徴されていたと言える。

だが、こうした台湾社会の不条理を告発する作家たちの創作を封殺したのが、1949年の四六事件に始まり1950年代にピークを迎える白色テロであった。白色テロでは多くの

批判的知識人が、左翼主義者や台湾独立運動家の烙印を押されて迫害を受け、後年の民主化の到来まで続く反共ファッションによる専制政治の下では、作家が自ら積極的に二二八を語り出すことは実に困難であった。前述「三月的媽祖」の作者であり、自身も白色テロで下獄した経験を持つ葉石濤は、エッセイ「談二二八文学」（1990）の中で当時を振り返り、次のように述べている。

1947年2月に発生した二二八事件及びその後十数年も長く続いた50年代白色テロの時期は、疑いなく四百年近くの長きにわたる台湾史において最も暗く犠牲の多い巨大な激変の時代だった。……残念なことに今日に至るまで、この時代を記録し反映した文学作品は極めて稀である。台湾共産党や外国人が記述した文献を除いて、直接台湾人作家が創作した文学作品は極めて限定的である。これは無論統治者が施行した四十余年の戒嚴体制が、有形無形の首かせとして創作の自由を強く束縛し制限したことがもたらした結果である。⁴⁴⁷

葉石濤の言葉は、戒嚴令下での政治的抑圧が台湾人作家の二二八をめぐる創作意識に対して、如何に深刻な影響を及ぼしたのかを如実に語っている。但し、「戒嚴体制が、有形無形の首かせ」となり、「この時代を記録し反映した文学作品」の誕生を阻み続けていた時代ではあったが、白駒『梅春娘』（1964）⁴⁴⁸ や呉濁流『無花果』（1970）⁴⁴⁹ のように二二八に言及する小説も一部では出現していたことも事実である。とりわけ作者の自伝的作品とも呼べる『無花果』は、作中で言及される二二八にまつわる歴史的事実の多くが公的資料に依拠しており、二二八発生当時の台湾での政治的・社会的状況を極めて正確に再現していた⁴⁵⁰。呉濁流は「この時期の社会はとても複雑で、若手作家はその直接的経験が無いために、その時代背景を理解するのが極めて難しく、仮に年配の作家が書かないとすれば、実際にその真相が伝わることはない」⁴⁵¹ と同作を世に問う社会的意義を示し、「〔自分で—筆者注〕見聞きした二二八事件の真相を率直に描き出そう」⁴⁵² と試みたのである。だが、

『無花果』は書籍として刊行された翌年には当局によって発禁処分を受け、その後も同作は作者の死後に編纂された『吳濁流作品集』（1977）への収録も見送られた。同作品集の編者である張良澤が「誤解を呼びかねないものは、収録しなかった」⁴⁵³と釈明したように、民主化以前の台湾社会において二二八は「全くもってまさに未だ色の褪せない恐怖」⁴⁵⁴であり、それを活字化することで被るであろう政治的圧力は、出版関係者をして十分に萎縮せしめたのである。

2. 美麗島事件以降における二二八小説

台湾の作家がこうした二二八にまつわる政治的禁忌を打破する転機となったのが、本論でしばしば言及した美麗島事件である。美麗島事件では本省人作家の王拓（1944-）や楊青矗も起訴されたが、デモ隊と当局の衝突発生から軍事法廷での裁判に至るまで一連の経過は、事件に直接は関与しなかった作家や詩人に対しても強い政治意識を覚醒させた。蕭阿勤によれば、美麗島事件で顕在化した民主主義を鼓吹し、国民党の専制独裁に強く反発する当時の文化人による政治的覚醒は、とりわけ台湾出身の郷土派作家・詩人の拠り所となっていた『台湾文芸』あるいは詩誌『笠』の同人において顕著であったという⁴⁵⁵。当時、李喬は『台湾文芸』を自身の主要な創作発表の場のひとつに選択し、1994年以降には同誌の編集長もつとめてゆくが、そうした中では彼もまた美麗島事件の影響を強く受けた作家の一人と言えた。後に李喬は、『笠』の同人である趙天儀（1935-）との対談「文学 文化 時代—詩人和小説家的対談」（文学 文化 時代—詩人と小説家の対談、1988）の中で、次のように述べている。

こんにち私は自分が何を欲しているのか、何をしたいのか、何が出来るのかがわかっています。わたしが書くのは台湾の歴史を背景とする小説であり、わたしは社会の重大事件の中に核心を見出し、大きな時代の衝突は自分の生命に衝撃を与え成熟させてくれまして、例えば中壢事件、美麗島事件が、わたしを成長させました。そうでなけ

れば、わたしは恐らくとうとう生涯にわたり生命が持つ意義の核心をつくことが出来ず、文学の核心もつくことが出来なかったことでしょう。はっきり言ってしまうと“わたしの文学とは何なのか”がわかったのです。……わたしたち作家はこんにち“政治”に直面していますが、“こんにち”という時空の特殊性には特に注目する必要がありまして、……台湾の作家は黒か白か、正義か不義かを明らかにはっきりさせる必要があります。作家がもしも未だに“政治の外に外れている”ことを望むのであれば恥ずべきことであり、文学に政治がなければ偽物であり、とくに現在の台湾作家にとってはそうなのです。⁴⁵⁶

美麗島事件が発生した際、李喬は台北近郊に蟄居し、自身の代表作となる『寒夜』三部作の執筆を急いでいたが、その一方では中壢事件や美麗島事件など 1970 年代末に連続した政治事件に直面することで、「台湾の作家は黒か白か、正義か不義かを明らかにはっきりさせる必要」を強く自覚し、「文学に政治がなければ偽物」であると言明するに至ったのである。こうして李喬は美麗島事件の後に、自身の創作を通して台湾社会が抱える政治的禁忌に対して一層果敢に挑戦してゆくが、とりわけ二二八に関連する問題については積極的に追求してきた。李喬は二二八を「台湾人の歴史の最大の痛み」⁴⁵⁷ と捉え、二二八の形象を頻繁に作中で描いてゆく。例えば、第 3 章でも言及したように、『笠』の同人を中心に創刊された『文学界』の創刊号には、李喬の短編小説「小説」が掲載されたが、同作は呉濁流『無花果』の発禁後に台湾文壇で初めて二二八を直接的に描き出した小説でもあった⁴⁵⁸。また、呉濁流文学賞特別賞の受賞作である短編小説「泰姆山記」では、1950 年代初頭に共産党の地下工作中に事故死したと伝えられる呂赫若の最期をモチーフにしながらも、二二八の際に最も残忍な制圧が繰り広げられた台湾南部の嘉義で、陳復志や潘木枝、陳澄枝ら実在した地方有力者が銃殺されてゆく姿を描き出し、読者の二二八に対する記憶を呼び戻すと同時に、二二八と白色テロの密接な繋がりを表現した。さらに、戒嚴令解除後に発表した短編小説「第一手資料」（第一次資料、1989）⁴⁵⁹ では、メタフィクションの

手法を用いて台湾住民と二二八の因縁を暴き出している。

李喬「小説」の発表後、台湾社会における民主化の進展に追随するかのよう、1980年代の台湾文壇では林雙不「黄素小編年」(1983)⁴⁶⁰、郭松棻「月印」(1984)⁴⁶¹、王拓『台北・台北!』(1985)⁴⁶²、李渝「夜琴」(1986)⁴⁶³、林深靖「西庄三結義」(1986)⁴⁶⁴、宋澤萊「抗暴的打猫市」(1987)⁴⁶⁵など、二二八に直接言及する短編小説が相次いで出現した。この時期には文芸作品以外でも、1984年3月に同年創刊されたばかりの党外人士による政論誌『前進時代』が“走出二二八事件的陰影”と題した巻頭特集を組み、1987年4月にはフォトジャーナリズム誌『人間』も“『2・28』的民衆史”と掲げた特集を掲載するなど、民間の言論メディアでも二二八への直接的な言及が目立った。民主化の展開が目覚ましく進んだとはいえ、依然として戒嚴令は有効であり、世間では林義雄宅惨殺事件や陳文成事件(1981)、江南事件(1984)など特務機関による市民への威嚇工作も頻発していたが、この時すでに台湾人作家にとって二二八とは、もはや忌憚すべき創作上の障害ではなくなりつつあった。

やがて1987年7月に戒嚴令が解除されて以降は、楊照「黯魂」(1987)⁴⁶⁶、同「煙花」(1987)⁴⁶⁷、林文義「風雪的底層」(1987)⁴⁶⁸、同「將軍之夜」(1988)⁴⁶⁹、「阿公，海漲囉！」(1988)⁴⁷⁰、葉石濤「紅鞋子」(1988)⁴⁷¹、同「夜襲」(1989)⁴⁷²、同「牆」(1989)⁴⁷³など、短編小説を中心に二二八小説が続々と発表されてゆく。戒嚴令解除後も白色テロの法的根拠とされる懲治叛乱条例は依然廃止されず、台湾社会が完全なる民主化を迎えたわけではなかったが、葉石濤のように自身が白色テロで投獄された経験を持つ作家から、二二八被害者の遺族でもある楊照(1963-)のような若手作家に至るまで、台湾人作家の多くが二二八の歴史を自身の創作を通して語り始めたのである。1989年には二二八小説の代表作を収録した「台湾文学史上最初の二二八事件に関する小説集」⁴⁷⁴として、前出『二二八台湾小説選』も刊行された。

また同時期には、二二八を主題とする長編小説の発表も相次いだ。姚嘉文『台湾七色記』(1987)⁴⁷⁵をはじめ、許振江『寡婦歲月』(1987)⁴⁷⁶、陳雷『百家春』(1988)⁴⁷⁷、東方白

『浪淘沙』(1990)⁴⁷⁸、鍾肇政『怒濤』(1993)⁴⁷⁹、廖清秀『反骨』(1993)⁴⁸⁰などが出版されたが、これらに特徴的なのは、いずれの作品でも作者が二二八を直接経験した世代に属するということである。とりわけ『怒濤』と『反骨』は、二二八をめぐる描写や国民党政権に対する政治的批判に留まらず、“祖国”復帰直後の台湾社会で中国人として生きざるを得ない、殖民地統治下の日本語教育で成長した本省人青年の心理的葛藤さえも淀みなく描き出していた。日本統治期皇民文学の代表的作家の一人である周金波(1920-96)が、かつて『怒濤』の作中人物に対して強い共感を示したように⁴⁸¹、二二八体験世代が描く二二八小説は、戦後台湾社会の中で半世紀近くにわたり抑圧され続けた本省人エリート層の心理状態を多分に代弁する作品でもあった。

一方、蕭颯『返郷箭記』(1987)⁴⁸²や陳燁『泥河』(1989)⁴⁸³、林耀徳『高砂百合』(1990)⁴⁸⁴、李昂『迷園』(1991)⁴⁸⁵など、1950年代以降に出生した作家も二二八を題材に捉える長編小説を続々と出版した。後述のように、1980年代の台湾では民主化の展開に伴い、政府関係機関や各種民間団体の調査・報告に基づいた数多くの二二八関連史料が公刊されたが、同時にアメリカや日本など海外ですでに活字化されていた記録も合法的に台湾社会へ流入し、現代台湾人の公的記憶として二二八が定着していった⁴⁸⁶。これら国内外の歴大な関連史料が、二二八に関して直接の経験を持たない次世代作家の創作に対しても、数多くの史的材料を提供したことは疑いない。但し、葉石濤が前出「談二二八文学」で述べるように、「新世代作家の多くには実際の経験がなく、創作上でぶつかる困難は大きかった」⁴⁸⁷ことも確かである。それゆえに1990年代初頭では「二二八及び白色テロの50年代の、数多くの人を感涙にむせばせる物語は依然として歴史の墳墓に埋もれたまま」⁴⁸⁸であり、「台湾文学の題材の中で、この領域は豊饒でありながらも未開の領域であった」⁴⁸⁹という指摘は否定できなかつた。

こうして1990年代に至ると、台湾社会の民主化達成と並行して、多くの作家が自身の小説中で二二八を題材に取り上げてゆく。李喬『埋冤』のほかにも、蕭麗紅『白水湖春夢』(1995)⁴⁹⁰、吳豊秋『後山日先照』(1996)⁴⁹¹、李昂『彩妝血祭』(1997)⁴⁹²、同『北港香

炉人挿」(1997)⁴⁹³、郭松棻「今夜星光燦爛」(1997)⁴⁹⁴、陳玉慧『海神家族』(2004)⁴⁹⁵、陳燁『玫瑰船長』(2007)⁴⁹⁶、施叔青『三世人』(2010)⁴⁹⁷、林央敏『菩提相思經』(2011)⁴⁹⁸など、二二八に言及する諸作品が発表された。先述のとおり、戒厳時期に最大の政治的忌避であった二二八は、現在ではすでに台湾文学における古典的題材として認められている。従来、封殺されてきた台湾住民の二二八にまつわる歴史記憶は、台湾人作家自身の創作によって再解釈され、頻繁に具現化される文学的テーマとして定着したのである。

但し、陳芳明が言うように、これら二二八小説で往々にして共通するのは、「二二八について論じようとすれば、大方ひとつの画一的パターンが出現し、つまり国民党が台湾人を大量虐殺する」⁴⁹⁹ という一方的な物語展開であったことは否定できない。この点に関しては、彭瑞金も「ひとたび二二八事件を主要な叙述背景とする小説が、台湾人の悲痛な歴史に帰すると、本省・外省〔人一筆者注〕の筋書きをなぞる小説となってしまう」⁵⁰⁰ として、二二八小説は物語中で省籍間での隔たりを過分に強調してしまう傾向を指摘する。二二八での真相を暴き出し、国民党による専制独裁の台湾現代史を批判的に描く文学作品の帰結として、物語中では「国民党が台湾人を大量虐殺する」ことがハイライトとなることは不可避とも言えるが、それでは『埋冤』ではこうした二二八小説が抱える創作上の隘路を如何にして解消しているのだろうか。以下では、ほかの二二八小説との相異点も含めて、『埋冤』の具体的な物語展開に即して考察する。

第2節 『埋冤 1947 埋冤』での二二八をめぐる歴史描写

1. 李喬と二二八

二二八をめぐる李喬の小説創作に関しては、作者個人による原体験の影響も無視できない。二二八が発生した当時、李喬は苗栗の大湖国民学校に通う生徒であったが、その際に目の当たりにした自身の父親の様子について、後年『台湾新聞報』に連載された対談記事の中で仔細に語っている⁵⁰¹。それによると、李喬の父親である李木芳は、日本統治期には台湾農民組合の大湖支部長として抵抗運動を繰り返した抗日活動家であり、日本の敗戦後

は国民党三民主義青年団の大湖地区責任者として台湾接收工作の一端を担っていた。だが、二二八で李木芳は本省人群衆による外省人への暴行を制止した際に負傷し、その数ヶ月後には暴動を教唆扇動したという誣告によって当局に連行され、桃園で危うく生き埋めにされかけてしまう。李喬本人の回想によれば、父親は一命を取り留めてから人格が急変し、二二八での不条理な体験を転機とする父親の急激な変貌の様子は、爾来自身の心の中で強く残り続けたという⁵⁰²。李喬は自らの創作人生について語った映像資料『長篇小説自剖』でも、「当時 14 歳ではあったが、わたしの父親がこのようなことに出くわしたので、わたしにも直接の経験があるということになる」⁵⁰³と語っており、早くから二二八を自分自身の“直接の経験”として意識していたのである。

ところで、周知のように 1990 年代前半の台湾社会では、国民党は積極的に二二八に関する調査を実施していた。監察院が戒嚴令解除の翌年に、二二八当時の楊亮功閩台監察使の記録による調査報告書を公開したことに始まり、1990 年 11 月には当時の李登輝総統の指示で行政院に“二二八事件特別委員会”が設置され、有識者を中心とする調査班“二二八事件研究グループ”（研究二二八事件小組）が組織された。同調査班には二二八に関する極秘档案への特権的な閲覧資格が供与され、その調査結果は 1992 年 2 月に“二二八事件研究報告”として公表されている。同時期には、台湾省文献委員会編『二二八事件文献輯録』（1991）や『同続録』（1992）、『同補録』（1994）、中央研究院近代史研究所編『二二八事件資料選輯』全六巻（1992-97）など、政府関係機関による各種関連資料の刊行も目立っていた。こうして台湾では二二八の真相は行政側の公的調査によって明らかにされていたが、但し、これら政府主導による調査や研究の成果は、統治者側の観点による歴史解釈に基づくものが多かったという点は否めなかった⁵⁰⁴。その一方で、実は民間でも戒嚴令解除前の 1980 年代より、民主化の加速と連動するように二二八再考に向けた主体的な歴史考察の気運が芽生えていたことは軽視できなかつた。1985 年 3 月、台湾人権促進会（以下、台権会と略す）会長で党外人士の江鵬堅が、立法院の場で初めて二二八に関する質問を提出し、政府による被害者に対する謝罪と賠償、二二八平和記念日の制定等を建議

した⁵⁰⁵。これを契機に翌年2月には、台北市議会の地下室にて台権会主催の座談会“省籍
與人権”が開催され、約300名の参加者が二二八に言及する議論を盛んに交わした⁵⁰⁶。ま
た、9月には台湾初の野党勢力となる民主進歩党（以下、民進党と略す）が結成されてい
るが、同党は二二八の真相解明を行動綱領に掲げていた。このような在野での動きが伏線
となり、やがて1987年2月には台北で台権会と民進党を軸とする国内外51団体の連合に
よる二二八和平日促進会（以下、和平日促進会と略す）の結成へと繋がり、これ以降は二
二八の真相解明と冤罪被害者の名誉回復、平和記念日の制定等を求めて、和平日促進会の
主催による社会運動が台湾各地で頻繁に展開されていった。彼らは座談会や講演会、追悼
集会、デモ等の活動を通して、平和・公正・正義の社会実現を目標に台湾全土で活動を拡
げていったのである。張炎憲によれば、この時に和平日促進会が進めた草の根の市民運動
は、二二八という最大の政治的禁忌を打破するために最も有効な社会的役割を果たしたと
いう⁵⁰⁷。

実はこうした和平日促進会の運動に、李喬も深く関与していたことはあまり知られてい
ない。李喬は和平日促進会の発足時からの会員であり⁵⁰⁸、同会の発足と同時に台湾全島で
展開された社会運動や講演活動でも精力的に活動していた⁵⁰⁹。苗栗や桃園など諸会場の演
説では登壇する度に、「李喬は二二八当時の状況に対して、現場の聴衆に向けて彼自身が
長年蒐集し考証してきた資料を公開し、〔二二八が一筆者注〕おおよそ如何にして発生し
たのか、及び事後如何に波及していったのか、ひいては当日の死傷者の状況に至るまで」⁵¹⁰
詳細に明かしていったのである。演説中では、二二八が発生より四十年も経過したにもか
かわらず、「それは依然として人々の記憶の奥底に留まり続け、この島の省籍の異なる人
民が平和に過ごすのに大きな障害となっている」⁵¹¹と喝破し、歴史を不確かなまま忘却す
るのではなく、政府が自ら「当時の事実や真相を公開し、当時の事件に対して、はっきり
と責任を負わなくてはならない」⁵¹²と説いていた。さらに李喬は、戒厳令解除の前夜に台
権会が主催した“二二八事件学術座談会”でも、二二八発生の経緯と台湾社会への影響に
ついて講演していた。同講演では二二八にまつわる歴史の真相を明らかにすることにより、

「〔二二八後に無念さを抱えたまま生きてきた一筆者〕あの世代の台湾人の身の潔白を証明する」⁵³ 必要性を強く訴えたが、それは李喬が二二八に関して調査と考証を繰り返す重要な動機のひとつとも言えた。

このように李喬は、和平日促進会や台権会を中心とする社会運動にも盛んに取り組み、長年の独自取材で知り得た二二八関連の事実を市民に対して明かしていった。1991年1月には、和平日促進会が前述の政府主導による調査班の結成に対抗して、“二二八民間研究グループ”（二二八民間研究小組）を独自に組織したが、そこでも李喬は二二八の調査活動に加わっている。同年末、和平日促進会はその調査結果を公開するために、台湾では初めてとなる二二八を議題に掲げた学術シンポジウム“二二八学術研討会”を開催したが、そこでは李喬も張炎憲や呉密察、李筱峰ら台湾史研究者と並び調査報告を行った。二二八の犠牲者数に関しては今日でも確定しておらず、一般的には18,000人から28,000人の間と伝えられるが、この人数は前出の政府報告書である“二二八事件研究報告”で人口学者の陳寛政が公表した数値に基づく結果である。李喬は調査活動の中で、陳報告とは別に統計学を用いた独自調査を実施し、二二八全体の死者数を19,000人強と算出している⁵⁴。こうして李喬は二二八の真相を現代台湾社会に伝えるべく、和平日促進会や台権会での活動を通じて歴史的事実の全像を明らかにしようと努めたが、これら二二八関連の調査結果は『埋冤』の題材の一端にもなっていたのである。

2. 二二八の写実的描写と戦後台湾社会への通底

前述のように、『埋冤』は上下二巻からなる大冊であり、その梗概は次のとおりである。

上巻では、二二八勃発の様子と直後の混乱した台湾社会の諸相が実録の如く描写される。物語では台北の大稻埕で発生した二二八の経緯を明らかにしながら、その後台湾各地で自発的に発生した本省人による民衆蜂起の波及を辿ると同時に、当局の武装鎮圧で市民が次々と逮捕、連行、殺害されてゆく場景が繰り返されてゆく。作中では林茂生や施江南、陳焯、阮朝日、張七郎など、二二八で犠牲となった実在の台湾人エリートが惨殺されてゆく

様子が描出される。その写実的な物語展開は「台湾での大虐殺の歴史経験を再現する」⁵¹⁵ 内容であり、すでに多くの先行研究がたびたび指摘してきたように、二二八「当時の惨状を再現し、読者に『歴史の局面を再び想起する』よう」⁵¹⁶ 迫る描き方であった。物語の舞台は台北に始まり、基隆、宜蘭、台中、彰化、嘉義、台南、高雄、屏東、花蓮など台湾全域に及ぶが、これは二二八という「台湾四百年の歴史の中で未曾有の凄惨な事件」（臺灣四百年史中所未有的慘絕事件）が、台北市街での専売局職員による闇タバコ売りの寡婦暴行事件に端を発した騒乱に留まらず、その後に台湾全域にまで拡大した本省人主体の民衆蜂起、並びに各地で市民を武装制圧した国民党の政府軍による凄惨な軍事行動さえも作中に内包するためである。

下巻では、二二八以降白色テロが横行した 1950 年代初頭までを中心に、林志天と葉貞子という二人の本省人男女の若者を主人公にして、歴史的事実を下敷きとする虚構の物語が展開される。作中では林志天が台湾中部の民兵組織・二七部隊の指導者となり、二二八での抵抗運動に加わるが、同部隊は台湾共産党創始者の一人である謝雪紅を総指揮官に、台中師範学校や台中商業学校の学生らを中心に結成された実在の武装組織である⁵¹⁷。宋澤萊をはじめ、すでに多くの論者が指摘しているように、林志天のモデルが二七部隊の部隊長であった鍾逸人（1921-）であることは間違いないだろう⁵¹⁸。実際に鍾逸人がそうであったように、『埋冤』でも蒋介石が南京から追加派遣した軍師団による武力掃討が展開されると、林志天は二七部隊の壊滅と同時に敗走し、台北近郊の汐止で逮捕される。その後は林志天が思想犯として台湾島内や離島など各地の政治犯収容所を転々としながら、「偉大なる中華祖国の監獄の中で怨み嘆き、憤怒し、涙を流す」（卻坐在偉大的中華祖國的監牢裏怨嘆、憤怒、落淚）姿が描かれてゆくのであった。一方、台湾大学の医学生である葉貞子は学生団体の幹部として、台北の中山堂を拠点に二二八に対する抗議活動を起す。史実として、旧台北公会堂である中山堂は、二二八の事後処理を担う“二二八事件処理委員会”の活動拠点であり、そこでは台湾大学や省立師範学院、延平学院を中心とする学生らも集い、政府に対する抗議デモを繰り返していた。だが、『埋冤』で葉貞子は中山堂が制

圧された際に軍兵にレイプされ、「腹の中の来歴が不明の、だが状況と出自が推測できる孽子」（肚子裏來路不明，但也可以猜測情況與來源的孽種）を抱えたことに絶望し、その後は人目を憚るように一人で台北を去り、花蓮の僻地で教員となる⁵¹⁹。

このように『埋冤』は、李喬自身が同作「後記」でも「わたしは“二二八の全景を呈示し、その意義を自由に〔人々のあいだで共有一筆者注〕させること”を生涯の天職とした」⁵²⁰と特に強調しているように、二二八の全貌を描き出すことを最大の目的としていた。こうした『埋冤』での二二八をめぐる描写について、陳芳明は次のように論評している。

李喬のこの歴史小説は、戒嚴令解除後の知識人の心情を実に良く反映している。〔歴史的一筆者注〕記憶に直面する際、彼は過去の権威体制下での歴史教育とはっきり異なる道を選び、一度は政治的禁忌と見なされた二二八事件を暴き出し、物語の叙述を通して、戒嚴体制の統治者に対して徹底的な批判を加えている。⁵²¹

『埋冤』では「二二八事件を暴き出し、物語の叙述を通して、戒嚴体制の統治者に対して徹底的な批判を加えている」と同時に、作中では「国民党政権に対する離叛と抵抗の態度」⁵²²が随所に見られる。例えば、周知の事実ではあるが、二二八発生の当夜に専売局職員の威嚇射撃で犠牲者が発生し、激怒した台北市民は嚴罰を求めて警察署に押し寄せ、その翌日には抗議のデモ隊が大挙して公署を包囲した。公署庁舎前での殺気立った現場の様子は、『埋冤』でも鮮やかに描出されている。物語の中で「殺人犯を出せ！」（交出兇手來！）と叫ぶ群衆の怒号には、「陳儀長官は正義を示せ！」（陳儀長官還我公道來！）、「専売局の独占制度を廃止しろ！」（廢除專賣獨佔制度！）と国民党統治に対する背反と反抗の姿勢が入り交じる。やがて市民による抗議の声は、「台湾人は立ち上がれ、貪官汚吏を追い出せ！」（臺灣人站起來！）、「台湾人は立ち上がれ、故郷と財産を守れ！」（臺灣人起來保衛家鄉財產！）と省籍をめぐるエスニシティの差異に訴えられ、外省人に対する敵意と憎悪が露わにされてゆく。こうした状況は、林志天の視点からも次のように印象的に描かれて

いた。

林志天はふと自分の内心を意識した——いや、体さえも不断に膨張して拡張し、上昇し、ついには自分と目の前にいるすべての群衆と一体となり、一心同体になって前へ突進した。激しい怒りを爆発させ、正義を要求し、台湾人の尊厳を求めたのである。⁵²³

このとき庁舎前にみなぎるのは「台湾人の尊厳」を求めて叫ぶ、極度に興奮した民衆の「激しい怒り」であった。『埋冤』では緊迫した現場の状況を描くと同時に、抗議する群衆と一体化してゆく林志天の内心の変化を示すことで、自身の尊厳を要求し、国民党統治に対して徹底的に抵抗しようとする台湾人の反抗精神を強く印象付けていたと言える。本章の第1節で述べたとおり、民主化が急展開する1980年代に至るまで、民衆に対する圧政の現実を描出し指弾する文学作品が台湾社会で流通することは皆無であったため、こうした展開を見せる『埋冤』の物語は大変新奇な趣向であった。さらに同作は、1980年代以降に台湾文壇で登場する各種の二二八小説と比較しても独自性を有していた。陳建忠は『埋冤』と他作品を比較して、次のような差異を指摘している。

『埋冤』は“撮影”に近い方法でもって、リアリズムの技法に従い、象徴主義の描き方ではなく（呂赫若「冬夜」、葉石濤「三月的媽祖」、吳濁流「ポツダム科長」と対照できる）、あるいは専ら個人や家族の苦難について書くというわけでもなく（林雙不「黄素小編年」あるいは鍾肇政『怒濤』と対照できる）、二二八という歴史における受難の族群を歴史の主体に仕立て上げたまさに最初の小説とすることができよう。⁵²⁴

とりわけ上巻では、上述のとおり月日の進展に従って移り変わる本省人による蜂起の様子と当局が進める鎮圧の手順を克明に解き明す「リアリズムの技法」が目立っていた。それは相対的には、二二八前夜の様子や事件直後の混乱を象徴的に描き出す呂赫若「冬夜」

や呉濁流「ポツダム科長」、葉石濤「三月的媽祖」とは異なるものだった。また、個人や家族の受難の様子に焦点を当てる林雙不「黄素小編年」や鍾肇政『怒濤』とも別様であり、『埋冤』は本省人という受難の族群を歴史の中心に据え置いて写實的に描き出す最初の小説と言える。もともと本章の第1節でも論じたように、二二八を台湾現代史の題材のひとつに捉えた長編小説には、姚嘉文『台湾七色記』や東方白『浪淘沙』等の先行作品が存在するが、『浪淘沙』では二二八に関して挿話的な描写に留まり、後述のように『埋冤』で特徴的な二二八以降白色テロへと続く台湾社会の閉塞感や歴史的連続性に対する深い言及は見られない。また、元民進党主席でもある姚嘉文（1938-）の『台湾七色記』は、「文中はあちこちが粗雑で稚拙、明らかに美学における“技術上の誤り”のある段落が見られ、さらに至るところで読者がテキストに向かおうとする読書欲を阻んでいる」⁵²⁵と楊照が酷評したように、多くの読者の共感を呼ぶ文学作品ではなかった⁵²⁶。『埋冤』では、二二八を描く時代設定は特別に目新しいとは言えなかったが、族群の歴史記憶を再現する写實的な物語展開は斬新であり、それゆえに「全体を二二八事件に焦点を合わせて描いた歴史小説」として、出版直後より大いに注目を集めたのである。

このように『埋冤』では、上巻を中心に二二八の歴史的事実を徹底的に洗い出してゆくのだが、但し同作は、二二八を実録の如く描写するに留まらなかったことも着目したい。すでに述べたとおり、下巻では林志天と葉貞子が自由を束縛され希望を剥奪されながらも生きる二二八以後の時代情況さえも描いてゆく。こうした下巻での展開について、李永熾は次のように指摘している。

林志天と葉貞子はそれぞれ台湾のグラーク〔旧ソ連の強制労働収容所のこと一筆者〕としての異なる面貌を呈示している。……李喬が描写しようとするこの種の監獄の内外に通底する強固なグラークとは、国民党の特務政治の形態と似通っている。要するに、林志天は囚われの状態を象徴しているのだ。葉貞子が象徴するのは“自発的に囚われの身となる”状態であるが、これは外側の圧力による強制に起因し、一歩進んで

外部からの力を自分で内部に取り込み、自身の強迫的な価値基準を成しているということであり、……⁵²⁷

李永熾は、林志天と葉貞子の二人が自由や希望を喪失しながらも二二八以後を生き抜く姿勢に共感し、それを恰も旧ソ連の強制収容所であるグラークに生きる人々に擬え、国民党による権威主義的体制下で抑圧され続けた台湾住民の姿と重ね合わせている。事実、二二八後の白色テロ下では獄中の政治犯だけではなく、一般市民もまた政治的制約の中での不自由な暮らしを強いられてきた。その点から見れば、アウシュビッツ収容所を描いたヴィクトール・フランクル (Viktor Emil Frankl, 1905-97) の『夜と霧』(1946)、旧ソ連グラークの実態を告発するアレクサンドル・ソルジェニーツィン (Alexandr Isaevich Solzhenitsyn, 1918-2008) の『収容所群島』(1973-75) と同様に、『埋冤』でも政治犯収容所の内外で束縛され続ける民衆の鬱屈とした心理が描き出されていると言えた。このように『埋冤』では、二二八発生直後の様子を実写するに留まらず、青年知識人の爾後の生き方を追うと同時に、二二八後台湾社会の歴史的軌道を描いてゆく。かつて李喬が「“二二八事件”及びその後十年の“白色テロ”は台湾最大の苦難の歴史である」⁵²⁸と声明したように、『埋冤』ではこうした「台湾最大の苦難の歴史」を繋ぎ合わせる時代の連続性が注視されていたのであった。

第3節 孤児意識からの脱却とその超克

1. 台湾人と孤児意識

但し、『埋冤』はこうした戦後台湾社会においての二二八や白色テロ下での社会的・時代的情況を描出しただけではない。注目すべきは、先述のように後年に李喬が『埋冤』の「上巻は下巻のための壮大な序文である」と言及し、虚構の物語が展開される下巻こそが、同作の中心的位置付けであることを強調している点である。

『埋冤』では、林志天と葉貞子の形象に二二八から白色テロの時代に生きる台湾人の姿

が象徴されていた。李喬は自身の創作理念について著した『小説入門』で、作中で登場する人物は「主題の現象のための演出者」⁵²⁹であり、作者による「あらゆる“小説現象”の中心」⁵³⁰であると位置付けている。これは李喬作品においては、各々の作中で現れる登場人物の表徴が非常に重要であることを明示したものと言えよう。李喬の創作では台湾現代史に取材し歴史的事実と迫ると同時に、物語中での登場人物の形象を通じて作者自身の歴史観を如何に呈示するのか、という点も本質的問題であったのだ。

『埋冤』巻末の「後記」にも記述されているように、同作は台湾現代史の「史実に合致するように」⁵³¹、物語全体で「歴史的情景の真実味を損なわない」⁵³²よう創作されており、また林志天や葉貞子を始めとする多くの登場人物にはそれぞれ実在するモデルがいた。だが、こうした主要人物の中でも、唯一作中では完全なる虚構上の人物である葉浦実の描き方は無視できない。浦実は葉貞子の私生児であり、二二八で暴行を受けた彼女が、その後に精神を病みながら逃避先の花蓮で出産した子供であった。着目したいのは、浦実と命名された息子の名前が日本語の“怨み”を由縁とすることが、以下のように物語中で何度も強調されることである。

時間は慌ただしく過ぎ、子供はすでに生まれてからひと月が過ぎた。法律を遵守する律儀な考えが彼女〔葉貞子―筆者注〕に戸籍を届けずにはいられなくさせた。彼女は家族の反対を気にかけず、“父親不詳”の方法で戸籍を届けた。子供は当然ながら母親の姓と同じで、名前も彼女自身が付け、“浦実”と呼んだ。湖や海辺の入り江のあたりを“浦”と言う。日本の浦島太郎は化け物を討伐した。花蓮港旧駅舎一帯の、花崗山の地は、言い伝えによると上古の時代には干潟であったという。“実”とは“果実”であり正真正銘の大地を指し、“浦実”の深意は難しくない、さらに重要なことは“浦実”の日本語での発音が“うらみ”であることで、“うらみ”とは怨みであり、つまり憎しみなのである。⁵³³

母親の葉貞子による命名は日本語の“うらみ”を由来としたが、こうした設定はおよそ半世紀の被殖民化を強いられた台湾人が、念願の“祖国”に復帰した直後の台湾社会でも日本語の影響から完全には逸出できないという、ポストコロニアルな言語状況を強く意識させる。さらに『埋冤』では、「Khen 卡 liose 敗」〔喧嘩両成敗—筆者注〕や「it 鬥 lio 但——得宜！」〔一刀両断で良い！—筆者注〕など、漢字の音で日本語の意味を代替させた作者独自の表現も頻出する。李喬自身はこうした叙述表現を“漢音日語”と呼び、同作での特色のひとつとしている⁵³⁴。この他にも、「昨日，北門之戰，一學生腹部中彈——下腹被炸成大洞，可能可訥丸嗒！」〔昨日、北門の戦いで、一人の学生が腹部に被弾した——下腹に大きな穴が開いたが、恐らくこの弾だ！—筆者注〕あるいは「振作唏咯！郭君！」〔しっかりしろ！郭くん！—筆者注〕など、日本語を混ぜた会話表現も少なくない。物語中では登場人物の会話文は言うまでも無く、叙述文にも北京語、台湾語、客家語、日本語など複数の言語が混ざり合いポリフォニーと化している。李喬自身も「1947年の台湾では、当地の人〔台湾人—筆者注〕はほとんどが当地の言葉と日本語をまぜこぜに使っており、それゆえ小説の中では〔多言語が—筆者注〕非常に“氾濫”した傾向にある」⁵³⁵と述べるように、『埋冤』の描写はこうした戦後直後の台湾社会での多言語が混在したハイブリッドな言語状況を十分に作品化している。

そして、作中で表現される戦後台湾のポストコロニアルな諸相は、登場人物の会話表現だけに限定されるわけではない。前出の自伝的評論『我的心靈簡史』の中に見られる次の一段は、その点に関して大きな示唆を与えてくれる。

『埋冤』の一作では“浦実”という人物を作り出したことが、全体を通して一番の見どころである。“浦実”は、台湾人女性が中国人兵士に強姦されて産み落とした孽子であり、恨みの産物だが、しかし台湾人女性の子供である。……台湾人の多くは“雑種”ではないだろうか？台湾人はずっと“憎しみと共生してきた”のではなかろうか？台湾人、台湾の雑種性は、どうなるのだろうか？私は浦実の成長、行動でもって答え

を出した。実のところ、浦実とは李喬の“代弁者”なのである。⁵³⁶

このように『埋冤』では、李喬が自身の信条を「浦実の成長、行動」に仮託し、浦実を「李喬の“代弁者”」として演じさせようとしている点は決して看過できないだろう。『埋冤』の物語全体を通じて、浦実は苦悩の表徴として描かれてゆく。母親の葉貞子は、花蓮の寒村に逃避後も「まさに浦実というこの不幸の雑種のために苦悩して止まない」（正爲了浦實這個不幸的雜種而苦惱不已）のであり、浦実は「雑種の罪業」（雑種的罪孽）という強烈に否定的な言葉でもって喩えられる。そして息子が周囲から嘲笑される際の“私生児、雑種”という言葉が少しでも耳にした途端、彼女は頭全体に火花が飛び散ったようで、全身がかすかに身震いし」（乍聽「私生子，雜種」這個字眼時，伊仍然滿腦海金星亂迸，全身微微顫抖）、「浦実と共に生き続けて現世という火宅で苦しまなければならない」（與浦實必得繼續爲活下去而煎熬於火宅人間）ことに悩むのであった。

父親不在の「私生児、雑種」と嘲罵される浦実の描写は、まさに日本の殖民地期以来、台湾社会が正対してきた“孤児”意識を隱喩的に描くものと言えまいか。かつて吳濁流『アジアの孤児』（原題『胡志明』、1946）でも描かれたように、台湾人は半世紀に及ぶ日本の殖民地統治下で“祖国”としての大陸からは切り捨てられ、一視同仁という言葉とは裏腹に日本人からも差別され続けた。そして日本帝国主義の對外膨張に伴い、大陸でも同胞として受け入れられず、台湾民衆は孤児としての自意識を強いられてきた。実はこうした台湾人の孤児意識は、皮肉にも“祖国”復歸後の台湾社会でも形を変えて反復する。二二八はその代表的一例であり、国民党の統治に対する失望感から祖国を認容できない台湾人は、それを境に再び孤児意識を強めてゆく。例えば、二二八直後に発表された張殊明「台湾，像是無告的孤児！」（1947）⁵³⁷でも、当時の台湾人が孤児意識に苛まれる様子が象徴的に表れている。「台湾、まるで何も訴えることのできない孤児のよう、／その不良な継母に棄てられて、／五十年の凶惡獐猛な悪魔のような名君／虐待、横暴と狂うような叫び声、／悲惨な奴隸生活、／涙も無ければ、笑いも無い！」⁵³⁸という印象的な冒頭で始まるこの

詩は、植民地支配から脱出し祖国への復帰を歓迎しながらも、国民党統治の現実を目の当たりにして失望へと転化せざるを得ない台湾人の複雑な心情を痛切に表現していたと言える。こうした戦後台湾社会での孤児意識は、二二八に留まらず、その後も国連での中国代表権の交替を始め、国際機関でのメンバーシップ喪失から米日欧諸国との度重なる断交等、外交的敗北に起因する 1970 年代以降の国際的孤立を通して、トラウマのように繰り返される。このように台湾人が近代以降絶えず自覚し続けてきた孤児意識に関して、李喬は「「二二八」在台湾人精神史的意義」（“二二八”の台湾人精神史における意義、1998）の中で、次のように述べている。

台湾人の精神状態は、“孤児意識”と“被害妄想”である。台湾人の“孤児意識”は 1895 年に日本への台湾割譲より形成され、1945 年日本人の台湾からの撤退は、孤児としての苦痛が徐々に治癒してゆく機会であったはずだが、誰が知ろうか、あろうことか 1947 年の惨事が傷口をますます悪化させる劇薬となった。もともと孤児は成長すると新しく生まれ変わり主体——自身の主へとなるはずである。不幸にも重い傷口は癒えず、加えて後に続く迫害が、我々を“成長できない”ようにさせ、自我の肯定ができず、独立独歩前進することさえもままならなくさせたのだ。⁵³⁹

李喬によれば、植民地統治の開始以来、形成されてきた「台湾人の“孤児意識”」は「1947 年の惨事」を経過して「ますます悪化」したという。この「1947 年の惨事」が、二二八を指すことは言を俟たないだろう。李喬は現代台湾人の精神に蔓延する“孤児意識”の元凶を二二八にも求め、その後に続く白色テロでの政治的迫害が台湾人であるという自我に対する首肯を長らく阻害し続けた点を論じている。実はこうした台湾人と孤児意識の相関関係に関して、李喬は『埋冤』を創作し発表する以前より何度も提起し続けていた。例えば、戒厳令が解除された翌年に発表した社会批評集『台湾人的醜陋面』（台湾人の醜悪さ、1988）では、歴史に翻弄された「不幸な〔歴史的―筆者〕過程が台湾人の孤児意識を孕み、

この孤児意識はとうとう台湾人の不幸と醜悪という要因のひとつになった」⁵⁴⁰として、こうした「孤児意識の様々な動態が種々の醜悪な面々となって隆盛している」⁵⁴¹と現代台湾社会を厳しく断罪している。このように近代以来連綿と続く台湾人の孤児意識に対して、李喬は常に批判的見解を呈してきたのである。

但し、一方で李喬は、こうして過去百年にわたり台湾社会で瀰漫し続ける孤児意識を指弾すると同時に、孤児意識からの脱却を常に追求してきたことも忘れてはなるまい。李喬は1984年に渡米した際、シカゴ台湾同郷会会員の前で「従文学作品看台湾人的形象」（文学作品より台湾人の形象を考察す）と題する講演を行っていた。同講演では頼和や呂赫若、楊逵らの代表作を参照しながら、作中で描き出される台湾人の形象について論じたが、その中では『アジアの孤児』にも言及し、孤児意識の象徴として見なされることの多い同作の主人公である胡太明（胡志明）にも触れていた。だが、意外にも、ここで李喬は胡太明の表象について論及した際に、孤児意識に束縛されることのない物語解釈の可能性を提示したのである。李喬は、物語の結末で孤児意識に苛まれた胡太明は発狂するが、発狂は彼自身に唯一残された行く末ではなく、「がっくりと気落ちして戻ってきた後で、自分が見限った台湾の索漠たる一面の景色を目の前にした後で——再度奮い立つ」⁵⁴²可能性さえも秘めていると言い、講演の最後を次のように結んでいた。

我々はそれぞれが努力しなければいけません。台湾人の歴史的なあのような性格——意気地なしで、依頼心が強く、卑下しやすく、被害妄想たっぷりの孤児意識を捨てさなくてはならないのです⁵⁴³

我々は「孤児意識を捨てさなくてはならない」と、李喬は台湾人の精神を覆う孤児意識からの脱却を強く提言するが、実はこれは彼がその後に何度も繰り返す言説でもあった。李喬は前出「「二二八」在台湾人精神史的意義」でも、次のように同様の見解を呈している。

まず二二八の史実を清算し、一步進んで“自分たちの国家がない”ということから来る甚大な痛みを理解しなければならない。それは外来統治がもたらした必然的帰結である。しかし痛みが癒えた後には、立ち上がるしかなく、不撓不屈の意志で独立した自主国家の将来を築いてゆかなければならない。……それは“孤児”意識を刷新して生まれ変わる機会でもある。このように、“二二八”は台湾人の精神史においてポジティブな意味を持つのだ。⁵⁴⁴

孤児意識からの脱却を促す李喬の言説が、台湾人の中で強まるナショナル・アイデンティティに共鳴していることは明らかである。1980年代に台湾社会で表面化した“台湾結／中国結”のイデオロギー対立を経て、後述のように1990年代は“台湾人意識”が急速に国民の間で台頭してゆく時期であった。こうした時期と重なるかのように、李喬の言説でも孤児意識に対する言及が何度も繰り返されたことは、決して偶然ではないだろう。前述の通り、1980年代末には台湾各地で和平日促進会を中心とする社会運動が頻繁に開催され、李喬もそれらの運動には精力的に取り組んできた。李喬は二二八に関する史的事実の詳細を台湾社会に呈示し続けながら、こうして台湾人自身が自らの手で主体的に過去の忌まわしい歴史の記憶を清算してゆく過程を「“孤児”意識を刷新して生まれ変わる機会」として捉えていたのではなかろうか。『埋冤』とは、1980年代以降に李喬がこうした言説を繰り返してゆく中で創作し、発表された作品であり、それゆえ孤児意識からの脱却とその超克を促す論理は、同作中でも物語の中核と成り得たのである。孤児意識の克服を強く説く「「二二八」在台湾人精神史的意義」の一文が、後に『埋冤』（第三版）の代序として収録された事実は、その傍証とも言えるだろう。

では、実際にそうした李喬の言説は、『埋冤』の物語でどのように表現されているのだろうか。それが端的に表れているのが、同作の大団円である。物語の終盤で15歳に成長した浦実は、父親不在の家庭環境に育った自身の出自を認め、母親の葉貞子に対しても過

去に起きた一切の不運な出来事を受け容れるように促す。

「僕が言うのは、苦悩や苦痛は、お母さん一人が陰でひっそりと背負うべきではないということ、僕はお母さんの唯一の子供だから、僕だって……」声が沈み、感情が高ぶってきた。⁵⁴⁵

物語中で浦実はお母さんに対して、自身で抱える「苦悩や苦痛」を一人で背負い続けるべきではないと言う。そして浦実は、「僕は知っているんだ、僕は私生児だって、僕は雑種だってことを」（我知道、我是私生子、我是雜種）と告げ、母親の過去と自身の出自に関する歴史的事実に正対しようとする勇気を見せる。これまで見てきたように、お母さんは常に「不幸の雑種」（不幸的雜種）としての浦実を産んだことに引け目を感じてきた。そうした他人には明かすことのできない内心の矛盾を衝かれたことで、お母さんは夢に魘された金縛りのような衝撃を受けるのだが、一方で、浦実自身は平静で動じる気配を全く見せない。

「そうだよ、僕は雑種なんだよ。でも、何の関係があるっていうの？僕は僕、そうでしょ？僕は“父親不詳”だけど、だから何だっていうの？僕はもう建国中学に合格したんだよ……」⁵⁴⁶

こうした浦実の台詞からは、もはや自身の過去に対する自虐的な意識は感じられない。花蓮の僻邑から台湾随一の進学校へ入学を決めた浦実が、母親と共に過去を直視しながら前へ踏み出す決意を固めるところで、『埋冤』の物語は完結する。そうした中での彼らの自意識の変化は、物語結末で叙述される次のような描写にも表徴されていると言えよう。

夜は過ぎた。きっと夜明け前に違いないだろう？空の光はすべて消えていて、辺りは

完全に漆黒の一面だった。だが、次の瞬間、東の空に一筋の太陽の光が輝いた。⁵⁴⁷

葉貞子と浦実の母子二人が過去を正視して前進しようとする意識は、夜明け前に差し込む「一筋の太陽の光」という表現で喩えられる。李喬は前出『長篇小説自剖』でも、「実際のところ、現世での怨嗟や宿怨の呪いから解き放たれることは簡単ではない」⁵⁴⁸としながらも、「しかし歴史は忘れてはならず、歴史は清算され、清算され解消されてから、前に進まなくてはならない」⁵⁴⁹、「人は前に向かって歩むことができる。これがこの本『埋冤』—筆者注』の結末で表現しようとしたテーマである」⁵⁵⁰と述べている。即ち、これこそが『埋冤』の中心的主題なのである。

浦実が自らを「雑種」と認め、母親には罪咎のないことを告げて気概を示す様子は、台湾人が二二八で深刻化した孤児意識を超克し、前進する姿と重なり合う。先述のとおり、従来の論考では作中での国民党による殺戮の描写の程度に議論が集中してきた。だが、浦実をめぐる描出も看過し得ないことは、物語の結末が「埋冤埋冤、心の中の陰影は、1947年に葬り去った。“埋冤”は動き出し、再び出発し、健康的で、幸福な未来を創るのだ！」

（埋冤埋冤，心裡の陰影，就埋藏在一九四七；「埋冤」起航，重新出發，創造健康，幸福前程！）という一文で結ばれている点からも十分に窺える。“埋冤”とは、恨み言を並べるといふ語意以外にも、台湾語では“埋冤”と“台湾”の読み方が掛詞にもなっており⁵⁵¹、こうした修辞からも物語の展開とその結末が台湾の将来に向けての祈願になっていることが読み取れよう。このように『埋冤』は、上巻を中心に写実的な描写を通して政治的禁忌とされてきた二二八の歴史と真相を読者に呈示する一方で、同時に下巻では、浦実を中心とする虚構の物語を展開することで、長年にわたり台湾人の精神的苦痛とされてきた孤児意識からの脱却とその超克を説き、台湾人自身の再生を期する物語を呈示していたのである。

2. 1990年代前半の台湾社会と族群の融和

一方では、こうして李喬が「台湾人、台湾の雑種性」⁵⁵²を肯定的に受け止め、浦実の表象を通して自らの信念を呈示したことは、1990年代前半での族群問題をめぐる台湾の社会的気運とも関係するかのようである。台湾では戒嚴令解除後、1991年に過去四十年以上継続した動員戡乱時期臨時條款の撤廃が宣言されたことで、事実上ひとつの中国という政治的虚構が終焉し、社会全般で台湾／中国の対比構造が現前化した。同年末には万年議員と揶揄されてきた国民大会代表の退任に伴う全面改選が初めて実施され、翌年末の立法委員全面改選でも本省人議員の当選比率が与野党を通じて定員の八割を上回るなど⁵⁵³、名実共に台湾人による台湾人のための政治が行われることに対して、市民の期待は大きく膨らんだ。これにより台湾の政治的民主化は一気に加速し、1994年には第三次憲法修正に伴い次期総統選での直接選挙の実施が決定され、1996年の民選総統の誕生により民主化が着実に遂行されていった⁵⁵⁴。こうした政治的民主化の進展は、台湾民衆のナショナル・アイデンティティにも少なからず影響を及ぼし、1990年代を通して“台湾人意識”が持続的に伸張する一方で、逆に“中国人意識”の減退は顕著であった⁵⁵⁵。

若林正文によれば、1990年代に事実上すでに中華人民共和国とは異なる政治体をなしている台湾をひとつのネーションとして、あるいはひとつの全体社会として想像するということは、言い換えれば、台湾社会をひとつの多元族群社会として、あるいはひとつの多元文化社会として想像することに他ならなかったという⁵⁵⁶。この時期には政治的民主化の展開に従うように、それまでマイノリティとして抑圧されてきた各種族群の自己意識も強まり、台湾社会の多方面で自らの権利回復を求める声が湧き起こっていた。原住民族による“正名運動”（原住民正名運動）や“我に土地を還せ運動”（還我土地運動）、客家人の“我に客家語を還せ運動”（還我母語運動）などはその代表的事例であり、従来の省籍矛盾の問題とは別の角度で議論すべき族群問題が台湾社会で顕現し始めたことの証左でもあった。実際、1990年代の台湾では、本来は人類学者や社会学者が学界で原住民族の各族を指す際に用いた“族群”という言葉が急速に市民権を持ち始め、それは台湾の社会構造

に言及する際の中心的用語として使われ出していた⁵⁵⁷。但し、その反面、このような台湾社会の多族群化は、社会的・文化的側面では多元化した族群間で相互関係の調整が実施されていったが、政治的側面では市民の手に開放された民主選挙における族群政治に代表されるように、族群の意識そのものが住民間での摩擦の要因にもなっていた⁵⁵⁸。

実は、李喬はこうして 1990 年代に表面化してゆく多元族群現象がもたらす台湾社会の亀裂に対して、非常に深く憂慮していた。前出『台湾人的醜陋面』では、李喬は来たるべき民主化の達成に向けた時代的進展を看取しつつも、族群間で生じる甚大な社会的軋轢に関して次のように指摘していた。

本当のところを言えば、今日及び未来の歳月で、台湾人が——閩南、客家、原住民、ひいては自ら台湾人であることを望む各省出身者〔外省人—筆者注〕等にかかわらず——仮に再び歴史の覆轍を踏み、分類械闘、あるいは省籍間で仇敵視するのであれば、その時は醜悪で卑しいばかりでは済まないだろう。もしも虎視眈々としている者が“平定”を口実に“出撃し侵略する”ことを許すのであれば、その時にはこの世代の台湾人は歴史の罪人となり、百代の子孫の幸福を滅するだろう！わたしたちが目にするのは、1：口を開く度に“野蛮人”と言う人が未だにいるため、原住民も平地社会に入ることを心の底から懷疑していること、2：客家人はいつも福佬ショービニズムによる抑圧を感じており、渋々“弱小”の現実に甘んじていること、3：福佬人は心置きなく何ものも眼中になく傲慢であること、4：“野心家”や“急進派”が秋波を送りながらも冷ややかな目で“茶番”が続く様子を眺めていること——こうした形勢やこのような状況では、誰が心を痛め頭を悩まさずにいられようか、誰が心配で居ても立っても居られないでいられようか？⁵⁵⁹

李喬は台湾社会で歴史的に連綿と続いてきた閩客情結の如くエスニックな対立を念頭に置き、四大族群が「歴史の覆轍を踏み、分類械闘、あるいは省籍間で仇敵視する」のであ

れば、「歴史の罪人となり、百代の子孫の幸福を滅するだろう」と強く警告している。そして、現実に散見される平地住民による原住民族への無意識のうちの蔑視、福佬人と客家人の日常的なわだかまり、福佬人やその文化が台湾的なるものを代表するという福佬ショービニズムなどを指摘しながら、台湾住民同士での確執の解消と族群の融和を期して、同書では次のように続けるのであった。

要するに、今後台湾社会が調和するかどうかは、各族群間での関係如何に、大きくかかっている。すべての台湾の命脈と前途は、もとより国際的な諸々の影響を受けるのだが、しかしながら“主体”はあくまで台湾人自身である。……わたしたちは福佬人、客家人、タイヤル、サイシャット、アミ、ルカイ、ツォウ、ブヌン……等々の昔ながらの名称や記号を、すべて歴史の宝庫に入れて珍藏し、これからは千万をひとつに、ひとつを千万に、数多大勢の人の心が“台湾民族”の斬新で力強い英姿でもって、台湾人の新たな将来と新しい理想を築き上げてゆくのである。⁵⁶⁰

李喬は「台湾社会が調和」し、「台湾人の新たな将来と新しい理想を築き上げてゆく」必要性を主張する。李喬が論じる台湾社会の調和とは、族群間での確執を解消して台湾住民が団結し、国際社会で台湾をひとつの国民国家として位置付けてゆくことのパラフレーズでもあった。確かに客家人である李喬は、前述の“我に客家語を還せ運動”では抗議活動の先頭に立ち、1990年に台湾客家公共事務協会が設立された際には同協会の理事に就任するなど、戒嚴令解除は積極的に客家人の族群意識を喚呼し、自らの権利の回復とその擁護を訴えてきたが⁵⁶¹、その一方では台湾社会全体が達成すべき課題のひとつとして、各族群の和解と国民の団結を常に提唱してきたことも事実であった。1991年に台湾本土派の文化人が中心となって推進した“新しい台湾を作り出そう運動”（行出新台湾運動）では、発起人の林雙不が「今日すべての台湾で生きる住民は、〔大陸から台湾へ—筆者注〕先にやってきたか後にやってきたかにかかわりなく、血縁や省籍、階級や党派を問わず、

新国家を築き上げる」⁵⁶² 責任があると提言したが、この時も李喬は同運動で精力的に活動していた⁵⁶³。

こうした李喬による族群の和解に向けた強い意向は、従来の台湾ナショナリズムの中では排他的に扱われてきた外省人に対しても、理解の眼差しを向けていた。例えば、李喬は前出『台湾新聞報』での対談記事の中で、『埋冤』を執筆するための取材中に感じ得た本省人住民による外省人への差別意識について、次のように反発している。

インタビューをした際に、心がとても揺り動くような体験がいくつかありました。屏東ではある御老体がすでに亡くなっていましたので、彼のお嫁さんがわたしに言ったのですが、彼女の舅御は晩年、海外から誰かがインタビューにやって来て、何かをしてもいいかと尋ねてくる際、彼はこのひと言で答えていたそうです。“台湾の民衆に役立つと思えば、絶対にやってみるがいい。だけど注意しなければいけないよ、外省人は信頼できないからね。” こうした言い方は間違っていて、わたしたちはどの族群が信頼できないなどと言い切ることはできないのです。客家人、福佬人にも信頼できない人はいますよ！彼のこうした考え方が人を傷つけているのです。⁵⁶⁴

取材中に、二二八被害者の遺族から「外省人は信頼できない」と指摘されたことに対して、李喬は族群を根拠に相手の内心を判断してはならないと感じていた。李喬はこうした狭隘な発想こそが族群間でのわだかまりを解消する障害になっているとして、族群に基づく差別意識を強く否定したのである。こうした李喬の信条は、長年続く省籍矛盾の解消だけを念頭に置いているわけではなく、多元化する族群社会の調和さえも視野に入れていた。そのことは次の講演内容からも十分に窺えるだろう。李喬は『埋冤』を刊行する直前の1994年には、台湾教授協会が主催する台湾民族主義研究会の基調講演にて登壇したが、そこでは得てして排外的思想に陥りやすいナショナリズムに言及しながら、台湾社会での族群の融和に向けて次のように説いていた。

精巧で気の利いた、情報化社会の台湾では、政治的システムが合理的な改善を見せれば、社会の矛盾は引き下がり、族群の和解を期待することができまして、台湾住民は当然ながらひとつの共同体であり、ひとつの多元化し活潑なネーションの単位、ひとつの国家でありますので、台湾ナショナリズムは台湾民族主義や台湾国族主義でもよろしいのですが、わたしは個人的には“台湾国民主義”が一番相応しいと思うのです。⁵⁶⁵

この講演で、李喬は「族群の和解を期待」し、台湾を「ひとつの共同体」あるいは「ひとつの多元化し活潑なネーション」として捉え、現代台湾社会で国民が調和し合う必要性を提唱している。それは他者に対して排他的な傾向を示すナショナリズムでは決してなく、族群間での対話を通じて台湾人としての主体性を新しく認識してゆく姿勢であったと言える。李喬は同時期に発表した論考「台湾主体性的追尋」（台湾という主体性の追求、1995）でも、「“台湾”では“主体性”はそこに存在しているのでは決してなく、この土地の住民が、反省や覚醒、創造、実践を経た結果として形成されるものである」⁵⁶⁶と論じているように、1990年代初頭の台湾社会で族群意識が多角的に生起する中で、相互の融和を図りながら台湾人としての主体性を追求してゆく市民社会の出現を期待していたのである。

こうした点から考えると、『埋冤』における浦実の造形は、李喬が同時期に抱いていた“台湾意識”を考察する上でも重要な意味を持つ。本省人女性の葉貞子が二二八で外省人に乱暴されて生まれた浦実が成長し、“台湾人”としての自我を強く意識してゆく物語展開は、孤児意識からの脱却とその超克という方向性だけを示すのではなく、同時に多元化した族群間での融和を目指すという強い決意さえも窺える。上述のとおり、浦実という登場人物の創出は、李喬自身の思想を代弁する文学的営為でもあった。それは要するに、李喬が『埋冤』の物語を通して、従来二二八小説の中で往々にして見られた本省人と外省人の衝突という二項対立の歴史感を再解釈し直し、さらには1990年代の台湾社会で勃興した多元族群現象という新時代の中で、市民が相互に調和しながら台湾人としての主体性を

確立してゆく必要を明確に呈示した内容であったとも言えよう。

小結

現代台湾社会で克服されるべき過去の歴史的イベントとは、二二八と白色テロであると言われている⁵⁶⁷。とりわけ二二八は最大の政治的禁忌であり、民主化以前の台湾社会でその真相について口を開くことは一般的に困難であった。しかし、1980年代半ばに結成された和平日促進会が展開した各種社会運動での成果により、二二八に関する歴史的事実は徐々に明らかにされていった。李喬もこうした和平日促進会の運動に深く関与していたのであり、二二八の真相を現代台湾社会に伝えるべく、同会での調査活動を通じて歴史的事実の全体像を明らかにしてきた。そうした中では、二二八を自身の小説中で主題化して台湾読者に呈示することは、李喬にとってかねてからの宿願でもあり、『埋冤』とはこのように年来の大望の末に完成した小説であった。

『埋冤』では、とりわけ上巻を中心に二二八当時の凄惨な現場の状況を歴史的展開に沿って写實的に描き出してゆくが、同作で描出されるのは、そうした二二八に直接関係する歴史的事実に限定されない。『埋冤』の物語では、林志天や葉貞子ら二二八に関連する実在の人物をモデルにした登場人物を描出する一方で、そこでは二二八から白色テロの時代にかけて、戒嚴令下の自由なき禁制的社会を生き抜く台湾市民の姿を表象していた。さらに同作の下巻では、浦実という想像上の人物を創り出すことで、二十世紀台湾社会における二重の被殖民の歴史に強られるかのように台湾人が抱え続けてきた孤児意識を形象化させながら、一方ではこうした孤児意識を中心とする歴史的記憶を台湾人自身が自らの手で清算し、それを超克してゆく必要性を強く喚起していたのである。

葉貞子と浦実の母子二人が、二二八を起因とする過去のトラウマを克服しながら未来へ向かって前進しようとする物語展開は、二二八で決定的となり、戦後台湾社会で顕在化する省籍矛盾を解消し、その和解さえも提起するかのようである。また、浦実の造形からは、1990年代初頭の台湾社会で多元化した族群間での融和を目指すという、李喬自身の強い

決意さえも窺える。このように『埋冤』では、現在に至るまでの時空的拡がりの中で二二八を中心とする物語が描かれていた。それは明らかに従来の二二八小説の多くで見られた、国民党による残忍な武装制圧の表象に終始する描写とは一線を画する内容であり、『埋冤』は李喬自身が省籍矛盾に代表される二二八にまつわる二元論的な歴史観を克服してゆく過程での所産とも言えたのである。

第1節 李喬文学における“歴史素材小説”の意義

本論では、李喬文学における最大の特徴である“歴史素材小説”を中心に論じた。1934年生まれの李喬は、アジア太平洋戦争から帝国日本の敗戦、台湾の“祖国”復帰、二二八、国府遷台に至るまで、台湾を取り巻く社会状況と国際情勢が激動した1940年代に幼少期を過ごしたが、これら諸々の歴史的イベントは「すべてがはっきりと、明白にわたし〔李喬一筆者注〕の生命に刻まれていた」⁵⁶⁸という。こうした台湾現代史の劇的な展開が、李喬自身の創作意識に及ぼした影響は少なくなく、李喬は「この時代の歴史を再現することはわたし〔李喬一筆者注〕の生涯で何ら拒絶、逃避することのできない仕事である」⁵⁶⁹と、自らの小説中で台湾の歴史とその時代に生きた人々の姿を描いてゆく揺るぎない決意を明言していた。李喬は自身の作中で虚構という枠組みを仮借しながら、台湾人が直視すべき集合的記憶への言及を繰り返してきたのである。

但し、そうした台湾の歴史を題材に“歴史素材小説”として完成させる李喬の創作上の視線は、何も過去の歴史的事実ばかりを描出することに傾斜したのではなかった。この点に関しては、本論で論述したとおりである。本論の第1章では、日本統治期の漢人による最後にして最大の武装蜂起であった西来庵事件を描く長編伝記小説『結義西来庵』に関して論述したが、作中では西来庵事件の中心的義民であった余清芳を中心とする物語展開を呈示することで、同作発表と同時代の1970年代台湾社会における長老教会や台湾社会の政治的变化に対しても大いに期待を寄せる言説となっていた。また、第2章では清末から日本統治期終焉までに及ぶ半世紀の台湾近現代史を描く『寒夜』三部作に関して論述したが、同作の物語展開からは、台湾の土地を基盤とする共同体意識が誕生し、強化され、やがては台湾・台湾人意識を構築してゆく過程さえも看取することができた。それゆえに『寒夜』三部作は結果として、戒厳時期にはただの小説としてだけではなく、新たに出現してゆく台湾本土主義者の世代全体を教育する一冊の重要な教科書として読み継がれることに

もなったのである。そして、第3章では台湾政治小説の代表的作品である短編小説「小説」について論述したが、作中では総督府が左翼組織を瓦解させた二一二事件後の大湖竹南事件と、戦後台湾現代史における最大の政治的禁忌である二二八を交互に描き出しながら、一方では同作発表時の1980年代という民主化が進展する時代において、各々の台湾人が自らの実存について主体的に考え直す必要性を強く問うていたと言えた。さらに、第4章では二二八の真相を暴き出す長編小説『埋冤』に関して論述したが、同作では長らく明らかにされることのなかった二二八の歴史的事実について言及する一方で、主人公の造形を借りながら、台湾人の孤児意識という歴史的なコンプレックスを可視化させ、そうした孤児意識からの脱却の必要性を説き明かすディスクールとしても完成していた。

以上のように、李喬が描き出す“歴史素材小説”は、過去の歴史的事件を物語化するだけではなく、各々の作品が発表された当時の、同時代における現代台湾社会の様相さえも注視していたと言える。こうした“歴史素材小説”では、李喬自身の歴史的解釈が作中で明らかにされると同時に、それは作者の現代台湾社会に向けての言説でもあったのである。李喬の“歴史素材小説”について、かつて彭瑞金は「ただの歴史的現象の客観的な再現ではないかと常に人に誤解され、作家が歴史を通じて表現した個人的創作観に伴う苦心は忘れられてしまう」⁵⁷⁰ という世間からの評価を指摘した。だが、以上からも分かるように、その創作内容はただの歴史的現象の再現ではなく、過去の史的事実を真摯に見据えながらも、それは同時に現代台湾での社会変革としての言説にもなっており、さらにそこでは高揚する自らの台湾・台湾人意識さえも見事に表出させていたのである。

第2節 本論の研究成果

本論の研究成果として、以下の三点が挙げられる。一点目は台湾人作家の李喬が日本語を媒介として文学創作を行っていた事実を明らかにしたこと、二点目は李喬作品における外国文学からの受容背景を明らかにしたこと、三点目は李喬文学の代表的ジャンルである“歴史素材小説”における重層的な物語展開の重要性について提起したこと、である。

まず、一点目についてだが、従来の先行研究では、李喬が日本語を媒介に創作を行っていた事実、さらにそれが李喬の創作の中枢に関わる重要な文学的営為であることを指摘し考察する論考は一切見られなかった。だが、実際には、本論の第2章及び第3章で論述したように、李喬は自らの創作の中で、自身にとっては外国語である日本語を積極的に援用していたのでもあった。本論の第2章では李喬が日本語に翻訳されたフォークナー作品を受容することにより、代表作『寒夜』三部作を創作した事実を考察し、第3章では安部公房の原作も含めた諸作品を受容することで、政治小説の代表作である短編小説「小説」を創作するに至ったことを論述した。前出『台湾新聞報』に掲載されたインタビューでは、李喬自身は幼少の時より抗日・反日の家庭教育を受けて育ってきたと答えている⁵⁷¹。李喬の父親が苗栗地方では有名な抗日左派の活動家であったことは、本論で述べたとおりである。こうした家庭環境に生まれ育った李喬ではあるが、その後自らの文学創作においては日本語を武器として欧米作家の作品を受容し、さらには日本の作家を通して西洋の哲学的思想を文学的に解釈する方法を学んでいったことは、実に興味深いものであると言えよう。

次に、二点目についてだが、本論の序章でも述べたように、従来の先行研究では、李喬作品における外国文学——とりわけフォークナー作品——からの影響の可能性を指摘する論考が多少は存在したとはいえ、その一方で、外国文学の受容経緯とその後に創造的模倣が如何にして行われていったのかを考察する論考は一切見られなかった。現代文学研究においては、先行する他の文化的テクストから如何なる影響を受けているのか、という受容論に関する受容の問題は無視できないが、これまでの李喬研究ではその点に関して全く注目して来なかったと言ってもよい。だが、そうした研究状況において、本論では、フォークナー作品と安部公房作品という二つの外国文学からの受容の経路を論証した。本論でも述べたとおり、フォークナー作品からは自身の故郷をモデルにして想像的な世界へと昇華させる手法を学び、安部公房作品からは小説での実存主義的思想の表出方法に対して強い影響を受けていた。それらはいずれも『寒夜』三部作と短編小説「小説」という李喬の代

表的な両作において、創作の根幹に直接関わっていたのである。

最後に、三点目についてだが、従来の先行研究では、李喬の“歴史素材小説”は一義的に解釈されることが圧倒的に多かった。それは例えば、西来庵事件を描く長編小説『結義西来庵』、あるいは二二八に取材した『埋冤』に関する論考において、特に顕著であった。だが、その内実では、本論の第1章と第4章で論述したとおり、非常に重層性の強い物語展開を見せていたのでもある。『結義西来庵』では、李喬が物語の取材過程で獲得してゆく台湾意識を基盤とする自身のアイデンティティの再編成が、余清芳を中心とする義民による抵抗の物語でも顕在化していたことは見落としてはならない。また『埋冤』では、台湾人の孤児意識からの脱却とその超克を促すという、より現代的な物語性も内包していた。両作の根幹に関わるのは、過去の歴史的事件の実写という技術的側面だけではないはずである。とりわけ、『結義西来庵』で見られるような官製文学の中での従属と抵抗の両面性とは、台湾に限らず、創作の自由において政治的制約が課されることの多かった二十世紀東アジアの文化環境の下で、一人の人間が如何にして自身の言葉を丹念に選び取り、その思いを作品の中で伝えようとしたのかという点に対して、実に大きな示唆を与えるものでもあろう。

以上のように、本論は従来の李喬研究では見落とされていた部分に注目し、既存の李喬研究の成果を補う研究を行った。但し、紙幅の都合により、そこでは次のような課題が残る。最後に以下では、それらを含む今後の研究課題について論じたい。

第3節 今後の研究課題

本論は、李喬文学におけるフォークナーと安部公房作品の受容に関する考察を主意とした。李喬が外国文学を受容しながら創作した経緯を明らかにすることで、そうした個人的な文学的経験が作者自身の台湾意識の勃興と如何に密接に結び付いているのか、を考察しようと試みた。だが、実際のところ、李喬の“台湾意識”も時代の流れや周辺の間人間関係に応じて絶えず変化しており、そうした台湾意識の内容面での変遷について考察が欠けて

いた。これらの点については、今後改めて調査したい。

また、第2章では『寒夜』三部作とフォークナーの代表作の比較研究を実施したが、各作品での登場人物の形象面における比較、並びに『寒夜』三部作におけるフォークナー作品からの文体的影響については論述することができなかった。第4章でも述べたように、李喬文学の中では登場人物の形象が非常に重要であり、この点に関しては稿を改めて詳しく論述する必要がある。李喬文学における安部公房作品からの影響に関して言えば、これは李喬が世界の実存主義文学から受容した文化的影響におけるひとつのフェーズであることは言うまでもない。実存主義の本家本元とも言える欧米作家の作品から具体的に如何なる形で影響を受けていたのか、という問題は今後さらに考察したい。また、本論でも述べたように、多面的な解釈を可能にする安部公房の『砂の女』であったが、同作について台湾では文学と政治の関係という側面だけではなく、他に如何なる読み方がなされていたのか、そしてこのような同作の多面的読解が、如何に李喬作品をはじめとする台湾の文学状況と密接に結びついているのか、という問題も別稿で検討する必要がある。

第3章においては、短編小説「小説」における『砂の女』の影響を考察し、台湾の国民党政権下での中国語文学における現代日本文学が与えた影響の一面にも注目した。従来、日本統治期の日本語作家に与えた日本近現代文学の影響に関する研究は数多にのぼるが、一方で戦後台湾における中国語文学に対する現代日本文学の影響を考察する論考は寥々たるものであった。本論でも考察したように、安部公房の作品は世界の読者を魅了し、台湾でも熱狂的な読者を多数抱えた時期があり、カミュやカフカらと同様に他の台湾人作家らの創作に影響を及ぼした可能性も否定できない。安部公房作品を含め日本の現代文学・文化が如何に同時代の台湾人作家らの創作に影響を与えたのか、という問題については、今後さらなる研究が進むことであろうと思われる。

なお、第1章と第2章では、李喬が『結義西来庵』と『寒夜』三部作を創作する過程で、自らの台湾に対するアイデンティティが高揚し、それが自身で創作する物語展開にも明確に表現されていることを論述したが、こうした当時の1970年代における台湾人作家の創

作態度の変化は、おそらく李喬だけに限定されるものではないだろう。同時期には、国民党文芸政策の変化や郷土文学論争が発生していたが、そうした諸々の社会的・政治的現象が李喬文学に及ぼした影響については、今後の詳細な研究に俟つところである。1970年代において、李喬以外の台湾人作家の創作では如何なる変化が現れたのか、当時の台湾文学は全体として如何に変容していったのか、これらの問題については今後別稿にて再検討したい。

最後に、李喬文学におけるキリスト信仰の影響も忘れてはならないものである。第1章で論じたように、1970年代以降の台湾社会の変化には長老教会の政治的行動が直接的に関係していた。こうした長老教会がリードする社会変革のただなかで、李喬自身はそれらの運動に如何に関与していったのか、そしてそこでの体験は李喬の文学創作において如何なる形で表現されるに至ったのか、という問題についても検討したい。キリスト信仰の問題に関連して言えば、第2章では『寒夜』三部作におけるフォークナー作品からの影響について考察したが、周知のようにフォークナー作品ではキリスト教の影響が無視できず、李喬はフォークナーの宗教的側面——例えば、贖罪の問題など——にも反応を示していた可能性は極めて高い。李喬文学の中でも贖罪がひとつの重要なテーマであることは作者自身がすでに認めており⁵⁷²、この点に関する考察も別稿にて検討しなければならないものと思われる。

1 李喬（本名、李能棋）は筆名のひとつであり、過去には“壹闡提”や“萬吉祥”などの筆名も使用した。これまでに発表した作品の多くは署名に“李喬”が使われ、主に 1970 年代以前に発表した文芸評論で“壹闡提”が使われた以外に、本名やそのほかの筆名でもって発表された作品は限定的である。台湾省立新竹師範学校（現、国立新竹教育大学）卒業。1960 年に兵役解除後は、苗栗の小学校や中学校などで国語教師をつとめながら創作を続けた。1982 年夏に台湾省立苗栗高級農工職業学校を定年退職後は執筆活動に専念し、1990 年代以降はテレビ番組でのパーソナリティなど多方面で活躍する。その間、文芸誌の『台湾文芸』総編集長や台湾ペンクラブ会長、行政院文化芸術基金会理事、真理大学台文系教授などを歴任し、民主進歩党（以下、民進党と略す）の陳水扁政権のはじめには一時期、総統府国策顧問に就任した。台湾文学賞のほか、呉三連文芸賞、呉濁流文学賞、巫永福評論賞、国家文芸賞、客家貢獻賞など、数多くの受賞経験を持つ。

2 李喬は 2010 年代に至っても、『幽情』三部作（2010-13）をはじめ、『情世界—回到未来』（情の世界—未来へ戻る、2015）や『草木恩情』（草木の恩情、2016）など、中・長篇小説 5 作と戯曲集 1 作、回想録 1 作、散文集 1 作の新刊を発表している。

3 自伝的回想録『我的心靈簡史』（わたしの靈魂の履歴書、2010）の序文に相当する「写在前面」では、これまでに脱稿した文学・文化評論は、散逸してしまった最大 100 編を加えると 330 編以上にのぼると書かれている。（李喬『我的心靈簡史』台北県・望春風、2010 年、19 頁）

4 「第十屆國家文藝獎得主（2006 年） 小説家／李喬 得獎理由」、「財團法人國家文化藝術基金會」

http://www.ncafroc.org.tw/award-history.asp?Prize_year=2006&Prize_no=%A4Q（2016 年 7 月 4 日アクセス）

〔原文〕 作品從生活及族群的基點出發，寫作面向擴及臺灣群體生活、歷史內涵與人性的普遍性和獨特性，其作品具多元文化意義

5 李喬「一位台灣作家的心路歷程」、李喬『李喬短篇小說全集資料彙編』苗栗・苗栗県立文化中心、2000年、45頁。初出は『亜洲人』（第7期、1984年）である。

6 若林正文『台灣抗日運動史研究 増補版』研文出版、2001年を参照した。

7 李木芳の抗日活動に関しては、『台灣総督府警察沿革誌』にも記述が見られる。同書の中では「農民組合大湖支部に於ては支部長李木芳が所謂第二中壠事件に關し檢舉され、爾來態度著しく軟化し、組合活動も亦不活潑となり、更に所謂二、一二事件に關し殆ど消滅状態に沈淪せり」と記されている。（台灣総督府警務局編『台灣社会運動史』龍溪書舎、1973年、1162頁）

8 李喬、前掲『我的心靈簡史』、22頁、及び許素蘭『給大地作家書—李喬』台北・典藏芸術家庭、2008年、19頁。

9 李喬「入選感言」『台灣文芸』（第5卷第18期、1968年）52頁。

[原文] 我會更專心，更忠誠於文學墾植，直到老死

10 鍾肇政「苦思苦写的李喬」、梅遜編『作家群像』台北・大江、1968年、277頁。

[原文] 從事寫作的歷史雖短，而成績則更其不凡，更其輝煌

11 李喬『台灣文學造型』高雄・派色文化出版社、1992年、17頁。初出は李喬「台灣文學正解」『台灣文芸』（第83期、1983年）である。

[原文] 所謂臺灣文學，就是站在臺灣人的立場，寫臺灣經驗的文學

12 同上論文、18頁。

[原文] 近四百年來，與大自然搏鬥與相處的經驗，反封建，反迫害的經驗，以及反政治殖民，經濟殖民，和爭取民主自由的經驗

13 同上論文、18頁。

[原文] 同情、認同，肯定他們的苦難、處境，希望，以及追求民主自由的奮鬥目標

14 但し、言うまでも無く、人間の創作は時間の推移に従って進化論的に進展してゆくわけではない。李喬の創作もまた同様であり、個人から集団を描く作風へと表現の幅を拓けると同時に、集団から個人へと回帰してゆくこともある。李喬は1980年代に、一連の政

治小説の発表でもって台湾の政治的禁忌に挑戦していったが、その一方では「爸爸的新棉被」（父さんの新しい布団、1983）や「母親的画像」（母親、1994）のように家族や男女の物語を描くことを通して、自身の内面ともひたむきに向き合っていた。（山口守「書評 李喬著三木直大・明田川聡士訳『曠野にひとり（李喬短篇集）』」『植民地文化研究』第14号、2015年、179-182頁）

15 同書には作家紹介のほかに、「苦水坑」（苦渋の坑道、1963）や「桃花眼」（秋波、1963）、「小京園」（小京園歌仔戲団、1963）、「全体肅立」（全員起立、1963）、「晴朗的心」（清々しい心、1964）、「天来嫂」（天来姉さん、1964）など6編の短編小説が収録されている。

16 鍾肇政「編輯的話」、鍾肇政編『本省籍作家作品選集 3』台北県・文壇社、1965年、3頁。

[原文] 有了較長的寫作資歷，作品數量較多的

17 鍾肇政編『本省籍作家作品選集 5』台北県・文壇社、1965年、84頁。

[原文] 五十一年夏開始學習寫作，進步神速，曾參加各項文賽，獲多次首獎

18 同上書、84頁。

[原文] 受着命運的主宰，默默地忍受人間之苦，是頗有深度的

19 葉石濤「兩年來的省籍作家及其小説」、葉石濤『葉石濤全集 13』台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008年、156頁。初出は『台湾日報』（1967年10月25、26日）である。

[原文] 李喬的文章已臻得心應手之地步，流暢易讀。原來他們這些作者壓根兒就沒有揹負日文羈絆的累贅，因此如果作品裡沒有豐富的鄉土色彩，就根本無法知道他就是省籍作家。

20 同上書、156頁。

[原文] 發表在《臺灣文藝》的小説〈那棵鹿仔樹〉，把迷戀於土地和故鄉的一個老農民的心理藉生活上掀起的漣漪透露出來。文筆客觀，情節的發展從容流暢，證明了他是

小説技巧頗佳的作家。

21 莊園〔鄭清文—筆者注〕「作家的起点」『台湾文芸』（第 14 卷第 57 期、1978 年）72 頁。

〔原文〕李喬對故鄉和童年的記述，是比較直截的

22 彭瑞金「悲苦大地泉甘土香—李喬的蕃仔林故事」『台湾文芸』（第 14 卷第 57 期、1978 年）116 頁。

〔原文〕李喬將有餘裕鋪陳情思交融的鄉土大地

23 謝松山「簡介『寒夜三部曲』」『文学界』（第 4 集、1982 年）64 頁。

〔原文〕不僅明白臺灣悲殘的歷史命運，也能瞭解這塊土地上的子民，所面臨的悲悶沉痛的根源

24 同上論文、60 頁。

〔原文〕土生土長的人，愛鄉愛土而合成一體

25 彭瑞金『台湾新文学運動 40 年』高雄・春暉、1997 年、180-181 頁。

〔原文〕李喬從一九七七年開始著手進行《寒夜三部曲》的寫作……李喬著重於闡發來到臺灣開疆拓土的漢移民，與臺灣這塊土地錯綜複雜的情感，強調他們對土地的情誼，也描述了土地對這些移民生死以之的密切關係，他們為土地而生，為失去土地而戰，奮勇抗暴，保衛鄉土，在異地的魂牽夢繞都在土地，《寒夜三部曲》赤裸地展示了強烈的本土回溯意願。

なお、本論では同書からの引用はすべて彭瑞金〔中島利郎・澤井律之訳〕『台湾新文学運動四〇年』（東方書店、2005 年）による。

26 同上書、181 頁。

〔原文〕也清楚地建立了土地、母親、生命交揉一體的文學觀

27 “台湾結／中国結論争”については、陳正醒「台湾における『中国意識』と『台湾意識』—最近の文学・思想界での論争を中心に」『中国研究月報』（第 439 号、1984 年）、及び若林正丈編『台湾—轉換期の政治と経済』（田畑書店、1989 年）に所収の松永正義「『中国意識』と『台湾意識』—揺れ動く中国／台湾イデオロギーの構図」、施敏輝〔陳芳

明一筆者注] 編『台湾意識論戦選集』(カリフォルニア・台湾出版社、1985年)等に詳しい。

28 松永正義、同上論文、332頁。

29 楊照『文学、社会與歴史想像』台北・聯合文学、1995年、105頁。

30 宋澤萊「忍向屍山血海求教訓一試介鍾逸人、李喬的二二八長篇小説」『台湾新文芸』(第11期、1998年)269頁。

[原文] 給我們最大的啓示莫過於它指名了臺灣人必要建立「臺灣意識」

31 朱雙一『台湾文学創作思潮簡史』北京・九州出版社、2010年、277頁。

[原文] 與90年代臺灣政治文化思潮的脈動和演變是緊密相關的

32 彭瑞金「李喬研究綜述」、彭瑞金編『台湾現当代作家研究資料彙編 27 一李喬』台南・国立台湾文学館、2012年、97頁。なお、彭瑞金はこうした李喬本人が著わした自身に関する文章は、「現在までのところ『李喬回想録』が存在しないという研究上の不備を十分に補うことができる」(可以充分填補迄爲今沒有「李喬回憶録」的研究缺口)と見なしている。

33 本論では、李喬作品における外国文学との影響関係を間テキスト性(Intertextuality)ではなく、受容の問題として論じる。なお、間テキスト性については、ジュリア・クリステヴァ [原田邦夫訳]『記号の解体学』(せりか書房、1983年)及び同 [中沢新一・原田邦夫・松浦寿夫・松枝到訳]『記号の生成論』(せりか書房、1984年)、前田愛『文学テキスト入門』(筑摩書房、1993年)等に詳しい。

34 李喬「『歴史素材小説』写作經驗談」(『歴史素材小説』の創作經驗談)『文訊』(第246期、2006年)54頁。

35 同上論文、54頁。

[原文] 首先我認爲自己寫的是「歴史素材小説」、與「歴史小説」不同。「歴史小説」是：作者選定一段時代，配以當時的風習，特殊景觀；以一或數件事件或人物爲中心，依歴史常識人事爲主線，配以此人事的枝節虛構的作品。「歴史素材小説」，借重歴

史素材的可信性，重點放在虛構的經營上，主題偏重在歷史人事的個人詮釋；出乎歷史底而歸趨於文學的純淨追求。

なお、李喬は『小説入門』（台北・大安、1996年）でも“歴史素材小説”（但し、『小説入門』では「歴史素材的小説」と記されている）と“歴史小説”の差異について、同様の見解を示している。同書は大安版と時報文化版（1986）のふたつの版本があり、前者は後者の内容を加筆、訂正したものである。本論で引用する箇所にも両者の間での異同はなく、同書からの引用はすべて大安版によるものとする。

36 李喬は“歴史小説”の一例として、台湾の歴史小説作家・高陽（1922-92）や司馬遼太郎の作品を挙げている。（李喬、同上『小説入門』大安版、192頁）

37 同上書、88頁。

[原文] 小説創作上、「虚構」（fiction）觀念至爲重要。虚構的完成，端賴想像力的發揮。

「想像」，質言之，就是對於現實人間的「心理重組」；心理重組，就是發明、創造的心理活動現象。所以，想像力，即是創造力；在文學上就是創作力。

38 陳芳明『後殖民台湾—文学史論及其周辺』台北・麦田、2007年二版、23頁。

[原文] 文學的歷史解釋，並不能脫離作家與作品所賴以孕育的社會而進行建構。戰後臺灣文學史的評價與解釋，也應放在臺灣歷史發展的脈絡中來看待。

39 陳芳明『台湾新文学史』台北・聯經、2011年、24頁。

[原文] 就不能只是停留在文學作品的美學分析，而應該注意到作家、作品在每個歷史階段與其所處時代社會之間的互動關係

なお、本論では同書からの引用はすべて陳芳明〔下村作次郎・野間信幸・三木直大・垂水千恵・池上貞子訳〕『台湾新文学史』（東方書店、2015年）による。

40 藤井省三『台湾文学この百年』東方書店、1998年、7頁。

41 李喬「自序之（一）」、李喬『埋冤 1947 埋冤（上）』苗栗・苗栗客家文化廣播電台、2003年、15頁。

[原文] 從事小説創作，偶然地涉入臺灣歷史，卻由此改變我的文學風格

42 葉石濤『台湾文学史綱』高雄・春暉、1987年、67頁。

43 陳芳明、前掲『台湾新文学史』、788頁。

44 李喬「戦後台湾小説的文化批評」（戦後台湾小説の文化批評）『国文天地』（第16巻第5期、2000年）27頁、及び李喬『文化、台湾文化、新国家』高雄・春暉、2001年、275頁。

45 李能棋『結義西来庵』台北・近代中国、1977年。同書は1985年に再版され、2000年には版元を移して、“李喬”の名前で新版が刊行されている（李喬『結義西来庵』台南県・台南県文化局）。近代中国版と台南県文化局版では、「祖国大陸」を「中国大陸」に書き改めるなど語彙の違いが若干見られる以外は、内容面での異同は特にない。また、近代中国版では作者が“李喬”であることを明記した紹介文は附されていない。なお、李喬自身によれば、当初『結義西来庵』の題名は『冤恨惨絶録』が予定されていたという。（李喬「文学的郷土性與世界性」〔文学の郷土性と世界性〕『台湾文芸』第80期、1983年、16頁）

46 李喬、前掲「一位台湾作家的心路歷程」、49頁。

[原文] 對我一生發生發生決定性的影響

47 李能棋、前掲書、序2頁。

[原文] 已不忍，不敢，也不能以虛構小説處理

なお、引用部の傍点は筆者によるものである。

48 彭瑞金『驅除迷霧找回祖靈』高雄・春暉、2000年、142頁。

[原文] 李喬的第一步歷史小説

49 許素蘭、前掲書、112頁。

[原文] 就文學成就而言，《結義西來庵》雖然比不上後來的《寒夜三部曲》與《埋冤・1947・埋冤》

50 同上書、112頁。

[原文] 對後來寫作《寒夜三部曲》有很大的幫助

51 彭瑞金、前掲『台湾新文学運動40年』、山口守編『講座台湾文学』（国書刊行会、2003

年)、中島利郎・河原功・下村作次郎編『台湾近現代文学史』(研文出版、2014年)等でも『伝記叢刊』に関する論述は一切見られない。

52 王鴻仁「訪劉紹唐先生談伝記文学」『書評書目』(第55期、1977年)11頁。

53 同上論文、12頁。

[原文] 一個傳記家在撰寫某一個人的傳記時，難免會帶有一種主觀的色彩

54 『結義西来庵』に関する主な先行研究には、花村「談李喬『結義西来庵』一書裏調子の運用」『中外文学』(第8巻第5期、1979年)、及び張怡寧「李喬伝記文学『結義西来庵』

(1977) 中的抗日反思與殖民批判」『台湾文学論叢』(第4輯、2012年)等が挙げられる。

なお、本論では1977年初版(近代中国版)の李能棋、前掲書を底本に用い、テキストの引用はすべて拙訳である。

55 余清芳は屏東に生まれ、台湾割譲直後の“日台戦争”では抗日運動に身を投じた。その後は公学校で日本語を習得し、台湾南部で巡査補や役場の書記などをつとめたが、各地の廟宇で抗日思想を説いたことで、1909年より三年間台東の浮浪者収容所に収監されている。釈放後、余清芳は偽名を使い西来庵近隣で精米店を経営し、西来庵では信徒に対して抗日思想を説いた。余清芳の経歴については、程大学編『台湾先賢先烈專輯—余清芳清芳伝』(台中・台湾省文献委員会、1978年)、及び王詩琅『余清芳清芳事件全貌』(台北・海峡学術、2003年)、許雪姬ほか『台湾歴史辞典』(台北・行政院文化建設委員会、2004年)、康豹『染血的山谷』(台北・三民、2006年)等に詳しい。

56 西来庵の址は、現在の台南市中西区青年路121、123号である。西来庵事件後、廟宇は当局によって破壊され、日本統治期終了後には跡地に教会と集合住宅が建てられた。なお、西来庵はその後幾度か場所を変えて再建され、現在は台南市北区大興街に建つ。程大学編、前掲『台湾先賢先烈專輯』、及び康豹、前掲書を参照した。

57 史明『台湾人四百年史』音羽書房、1962年、380頁、及び戴國輝『台湾一人間・歴史・心性』岩波書店、1988年、75頁。

58 丘秀芷「結義西来庵—噍吧哖事件」『中央日報』1978年10月25日、及び沈明進「評李

喬的『結義西来庵』『中央日報』1979年3月4日。

59 周婉窈 [石川豪・中西美貴・中村平訳]『凶説台湾の歴史 増補版』平凡社、2013年、108頁。なお、史明、前掲書、及び戴國輝、前掲書では、死刑者数を903名としている。

60 戴國輝、前掲書、75頁。なお、伊藤潔によれば、866名の死刑囚のうち95名が処刑されたところで、大正天皇即位式の恩赦により766名が無期刑に減刑されたという。(伊藤潔『台湾一四百年の歴史と展望』中央公論社、1993年、97頁)

61 黄昭堂『台湾総督府』教育社、1981年、101頁。

62 武者小路実篤「八百人の死刑」、武者小路実篤『武者小路全集3』小学館、1988年、432-434頁。また、このほかにも武者小路は『白樺』で西来庵事件について幾度か言及し、台湾での日本帝国主義による殖民地政策を批判している。

63 周婉窈、前掲書、108-110頁。

64 楊達は1982年に半世紀ぶりに訪日した際、戴國輝に対して「〔西来庵事件は一筆者注〕印象が強烈で、頭にいまでも残っている」と語っていた。(楊達「一台湾作家の七十七年」『文芸』第22巻第1号、1983年、298頁)

65 林梵『楊達画像』台北・筆架山、1978年、56頁。なお、林梵は林瑞明の筆名である。

66 「台胞抗日史、乃血涙写成！」『中国時報』1976年10月25日。

[原文] 回顧成仁取義慘烈的壯舉

67 康豹、前掲書、133頁。

68 張家鳳「噍吧哖惨史」『南瀛文献』(第23巻、1978年)69頁。

[原文] 日人驅聚臺灣同胞大肆屠殺而聞名

69 なお、1958年には西来庵事件を題材にして、映画『血戦噍吧哖』(何基明監督)が製作、上映されたが、同映画は当時教育部から唯一顕彰された台湾語映画であったという。(黄仁・王唯編『台湾電影百年史話』台北・中華影評人協会、2004年、188-189頁、及び徐樂眉『百年台湾電影史』新北・揚智文化、2012年、49頁)

70 李喬、前掲「一位台湾作家的心路歷程」、48-49頁。

71 李能棋、前掲書、序 1-2 頁。

[原文] 早就有意探其體材，寫成小說

72 李喬「流転」、李喬『李喬短篇小説全集 6』苗栗・苗栗県立文化中心、2000 年。初出は『中華日報』（1972 年 12 月 26-28 日）である。

73 李能棋、前掲書、序 1 頁。

[原文] 在臺灣抗日史上，有其特殊意義

74 李能棋、前掲書、序 1 頁。

[原文] 意義最深的偉大革命行動

75 国立中央図書館台湾分館特蔵資料編纂委員会編『台湾文献書目解題第 4 種伝記類 1』台北・国立中央図書館台湾分館、1991 年、159 頁。なお、近代中国出版社は 1977 年 3 月には中華民国史研究を中心とする学術誌『近代中国』を創刊している。

76 吳橋「人性與同情」『書評書目』第 55 期、1977 年、14 頁。この時の招聘作家は、鍾肇政、李喬、李永熾（1939-）、林文月（1933-）、謝霜天（1943-）、白慈飄（1945-）、羅秋昭（?-）、丘秀芷（1940-）、蘇雲青（1921-2000）、李新民（?-）の十名である。

77 国立中央図書館台湾分館特蔵資料編纂委員会編、前掲書、254 頁。なお、『伝記叢刊』（第一期）での『結義西来庵』以外の作品は、鍾肇政『丹心耿耿屬斯人一姜紹祖伝』（台北・近代中国、1977 年）、李永熾『不屈的山岳一霧社事件』（台北・近代中国、1977 年）、林文月『青山青史一連雅堂伝』（台北・近代中国、1977 年）、謝文玖〔筆名、謝霜天一筆者注〕『耿耿此心在一翁俊明伝』（台北・近代中国、1977 年）、白慈飄『啓門人一蔡惠如伝』（台北・近代中国、1977 年）、羅秋昭『大湖英烈一羅福星伝』（台北・近代中国、1977 年）、丘秀芷『剖雲行日一丘逢甲伝』（台北・近代中国、1978 年）、蘇雲青『念茲在茲一丘念台伝』（台北・近代中国、1984 年）、李新民『愛国愛郷一黄朝琴伝』（台北・近代中国、1984 年）である。

78 蔣経国の“文化建設”については、菅野敦志『台湾の国家と文化』（勁草書房、2011 年）に詳しい。また、国民党の文芸政策の変化については、許青娟『台湾現代文学の研

究』(晃洋、2008年)、及び郭沢寛『官方視角下的郷土』(高雄・麗文文化、2010年)、赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』(東方書店、2012年)等に詳しい。

79 李喬「個人反抗與歴史記憶」、李喬、前掲『李喬短篇小説全集資料彙編』67頁。初出は『中国時報』(1998年10月20-23日)である。

80 鍾肇政『鍾肇政全集25』桃園・桃園県文化局、2002年、452頁。

81 鄭尊仁『台湾当代伝記文学研究』台北・秀威資訊科技、2003年、212頁。

82 羅秋昭『羅福星伝』台北・黎明、1974年。

83 鄭尊仁、前掲書、213頁。なお、羅福星の抗日事績が国民党統治下で如何に評価されたのかについては、何義麟「戦後台湾抗日運動史の構築—羅福星の革命事績を中心に」(五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における「日本」』風響社、2006年)に詳しい。

84 鄭尊仁、前掲書、215頁。

85 鄭尊仁、前掲書、220頁。

86 鄭尊仁、前掲書、214頁。

[原文] 開始寫民國初年在大陸的革命先烈

87 鄭尊仁、前掲書、220頁。

[原文] 一些從沒有人聽過的革命先烈來當主角

88 李能棋、前掲書、232頁。

[原文] 抗日革命事件裏，最龐大、慘烈、悲壯的一戰

89 林衡道主編、程大学編訳『余清芳清芳抗日革命案全档』(台中・台湾省文献委員会)は、1974-76年に全四集、八冊が刊行された。但し、第1輯第1冊と第1輯第2冊に限り、程大学・王詩琅・呉家憲編訳である。

90 国立中央図書館台湾分館特蔵資料編纂委員会編、前掲書、72頁。

[原文] 最詳之傳記

91 程大学編、前掲『台湾先賢先烈專輯』。

92 李喬、前掲「文学的郷土性與世界性」16頁。

93 沈明進、前揭論文。

94 周宗賢「噍吧哖事件大屠殺的真相」『淡江人文社会学刊』第 17 期、2003 年、51 頁。

95 鍾肇政、前掲『丹心耿耿屬斯人一姜紹祖伝』台北・近代中国、1977 年。姜紹祖（1875-95 年）は、“日台戦争”で抗日運動に身を投じた客家人の義民である。

96 朱西甯『表率群倫の林子超先生—林森伝』台北・近代中国、1982 年。林森（1868-1943 年）は国民政府第三代主席であり、抗日戦争中に重慶で没している。

97 王鴻仁、前掲論文、10 頁。

[原文] 真正從事文學工作的人

98 王鴻仁、前掲論文、10 頁。

[原文] 不承認傳記文學是真正的文學

99 注 45。

100 彭瑞金「讀『結義西來庵』」『民衆日報』1978 年 10 月 21 日。

[原文] 以歷史背景寫成的小說

101 花村、前掲論文、149 頁。

[原文] 這本書確已妥善而周到的寫出余清芳、羅俊、江定等人的遭遇、行誼；寫出受制於侵略者的衆百姓感受到的心情；也概括出噍吧哖事件的緣起、結束，和它在臺灣五十年割據時期中所具的歷史意義。

102 花村、前掲論文、149 頁。

[原文] 內涵方面，沒有什麼可讓別人置喙的餘地了

103 沈明進、前掲論文。

[原文] 縱的方面詳述事件的始末，橫的方面交代諸烈士的組織成員

104 注 76、77。

105 丘秀芷、前掲論文。

[原文] 則完全以史實爲據、不會虛構半點

106 沈明進、前掲論文。

[原文] 大型的報導文學

107 鄭尊仁、前掲書、148 頁。

108 鄭尊仁、前掲書、149-150 頁。

109 花村、前掲論文、149 頁。

[原文] 在形式方面，卻相當明顯的可以討論

110 花村、前掲論文、149-150 頁。

[原文] 作者對於羅俊便盡可能的寫得詳細，竟佔全書三分之一有餘的篇幅。但噍吧哞事件是成千上萬人造成的事件；再若按情按理來看，真正的發起人和領導人，也確實是余清芳。余清芳所在的西來庵是革命運動的溫釀地；經由余清芳主動，才聯絡到江定、羅俊；余清芳是統領義軍的大元帥，由他發佈檄文，諭告天下。所以，就噍吧哞事件的進行來看，主題應繞著余清芳才算完整。

111 羅俊は雲林斗南の出身。羅俊の経歴については、程大学編、前掲『台湾先賢先烈專輯』、及び王詩琅、前掲書、許雪姬ほか、前掲書、康豹、前掲書等に詳しい。

112 保良局については、檜山幸夫「台湾初期統治の歴史的問題について—台北保良局設置条件の分析とその日本植民地統治上における意義」（『史叢』第 19 号、1976 年）を参照した。檜山幸夫は、保良局の設置を要求した台湾人紳商が目指したものは「日本軍の誤った処罰、暴行・略奪から自己を守る事であり、同時に『土匪』等の襲撃・強奪を日本軍を使って防ぎ、更に旧来の特権的地位を住民の代表者として位置付ける事によって確保」するため、「その保障・代償として、日本に対する忠誠と服従を誓い、総督府の民政・地方行政を補助し、日本軍の手先として反日抵抗分子を日本軍に売渡すという反民族的行為を行った」と指摘する。（檜山幸夫、同上「台湾初期統治の歴史的問題について」、74-75 頁）

113 李能棋、前掲書、56-57 頁。

[原文] 賴秀，四十七歲。他以「臺灣名醫」，外加上「臺灣名先生」頭銜，挾技遨遊，闖蕩江湖。以後七年期間，他遍遊閩浙兩廣，嶺南各地的古剎名都，水陸要地，點查政情風俗，民生疾苦。他的心中滿懷悲愴，因為他懷着一腔熱血，而這時的祖國

大陸上正鬧着義和團事件，引起八國聯軍的亂子，接着日俄戰起，以我東北疆土爲戰場。滿清政府的腐敗，已完全暴露；祖國大陸，同樣的面臨着被列強蠶食鯨吞的局面。

只有在一九〇五年，光緒三十一年，孫中山先生籌組革命團體——中國同盟會，給天寒地凍，慢慢長夜的祖國，帶來一些希望。

114 同上書、62 頁。

[原文] 最令他振奮的，是一九一一年（宣統三年）十月十日，孫中山先生領導的革命軍起義武昌，滿清退位，中華民國誕生。……中華民國的誕生卻給他帶來了無限的希望和鼓舞。

115 野沢豊『辛亥革命』（岩波書店、1972 年）、及び川島真『近代国家への模索』（岩波書店、2010 年）を参照した。

116 李能棋、前掲書、15 頁。

[原文] 奉了中華革命黨之命，來臺灣協助大家辦事的

117 李能棋、前掲書、15 頁。

[原文] 全國大革命的一環，一個支流

118 林資鏗の経歴については、外務省政務局編『現代支那人名鑑』（外務省政務局、1916 年）、及び外務省情報部編『現代支那人名鑑』（外務省情報部、1924 年）、支那研究会編『最新支那官紳録』（北京・支那研究会、1918 年）、曾迺碩『国父與台灣的革命運動』（台北・幼獅、1978 年）、許雪姬ほか、前掲書などを参照した。

119 李能棋、前掲書、序 1 頁。

[原文] 革命同志

120 李能棋、前掲書、序 1 頁。

[原文] 羅氏與林季商的關係，尤其重要

121 李能棋、前掲書、64-65 頁。

[原文] 「賴先生：雖然這裏是祖籍的地方，但，我們在臺灣也是世代代了，我們該

回去爲革命奮鬥才是。」

「是的！林先生，我……」他老懷激動，說不出話來。

「您是有心人，我林某也是個有心人，我會盡力幫助臺灣的有志之士光復國土的。」

「好。」他霍然站起來，口吻爽朗而堅毅。伸手和林祖密僅僅一握……

122 李能棋、前掲書、67 頁。

[原文] 中華民國政府，中國國民黨與臺島抗日革命有直接關連的重要史實

なお、辛亥革命の台湾への波及については曾迺碩、前掲書、及び蔣子駿『辛亥革命與台湾早期抗日運動』（台北・文史哲、1990 年）に詳しい。

123 程大学編、前掲『台湾先賢先烈專輯』を参照した。

124 李能棋、前掲書、序 1 頁。

125 李能棋、前掲書、序 1 頁。

[原文] 是三方面反日勢力の大集合：余清芳，代表一般民心自衛本能的抗暴；江定，代表地下武力的引發；羅俊卻是基於民族意識的大義抗日。如此看來，羅俊才是真正的群倫領袖，遺憾的是大旗未舉而身陷敵手，令人扼腕嘆息。

126 蕭阿勤『回帰現実』台北・中央研究院社会学研究所、2008 年、146 頁。

127 同上書、146 頁。

128 楊貴「压不扁的玫瑰花」（原題「春光関不住」）は、楊達が緑島で政治犯として服役中に創作した短編小説であり、獄中誌『新生月刊』（1957 年 6 月）に掲載された。1976 年に中学国語教科書で採用されるにあたり、作者名の本名への改訂、原題からの改題が行われた（楊達『楊達全集 8』台南・国立文化資産保存研究中心籌備処、2000 年、240-241 頁）。なお、『新生月刊』については、黄文成『関不住的繆思—台湾監獄文学縦横論』（台北・秀威資訊科技、2008 年）に詳しい。

129 蕭阿勤、前掲書、185 頁。

130 蕭阿勤、前掲書、168-181 頁。

131 陳少廷『台湾新文学運動簡史』台北・聯經、1977年を参照した。

132 鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集』（全八卷）台北・遠景、1979年を参照した。

133 陳培豊「台湾の文学と歌謡」『中国 21』第 36 期、2012 年、197-203 頁。

134 同上論文、203 頁。

135 沈明進、前掲論文。

[原文] 對同胞、對祖國、對民族的愛與關切

136 李喬『山園恋』台中・台湾省政府新聞處、1971 年。

137 李喬『青青校樹』台中・台湾省政府新聞處、1978 年。

138 『省政叢書』については郭沢寛、前掲書に詳しい。同叢書は 1965 年より出版されて以降、1980 年まで継続的に刊行された。（郭沢寛、前掲書、31-34 頁）

139 郭沢寛、前掲書、252 頁。

140 李能棋、前掲書、73 頁。

[原文] 目睹異族的肆虐橫暴

141 李能棋、前掲書、74 頁。

[原文] 悄悄投入武裝抗日的義民團體

142 李能棋、前掲書、74 頁。

[原文] 殷厚人家，能夠携妻子返回閩粵祖籍，而絕大多數的臺民都無力西行，臺灣是他們生根茁長、血肉相連的地方，縱使有能力離去，又有誰甘心離去？

於是，本來就此起彼落，殺不盡壓不住的抗日烽火，在這個特別的年份裏，義民義軍，便更是風起雲湧前仆後繼而全臺震動了。

143 李能棋、前掲書、217 頁。

[原文] 「日寇回穴，還我河山」，「保我臺灣，歸我祖國」，「佔我家園，誓不兩立」

144 李能棋、前掲書、141 頁。

[原文] 余大元帥的訓話，很簡單、淺顯。他說：

「我們是活不下去了、所以起來反抗。我們不是因爲統治者是日本狗才是反抗

；是日本狗不是漢族人、不讓我們漢族人活下去、我們所以才反抗日本狗。

……

我們不是孤單的一群、全臺人民會起來響應，大陸祖國會支持我們——現在連絡中斷；一接上線，兵力、軍火就會運過來！……」

145 李能棋、前揭書、134 頁。

[原文] 和大陸的通訊斷了，人力支援，軍火供應，都斷了來路

146 李能棋、前揭書、232 頁。

[原文] 臺灣陷日五十年中，抗日革命事件裏，最龐大、慘烈、悲壯的一戰，逐步落幕

147 許素蘭、前揭書、112 頁。

148 李能棋、前揭書、序 2 頁。

[原文] 詳讀八巨冊檔案近三百萬言史料，再赴臺南、高雄二縣市四鄉村莊，參詳傳說，採擷逸聞，訪遺老，弔戰場，瞻遺像，進而目睹忠魂塔骨倉內，刀痕彈跡猶存的烈士遺骸之後，筆者已不忍，不敢，也不能以虛構小說處理。

149 李喬『咒之環』台北鼎·印刻、2010 年、9 頁。

[原文] 「我」是什麼？「我」是誰？

150 同上書、12-13 頁。

[原文] 我站在高一公尺五十公分左右，跟四壁間留下約二十多公分的巨大「骨倉」前面。

完整或不完整的骷髏、髑髏、頭蓋骨、脊椎骨、上下臂骨、大小腿骨、肋骨、散裂的骨盤骨……全都是灰色的。因為沉積覆蓋著厚厚的塵灰……厚厚的歷史……

我拿起一個比較完整的髑髏。面對的右邊太陽穴處有一個食指大小的小孔；左太陽穴這邊是拳頭大小的窟窿。是的，子彈從右太陽穴射入，準確地由左太陽穴穿出並炸掉附近肉骨……我看到了，我真的看到了。我在場啊！

我倏地卡在 1915 年與 1976 年的我拿在手上凝視端詳……我看到自己，我找到

自己。然而，我是誰？我是什麼？

151 李喬、前掲『我的心靈簡史』、57-59 頁。

[原文] 這部傳記小說《結義西來庵》的寫作，使我化蛹成蛾；一個「臺灣小說人」確立下來。

……

我經常反省：如果不經《結義西來庵》的雙重鍛煉：史料吸收與田調能耐，以及「臺灣人」的培^マ育，我不可能寫臺灣歷史系列的作品。

152 李喬、前掲「個人反抗與歷史記憶」、68 頁。

[原文] 這整個經驗對我有兩點重要的啓發，一是如何透過實際接觸和印證，把文字的資料轉化文學，在技巧上我有突破；二是對於臺灣歷史與後來大家談的「臺灣意識」，我有了比較深刻的認知。

153 李喬「尋鬼記」、李喬『李喬短篇小說全集 8』苗栗・苗栗縣立文化中心、2000 年。同全集によると、初出は『中央日報』（1978 年 1 月）である。

154 郷土文学論争については、陳正醒「台湾における郷土文学論戦」『台湾近現代史研究』（第 3 号、1981 年）、及び游勝冠『台湾文学本土論的興起與發展』（台北・群学、2009 年）等に詳しい。

155 台湾のキリスト教については、鄭兪玉「台湾のキリスト教」吳利明ほか『アジア・キリスト教史 1』（教文館、1981 年）、及び五十嵐真子『現代台湾宗教の諸相』（人文書院、2006 年）、藤野陽平『台湾における民衆キリスト教の人類学』（風響社、2013 年）等を参照した。

156 「台湾基督長老教会の受難 4」『福音と世界』（第 35 卷第 10 号、1980 年）67 頁。

157 鄭兪玉、前掲論文、94 頁。

158 查時傑「四十年来的台湾基督教会」、林治平編『基督教與台湾』台北・基督教宇宙傳播中心、1996 年、166 頁。

159 五十嵐真子、前掲書、150 頁。

160 鄭兪玉、前掲論文、74 頁。

161 長老教会と台湾近現代史の関係、長老教会が台湾の近代化に寄与した意義については、藤野陽平、前掲書、鄭兪玉、前掲論文以外にも、「台湾基督長老教会について」（日本基督教団台湾関係委員会編『台湾基督長老教会の歴史と苦難』日本基督教団、1982 年）、及び陳南州『台湾基督長老教会的社会、政治倫理』（台北・永望文化、1991 年）等に詳しい。

162 「台湾基督長老教会の受難 2」『福音と世界』（第 35 卷第 8 号、1980 年）57 頁。

163 「台湾基督長老教会対国是的声明與建議」『台湾教会公報』（第 1076 号、1972 年 1 月）10 頁。

164 同上論文、10 頁。

165 高俊明『「国是声明與建議」在信仰上及神学上之動機』『台湾教会公報』第 1078 号、1972 年 3 月 1 日。

166 王崇堯「台湾处境化神学的發展—論 1970 年後台湾長老教会與台湾政治社会的互動」『神学與教会』（第 28 卷第 2 期、2003 年）366 頁。

167 「基督徒的政治責任」『台湾教会公報』第 1238 号、1975 年 11 月 23 日。

168 「我們的呼籲」『台湾教会公報』第 1230 号、1975 年 9 月 28 日。

169 岡部達味編『中国をめぐる国際環境』岩波書店、2001 年、127 頁。

170 「台湾基督長老教会人權宣言」『台湾教会公報』第 1329 号、1977 年 8 月 21 日。

[原文] 臺灣成爲一個新而獨立的國家

171 同上論文。

172 薛化元『戰後台湾歴史閱覽』台北・五南圖書、2010 年、240、268 頁。

173 李喬、前掲『我的心靈簡史』、216 頁。

174 李喬、前掲『我的心靈簡史』、213 頁。

[原文] 我五十歲以後接觸基督神學

175 葉石濤「論李喬小説裡的『仏教意識』」、葉石濤『葉石濤全集 14』台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008 年、66 頁。初出は『台湾文芸』（第 57 期、1978 年 1

月)である。

176 壹闡提「簡介『金剛經』」『書評書目』(第1期、1972年)

177 壹闡提「淺談仏經誦法」『書評書目』(第8期、1973年)

178 紀野義一 [李喬訳]『真情人生—給拙於生活的人』台北・文皇、1974年。

179 李喬、前掲『我的心靈簡史』、216-217頁。なお、1970年代の李喬作品に対するキリスト教の影響については、李喬自身も宋澤萊との対談の中で、自身の短編小説「昨日水蛭」(1977)等にキリスト教の宗教的思想が表現されていると認めている。「心靈的尋索、文学的旨趣—文学大師的信仰対話：李喬與宋澤萊」、「台湾教会公報新聞網」

<http://www.tcn.org.tw/news-detail.php?nid=6831> (2016年7月4日アクセス)

180 李喬、前掲『文化、台湾文化、新国家』、337-339頁、及び李喬「台湾文学與本土神学」(台湾文学と本土神学)、李喬『李喬文学文化論集(一)』苗栗・苗栗県文化局、2007年、161-162頁。

181 李喬、前掲『我的心靈簡史』、215頁。

[原文] 臺灣社會發生重大事故時，起來「強烈反應」的是基督教，尤其是臺灣基督長老教會

182 台湾の王爺信仰については、三尾裕子「〈鬼〉から〈神〉へ—台湾漢人の王爺信仰について」『民族学研究』(第55巻第3号、1990年)等に詳しい。

183 康豹、前掲書、56-61頁。

184 李能棋、前掲書、1頁。

[原文] 民國四年(公元一九一五年)四月十六日，農曆三月三日。這天是臺南市西來庵，五福大帝排行第三的「宣靈公」劉元達尊神聖誕佳日

185 李能棋、前掲書、67頁。

[原文] 西來庵農曆每月三、六、九都要「降筆」一次

186 李能棋、前掲書、69-70頁。

[原文] 王藍石老舉人開始負起筆生的任務了

……

……老舉人一拈鬚鬚，欣然而喜：「五帝爺說，大事，可行也！」

又問：反日，能不能成功？

香灰上，畫一個三橫一豎。

老舉人說：「這是個王字。王，天下有所歸往也。三者，天地人也；天地人謂之『三才』，三才通而王；王，王天下也：反日一定成功。」

又問：反日，由何處發動？

187 『寒夜』三部作の「序」によれば、各作品の起稿と脱稿時期は次のとおりである。『寒夜』（1975年起稿、1979年12月脱稿）、『荒村』（1979年7月起稿、1980年9月脱稿）、『孤灯』（1978年2月起稿、1979年3月脱稿）。但し、同序文において作者自身は、『寒夜』は「1975年に起稿したが、1977年6月に初稿の十万字を破棄し、改めて書き直した」（於一九七五拈起稿，一九七七年六月將初稿十萬字拋棄，另起爐灶）と述べている。李喬「序」、李喬『寒夜』台北・遠景、1980年、1-3頁。

188 注25。

189 注29。

190 李喬・三木直大・周婉窈・黃華昌「縦談《寒夜》的歷史與文学」『文学台湾』（第61期、2007年）239-245頁。

191 李喬「文学與歷史的兩難」『台湾文芸』（第100期、1986年）18頁。

[原文] 文學是從歷史、人間的「事實」中挑出「真實」，以「虛構」之線連綴成「複合的」也是「複製的」歷史人間。歷史之於文學者，重在藉事件或人物來表達自己的觀念。如果文學創作也忠於歷史人物或事件，但重點也不在「重現它」而在解釋。兩難因而產生。

192 注35。

193 例えば、国立台湾大学での講演を記録したDVDである李喬『長篇小説自剖』（長編小説の分析、2009）でも、「わたしが一生涯のうちで最も敬服する作家はフォークナーで

あります」(我一生當中最佩服的作家示福克納)と述べている。なお、引用は本映像資料
附属の講演録による。(李喬『長篇小説自剖』台北・台大出版中心、2009年、3頁)

194 李喬、前掲『我的心靈簡史』、59頁。

[原文] 起筆時受福克納寫作《聲音與憤怒》(*The Sound and the Fury*) 的啟示

195 本論では以下のテキストを底本に用いる。李喬『寒夜』(台北・遠景、1980年)、李喬
『荒村』(台北・遠景、1981年)、李喬『孤灯』(台北・遠景、1979年)、フォークナー
『フォークナー全集 5 (響きと怒り)』(富山房、1969年)、フォークナー『フォークナー
全集 7 (サンクチュアリ)』(富山房、1992年)、フォークナー『フォークナー全集 9 (八
月の光)』(富山房、1968年)。なお、テキストの引用はすべて拙訳であるが、適宜邦訳の
李喬[岡崎郁子・三木直大訳]『寒夜』(国書刊行会、2005年)を参照した。

196 李喬「從文学作品看台湾人的形象」(文学作品より台湾人の形象を考察す)『台湾文
芸』(第91期、1984年)58頁。

[原文] 「聲音與憤怒」「八月之光」是我平生最佩服的作家「威廉、福克納」的偉大作品

197 李喬『重逢一夢裡的人』台北県・印刻、2005年、235頁。

[原文] 威廉・佛克納是個人唯一無上限、無預設前提的最敬佩的作家

なお、先行研究の中では同書をメタフィクション小説として見なす論考も見られるが
(紀俊龍「李喬『重逢一夢裡的人』探析」、姚榮松・鄭瑞明編『李喬的文学與文化論述—
第五届台湾文化国際學術研討會論文集』台北・国立台湾師範大学台湾文化及語言文学研究
所、2007年)、彭瑞金は前出「李喬研究綜述」の中で、作中で言及されている内容は「李
喬文学研究の第一次資料と呼ぶことができる」(堪稱研究李喬文學的第一手資料)と述べ
ている。(彭瑞金、前掲「李喬研究綜述」、97頁)

198 洪醒夫「偉大的同情與大地的鄉愁」『書評書目』(第18期、1974年)19頁。

[原文] 我獨獨鍾情於威廉・福克納。有沒有受到誰的影響，這個我不清楚。

199 鍾肇政、前掲『鍾肇政全集 25』、435頁。

[原文] 令人莞爾——從我整個學習過程說，純文學的作品，我實在讀得太少了，自從略為

用心於「フォーワナ」之後，年來還真是「怕」讀了，「フォーワナ」的陰魂將統
罩我以後作品的一切。

200 李喬「小説人『応読書』書単』『新書月刊』（第 20 期、1985 年）14-16 頁。

201 李喬「我的文学行程與文化思考」、李喬、前掲『台湾文学造型』、341 頁。

202 大橋健三郎『フォークナー』中央公論社、1993 年、112 頁。

203 陳芳明、前掲『台湾新文学史』、346 頁。

204 同上書、376-377 頁。

205 戦後台湾でのアメリカ現代文学の受容経緯については、余玉照「美国文学在台湾」、
朱炎編『美国文学・比較文学・莎士比亚—朱立民教授七十寿慶論文集』（台北・書林、1990
年）及び李惠珍「美国小説在台湾的翻譯史」（台北県・輔仁大学翻譯学研究所修士論文、1995
年）、単徳興「冷戦時代の美国文学中訳」、彭小妍編著『文化翻譯與文本脈路』（台北・中
央研究院文哲研究所、2013 年）等を参照した。

206 何欣「訳者序」、福克納〔何欣訳〕『熊』台北・晨鐘、1970 年、1 頁。

〔原文〕威廉・福克納雖早已被認爲是二十世紀偉大小説作家之一，他的聲名也早已爲國內
讀者所熟知，但他的作品介紹到國內來的卻還很少，少得幾乎近於零。這倒不是從
事翻譯工作的朋友們懶惰，而是他的文字十分難譯，有些幾乎無法譯成尚能保持一
絲兒原著風格的中文。

207 福克納〔沙文淵訳〕『野椰』屏東市・白沙書屋、1960 年。

208 福克納〔何欣訳〕『熊』台北・晨鐘、1970 年、及び福克納〔何欣訳〕『熊』台北・哲志、1973
年。

209 福克納〔黎登鑫訳〕『熊』台北・遠景、1979 年、及び福克納〔黎登鑫訳〕『熊』台北県
・書華、1986 年、福克納〔黎登鑫訳〕『熊』台北・萬象、1993 年。

210 福克納〔杜若洲訳〕『野棕』私家版、1976 年。

211 福克納〔黎登鑫訳〕『声音與憤怒』台北・遠景、1979 年。

212 李喬、前掲『重逢—夢裡的人』、235 頁。

[原文] 最先接觸到的是何欣教授譯的《佛克納短篇小說選》

213 佛克納 [何欣訳]『佛克納短篇小說選』台北・重光文芸、1959年。

214 「威廉・佛克納」、同上書、3頁。

[原文] 不朽名著「聲音與憤怒 (The Sound and the Fury)」

215 同上論文、4頁。

[原文]「聖堂 (Sanctuary) 出版後，立刻轟動了」

216 壹闡提「我喜愛的書」『書評書目』(第5期、1973年) 61頁。

[原文] 不曉得到目前為止，福克納的小說，除了何欣先生譯的「佛克納短篇小說選」，和中篇「熊」外，還有沒有其他？如果沒有，實在是我們讀書界，也是文壇的一大遺憾。我擁有幾部福克納的日譯本長短篇小說，……我希望，也可以說是祈求從事翻譯的學者先生，能把福克納的重要著作中譯過來；有魄力有眼光的出版社，能推出福克納的全集。

217 国立台湾文学館編『想像の壯遊—十場台湾当代小説の心霊饗宴 2』台南・国立台湾文学館、2007年、208頁。

[原文] 我經常開玩笑說，我是作家當中讀文學作品最少的一個，講起來很不好意思，像《紅樓夢》我就沒有看完，作家如此實在太差勁了，但是有一位作家的作品除外，那就是威廉福克納，我開始讀得非常勉強，我一面查字典一面讀日文的福克納，不過從他的生平傳記，從他的短篇到長篇，對我的影響是很可怕的。

218 壹闡提「威廉福克納的一「秋光」(上)」『台湾時報』1972年8月18日、及び壹闡提「威廉福克納的秋光(下)」『台湾時報』1972年8月19日。

219 壹闡提「威廉福克納的一声音與憤怒」『台湾時報』1972年9月17日。

220 壹闡提、前掲「威廉福克納的秋光(下)」。

[原文]「本文取材於：高橋正雄的日譯本「八月之光」及大橋吉之作：「八月之光的解說」，大橋健三郎作「福克納：南部與現代」等。」

221 壹闡提、前掲「威廉福克納的一声音與憤怒」。

[原文] 本文取材於高橋正雄の日譯本「聲音與憤怒」與解說。(講談社版)

222 フォークナー [高橋正雄訳]『世界文学全集 45 フォークナー』河出書房新社、1961年。

223 フォークナー [高橋正雄・佐伯彰一訳]『世界文学全集 41 フォークナー』講談社、1968年。

224 なお、講談社版の同書には、「響きと怒り」「死の床に横たわりて」「あの夕陽」「エミリーへのばら」の四編が収録されている。

225 西川正身編『フォークナー』研究社、1966年

226 李喬、前掲『重逢—夢裡的人』、236頁。

[原文] 那幾年我的日文書刊唯一來源是鄭清文兄代購的，其中佛氏親弟寫的《想起我兄》(佛克納傳)，和導讀性論集：《W. Faulkner》(西川正身等編著)——是鄭先生贈送的。佛氏日譯書我大都擁有。

なお、原文中の“想起我兄(佛克納傳)”とは、フォークナーの実弟による回想録であるジョン・フォークナー [佐藤亮一訳]『響きと怒りの作家—フォークナー伝』(荒地、1964年)の可能性が高い。

227 鍾肇政、前掲『鍾肇政全集 25』、353頁。

[原文] 這個週末，假日過得十分愉快，一因買回本月份「文藝」(要不要寄給您?)細讀了大作：「阿枝仔和他的女人」，二因清文來信說放棄封筆之說，又開始動了；另外寄來一本「西川正身」編的「フォークナー」，我目前要求的書已足！

228 1974年に実施された前出の洪醒夫によるインタビューに対して、李喬は次のように回答している(洪醒夫、前掲論文、21頁)。「わたしは甲午の年の数年前から光復の数年前にかけて書きたいです。三つの部分に分けてです。……全体の大きな主題はわたしの母親——母親の愛情をもって貫きます。……母親の愛情を追求することは、生命の本源を追求することでもありますし、母親はまさに大地であり、大地はまさに人の本源なのです。……このようなひとつの大きなものがわたしの頭の中で回っていますが、わたしは大きな長篇

を構成することができると思っています。」（我希望寫甲午年前幾年到光復前幾年。分成三段。……而整個大主題是以我的母親——母愛來貫穿。……追求母愛，也是追求生命的本源，母親就是大地，大地就是人的本源。……有這麼一個大的東西在我腦筋裏面轉，我認為可以構成一個大長篇。）前述のとおり、『寒夜』三部作は日本統治期の半世紀を描いた三部作であり、作者の母親をモデルとした主人公の葉灯妹は三部作全体を通して中心的人物に据えられていた。そのため、李喬は洪醒夫のインタビューに応じた際、すでに『寒夜』三部作の骨子を構想していたものと思われる。

229 日本ウィリアム・フォークナー協会編『フォークナー事典』松柏社、2008年、656頁。
なお、“ヨクナパトーフア”とはインディアンの言葉で“水はゆるやかに平坦地を流れる”という意味であり、アメリカのミシシッピ州を流れるヨクナ川の古名でもある。（大橋健三郎、前掲『フォークナー』、99頁）

230 西川正身編『フォークナー』研究社、1966年、16頁。

231 大橋健三郎、前掲『フォークナー』、202頁。

232 同上書、vii頁。

233 廖偉竣〔宋澤萊一筆者注〕「走出「寒夜」的作家——李喬訪問記」『暖流』（第1卷第4期、1982年）49頁。

[原文] 當我寫孤燈寫到太平洋戰爭時，對於“FICTION”我有了更深的解悟，所謂人的「想像力」實在是非常有限，小說必然是建築在許多真實的「點」之上的，「虛構」只是一種線；把真實給連結起來，這樣便是小說了。

234 『寒夜』三部作の各作品における起稿及び脱稿時期については、注 186 を参照されたい。

235 大橋健三郎、前掲『フォークナー』、10頁。

236 壹闡提、前掲「威廉福克納の—声音與憤怒」。

[原文] 「聲音與憤怒」和「薩特利斯」以及「秋光」（已於八月十八日介紹）一樣，是以架空的「傑弗遜」鎮為背景寫成的。這是描述名門「堪普森」家族沒落的故事。

237 李喬、前掲『重逢—夢裡的人』、236 頁。

[原文] 佛氏「納實存虛」地創造了「約克那柏陶伐郡」，讓我大膽地以童年生活基地「蕃仔林」，複製為李喬「歷史素材小說」的整個空間。

238 前出『小説入門』によれば、李喬は「一千万字以上の史料を読み、田野のお年寄りや生き証人を百人以上訪ね」（閱讀了千萬字以上史料文字，訪問過野老遺賢百人以上）て、『寒夜』三部作と『結義西來庵』を書きあげたという。（李喬、前掲『小説入門』大安版、200 頁）

239 李喬、前掲『寒夜』、321 頁。

[原文] 然而，岳大人阿強伯的臉色十二分難看，人華更是冷言冷語；人興帶著阿枝仔回來了。阿枝仔的第一胎孩子夭亡，現在又已大腹便便。現在，阿漢在彭家，成了真正多餘的一口。

在這段時間，北臺灣動亂的消息不斷流傳過來。聽說街上的富裕人家都紛紛北上了；不，是南下逃亡，準備由安平、打狗一帶的港口出海逃難。因為北部已經陷落；東洋蕃在臺北城已經開府視事，於六月十七日舉行「始政式」。

240 李喬、前掲『荒村』、274 頁。

[原文] 趙港是黃的最早同志。最後，他們取得協議：關於組織「農民黨」部份免議；爲了加強組織力量，擴大影響面，增加抗爭實力和協助更多的農民大眾，決定改組「佃農組合」爲「農民組合」。

——這就是劉明鼎眼前的任務：協助成立「農民組合」。

在這期間，明鼎有很多和簡吉接觸的機會。簡吉是一位滿懷熱情，富於俠義心的年輕人；在農民運動上的理論與理想，比郭秋揚、黃、趙等人高出許多；簡識見淵博，知道好多明鼎完全陌生的東西；一些明鼎十分吃驚的立論與手段，簡都好像十分熟悉，而且視作平常事物。

241 若林正丈、前掲『台灣抗日運動史研究 增補版』、444 頁。

242 李喬、前掲「序」、1 頁。

[原文] 臺灣光復前後臺灣山村的非人生活，以及十萬青年赴戰南洋的事跡

243 李喬・三木直大・周婉窈・黃華昌、前掲「縦談《寒夜》の歴史與文学」、250 頁。

[原文] 我寫了更大的人類共同的災難，那就是戰爭

244 フォークナー、前掲『フォークナー全集 7』、9 頁。

245 岡本勝『禁酒法』講談社、1996 年、3-44 頁。

246 前掲『フォークナー事典』、477 頁。

247 岡本勝、前掲書、3-44 頁。

248 森岡裕一『飲酒／禁酒の物語学』大阪大学出版会、2005 年、181 頁。

249 同上書、181 頁。

250 大橋健三郎『フォークナー研究 2』南雲堂、1979 年、16 頁。

251 サラ・M・エヴァンズ [小檜山ルイ・竹俣初美・矢口祐人・宇野知佐子訳]『アメリカの女性の歴史』明石書店、2005 年、285-287 頁。

252 前掲『フォークナー事典』、108、110、574 頁。

253 上杉忍『公民権運動への道』岩波書店、1998 年、121 頁。

254 前掲『フォークナー事典』、485 頁。

255 上杉忍、前掲書、122、124 頁。

256 田中久男『ウィリアム・フォークナーの世界』南雲堂、1997 年、206 頁。

257 同上書、12 頁。

258 壹闡提、前掲「威廉福克納的秋光（下）」。

[原文] 福克納的作品，往往被目爲「地方性的」，也就是我們說的「鄉土文學」，這是他生長的大小環境悠關，但是他的作品絕不自限於「地方性」；福克納之所以偉大處，正是這種由美國南方獨特的自然底，風格底，道德底出發，然後和現代底人間的條件相通相融，構成屬於他的藝術世界。

259 李喬、前掲『寒夜』、140 頁。

[原文] 住口！這是我們出血流汗，拿頭腦換來的活命地盤

260 李喬、前揭『寒夜』、140 頁。

[原文] 頭朥可以拿去，田地，不行！

261 李喬、前揭『荒村』、16-17 頁。

[原文] 「你阿漢哥，也算出頭天啦，你……」古阿龍大概想起什麼，話突然中斷了。

「出頭天？哈，出頭天！」

「子女長大了嘛！你也不簡單啊，咬薑嚼醋，難爲你們夫婦白手成家的。」

「子女長大又怎麼樣？多一張嘴，就是多一份受苦受難的野人！」

「嗯……」

「人，好像生下就是來受苦的。」

「話，不能這樣說——祇有我們才這樣。」

「臺灣人才這樣。」

「那些頭家，那些三腳仔就不一樣。」

「窮苦的臺灣人才這樣。」

「阿漢哥：什麼時代，我們臺灣人才能出頭天？」

262 何義麟『二・二八事件—「台湾人」形成のエスノポリティクス』東京大学出版会、2003 年、34 頁。

263 同上書、34 頁。

264 李喬、前揭『孤灯』、323 頁。

[原文] 他們一行三十多人，經過聖斐南多空蕩蕩的大街，朝北走去。砲聲隱隱，前途茫茫。路面，時時有輕微而持續的震顫，就不知道是戰車，還是大編制轟炸機羣所引起的？

故鄉是否安然無恙？

蕃仔林是個偏僻的山村，總不會受到敵機的空襲吧？明基邊走邊想。可是，整個臺灣島呢？

265 平石貴樹『アメリカ文学史』松柏社、2010 年、388 頁。

266 田中久男、前掲書、190 頁。

267 田中久男、前掲書、116 頁。

268 美麗島事件は 1979 年 12 月 10 日に発生したが、事件当時すでに『孤灯』は完成しており、『寒夜』も物語の大方は書きあがっていたようである。各作品の脱稿時期については注 186 を参照されたい。

269 李喬、前掲「我的文学行程與文化思考」、341 頁。

[原文] 真正使我成長的是「中壢事件」與「美麗島事件」。在年輕朋友面前我從不諱言：我這一代大都白活了十年十五年；如果無「中壢事件」、「美麗島事件」的教育，我怕是老死也未長大呢！是的，由「寒夜」寫作的緣由，臺灣社會重大事件的刺激，李喬不得不由文學的自限而邁向文化的思考了。

270 彭瑞金、前掲『台湾新文学運動 40 年』、127 頁。

[原文] 限於財力，辦得薄薄的，其貌不揚，發布出稿費

271 注 9。

272 隅谷三喜男・劉進慶・涂照彦『台湾の經濟—典型 NIES の光と影』東京大学出版会、1992 年、39 頁。

273 蕭新煌「工業化・都市化と社会變動」、戴國輝編『もっと知りたい台湾』弘文堂、1986 年、63-79 頁。

274 「渡假美軍刺傷吧女案是否撤回捨棄權 檢察官正研究中」『聯合報』（1967 年 3 月 8 日）、「吧女裸屍案小心求証 周首席指示毋枉毋縱」『聯合報』（1972 年 4 月 28 日）、「酒吧女陳屍大飯店」『中国時報』（1973 年 3 月 10 日）、「涉嫌扼斃吧女魯賓遜判五年」『聯合報』（1973 年 8 月 4 日）等を参照した。

275 李喬は 1965 年 9 月 14 日の鍾肇政宛ての書簡で、「わたしは自分が自らの確かな風格を持ちたいと思います」（我希望自己有屬於自己的真正的風格）と記している。（鍾肇政、前掲『鍾肇政全集 25』、26 頁）

276 鍾肇政、前掲『鍾肇政全集 25』、385 頁。

[原文] 半年來，文壇上「社會派」甚壯聲勢，而幾位學院派首腦提出主張云云，想起來好些一直自己就這樣做了（沒啥新鮮值得鼓之極之？）

277 鍾肇政、前掲『鍾肇政全集 25』、395-396 頁。

[原文] 從楊青矗先生崛起，以「社會路線」見稱後，我就漸想後退了，但與某思想所牽，寫來總是社會意識很重，……

278 許素蘭、前掲書、109 頁。

[原文] 1974 到 1976 年之間，李喬的小說創作，確實呈現由峰頂往谷底傾斜的走勢

279 注 230。

280 洪醒夫、前掲論文、16 頁。

281 本論では以下のテキストを底本に用いる。李喬「小説」、李喬『李喬短篇小説全集 9』（苗栗・苗栗県立文化中心、2000 年、11-50 頁）、及び安部公房「砂の女」、安部公房『安部公房全集 16』（新潮社、1998 年、115-250 頁）。なお、「小説」の引用はすべて拙訳であるが、適宜邦訳である鄭清文・李喬・陳映真〔中村ふじゑ・松永正義・岡崎郁子訳〕『三本足の馬』（研文出版、1985 年）所収の松永訳を参照した。

282 李喬「苦海坑」『自由談』（第 14 卷第 1 期、1963 年）39-41 頁。なお、同作発表時の表題は「苦海坑」であり、大賞の賞金は 1500 元だった。（「自由談五十二年新正徴文小啓」『自由談』第 13 卷第 10 期、1962 年、39 頁）

283 彭歌「『自由談』歳月」『文訊』（第 240 期、2005 年）25-30 頁、及び顧敏耀「『自由談』概述」『文訊』（第 240 期、2005 年）25-26 頁。

284 応鳳凰「鍾肇政與五、六十年代台灣文化生産場域」、鄭焯明編『越浪前行的一代』高雄・春暉、2002 年、214-215 頁、及び顧敏耀、同上論文、31-35 頁。

285 李喬「繽紛二十年」（波瀾万丈の二十年間）、李喬、前掲『李喬短篇小説全集資料彙編』、36 頁。初出は『自由日報』（1981 年 10 月 3-4 日）である。

286 壹闡提「我看『台湾文学』」『台湾文芸』（第 73 期革新第 20 号、1981 年）210 頁。

[原文] 西洋的，尤其美國的日本的文學理論與作品卻源源開入這久被蹂躪的海島臺灣

なお、戒嚴時期に発表された同文は、その後の民主化後に前掲『台湾文学造型』へ収録されるにあたり論述内容の書き換えが部分的に行われたが、本論で引用する箇所には記述の変更等は見られない。

287 同上論文、211 頁。

[原文] 那就是日本、歐美的強烈影響，尤其一九四九年之後的二十多年間，臺灣的文壇幾乎全籠罩在歐風美雨之下

288 李喬「與我周旋寧作我」、李喬、前掲『李喬短篇小說全集資料彙編』、19 頁。初出は『中華日報』（1974 年 1 月 18 日）である。

[原文] 在我開始習作那幾年，正是所謂文藝「現代化」口號很熱鬧時期。……對於「新的，我的原則是：絕不以不懂爲懂——看不懂，假裝做懂；……

289 葉石濤「從鄉土文学到三民主義文学」、葉石濤『葉石濤全集 18』台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008 年、294 頁。初出は『台湾文芸』（第 62 期革新第 9 号、1979 年）5-31 頁である。

[原文] 鍾肇政或李喬接受西化的影響也不是不可能，畢竟一個作家需要不斷地吸取新的技巧、嘗試新的創作方法才可能進步，才能拓展他的視野，這也沒有什麼奇怪的。不過他們接受西方文學的動機純粹是爲了豐富他的文學、創新他的文學，這和盲目地奉西方文學爲圭臬的膜拜是不相同的。

290 賴松輝「現代主義與李喬早期的小說」、姚榮松・鄭瑞明編、前掲書、567 頁。

[原文] 表現出強烈的現代主義風格

291 葉石濤、前掲「兩年来的省籍作家及其小説」、156 頁。

292 李喬、前掲「繽紛二十年」、36 頁。

[原文] 被人談論最多，轉載最多的所謂意識流小説

293 鍾肇政「飄然曠野裏的李喬」『自由青年』（第 35 卷第 4 期、1966 年）24 頁。

[原文] 李喬屢次地在其作品中擷取了各種意識流手法，加以嘗試性的運用，成績都相當圓滿

294 実存主義については、廣松渉ほか編『哲学・思想事典』（岩波書店、1998年）、及び永井均ほか編『事典 哲学の木』（講談社、2002年）、実存主義と文学の関係については、飯島宗享・吉澤傳三郎編『文学—実存主義講座VII』（理想社、1973年）等を参照した。

295 許素蘭、前掲書、及び李喬「窮山月明」、李喬、前掲『李喬短篇小説全集資料彙編』（初出は『民衆日報』1980年12月26日）、李喬、前掲『我的心靈簡史』等を参照した。

なお、李喬が新竹師範学校に在学したのは、1951年9月から1954年7月までである。

（彭瑞金編、前掲『台湾現当代作家研究資料彙編27—李喬』、65頁）

296 頼松輝、前掲論文、585頁。

297 呂正恵「西方文学翻訳在台湾」、封德屏主編『台湾文学出版』、台北・行政院文化建設委員会、1996年、245頁、及び周伯乃「西方文芸思潮对我国六十年代文学的影響」『文訊月刊』（第13期、1984年）38頁。

298 陳芳明、前掲『台湾新文学史』、363頁、及び葉石濤「六十年代的台湾郷土文学」『文訊月刊』（第13期、1984年）142頁。

299 何欣「六十年代的文学理論簡介」『文訊月刊』（第13期、1984年）41頁。

[原文] 那時節存在主義像一陣狂風般，其力似乎是不可抗的，存在主義哲學方面的著作有了譯本，獲得了廣大讀者的喜愛

300 同上論文、41-42頁。

[原文] 沙特和卡繆的作品之分析介紹，出現在雜誌上和報紙副刊上，沒有讀過「嘔吐」、「異郷人」，甚至卡夫卡的小說的「文學愛好者」，彷彿就像沒有讀過好作品似的

301 葉石濤「卡繆論」、葉石濤、前掲『葉石濤全集13』、87-96頁。初出は『台湾文芸』第3卷第10期、1966年、30-34頁）、及び松崎寛子「鄭清文『旧金山一九七二』における在米台湾人留学生表象」（『東方学』第122輯、2011年）107頁。

302 李喬、前掲「窮山月明」、30頁。

[原文] 記得在十七八年前的臺灣文壇，正是現代主義現代小説橫掃一切的時刻。我也不能免俗，一度沈湎於實存哲學（存在主義）的醇醪裡，沙特、卡繆、貝克特、齊克果、

カ夫カ等大師經常登上我心靈原野。

303 李喬、前掲「小説人『応読書』書単」、14-16 頁。

304 吉本隆明『吉本隆明全著作集 4』勁草書房、1969 年、379 頁。

305 木村陽子『安部公房とはだれか』笠間書院、2013 年、48-56 頁。

306 ヴラスト・ヴィンケルヘーフェロヴァー [竹田裕子訳]「チェコでの安部公房」『すばる』(第 15 巻第 6 号、1993 年) 208 頁。

307 沼野充義「世界の中の安部公房」『国文学—解釈と教材の研究』(第 42 巻第 9 号、1997 年) 12 頁。

308 安部ねり『安部公房伝』新潮社、2011 年、302 頁。

309 李喬、前掲『小説入門』大安版、20 頁。

[原文] 在日本，在世界文壇上，都稱得上特異的作家，最富有「原創力」的作家之一

310 鄭清文「読『人球』」(『台湾文芸』第 7 巻第 29 期、1970 年) 71-72 頁。また三木直大は、「人球」の物語は 1960 年代末から台湾が直面していた政治的情況のメタファーにもなっていると指摘する。(三木直大「李喬文学中的現代性・郷土性・大衆性」、姚栄松・鄭瑞明編、前掲書、21-23 頁)

311 「人球」におけるカフカからの影響について言及した論考には、葉石濤、前掲「論李喬小説裡的『佛教意識』」などがある。

312 李喬、前掲「個人反抗與歴史記憶」、77 頁。

[原文] 我讀過卡夫卡的《蛻變》、安部的《デンドロカカリヤ》(一種菊花)、《人球》寫一半，這兩篇一先一後跑出來了，於是寫不下去了

313 川西政明『新・日本文壇史 10』岩波書店、2013 年、292 頁。なお、本論では「デンドロカカリヤ」の引用は安部公房『安部公房全集 3』(新潮社、1997 年) 所収の書肆ユリイカ版に拠る。

314 白川正芳「夢の象徴」『ユリイカ』(第 8 巻第 3 号、1976 年) 169 頁。

315 北川透「メタファーとしての変身」、佐藤泰正編『文学における変身』笠間書院、1992

年、138 頁。

316 石橋佐代子「『デンドロカカリヤ』論」『名古屋近代文学研究』（第 19 号、2001 年）45 頁。

317 高野斗志美『安部公房論』花神社、1979 年、12 頁。

318 鍾肇政、前掲『鍾肇政全集 25』、102 頁。

[原文] 該「デンドロカカリヤ」似迄無譯文，何妨再爲國人揮筆？

319 李喬、前掲「個人反抗與歷史記憶」、77 頁。

[原文] 安部寫過一些存在主義的東西

320 「編後記」『文学界』（第 1 集、1982 年）222 頁。

[原文] 回想臺灣人民的一段悲傷歷史

321 周寧「喜悅之種種」、周寧編『七十一年短篇小說選』台北・爾雅、1983 年、2 頁。

[原文] 象徵著國內作品境界的新的高峰

322 張振翱編『飄泊與原鄉』台北・国立編訳館、1992 年。

323 若林正文「語られはじめた現代史の沃野」、鄭清文・李喬・陳映真、前掲書、184-204 頁。

324 同上論文、188 頁。

325 同上論文、188 頁。

326 李喬「小説」、李喬、前掲『李喬短篇小說全集 9』、40 頁。

[原文] 於是，他慢慢地努力聚集信心、耐心，也決心專心準備承擔必然還會再來的那些「體刑」；要堅忍支持下去，忍受下來；不要反抗，不要出現任何不馴神色，要靜靜地接受，默默熬下去。

他這樣想，也這樣做。他覺得自己充滿了希望……

327 同上論文、49 頁。

[原文] 「唉！」他不覺又嘆了口氣。

他想不該嘆氣的。還是搖頭吧。他繼續搖頭。他再被押上警車；這是一部遮上

黑幔的警車，裡面漆黑不見五指。

不過沒關係。他根本不想看什麼，也不想聽什麼。他閉上眼睛養神。他想以坐式做吐納功夫，可惜不很成功。

他現在能做的，只有繼續搖頭而已。

328 彭瑞金「導讀」、向陽主編『二十紀台灣文學金典—小說卷・戰後時期・第一部』台北・聯合文學、2006年、214頁。

329 李喬「小說研究場域與現代文學理論譜系」『文學台灣』（第71期、2009年）132頁。

[原文] 非常偉大的思想

330 同上論文、132頁。

[原文] 人生存在的問題是要人自己面對的，沒有辦法交給上帝

331 同上論文、133頁。

[原文] 人是在自己去面對才真正存在

332 同上論文、133頁。

[原文] 最有名的薛西弗斯（Sisyphus）的神話，宙斯要他在那個坑裡面永遠推那個巨石，一推到山頂上又壓下來，他一直做，好像無謂地永遠不會達到結果的。因為你達到山頂上達到目標，在巨石的壓迫下得不到解放，到山頂上又下降下來。所以都是無謂的、沒有結果的。另外一個角度來講，石頭壓下來，我努力把他推上去，這個過程你就存在；當人面對無可抵抗的巨石壓下來的時候，莊嚴不是藉神的力量，而是你自己要把它一直推；推的過程，證明我是我，我是存在的。

333 ドナルド・キーン「解説」、安部公房『砂の女』新潮社、2003年、269-276頁。

334 磯貝英夫「砂の女」『国文学—解釈と教材の研究』（第17巻第12号、1972年）55頁。

335 渡辺広士『安部公房』審美社、1976年、57頁。

336 磯貝英夫、前掲論文、55頁。

337 加藤弘一「解説」、安部公房『（霊媒の話より）題未定』新潮社、2013年、283頁。

338 大江健三郎「解説」、安部公房『他人の顔』新潮社、1989年、286頁。

339 大江健三郎『持続する志』文芸春秋、1968年、341頁。

340 平岡篤頼「安部公房における小説の方法と文体」『国文学—解釈と教材の研究』（第17巻第12号、1972年）39頁。

341 高野斗志美「新たなコンセプトによる作品案内」『国文学—解釈と教材の研究』（第42巻第9号、1997年）141頁。なお、『砂の女』をめぐる様々な解釈についての具体的事例は、石崎等編『安部公房「砂の女」作品論集』（クレス出版、2003年）を参照されたい。

342 磯貝英夫、前掲論文、61頁。

343 紅野敏郎「『砂の女』」『国文学—解釈と鑑賞』（第36巻第1号、1971年）104頁。

344 鍾肇政「安部公房與砂丘之女」、安部公房〔鍾肇政訳〕『砂丘之女』台北・純文学、1967年、9頁。

[原文] 安部是把文學表現的主力傾注在與砂搏鬥的人之精神運動上面，而並不是把落入圈套進了砂洞無法出來的一個人的經歷體驗，寫成一部小說的。因此通過那個教師的對砂的搏鬥過程而絕望地發現的世界，也就是現實世界的一個新的側面，便與我們的現實世界的具體生活相疊在一起。我們與教師一起搏鬥，這使我們發現怎樣地和現實生活上的絕望的困難搏鬥下去的方法。

345 葉石濤「林海音論」、葉石濤、前掲『葉石濤全集 13』、188-189頁。初出は『台灣日報』（1968年1月8-10日）である。

[原文] 《砂丘之女》的那被擄的博物教師和女人住在砂之威脅中生活，假若時時刻刻不把砂弄出，就有被砂埋沒的危險。那不斷地滑落下來的砂等於薛西弗斯的大石頭。因此，永無休息的挖砂弄出的工作，才給他們帶來生存意識。

346 鍾肇政、前掲『鍾肇政全集 25』、80頁。

[原文] 三讀尊譯的「砂の女」，如果不是「先」有卡繆「異鄉人」，砂作實在是絕響——我是說「砂」，好像是「異」的改善與引申……

347 白井浩司「解説」、カミュ〔窪田啓作訳〕『異邦人』新潮社、1995年、135頁。

348 呂正恵、前掲論文、245頁。

349 同上論文、245 頁。

350 高幸玉「日本小説在台灣的翻譯史」台北縣・輔仁大學翻譯學研究所修士論文、2004 年、15 頁。

351 鍾肇政『世界文壇新作家』台北・林白、1969 年、78 頁。

[原文] 川端康成獲得諾貝爾獎後，此間文壇掀起了一陣「川端旋風」，翻譯他的作品，報導其軼事，出版其作品，連篇累牘，熱鬧之極。似乎連帶地，日本文學也重新受到我們文壇的注目。

352 戰後台灣における近現代日本文学の受容情況については、高幸玉、前掲論文が詳細に論じている。

353 李永熾『歷史・文學與台灣』台中・台中縣立文化中心、1992 年、175 頁。初出は『中國時報』（1988 年 7 月 7 日）である。

[原文] 前二十年在文學、文化上幾乎與日本斷絕關係

354 同上論文、175 頁。

[原文] 到一九六八年，川端康成榮獲諾貝爾文學獎，臺灣出現川端康成旋風後，臺灣對日本文學的態度才有所改變

355 純文學月刊社とは、『聯合報』「聯合」副刊で主編をつとめた林海音が 1968 年に設立した純文學出版社の前身である。純文學月刊社や純文學出版社より発行された文芸誌『純文學』や純文學叢書は、当時の台灣文壇に大きな影響を及ぼしていた。（汪淑珍「林海音成功經營『純文學出版社』策略解析」『出版與管理研究』第 2 期、2006 年、85-102 頁、及び応鳳凰「文芸雜誌、作家群落與六〇年代台灣文壇」、東海大學中國文學系編『苦悶與蛻變』台北・文津、2007 年、117-150 頁）

356 鍾肇政、前掲『世界文壇新作家』、130 頁。

[原文] 轟動一時的安部公房的作品「砂丘之女」

357 鍾肇政「改版後記」、安部公房[鍾肇政・劉慕沙訳]『砂丘之女及其他』台北・純文學、1975 年、253 頁。

[原文] 行銷一個時期之後即告絕版

358 管見の限りでは、1967年4月初版の『砂丘之女』は1969年に第3刷を刊行している。

359 鍾肇政、前掲「安部公房與砂丘之女」、3頁。

[原文] 自從一九四七年起安部就是個文壇上最特異的，也是最重要的作家之一

なお、「一九四七年」とは安部公房の自費出版詩集『無名詩集』の刊行年を指すものと考えられる。(谷真介編『安部公房評伝年譜』新泉社、2002年を参照した)

360 同上論文、4頁。

[原文] 如今他已是個受着世界文壇矚目的人物，則是不容否認的

361 なお、鍾肇政、前掲『世界文壇新作家』では、アラン・ロブグリエやハロルド・ピンターをはじめ、仏・英・米・西独・日の新鋭作家の作風と経歴が紹介されているが、日本人作家では安部公房と三島由紀夫の二人が挙げられている。

362 安部公房 [鍾肇政・劉慕沙訳]、前掲『砂丘之女及其他』。なお、同作には『砂の女』のほか、「赤い繭」「棒」「無関係な死」「魔法のチョーク」など短編小説四編を収録する。

363 鍾肇政「日本文壇怪傑」、鍾肇政『鍾肇政全集 21』桃園・桃園県文化局、2002年、624頁。

[原文] 依然有不錯的銷路，足見此書受人歡迎

364 安部公房 [鍾肇政訳]『燃燒的地図』台北・遠行、1977年。なお、同作は1970年5月から同年9月にかけて総合誌『這一代』(復刊)で連載された。

365 安部公房 [魏明果訳]『跳蚤奔月』台北・遠行、1978年。なお、同作には「探偵と彼」「家」「鉛の卵」「使者」「透視図法」「月に飛んだノミの話」「賭」「完全映画」「なわ」など短編小説九編を収録する。

366 安部公房 [劉慕沙訳]『夢幻兵士』台北・遠行、1978年。なお、同作には「夢の兵士」「棒」「手段」「鍵」「盲腸」「変形の記録」「ごろつき」「耳の値段」「犬」「鏡と呼子」など短編小説十編を収録する。

367 安部公房 [鍾肇政訳]『箱子裏的男人』台北・遠景、1979年。

368 鍾肇政「関與『燃燒的地図』」、安部公房〔鍾肇政訳〕『燃燒的地図』台北・遠行、1977年、1頁。

〔原文〕安部公房這位日本著名作家，在此間已不算太陌生了

369 なお、後に『砂丘之女』は劉蘋華による新訳（1986年）、呉憶帆による新訳（2007年）も出版されている。（安部公房〔劉蘋華訳〕『砂丘之女』台北・星光、1986年、及び安部公房〔呉憶帆訳〕『砂丘之女』台北・志文、2007年）

370 木村陽子、前掲書、9、52頁、及び谷真介編、前掲書などを参照した。

371 村松定孝・武田勝彦著『海外における日本近代文学研究』早稲田大学出版部、1968年、219-220頁、及び木村陽子、前掲書、52-53頁。

372 沼野充義、前掲「世界の中の安部公房」、12頁、及び木村陽子、前掲書、59頁、谷真介編、前掲書などを参照した。

373 沼野充義「辺境という罫」『すばる』（第15巻第6号、1993年）200頁。

374 ミコワイ・メラノヴィッチ「『砂の女』を再読して」『すばる』（第15巻第6号、1993年）211頁。

375 同上論文、215頁。

376 同上論文、212-214頁。

377 なお、沼野充義によれば、旧ソ連でも『砂の女』は自国の「全体主義社会を寓意的に描いたものとして読み替えられた」という。（沼野充義、前掲「辺境という罫」、201頁）

378 沼野充義、前掲「世界の中の安部公房」、16頁。

379 若林正丈『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、2008年、82頁。

380 同上書、82頁。

381 松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』慶應義塾大学出版会、2006年、126頁。

382 若林正丈『台湾—分裂国家と民主化』東京大学出版会、1992年、168頁。

383 同上書、289頁、及び若林正丈、前掲『台湾の政治』、69頁。

384 方以直〔王鼎鈞—筆者注〕「砂丘之女」『微信新聞報』1967年4月5日。

[原文]「純文學」第四期，有鍾肇政先生譯的「砂丘之女」，好文章！特在此向同好推介。

……「砂丘之女」中有一個奇異的、迷離恍惚的世界，充滿了象徵的意義。……有時候，我想，落入陷阱的男主角也許能象徵獨裁暴政下的人民，環境的巨大壓力，使他們逐漸失去人性的尊嚴和反抗的意識。

385 菅野敦志、前掲『台湾の国家と文化』、327-328 頁。

386 林淇瀆『書写與拼图』台北・麦田、2001 年、186 頁。

387 李喬・高天生編『台湾政治小説選』台北・台湾文芸、1983 年。なお、同書の出版年は奥付に明記されていないが、彭瑞金編、前掲『台湾現当代作家研究資料彙編 27 —李喬』によれば 1983 年であるという。

388 「【李昂インタビュー】台湾のフェミニズム文学」、李昂 [藤井省三訳]『夫殺し』宝島社、1993 年、171 頁。

389 彭瑞金「回顧一段迢迢文学路—『文学界』停刊感言」『文学界』（第 28 集、1989 年）6 頁。

[原文] 時代的產物

390 鄭焯明「写在『文学界』停刊之前」『文学界』（第 28 集、1989 年）1 頁。

[原文] 題材稍微敏感的作品，沒有地方可發表

391 同上論文、1 頁。

[原文] 接納了它們，成爲臺灣文學的避風港

392 李喬の作品では「小説」のほか、政治小説「告密者」も『文学界』（第 4 集、1982 年）に掲載されている。国民党による密告の使命を帯びた主人公の湯汝組が、自らを密告の対象としてしまう同作は、党国体制を支えるために台湾社会の隅々にまで浸透した密告制度を糾弾する物語であったと言えよう。

393 若林正文、前掲「語られはじめた現代史の沃野」、186 頁。

394 同上論文、186 頁。

395 李喬「文学界的未来」『文学界』（第 28 集、1989 年）21 頁。

[原文] 二十世紀後二十年是臺灣島嶼決定命運的關鍵時刻，臺灣文學的新的高峰當也在這個時候創造。今天，身為臺灣人，尤其身為文化人、文學者，非常非常需要、謹慎且嚴密地、謙卑但不失自信地，以自主的立場重新思考各種「存在的意義」——包括生命、幸福、臺灣、臺語人、族群、民族、歷史、國家、臺灣獨立、臺灣合併於「中國」（說統一，不合事實，祇能說「合併」。）、文化、文學等等，都要「重新思考」、思考其「存在的意義」。試回首一瞥世界各大民族，在歷史的重要時刻，唯能從現實出發、重新思考各種存在的意義，然後以行動成就或完成或實現那「新的存在意義」，其正是新時代誕生之日。

396 注 341 で引用した箇所は、大江健三郎「安部公房案内」（大江健三郎・江藤淳編『われらの文学 7—安部公房』講談社、1966年、479頁）の記述に酷似する。なお、同書については鍾肇政自身も同解説（「安部公房與砂丘之女」）の中で言及している。

397 この点については、鍾肇政と鄭清文の間での書簡（鍾肇政『鍾肇政全集 26』桃園・桃園県文化局、2002年）、及び葉石濤の鍾肇政宛て書簡（葉石濤『葉石濤全集 11』台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008年）等を参照されたい。

398 若林正丈、前掲『台湾—分裂国家と民主化』、165頁。

399 安部公房は1951年に日本共産党に入党し、『人民文学』や新日本文学会での中心的作家として活動した後、1962年2月に花田清輝らと共に日本共産党を除名されている。なお、『砂の女』は1962年6月に刊行された。（谷真介編、前掲書を参照した）

400 葉石濤、前掲『葉石濤全集 11』、30頁。

[原文] 安部公房很明顯地絕對是

401 葉石濤、前掲『葉石濤全集 11』、30頁。

[原文] 你也太粗心了

402 鍾肇政、前掲『鍾肇政全集 26』、188頁。

[原文] 不過我想，只是接近ism，並非ist，不大會有問題的吧

403 二二八については、何義麟、前掲書、及び何義麟『台湾現代史—二・二八事件をめぐ

る歴史の再記憶』(平凡社、2014年)等を参照されたい。

404 張炎憲「走出更寬廣的遠景」、鍾逸人『辛酸六十年』台北・自由時代、1988年、17頁。

[原文] 二二八事件是二次大戰後影響臺灣最具深遠的一次事件

405 同上論文、17頁。

[原文] 至今臺灣很多政治社會問題，仍然起源於這個事件

406 例えば、2015年には台北市での二二八犠牲者追悼式典に遺族代表の一人として参列した柯文哲台北市長の演説が台湾社会で反響を呼び、また同年夏には二二八への言及も含む高校歴史教科書の改訂に反発した高校生自身が、主管官庁に突入して抗議活動を行うなど、今日の台湾社会でも二二八はただの往時の出来事として見なされているわけではなかった。

(「首位 228 受難者家属首都市長」『自由時報』2015年3月1日、及び「反黒箱課鋼学生夜襲教部衝進部長室」『自由時報』2015年7月24日)

407 李喬『埋冤 1947 埋冤』基隆・海洋台湾、1995年。『埋冤 1947 埋冤』は、上巻の『埋冤、1947』と下巻の『埋冤、埋冤』という上下二巻で構成される。本論では同作上巻を『埋冤(上)』、下巻を『埋冤(下)』と記す。なお、本論では以下の版本を底本に用い、テキストの引用はすべて拙訳である。李喬『埋冤 1947 埋冤(上)』苗栗・客家文化廣播電台、2003年三版、及び李喬『埋冤 1947 埋冤(下)』苗栗・客家文化廣播電台、2003年三版。

408 彭瑞金、前掲『驅除迷霧找回祖靈』、146頁。

[原文] 整個焦定二二八事件而寫的歷史小說

409 李喬、前掲『李喬文学文化論集(一)』、50頁。

410 李喬、前掲『埋冤(下)』、643頁。

[原文] 實際寫作時間約三年半，收集資料、採訪口述等前後十年

411 『埋冤(上)』に掲載分は当初、台北の『首都早報』に連載されたが(1990年3月7日から同年8月28日まで)、経営上の問題により同紙が廃刊されたことに伴い、その後は高雄の『台湾時報』に連載されて完結した(1990年12月29日から1991年11月7日ま

で)。一方、『埋冤（下）』に掲載分は台北の『自立晩報』に連載された（1993年2月21日から1994年7月18日まで）。なお、『埋冤（上）』の起稿は1989年冬、脱稿は1991年7月31日であり、『埋冤（下）』の起稿は1992年1月、脱稿は1994年4月22日である。

（李喬、前掲『埋冤（上）』、587頁、及び李喬「後記」、前掲『埋冤（下）』、643頁）

412 奥付の表記によると、『埋冤』は初版（1995年）と第二版（1996年）が基隆の海洋台湾出版社、第三版（2003年）は苗栗の客家文化廣播電台より出版された。但し、自費出版といえども、初版刊行直後には台湾本土派作家の著作を中心に取扱う台北の前衛出版社が販売の後援を決定し、新書発表会まで開催しており、実際には同社が『埋冤』の販売促進を助成していた模様である。（「李喬：80万字一半是序言」『中国時報』1995年11月19日）

413 向陽「開拓台湾文学的新版図」、彭瑞金・許素蘭・李敏勇編『1994 台湾文学選』台北・前衛、1995年、7頁。

414 李喬「三版序」、李喬、前掲『埋冤（上）』、1頁。

415 「本土十大好書出爐」『中国時報』1996年1月16日。

416 「全国閲読運動推介六十三本文学好書」『聯合報』2006年4月9日。

417 許俊雅「小説中的『二二八事件』」、許俊雅編『無語的春天—二二八事件小説選』台北・玉山社、2003年、6頁。

[原文] 臺灣文學中的一個經典性的題材

418 『埋冤 1947 埋冤』に関する具体的な先行研究については、彭瑞金編、前掲『台湾現当代作家研究資料彙編 27』を参照されたい。

419 李喬、前掲『我的心靈簡史』、64頁。

[原文] 從文學作品看，上冊是下冊的長序

420 林雙不編『二二八台湾小説選』台北・自立晩報、1989年。

421 許俊雅編、前掲書。

422 曾健民・横地剛・藍博洲編『文学二二八』台北・台湾社会科学、2004年。

423 他に、国立台湾文学館編『天光一二二八事件本土母語文学選』（台南・国立台湾文学館、2010年）は、二二八を主題とする台湾語小説や客家語小説のみを収録する。

424 呂赫若「冬夜」『台湾文化』（第2巻第2期、1947年）。

425 丘平田「農村自衛隊」『台湾文化』（第2巻第2期、1947年）。

426 何義麟、前掲『台湾現代史』、103頁。

427 何義麟「戦後台湾における検閲制度の確立」『Intelligence』（第14号、2014年）57頁。

428 楊逵「二二八事件前後」、楊逵『楊逵全集 14』台南・国立文化資産保存研究中心籌備処、2001年、89頁。なお、同全集の表記によれば、初出は『台湾與世界』（第21期、1985年5月）である。

429 鍾逸人『辛酸六十年（上）』台北・前衛、2009年修訂三版、459頁。なお、「大捷之後」は『楊逵全集』に未収録であり、筆者は未見である。

430 一読者（楊逵）「二・二七惨案真因—台湾省民之哀訴」『自由日報』及び『和平日報』1947年3月8-9日。なお、曾健民・横地剛・藍博洲編、前掲書によれば、同作は3月8日掲載分の署名が“一読者”、3月9日掲載分の署名が“台中区時局処委会稿”と区別されているという。（曾健民・横地剛・藍博洲編、前掲書、345頁）

431 曾健民・横地剛・藍博洲編、前掲書、339頁。

[原文] 政府卻掩耳盜鈴，偏偏地把寶庫弄得亂七八糟，把這塊淨土爲官匪，軍匪的跳梁之地

432 夢周「創傷」『中華日報』1947年4月20日。

433 許俊雅は前掲「小説中的『二二八事件』」の中で、「伯子の小説『台湾島上血和恨』（1947年5月）が現在見るところ最も早くに“二二八”惨劇の真相を描いた文学作品である」

（伯子の小説〈臺灣島上血和恨〉（一九四七年五月）是目前所見最早描寫「二二八」慘劇真相的文學作品）と記しているが、同論考の後に出版された曾健民・横地剛・藍博洲編、前掲『文学二二八』では、夢周「創傷」が同作よりも先に発表されていたことを明らかにしている。（許俊雅、前掲「小説中的『二二八事件』」、9頁）

434 朱雙一「楊夢周一光復初期台湾文壇的重要存在」『台湾研究集刊』（第 86 期、2004 年）、及び朱雙一「尋找夢周」、陳映真編『爪痕與文学』台北・人間、2004 年。

435 朱雙一、前掲「楊夢周」、99-100 頁。

436 朱雙一、前掲「楊夢周」、102 頁。

[原文] 抨擊政治弊端和官僚腐敗統治

437 夢周「難忘的日子！」『中華日報』1947 年 4 月 11 日。

438 伯子「台湾島上血和恨」『文芸生活』（第 32 期、1947 年 5 月）。

439 歐坦生「沉醉」『文芸春秋』（第 5 卷第 5 期、1947 年 11 月）。

440 歐坦生「鵝仔」『文芸春秋』（第 7 卷第 4 期、1948 年 10 月）。

441 なお、歐坦生「沉醉」は、楊逵が 1948 年に台中で創刊したものの僅か三号で終刊した『台湾文学叢刊』にも転載された。同叢刊は鄭重「模索」や章仕開「X 區長」、陳濤「簽呈」をはじめ、すでに『台湾新生報』や『台湾公論報』などで発表された戦後直後の台湾での省籍矛盾の様子を描き出す諸作品を数多く再録している。

442 曾健民・横地剛・藍博洲編、前掲『文学二二八』、95 頁。

443 呂正恵「発現歐坦生—戦後初期台湾文学的一个側面」、歐坦生『鵝仔—歐坦生作品集』台北・人間、2000 年、及び曾健民「撥開歷史的迷霧—記探尋作家歐坦生的經過和感想」、歐坦生、前掲書、歐坦生「後記」、前掲書などを参照した。

444 吳濁流『夜明け前の台湾』台北・学友書局、1947 年。

445 吳濁流『ポツダム科長』台北・学友書局、1948 年。

446 葉石濤「三月的媽祖」『台湾新生報』1949 年 2 月 11 日。

447 葉石濤「談二二八文学」、葉石濤『葉石濤全集 8』（台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008 年、237 頁。初出は『台湾時報』（1990 年 2 月 28 日）である。

[原文] 一九四七年二月發生的二二八事件及其後延續有十多年之久的五〇年代白色恐怖時期，毫無疑問的是將近四百年之久的臺灣歷史上最黑暗而犧牲慘重的巨大激變的時代。……可惜迄今止，紀錄或反映時代的文學作品寥寥無幾。除去台共和外國人所

記述的文獻之外，直接由臺灣作家創作的文學作品極其有限。這自然是統治者所施行的四十多年戒嚴體制，以有形無形的枷鎖來禁錮創作自由所導致的結果。

448 白駒『梅春娘』台北鼎・文壇、1964年。

449 吳濁流『無花果』台北・林白、1970年。初出は『台湾文芸』（第19期、1968年、第20期、1968年、第21期、1968年）に連載された。

450 許俊雅『台湾文学論』台北・南天、1997年、266頁。

451 吳濁流「自序」、吳濁流〔鍾肇政訳〕『台湾連翹』台北・年代文庫、1987年、6頁。

[原文] 這段時期社會很複雜，年輕作家身無歷其境，極難了解其時代背景，如果老一輩的作家不寫的話，其真相實無可傳

452 吳濁流、前掲『無花果』、2頁。

[原文] 所見所聞的二二八事件的真相率直地描寫出來

453 「不滅的詩魂—吳濁流作品研討座談會記錄」『台湾文芸』（第58期、1978年）158頁。

[原文] 可能會引起誤會的，就沒有收進去

454 鍾肇政「拼命文章不足誇—紀念吳濁流先生逝世十週年」、吳濁流、前掲『台湾連翹』、2頁。

[原文] 根本就是尚未褪盡的驚恐

455 蕭阿勤『重構台湾』台北・聯經、2012年、191頁。

456 趙天儀・李喬「文学 文化 時代—詩人和小說家的対談」『台湾文芸』（第110期、1988年）30-31頁。

[原文] 今天我所知道自己想要什麼？想做什麼？能做什麼？我寫的是以臺灣歷史為背景的小說，我是在社會的重大事件中找到焦點，大時代的衝突使自己的生命獲得衝擊因而成熟，例如中壢事件、美麗島事件，讓我成長。不然的話，我可能終其生找不到生命意義的焦點，也就找不到文學的焦點。講明白一點就是瞭解到「我的文學是什麼」。……我們作家今天面對「政治」，要特別注意「今天」的時空特性；……在臺灣的作家卻顯然的要分出你是黑是白，是正義是不義；作家若還想「超乎政治之

外」是可恥的，文學沒有政治是假的，尤其是當前的臺灣作家。

457 李喬、前掲「三版序」、1頁。

[原文] 臺灣人歴史之最大痛點

458 確かに李喬「小説」が発表される以前にも、陳映真「郷村的教師」（村の教師、1960）、陳千武「遺像」（遺影、1976）、陳若曦「老人」（1976）、同「帰」（帰る、1978）、陳鏡花〔舞鶴一筆者注〕「微細的一線香」（微かな香り、1978）、陳若曦「路口」（分かれ道、1980）などで、二二人を想起させる描出は部分的に確認できるが、それらのいずれにおいても二二人は挿話的に言及されているに過ぎず、物語の中心的内容に関わるわけではない。

459 李喬「第一手資料」『首都早報』1989年7月5、6日。

460 林雙不「黄素小編年」『自立晚報』1983年7月16日。

461 郭松棻「月印」『中国時報』1984年7月21-30日。

462 王拓『台北・台北！』私家版、1985年。

463 李渝「夜琴」『中国時報』1986年1月5-7日。

464 林深靖「西庄三結義」『台湾文芸』（第99期、1986年）。

465 宋澤萊「抗暴的打猫市」『台湾新文化』（第9期、1987年）。

466 楊照「黯魂」、楊照『吾郷之魂』台北・時報、1987年。

467 楊照「煙花」、楊照、同上書。

468 林文義「風雪的底層」『文学界』（第24期、1987年）。

469 林文義「將軍之夜」『南方』（第15期、1988年）。

470 林文義「阿公，海漲囉！」『自立晚報』1988年10月1-3日。

471 葉石濤「紅鞋子」『自立晚報』1988年12月6-19日。

472 葉石濤「夜襲」『新文化』（第8期、1989年）。

473 葉石濤「牆」『台湾時報』1989年1月14日。

474 林雙不「見証與鼓舞—編選序」、林雙不編、前掲書。但し、引用した箇所には頁数の表記は無い。

[原文] 臺灣文學史上第一本有關二二八事件的小說選

475 姚嘉文『台灣七色記』台北・自立晚報、1987年。

476 許振江『寡婦歲月』高雄・愛華、1987年。

477 陳雷『百家春』台北・自由時代、1988年。

478 東方白『浪淘沙』台北・前衛、1990年。

479 鍾肇政『怒濤』台北・前衛、1993年。

480 廖清秀『反骨』台北・遠景、1993年。

481 周金波「私の歩んだ道」『野草』（第54号、1994年）12頁。

482 蕭颯『返鄉劄記』台北・洪範、1987年。

483 陳燁『泥河』台北・自立晚報、1989年。

484 林耀德『高砂百合』台北縣・聯合、1990年。

485 李昂『迷園』台北・貿騰、1991年。

486 何義麟、前揭『台灣現代史』、216頁。

487 葉石濤、前揭「談二二八文学」、239頁。

[原文] 新生代作家大多沒有身歷其境，寫作上遇到的困難很大

488 葉石濤、前揭「談二二八文学」、241頁。

[原文] 二二八以及白色恐怖的五〇年代，許多可歌可泣的故事還埋沒在歷史的墳墓裡

489 葉石濤、前揭「談二二八文学」、241頁。

[原文] 在臺灣文學的題材中，這領域是豐饒而未開的領域

490 蕭麗紅『白水湖春夢』台北・聯經、1996年。

491 吳豐秋『後山日先照』台北・躍昇文化、1996年。

492 李昂「彩妝血祭」『聯合文学』（第13卷第4期、1997年）。

493 李昂「北港香炉人人插」、李昂『北港香炉人人插』台北・麦田、1997年。

494 郭松棻「今夜星光燦爛」『新新聞』1997年3月2-8日。

495 陳玉慧『海神家族』台北縣・印刻、2004年。

496 陳燁『玫瑰船長』台北縣・遠景、2007年。

497 施叔青『三世人』台北・時報、2010年。

498 林央敏『菩提相思經』台北・草根、2010年。

499 陳芳明「後設小說改變了什麼」『文訊』（第350期、2014年）11頁。

[原文] 只要討論二二八，大約都出現一個固定的模式，就是國民黨屠殺臺灣人

500 彭瑞金、前掲『驅除迷霧找回祖靈』、152頁。

[原文] 一旦以二二八事件爲主要敘述背景的小說，也落入臺灣人的悲情史裡，成爲梳理本省、外省情節的小說

501 「逍遙自在孤獨行」『台灣新聞報』2001年5月16日-6月19日。なお、引用は莊紫蓉『面對作家（二）』（台北・吳三連台灣史料基金會、2007年）による。

502 李喬「台灣二二八研究之片段」、『二二八學術研討會論文集』台北・二二八民間研究小組、1992年、210頁。

503 李喬『長篇小說自剖』台北・台大出版中心、2009年、27頁。なお、引用は本映像資料附属の講演録による。

[原文] 當時我十四歲，而我老爸因爲遭受這件事情，我也算是擁有直接經驗

504 何義麟、前掲『台灣現代史』、221-222頁。

505 陳翠蓮「歷史正義的困境」『國史館學術集刊』第16期、2008年、200頁。

506 「『省籍與人權』座談會」『台灣人權促進會會訊』（第5期、1986年）を参照した。

507 張炎憲「緒論」、簡筌簧主編『二二八事件檔案彙編（一）』台北縣・國史館、2002年、1頁。

508 林濁水「【鄉巴佬異芸錄】十、 遮在 228 和平運動上的菁英面紗」、「想想論壇」2013年5月10日

<http://www.thinkingtaiwan.com/content/790> (2016年7月4日アクセス)

509 二二八事件四十週年紀念專輯編輯委員會編『走出二二八事件的陰影』台北・自由時代、1987年、84-85頁。

510 同上書、85 頁。

[原文] 李喬針對二二八當時情況，向現場聽眾公開了他自己多年來所蒐集考證的資料，大至如何發生，及事後如何波及，乃至於當天的死傷情形

511 二二八事件四十週年紀念專輯編輯委員會編、前揭書、85 頁。

[原文] 它仍留存在人們的記憶深處，成爲這個島上不同省籍人民和平相處的一大障礙

512 二二八事件四十週年紀念專輯編輯委員會編、前揭書、85 頁。

[原文] 公佈當年事實真相，並對當年事件，確實負起責任

513 李喬「事件的地点及情況」『台湾人權促進會會訊』（第 8 期、1987 年）12 頁。

[原文] 還那一代臺灣人的清白

514 李喬、前揭「台湾二二八研究之片段」、226 頁。

515 陳健忠「李喬『埋冤一九四七埋冤』與林耀德『一九四七高砂百合』的『二二八』歷史小說比較」、姚榮松・鄭瑞明編、前揭書、234 頁。

[原文] 重現臺灣大屠殺的歷史經驗

516 李喬・曾貴海・劉慧真編『台湾文學導讀』台北縣・群策會、2006 年、73 頁。

[原文] 重現當時慘狀，請讀者「再臨歷史場景」

517 二七部隊については、鍾逸人「二七部隊之回憶」『台湾新文化』（第 6 期、1987 年）、及び陳明忠「我是第一個通過警總四階段刑求的人—陳明忠談二七部隊攻打日月潭事件與被刑求經過」『新新聞』（第 276 期、1992 年）、陳明忠「檢証二七部隊」『海峽評論』（第 52 期、1995 年）等を参照されたい。

518 宋澤萊「忍向屍山血海求教訓—試介鍾逸人、李喬的二二八長篇小說」『台湾新文芸』（第 11 期、1998 年）。

519 李喬自身によれば、葉貞子のモデルは苗栗出身で台湾大学に当時在籍していた女学生であるという。（李喬、前掲『長篇小説自剖』、28 頁）

520 李喬、前掲「後記」、643 頁。

[原文] 我就把「呈現二二八的全景，並釋放其意義」當作生命上的天職

521 陳芳明、前揭『後殖民台灣—文學史論及其周辺』、115 頁。

[原文] 李喬的這部歷史小說，頗能反映解嚴後知識分子的心情。在面對記憶時，他選擇與過去權威體制的歷史教育截然不同的途徑，對於一旦被視為政治禁忌的二二八事件予以揭露，並且透過故事的鋪陳，對於戒嚴體制的統治者進行徹底的批判。

522 陳芳明、前揭『後殖民台灣—文學史論及其周辺』、115 頁。

[原文] 對國民黨政權的疏離與抗拒的態度

523 李喬、前揭『埋冤（上）』、41 頁。

[原文] 林志天恍然間意識到自己的心——不，連身軀也是不斷地膨脹擴展、上昇，終至於自己和眼前所有人衆合而為一體，以一體一心往前衝去，去噴射怒火，去討回公道，去討回臺灣人的尊嚴。

524 陳健忠、前揭論文、234 頁。

[原文] 《埋冤》可說是真正第一部以接近「照相」的方式，遵循寫實主義技法而不是以象徵性的筆法（可對照呂赫若〈冬夜〉、葉石濤〈三月的媽祖〉與吳濁流〈波茨坦科長〉），或單寫個人或家族遭遇（可對照林雙不〈黃素小編年〉或鍾肇政《怒濤》），將二二八歷史中的受難族群塑造為歷史主題的小說。

525 楊照『霧與画—戰後台灣文學史散論』台北·麦田、2010 年、155 頁。

[原文] 文中到處可見粗拙、幼稚，明顯屬美學上「技術犯規」的段落，更在在地阻卻了讀者接近文本地企圖心

526 楊照によれば、「〔1980 年代末の一筆者注〕政治ブームが冷めて以降、『〔台灣一筆者注〕七色記』が再度取り上げられることも少なくなった」（政治性地熱潮降溫後，《七色記》也就很少再被提起了）という。（同上書、155 頁）

527 李永熾「序—台灣古拉格的囚禁與脫出」、李喬、前揭『埋冤（上）』、6 頁。

[原文] 林志天和葉貞子分別展顯出臺灣作為古拉格的不同面向。……李喬所要描寫的這種監獄內外通底的剛性古拉格，與國民黨特務統治的形態相彷彿。總之，林志天象徵被囚狀態。葉貞子所象徵的則是「自囚」狀態，這是緣於外力的強制，進而將外力

自我內化，成爲自己強迫性的價值指標；……

528 「李喬二二八小說將問世」、『聯合報』1995年8月3日。

[原文] 「二二八事件」及往後十年「白色恐怖」是臺灣最大的苦難史

529 李喬、前揭『小說入門』大安版、135頁。

[原文] 爲了主題的顯現而演出者

530 李喬、前揭『小說入門』大安版、135頁。

[原文] 整個「小說現象」的中心

531 李喬、前揭「後記」、644頁。

[原文] 貼緊史實

532 李喬、前揭「後記」、644頁。

[原文] 不捨歷史情境之真

533 李喬、前揭『埋冤（下）』、173頁。

[原文] 時間匆匆，孩子已經滿月了。守法的深固觀念令伊不得不去報戶口。伊不理會家人的反對，以「父不詳」方式報了戶口。孩子當然跟母姓；名字也是伊自己取的，叫做「浦實」。湖海之曲灣入陸之地稱爲「浦」。日本的浦島太郎是討伐妖魔鬼怪的。花蓮港舊火車站一帶，花崗山下，據說上古就是海浦新生地。「實」是「果實」也是實在的大地；「浦實」的隱義不難理解，更重要的是「浦實」的日語發音是「烏拉密」；「烏拉密」就是怨，就是恨。

534 李喬「文學語言之弁」『台灣時報』1991年6月28日。

535 同上論文。

[原文] 因爲一九四七年間的臺灣，本地人幾乎是本地話日語混合使用的，所以小說中頗有「氾濫」趨勢

536 李喬、前揭『我的心靈簡史』、65頁。

[原文] 《埋冤》一書塑造「浦實」這個人物，是全書精華。「浦實」，臺灣女人被阿山兵強暴生下來的孽種；恨的產物，卻是臺灣女人之子。……臺灣人不是有許多「雜種」

嗎？臺灣人不是一直「與恨共生」嗎？臺灣人，臺灣的雜種，何去何從？我以浦實的成長、行動提出答案。實際上，浦實正是李喬的「發言人」。

537 張殊明「台灣，像是無告的孤兒！」『文芸生活』（第 32 期 [抗戰勝利後第 14 期]、1947 年）。

538 なお、テキストの引用はすべて拙訳であり、横地剛・藍博洲・曾健民編、前掲書を出典とする。

[原文] 臺灣，像是無告的孤兒，／被它的不良後母棄掉，／五十年兇狠的惡主／虐待，橫暴和狂囂，／悲慘的奴隸生活，／沒有眼淚，也沒有笑！

539 李喬『『二二八』在台灣人精神史的意義』、張炎憲・陳美蓉・楊雅慧編『二二八事件研究論文集』台北・吳三連台灣史料基金會、1998 年、406 頁。

[原文] 臺灣人的精神狀態：「孤兒意識」與「被迫害感」。臺灣人「孤兒意識」形成於 1895 年棄台讓日；1945 年日人退出臺灣，理應是孤兒傷痛逐漸消癒機會，誰知 1947 年慘事居然成了深化的劇劑。本來孤兒長大便是新生主體——自己的主人。不幸重傷未癒，加上後續的迫害，遂使吾人「長不大」，難以自我肯定，獨立前進。

540 李喬『台灣人的醜陋面』台北・前衛、1988 年、21 頁。

[原文] 不幸的過程乃孕育了臺灣人的孤兒意識；這個孤兒意識遂也成爲臺灣人不幸與醜陋的種因之一

541 同上書、30 頁。

[原文] 孤兒意識的種種變貌繁衍爲諸類醜陋面目

542 李喬、前掲「從文学作品看台灣人的形象」、64 頁。

[原文] 垂頭喪氣回來之後，面對被他拋棄的臺灣一片蕭條之後——再振作起來

543 李喬、前掲「從文学作品看台灣人的形象」、66 頁。

[原文] 我們大家分頭努力，拋棄臺灣人歷史上的那些性格——懦弱、依賴、自卑而滿懷被逼害的孤兒意識

544 李喬、前掲『『二二八』在台灣人精神史的意義』、406-407 頁。

[原文] 首先釐清二二八史實，進而理解巨大傷害來自「沒有自己的國家」，外來統治的必然結果。然而止痛療傷之後，唯有起而行，以血肉意志建立獨立自主的國家一途。……也是「孤兒」脫胎換骨的契機。如此，「二二八」在臺灣人精神史上才有其積極意義。

545 李喬、前掲『埋冤（下）』、634-635 頁。

[原文] 「我是指：一些苦惱，一些痛苦，不要媽一個人暗暗承擔；我是您唯一兒子，我也……」^マ ^マ 嗓音下沉，激動了。

546 李喬、前掲『埋冤（下）』、636 頁。

[原文] 「不錯，我是雜種。但是，有什麼關係？我是我，對不對？我『父不詳』，又怎麼樣？我已經考上建國中學……」^マ ^マ

547 李喬、前掲『埋冤（下）』、638 頁。

[原文] 午夜已過，該是凌晨時分吧？連一絲天光都消失，周遭真正一團漆黑。不過，下一瞬間，東天就會閃出一道曙光的。

548 李喬、前掲『長篇小説自剖』、29 頁。

[原文] 實際上，恨難從人間的冤枉、怨恨的魔咒裡解脫出來

549 李喬、前掲『長篇小説自剖』、29 頁。なお、傍点は筆者によるものである。

[原文] 可是歷史不能忘記，歷史要釐清，釐清以後埋下它，往前走

550 李喬、前掲『長篇小説自剖』、29 頁。なお、傍点は筆者によるものである。

[原文] 人是可以往前走的，這是這本書的結尾要表達的主題

551 鄭清文『多情與嚴法』台北・玉山社、2004 年、77 頁。

552 注 531。

553 若林正文『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房、2001 年、181 頁。

554 同上書、171 頁。

555 若林正文、前掲『台湾の政治』、362 頁。

556 若林正文、前掲『台湾の政治』、332-333 頁。

557 王甫昌 [松葉隼・洪郁如訳]『族群—現代台湾のエスニック・イマジネーション』東方書店、2014年、9-10頁、及び若林正文、前掲『台湾の政治』、332頁。

558 若林正文、前掲『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』、194頁。

559 李喬、前掲『台湾人の醜陋面』、150頁。

[原文] 老實說，今天以及未來的歲月，臺灣人——無論閩客原住民，乃至自願成爲臺灣人的各省人等，如果再蹈歷史的覆轍，走向分類爭鬥，或省籍仇視，其時就非止是醜陋而已；若而引來虎視眈眈者以「平亂」爲藉口行「揮兵侵略」之實，其時這一代的臺灣人便是歷史罪人，滅絕百代子孫幸福矣！當我們目睹：一、還有人開口閉口「蕃仔」，而原住民也滿懷疑懼走入平地社會；二、客家人老感福佬沙文壓力、心不甘情不願地接受「弱小」現實；三、福佬人心安理得地目空臺灣；四、「有心人」「偏激份子」在旁吹風鼓浪，冷眼欣賞「醜劇」連台——如此形勢這般情況，誰能不痛心疾首，誰不憂心如焚？

560 李喬、前掲『台湾人の醜陋面』、156頁。

[原文] 總之：今後臺灣社會的和諧與否，各族羣間的關係如何，牽繫至巨至大；整個臺灣的命脈前途，固然深受國際諸因影響，然而「主體」仍然是臺灣人自己。……讓我們把福佬人、客家人、泰雅、賽夏、阿美、魯凱、曹族、布農……等等老名稱舊記號，攏總拋入歷史的寶庫裏珍藏；今後萬千化爲一，一化爲千萬，千萬人一條心以「臺灣民族」的嶄新剛健英姿，開創臺灣人的新前景，新理想。

561 林吉洋「敘事與行動—台湾客家認同的形成」新竹・国立清華大学社会学研究所修士論文、2007年、34-35頁。

562 林雙不「我的心情我的路—『行出新台湾』出發之前写給台湾同胞的公開信」、王美雲編『行出新台湾』台北・前衛、1991年、31頁。

[原文] 包括今天所有在臺灣島上生存的住民，不管先來後到，不論血緣省籍，不問階級黨派，建立新國家

563 王美雲編、同上書、152-153頁。

564 前掲「逍遙自在孤獨行」。なお、引用は莊紫蓉、前掲書による。

[原文] 訪問時、有一些滿震撼的經驗。屏東有一位老先生已經過世了，他媳婦跟我講，他公公老年以後，海外有人回來去訪問他，問他某件事情可不可以做時，他會用這一句話回答：「你只要認定對臺灣大眾有益的，絕對可以去做。不過你要小心，阿山仔不可以信任。」這樣的說話是不對的，我們不能夠認定哪一個族群不能信任。客家人、福佬人都有不可信任的人啊！他這樣的思考模式傷了人了。

565 李喬『台湾民族主義』的幾個問題」、李喬、前掲『李喬文学文化論集（一）』、65 頁。初出は台湾教授協会主催の台湾民族主義研討会（1994 年 9 月 24 日）での開会の辞における発言であり、その後施正鋒編『台湾民族主義』（台北・前衛、1994 年）に収録された。

[原文] 小巧玲瓏、資訊發達的臺灣，祇要政制獲得合理改善，社會矛盾降低，族群和諧可期，臺灣居民當然是一個共同體、一個多元而活潑的 Nation 單位、一個國家，Taiwan Nationalism 稱之為臺灣民族主義、臺灣國族主義都好，我個人認為「臺灣國民主義」最好。

566 李喬「台湾主体性的追尋」、国立台湾師範大学文学院人文教育研究中心編『第一屆台湾本土文化學術研討会論文集』台北・国立台湾師範大学文学院人文教育研究中心、1995 年

[原文] 「臺灣」並無一個「主體性」擺在那裡，而是在此土地上的居民，經由反省、覺醒、創造、實踐的結果形成的。

567 若林正文、前掲『台湾の政治』、305 頁。

568 李喬、前掲「自序之（一）」、16 頁。

[原文] 都清楚、明晰地刻在我的生命裏

569 李喬、前掲「自序之（一）」、16 頁。

[原文] 將此段歷史再現是我一生無可拒絕、逃避的工作

570 彭瑞金、前掲「讀『結義西來庵』」。

[原文] 最常令人誤認只是歷史現象客觀的再現，而忘了作家透過歷史所展露的個人創作觀

的苦心

571 前掲、「消遙自在孤獨行」。

572 李喬は前出の宋澤萊との対談の中で、「“贖罪”はわたしのどの作品においても最終的なテーマでありまして、“贖罪”とはキリスト教最大の核心的意義ではないでしょうか？」（「救贖」是我每一部作品的最終主題，而「救贖」不就是基督教最大的核心意義嗎？）と述べている。前掲、「心靈的尋索、文學的旨趣」（2016年7月4日アクセス）

主要参考文献

以下、参考文献一覧は、[李喬作品][中国語書籍][中国語論文][中国語新聞][日本語書籍][日本語論文][英語文献][学位論文][インターネット文献][映像資料]の順に掲載する。

[李喬作品] 原則として署名の五十音順、同一署名の中では発表順

〈小説〉

李喬「酒徒的自述」『台湾教育輔導月刊』（第9期第8号、1959年）

李喬「阿妹伯」『中央日報』1962年10月14-15日

李喬「苦海坑」『自由談』（第14卷第1期、1963年）

李喬「桃花眼」『中華日報』1963年4月14-22日

李喬「小京園」『中央日報』1963年6月22日

李喬「全体肅立」『徵信新聞報』1963年7月17日

李喬「晴朗的心」『中華日報』1964年4月11日

李喬「天来嫂」『聯合報』1964年5月26日

李喬「飄然曠野」『徵信新聞報』1965年8月15日

李喬「鹹菜婆」『台湾日報』1967年4月20-21日

李喬「那棵鹿仔樹」『台湾文芸』（第16期、1967年）

李喬「山女」『青溪月刊』（1969年3月）

李喬「人球」『中国時報』1970年2月12-13日

李喬「捷克・何」『中国時報』1972年3月23-24日

李喬「孟婆湯」『中国時報』1973年3月9-10日

李喬「流轉」『中華日報』1972年12月26-28日

李喬「尋鬼記」『中央日報』1978年1月

李喬「小說」『文學界』（第1集、1982年）

李喬「告密者」『文學界』（第4集、1982年）

李喬「爸爸的新棉被」『明道文芸』（第82期、1983年）

李喬「泰姆山記」『台灣文芸』（第86期、1984年）

李喬「第一手資料」『首都早報』1989年7月5、6日

李喬「母親的画像」『台灣時報』1994年4月12-14日

〈雜誌・新聞に掲載された評論・エッセイ等〉

壹闡提「簡介『金剛經』」『書評書目』（第1期、1972年）

壹闡提「威廉福克納的一「秋光」（上）」『台灣時報』1972年8月18日

壹闡提「威廉福克納的秋光（下）」『台灣時報』1972年8月19日

壹闡提「威廉福克納的一声音與憤怒」『台灣時報』1972年9月17日

壹闡提「我喜愛的書」『書評書目』（第5期、1973年）

壹闡提「淺談仏經誦法」『書評書目』（第8期、1973年）

壹闡提「我看『台灣文學』」『台灣文芸』（第73期革新第20号、1981年）

趙天儀・李喬「文學 文化 時代—詩人和小說家的對談」『台灣文芸』（第110期、1988年）

李喬「入選感言」『台灣文芸』（第5卷第18期、1968年）

李喬「與我周旋寧作我」『中華日報』1974年1月18日

李喬「序」、李喬『寒夜』台北・遠景、1980

李喬「窮山月明」『民衆日報』1980年12月26日

李喬「繽紛二十年」『自由日報』1981年10月3-4日

- 李喬「台湾文学正解」『台湾文芸』（第 83 期、1983 年）
- 李喬「文学的郷土性與世界性」『台湾文芸』（第 80 期、1983 年）
- 李喬「從文学作品看台湾人的形象」『台湾文芸』（第 91 期、1984 年）
- 李喬「一位台湾作家的心路歷程」『亜洲人』（第 7 期、1984 年）
- 李喬「小説人『応読書』書單」『新書月刊』（第 20 期、1985 年）
- 李喬「文学與歷史的兩難」『台湾文芸』（第 100 期、1986 年）
- 李喬「事件的地点及情況」『台湾人權促進會會訊』（第 8 期、1987 年）
- 李喬「文学界的未来」『文学界』（第 28 集、1989 年）
- 李喬「文学語言之弁」『台湾時報』1991 年 6 月 28 日
- 李喬「我的文学行程與文化思考」、李喬『台湾文学造型』高雄・派色文化出版社、1992 年
- 李喬「台湾二二八事件研究之片段」、『二二八事件學術研討會論文集』台北・二二八事件民間研究小組、1992 年
- 李喬「『台湾民族主義』的幾個問題」、施正鋒編『台湾民族主義』台北・前衛、1994 年
- 李喬「台湾主体性的追尋」、国立台湾師範大学文学院人文教育研究中心編『第一屆台湾本土文化學術檢討會論文集』、台北・国立台湾師範大学文学院人文教育研究中心、1995 年
- 李喬「『二二八』在台湾人精神史的意義」、張炎憲・陳美蓉・楊雅慧編『二二八事件研究論文集』台北・吳三連台湾史料基金会、1998 年
- 李喬「個人反抗與歷史記憶」『中国時報』1998 年 10 月 20-23 日
- 李喬「戰後台湾小説的文化批評」『国文天地』（第 16 卷第 5 期、2000 年）
- 李喬「三版序」、李喬『埋冤 1947 埋冤』苗栗・苗栗客家文化廣播電台、2003 年
- 李喬「自序之（一）」、李喬『埋冤 1947 埋冤（上）』苗栗・苗栗客家文化廣播電台、2003 年
- 李喬「『歷史素材小説』写作經驗談」『文訊』（第 246 期、2006 年）
- 李喬・三木直大・周婉窈・黃華昌「縱談《寒夜》的歷史與文学」『文学台湾』（第 61 期、2007

年)

李喬「台湾文学與本土神学」、李喬『李喬文学文化論集（一）』苗栗・苗栗縣文化局、2007

年

李喬「小說研究場域與現代文学理論譜系」『文学台湾』（第71期、2009年）

〈出版物〉

李喬『飄然曠野』台北・雄獅文化、1965年

李喬『恋歌』台北・水牛、1968年

李喬『晚晴』台北・台湾商務印書館、1968年

李喬『人的極限』彰化・現代潮、1969年

李喬『山女—蕃仔林故事集』台北・晚蟬、1970年

李喬『山園恋』台中・台湾省政府新聞處、1971年

李能棋『結義西來庵—噍吧嘓事件』台北・近代中国、1977年

李喬『結義西來庵—噍吧嘓事件』台南縣・台南縣文化局、2000年

李喬『青青校樹』台中・台湾省政府新聞處、1978年

李喬『孤灯』台北・遠景、1979年

李喬『孤灯』台北・遠景、2001年

李喬『寒夜』台北・遠景、1980年

李喬『寒夜』台北・遠景、2001年

李喬〔岡崎郁子・三木直大訳〕『寒夜』国書刊行会、2005年

李喬『荒村』台北・遠景、1981年

李喬『荒村』台北・遠景、2001年

李喬『情天無恨—白蛇新伝』台北・前衛、1983年

李喬・高天生編『台湾政治小説選』台北・台湾文芸、1983年

李喬『藍彩霞的春天』台北・五千年、1985年

李喬『小說入門』台北・時報文化、1986年

李喬『小說入門』台北・大安、1996年

李喬『台灣人的醜陋面』台北・前衛、1988年

李喬『台灣運動的文化困局與轉機』台北・前衛、1989年

李喬『台灣文學造型』高雄・派色文化、1992年

李喬『台灣文化造型』台北・前衛、1992年

李喬『埋冤 1947 埋冤』基隆・海洋台灣、1995年

李喬『埋冤 1947 埋冤』苗栗・苗栗客家文化廣播電台、2003年

李喬『文化心燈—李喬文化評論選粹』台北縣・望春風、2000年

李喬『文化、台灣文化、新國家』高雄・春暉、2001年

李喬『重逢—夢裡的人』台北縣・印刻、2005年

李喬・曾貴海・劉慧真編『台灣文學導讀』台北縣・群策會、2006年

李喬『情歸大地』台北・行政院客家委員會、2008年

李喬『咒之環』台北縣・印刻文學、2010年

李喬『散靈堂伝記』新北・印刻文學、2013年

李喬『李喬短篇小說全集 1』苗栗・苗栗縣立文化中心、1999年

李喬『李喬短篇小說全集 2』苗栗・苗栗縣立文化中心、1999年

李喬『李喬短篇小說全集 3』苗栗・苗栗縣立文化中心、1999年

李喬『李喬短篇小說全集 4』苗栗・苗栗縣立文化中心、1999年

李喬『李喬短篇小說全集 5』苗栗・苗栗縣立文化中心、1999年

李喬『李喬短篇小說全集 6』苗栗・苗栗縣立文化中心、2000年

李喬『李喬短篇小說全集 7』苗栗・苗栗縣立文化中心、2000年

李喬『李喬短篇小說全集 8』苗栗・苗栗縣立文化中心、2000年

李喬『李喬短篇小說全集 9』苗栗・苗栗縣立文化中心、2000年

李喬『李喬短篇小說全集 10』苗栗・苗栗縣立文化中心、2000 年

李喬『李喬短篇小說全集資料彙編』苗栗・苗栗縣立文化中心、2000 年

李喬『李喬文學文化論集（一）』苗栗・苗栗縣文化局、2007 年

李喬『李喬文學文化論集（二）』苗栗・苗栗縣文化局、2007 年

李喬『我的心靈簡史』台北縣・望春風、2010 年

李喬『V 與身體』新北・印刻文學、2013 年

李喬『情世界—回到未來』新北・印刻、2015 年

李喬『草木恩情』新北・遠景、2016 年

Li Qiao, *Wintry Night*, New York, Columbia University Press, 2001

[中國語書籍] 原則として著者名の五十音順、同一著者名の中では発表順

安部公房 [鍾肇政訳] 『砂丘之女』台北・純文學、1967 年

安部公房 [鍾肇政・劉慕沙訳] 『砂丘之女及其他』台北・純文學、1975 年

安部公房 [鍾肇政訳] 『燃燒的地圖』台北・遠行、1977 年

安部公房 [魏明果訳] 『跳蚤奔月』台北・遠行、1978 年

安部公房 [劉慕沙訳] 『夢幻兵士』台北・遠行、1978 年

安部公房 [鍾肇政訳] 『箱子裏的男人』台北・遠景、1979 年

安部公房 [劉蘋華訳] 『砂丘之女』台北・星光、1986 年

安部公房 [吳憶帆訳] 『砂丘之女』台北・志文、2007 年

王詩琅『余清芳清芳事件全貌』台北・海峽學術、2003 年

王拓『台北・台北！』私家版、1985 年

歐坦生『鵝仔—歐坦生作品集』台北・人間、2000 年

王美雲編『行出新台灣』台北・前衛、1991 年

郭松棻「今夜星光燦爛」『新新聞』1997年3月2-8日

郭沢寛『官方視角下的鄉土』高雄・麗文文化、2010年

紀野義一〔李喬訳〕『真情人生—給拙於生活的人』台北・文皇、1974年

丘秀芷『剖雲行日—丘逢甲伝』台北・近代中国、1978年

許俊雅『台湾文学論』台北・南天、1997年

許俊雅編『無語的春天—二二八事件小説選』台北・玉山社、2003年

許振江『寡婦歲月』高雄・愛華、1987年

許雪姬ほか『台湾歴史辞典』台北・行政院文化建設委員会、2004年

許素蘭『給大地写家書—李喬』台北・典藏芸術、2008年

吳濁流『無花果』台北・林白、1970年

吳濁流〔鍾肇政訳〕『台湾連翹』台北・年代文庫、1987年

吳豊秋『後山日先照』台北・躍昇文化、1996年

黄仁・王唯編『台湾電影百年史話』台北・中華影評人協會、2004年

康豹『染血的山谷』台北・三民、2006年

黄文成『関不住的繆思—台湾監獄文学縦横論』台北・秀威資訊科技、2008年

国立台湾文学館編『想像的壯遊—十場台湾当代小説の心霊饗宴 2』台南・国立台湾文学館、
2007年

国立台湾文学館編『天光—二二八事件本土母語文学選』台南・国立台湾文学館、2010年

国立中央図書館台湾分館特蔵資料編纂委員会編『台湾文献書目解題第4種伝記類 1』台北
・国立中央図書館台湾分館、1991年

施叔青『三世人』台北・時報、2010年

施正鋒編『台湾民族主義』台北・前衛、1994年

施敏輝〔陳芳明—筆者注〕編『台湾意識論戦選集』カリフォルニア・台湾出版社、1985
年

謝文玖（謝霜天）『耿耿此心在一翁俊明伝』台北・近代中国、1977年

朱西甯『表率群倫的林子超先生—林森伝』台北・近代中国、1982年

朱雙一『台湾文学創作思潮簡史』北京・九州、2010年

徐樂眉『百年台湾電影史』新北・揚智文化、2012年

蕭阿勤『回歸現實—台湾 1970年代的戰後世代與文化政治變遷』台北・中央研究院社会学研究所、2008年

蕭阿勤『重構台湾』台北・聯經、2012年

鍾逸人『辛酸六十年』台北・自由時代、1988年

鍾逸人『辛酸六十年（上）』台北・前衛、2009年修訂三版

蕭颯『返鄉割記』台北・洪範、1987年

蔣子駿『辛亥革命與台湾早期抗日運動』台北・文史哲、1990年

鍾肇政編『本省籍作家作品選集 3』台北縣・文壇社、1965年

鍾肇政編『本省籍作家作品選集 5』台北縣・文壇社、1965年

鍾肇政『丹心耿耿屬斯人—姜紹祖伝』台北・近代中国、1977年

鍾肇政『世界文壇新作家』台北・林白、1969年

鍾肇政『怒濤』台北・前衛、1993年

鍾肇政『鍾肇政全集 21』桃園・桃園縣文化局、2002年

鍾肇政『鍾肇政全集 25』桃園・桃園縣文化局、2002年

鍾肇政『鍾肇政全集 26』桃園・桃園縣文化局、2002年

鍾肇政『鍾肇政全集 34』桃園・桃園縣文化局、2004年

鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集 1——桿秤仔』台北・遠景、1979年

鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集 2——一群失業的人』台北・遠景、1979年

鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集 3——豚』台北・遠景、1979年

鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集 4——薄命』台北・遠景、1979年

鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集 5——牛車』台北・遠景、1979年

鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集 6——送報伙』台北・遠景、1979年

鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集 7 一植有木瓜樹的小鎮』台北・遠景、1979 年

鍾肇政・葉石濤編『光復前台湾文学全集 8 一闖鷄』台北・遠景、1979 年

蕭麗紅『白水湖春夢』台北・聯經、1996 年

薛化元『戰後台湾歷史閱覽』台北・五南、2010 年

蘇雲青『念茲在茲—丘念台伝』台北・近代中国、1984 年

曾健民・橫地剛・藍博洲編『文学二二八』台北・台湾社会科学、2004 年

莊紫蓉『面对作家 (二)』台北・吳三連台湾史料基金会、2007 年

曾迺碩『国父與台湾的革命運動』台北・幼獅、1978 年

单德興「冷戰時代的美国文学中訳」、彭小妍編著『文化翻譯與文本脈路』台北・中央研究院文哲研究所、2013 年

張炎憲編『二二八事件辞典』台北県・国史館、二二八事件紀念基金会、2008 年

張振翱編『飄泊與原郷』台北・国立編訳館、1992 年

陳玉慧『海神家族』台北県・印刻、2004 年

陳少廷『台湾新文学運動簡史』台北・聯經、1977 年

陳南州『台湾基督長老教会的社会、政治倫理』台北・永望文化、1991 年

陳芳明『後殖民台湾—文学史論及其周辺』台北・麦田、2007 年二版

陳芳明『台湾新文学史』台北・聯經、2011 年

陳燁『泥河』台北・自立晚報、1989 年

陳燁『玫瑰船長』台北県・遠景、2007 年

陳雷『百家春』台北・自由時代、1988 年

鄭清文『多情與嚴法』台北・玉山社、2004 年

鄭尊仁『台湾当代伝記文学研究』台北・秀威資訊科技、2003 年

程大学編『台湾先賢先烈專輯—余清芳清芳伝』台中・台湾省文献委員会、1978 年

東方白『浪淘沙』台北・前衛、1990 年

二二八事件四十週年紀念專輯編輯委員会編『走出二二八事件的陰影』台北・自由時代、1987

年

梅遜編『作家群像』台北・大江、1968年

白駒『梅春娘』台北縣・文壇、1964年

白慈飄『啓門人一蔡惠如伝』台北・近代中国、1977年

福克納 [沙文淵訳]『野椰』屏東・白沙書屋、1960年

福克納 [何欣訳]『熊』台北・晨鐘、1970年

福克納 [何欣訳]『熊』台北・哲志、1973年

福克納 [黎登鑫訳]『熊』台北・遠景、1979年

福克納 [黎登鑫訳]『熊』台北縣・書華、1986年

福克納 [黎登鑫訳]『熊』台北・萬象、1993年

福克納 [杜若洲訳]『野棕』私家版、1976年

福克納 [黎登鑫訳]『声音與憤怒』台北・遠景、1979年

佛克納 [何欣訳]『佛克納短篇小說選』台北・重光文芸、1959年

藤井省三 [張季琳訳]『台湾文学這一百年』台北・麦田、2004年

彭瑞金『台湾新文学運動 40 年』高雄・春暉、1997年

彭瑞金『驅除迷霧找回祖靈』高雄・春暉、2000年

彭瑞金編『台湾現当代作家研究資料彙集 27 一李喬』台南・国立台湾文学館、2012年

姚栄松・鄭瑞明編『李喬の文学與文化論述—第五届台湾文化国際學術研討会論文集』台北

・国立台湾師範大学台湾文化及語言文学研究所、2007年

姚嘉文『台湾七色記』台北・自立晚報、1987年

楊逵『楊逵全集 8』台南・国立文化資產保存研究中心籌備処、2000年

楊逵『楊逵全集 14』台南・国立文化資產保存研究中心籌備処、2001年

楊淇竹『跨領域改編—《寒夜三部曲》及其電視劇研究』台北・秀威資訊科技、2010年

楊照『文学、社会與歴史想像』台北・聯合文学、1995年

楊照『霧與画—戰後台湾文学史散論』台北・麦田、2010年

游勝冠『台湾文学本土論の興起與發展』台北・群学、2009年

葉石濤『台湾文学史綱』高雄・春暉、1987年

葉石濤『葉石濤全集 8』台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008年

葉石濤『葉石濤全集 11』台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008年

葉石濤『葉石濤全集 13』台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008年

葉石濤『葉石濤全集 14』台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008年

葉石濤『葉石濤全集 18』台南・国立台湾文学館及び高雄・高雄市文化局、2008年

羅秋昭『羅福星伝』台北・黎明、1974年

羅秋昭『大湖英烈—羅福星伝』台北・近代中国、1977年

李永熾『不屈的山岳—霧社事件』台北・近代中国、1977年

李永熾『歴史・文学與台湾』台中・台中県立文化中心、1992年

李昂『迷園』台北・貿騰、1991年

李新民『愛国愛郷—黄朝琴伝』台北・近代中国、1984年

廖清秀『反骨』台北・遠景、1993年

林央敏『菩提相思経』台北・草根、2010年

林淇瀆『書写與拼図』台北・麦田、2001年

林衡道主編、程大学・王詩琅・吳家憲編訳『余清芳清芳抗日革命案全档第1輯第1冊』台中・台湾省文献委員会、1974年

林衡道主編、程大学・王詩琅・吳家憲編訳『余清芳清芳抗日革命案全档第1輯第2冊』台中・台湾省文献委員会、1974年

林衡道主編、程大学編訳『余清芳清芳抗日革命案全档第2輯第1冊』台中・台湾省文献委員会、1975年

林衡道主編、程大学編訳『余清芳清芳抗日革命案全档第2輯第2冊』台中・台湾省文献委員会、1975年

林衡道主編、程大学編訳『余清芳清芳抗日革命案全档第3輯第1冊』台中・台湾省文献委

員会、1975 年

林衡道主編、程大学編訳『余清芳清芳抗日革命案全档第 3 輯第 2 冊』台中・台湾省文献委

員会、1975 年

林衡道主編、程大学編訳『余清芳清芳抗日革命案全档第 4 輯第 1 冊』台中・台湾省文献委

員会、1976 年

林衡道主編、程大学編訳『余清芳清芳抗日革命案全档第 4 輯第 2 冊』台中・台湾省文献委

員会、1976 年

林雙不編『二二八台湾小説選』台北・自立晚報、1989 年

林文月『青山青史—連雅堂伝』台北・近代中国、1977 年

林梵『楊逵画像』台北・筆架山、1978 年

林耀德『高砂百合』台北県・聯合、1990 年

[中国語論文] 原則として著者名の五十音順、同一著者名の中では発表順

「威廉・佛克納」、佛克納 [何欣訳]『佛克納短篇小説選』台北・重光、1959 年

王鴻仁「訪劉紹唐先生談伝記文学」『書評書目』(第 55 期、1977 年)

汪淑珍「林海音成功経営『純文学出版社』策略解析」『出版與管理研究』(第 2 期、2006 年)

王崇堯「台湾处境化神学的的發展—論 1970 年後台湾長老教会與台湾政治社会的互動」『神学與教会』(第 28 卷第 2 期、2003 年)

歐宗智「小説哲学的的建構—談『藍彩霞的春天』反抗意識與象徵意義」『台湾新聞報』(2001 年 6 月 14 日)

歐坦生「沉醉」『文芸春秋』(第 5 卷第 5 期、1947 年 11 月)

歐坦生「鵝仔」『文芸春秋』(第 7 卷第 4 期、1948 年 10 月)

- 歐坦生「後記」、歐坦生『鵝仔—歐坦生作品集』台北·人間、2000年
- 宓鳳凰「鍾肇政與五、六十年代台灣文化生產場域」、鄭炯明編『越浪前行的一代』高雄·春暉、2002年
- 宓鳳凰「文芸雜誌、作家群落與六〇年代台灣文壇」、東海大學中國文學系編『苦悶與蛻變』台北·文津、2007年
- 何欣「譯者序」、福克納〔何欣譯〕『熊』台北·晨鐘、1970年
- 何欣「六十年代的文學理論簡介」『文訊月刊』（第13期、1984年）
- 花村「試評『痛苦的符號』」『台灣文芸』（第14卷第57期、1978年）
- 花村「談李喬『結義西來庵』一書裏調子的運用」『中外文學』（第8卷第5期、1979年）
- 柯孟潔「河洛歌仔戲劇本『台灣、我的母親』之研究—以小說『寒夜三部曲之一寒夜』與黃英雄『台灣、我的母親』及河洛歌仔戲舞台演出本『台灣、我的母親』之探討」『台灣民俗藝術彙刊』（第3期、2006年）
- 郭松棻「月印」『中國時報』1984年7月21-30日
- 紀俊龍「李喬『重逢—夢裡的人』探析」、姚榮松·鄭瑞明編『李喬的文學與文化論述—第五屆台灣文化國際學術研討會論文集』台北·國立台灣師範大學台灣文化及語言文學研究所、2007年
- 許俊雅「小說中的『二二八事件』」、許俊雅編『無語的春天—二二八事件小說選』台北·玉山社、2003年
- 丘秀芷「結義西來庵—噍吧嘓事件」『中央日報』1978年10月25日
- 丘平田「農村自衛隊」『台灣文化』（第2卷第2期、1947年）
- 顧敏耀「『自由談』概述」『文訊』（第240期、2005年）
- 吳橋「人性與同情」『書評書目』（第55期、1977年）
- 吳濁流「自序」、吳濁流〔鍾肇政譯〕『台灣連翹』台北·年代文庫、1987年
- 黃惠貞「母土與父國—李喬『情歸大地』與『一八九五』電影改編的認同差異」『台灣文學研究學報』（第10期、2010年）

高俊明「『国是声明與建議』在信仰上及神學上之動機」『台灣教會公報』第 1078 号、1972 年 3 月 1 日

洪醒夫「偉大的同情與大地的鄉愁」『書評書目』（第 18 期、1974 年）

向陽「開拓台灣文學的新版圖」、彭瑞金·許素蘭·李敏勇編『1994 台灣文學選』台北·前衛、1995 年

查時傑「四十年來的台灣基督教會」、林治平編『基督教與台灣』台北·基督教宇宙傳播中心、1996 年

「自由談五十二年新正徵文小啓」『自由談』（第 13 卷第 10 期、1962 年）

謝松山「簡介『寒夜三部曲』」『文學界』（第 4 集、1982 年）

章仕開「X 區長」『台灣文學叢刊』（第 2 輯、1948 年）

鍾逸人「二七部隊之回憶」『台灣新文化』（第 6 期、1987 年）

周宗賢「噶吧嘰事件大屠殺的真相」『淡江人文社會學刊』（第 17 期、2003 年）

周寧「喜悅之種種」、周寧編『七十一年短篇小說選』台北·爾雅、1983 年

周伯乃「西方文藝思潮對我國六十年代文學的影響」『文訊月刊』（第 13 期、1984 年）

莊園（鄭清文）「作家的起點」『台灣文藝』（第 14 卷第 57 期、1978 年）

「『省籍與人權』座談會」『台灣人權促進會會訊』（第 5 期、1986 年）

鍾肇政「編輯的話」、鍾肇政編『本省籍作家作品選集 3』台北·文壇社、1965 年

鍾肇政「飄然曠野裏的李喬」『自由青年』（第 35 卷第 4 期、1966 年）

鍾肇政「安部公房與砂丘之女」、安部公房 [鍾肇政識]『砂丘之女』台北·純文學、1967 年

鍾肇政「苦思苦寫的李喬」、梅遜編『作家群像』台北·大江、1968 年

鍾肇政「改版後記」、安部公房 [鍾肇政·劉慕沙識]『砂丘之女及其他』台北·純文學、1975 年

鍾肇政「閱與『燃燒的地圖』」、安部公房 [鍾肇政識]『燃燒的地圖』台北·遠行、1977 年

鍾肇政「拼命文章不足誇—紀念吳濁流先生逝去十週年」、吳濁流 [鍾肇政識]『台灣連翹』

台北·年代文庫、1987年

鍾肇政「日本文壇怪傑」、鍾肇政『鍾肇政全集 21』桃園·桃園縣文化局、2002年

朱雙一「楊夢周一光復初期台灣文壇的重要存在」『台灣研究集刊』(第86期、2004年)

朱雙一「尋找夢周」、陳映真編『爪痕與文學』台北·人間、2004年

沈明進「評李喬的『結義西來庵』」『中央日報』1979年3月4日

曾健民「撥開歷史的迷霧—記探尋作家歐坦生的經過和感想」、歐坦生『鵝仔—歐坦生作品集』台北·人間、2000年

宋澤萊「抗暴的打貓市」『台灣新文化』(第9期、1987年)

宋澤萊「忍向屍山血海求教訓—試介鍾逸人、李喬的二二八長篇小說」『台灣新文芸』(第11期、1998年)

張怡寧「李喬傳記文學『結義西來庵』(1977)中的抗日反思與殖民批判」『台灣文學論叢』(第4輯、2012年)

張炎憲「走出更寬廣的遠景」、鍾逸人『辛酸六十年』台北·自由時代、1988年

張炎憲「緒論」、簡筌簧編『二二八事件檔案彙編 1—立法院、國家安全局檔案』台北縣·國史館、2002年

張家鳳「噍吧嘸慘史」『南瀛文獻』(第23卷、1978年)

張殊明「台灣，像是無告的孤兒！」『文芸生活』(第32期[抗戰勝利後第14期]、1947年)

陳映真「鄉村的教師」『筆匯』(第2卷第1期、1960年)

陳鏡花(舞鶴)「微細的一線香」『前衛』(第1期、1978年)

陳健忠「李喬『埋冤 1947 埋冤』與林燿德『一九四七高砂百合』的「二二八事件」歷史小說比較」、姚榮松·鄭瑞明編『李喬的文學與文化論述—第五屆台灣文化國際學術研討會論文集』台北·國立台灣師範大學台灣文化及語言文學研究所、2007年

陳若曦『老人』台北·聯經、1978年

陳若曦『婦』台北·聯經、1978年

陳若曦「路口」、彭瑞金編『國民文選·小說選3』台北·玉山社、2004年

陳翠蓮「歷史正義的困境」『國史館學術集刊』(第16期、2008年)

陳千武「遺像」『台灣文芸』(第50期、1976年)

陳濤「簽呈」『台灣文學叢刊』(第2輯、1948年)

陳芳明「後設小說改變了什麼」『文訊』(第350期、2014年)

陳明忠「我是第一個通過警總四階段刑求的人—陳明忠談二七部隊攻打日月潭事件與被刑求經過」『新新聞』(第276期、1992年)

陳明忠「檢証二七部隊」『海峽評論』(第?期、?年)

鄭炯明「写在『文學界』停刊之前」『文學界』(第28集、1989年)

鄭清文「讀『人球』」(『台灣文芸』第7卷第29期、1970年)

鄭清文「李喬的『恍惚的世界』」『書評書目』(第19期、1974年)

鄭重「模索」『台灣文學叢刊』(第1輯、1948年)

伯子「台灣島上血和恨」『文芸生活』(第32期、1947年5月)

「不滅的詩魂—吳濁流作品研討座談會記錄」『台灣文芸』(第58期、1978年)

「編後記」『文學界』(第1集、1982年)

「編者的話」『前進時代』第8期、1984年

方以直「砂丘之女」『徵信新聞報』1967年4月5日

彭歌「『自由談』歲月」『文訊』(第240期、2005年) 25-30頁

彭瑞金「悲苦大地泉甘土香—李喬的蕃仔林故事」『台灣文芸』(第14卷第57期、1978年)

彭瑞金「讀『結義西來庵』」『民衆日報』1978年10月21日

彭瑞金「回顧一段迢迢文學路—『文學界』停刊感言」『文學界』(第28集、1989年)

彭瑞金「歷史文學的掙扎與蛻變—拒絕在虛構、真實間擺盪的『埋冤 1947 埋冤』」『台灣文學與社會—第二屆台灣本土文化國際學術研討會論文集』台北·國立台灣師範大學文學院國文學系／人文教育研究中心、1995年

- 彭瑞金「人、妖交纏，佛法解不開的人間情欲」『台灣新聞報』1996年5月23-28日
- 彭瑞金「歷史文學的掙扎與蛻變」、彭瑞金『驅除迷霧找回祖靈』高雄·春暉、2000年
- 彭瑞金「導讀」、向陽主編『二十世紀台灣文學金典—小說卷·戰後時期·第一部』台北·聯合文學、2006年
- 彭瑞金「李喬研究綜述」、彭瑞金編『台灣現當代作家研究資料彙編 27—李喬』台南·國立台灣文學館、2012年
- 三木直大「李喬文學中的現代性·鄉土性·大眾性」、姚榮松·鄭瑞明編、『李喬的文學與文化論述—第五屆台灣文化國際學術研討會論文集』台北·國立台灣師範大學台灣文化及語言文學研究所、2007年
- 夢周「難忘的日子！」『中華日報』1947年4月11日
- 夢周「創傷」『中華日報』1947年4月20日
- 余玉照「美國文學在台灣」、朱炎編『美國文學·比較文學·莎士比亞—朱立民教授七十壽慶論文集』台北·書林、1990年
- 楊達「二二八事件前後」『台灣與世界』(第21期、1985年)
- 楊貴「壓不扁的玫瑰花」『新生月刊』、楊達『楊達全集 8』台南·國立文化資產保存研究中心籌備處、2000年
- 楊照「黯魂」、楊照『吾鄉之魂』台北·時報、1987年
- 楊照「煙花」、楊照『吾鄉之魂』台北·時報、1987年
- 葉石濤「三月的媽祖」『台灣新生報』1949年2月11日
- 葉石濤「卡繆論」『台灣文芸』(第3卷第10期) 1966年
- 葉石濤「兩年來的省籍作家及其小說」『台灣日報』1967年10月25-26日
- 葉石濤「林海音論」『台灣日報』1968年1月8-10日
- 葉石濤「論李喬小說裡的『佛教意識』」『台灣文芸』(第57期、1978年)
- 葉石濤「從鄉土文學到三民主義文學」『台灣文芸』(第62期革新第9號、1979年)
- 葉石濤「六十年代的台灣鄉土文學」『文訊月刊』(第13期、1984年)

- 葉石濤「大河小說的種籽—短評『告密者』」『聯合文學』（第2卷第1期、1985年）
- 葉石濤「紅鞋子」『自立晚報』1988年12月6-19日
- 葉石濤「牆」『台灣時報』1989年1月14日
- 葉石濤「夜襲」『新文化』（第8期、1989年）
- 葉石濤「談二二八文學」『台灣時報』1990年2月28日
- 賴松輝「現代主義與李喬早期的小說」、姚榮松·鄭瑞明主編『李喬的文學與文化論述—第五屆台灣文化國際學術研討會論文集』台北·國立台灣師範大學台灣文化及語言文學研究所、2007年
- 李永熾「序—台灣古拉格的囚禁與脫出」、李喬『埋冤 1947 埋冤』（上卷）、苗栗·苗栗客家文化廣播電台、2003年、6頁。
- 李昂「彩妝血祭」『聯合文學』（第13卷第4期、1997年）
- 李昂「北港香爐人人插」、李昂『北港香爐人人插』台北·麦田、1997年
- 李渝「夜琴」『中國時報』1986年1月5-7日
- 廖偉竣（宋澤萊）「走出『寒夜』的作家」『暖流』（第1卷第4期、1982年）
- 林雙不「黃素小編年」『自立晚報』1983年7月16日
- 林雙不「見證與鼓舞—編選序」、林雙不編『二二八台灣小說選』台北·自立晚報、1989年
- 林雙不「我的心情我的路—『行出新台灣』出發之前寫給台灣同胞的公開信」、王美雲編『行出新台灣』台北·前衛、1991年、31頁。
- 林深靖「西庄三結義」『台灣文芸』（第99期、1986年）
- 林文義「風雪的底層」『文學界』（第24期、1987年）
- 林文義「將軍之夜」『南方』（第15期、1988年）
- 林文義「阿公，海漲囉！」『自立晚報』1988年10月1-3日
- 呂赫若「冬夜」『台灣文化』（第2卷第2期、1947年）
- 呂正惠「西方文學翻譯在台灣」、封德屏主編『台灣文學出版』台北·行政院文化建設委員會、1996年

呂正惠「發現歐坦生—戰後初期台灣文學的一個側面」、歐坦生『鵝仔—歐坦生作品集』台北·人間、2000年

[中國語新聞] 發表順

「渡假美軍刺傷吧女案是否撤回捨棄權 檢察官正研究中」『聯合報』1967年3月8日

「酒吧女陳屍大飯店」『中國時報』1973年3月10日

「涉嫌扼斃吧女魯賓遜判五年」『聯合報』1973年8月4日

「台胞抗日史、乃血淚寫成！」『中國時報』1976年10月25日

「台灣基督長老教會對國是的聲明與建議」『台灣教會公報』第1076號、1972年1月

「吧女裸屍案小心求証 周首席指示毋枉毋縱」『聯合報』1972年4月28日

「台灣基督長老教會人權宣言」『台灣教會公報』第1329號、1977年8月21日

「我們的呼籲」『台灣教會公報』第1230號、1975年9月28日

「基督徒的政治責任」『台灣教會公報』第1238號、1975年11月23日

「李喬二二八事件小說將問世」『聯合報』1995年8月3日

「李喬：80万字一半是序言」『中國時報』1995年11月19日

「本土十大好書出爐」『中國時報』1996年1月16日

「逍遙自在孤獨行」『台灣新聞報』2001年5月16日-6月19日

「全國閱讀運動推介六十三本文學好書」『聯合報』2006年4月9日

「首位228受難者家屬首都市長」『自由時報』2015年3月1日

「反黑箱課綱學生夜襲教部衝進部長室」『自由時報』2015年7月24日

[日本語書籍] 原則として著者名の五十音順、同一著者名の中では発表順

赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』東方書店、2012年

安部公房『安部公房全集3』新潮社、1997年

安部公房『安部公房全集16』新潮社、1998年

安部ねり『安部公房伝』新潮社、2011年

飯島宗享・吉澤傳三郎編『文学—実存主義講座VII』理想社、1973年

五十嵐真子『現代台湾宗教の諸相』人文書院、2006年

石崎等編『安部公房「砂の女」作品論集』クレス出版、2003年

伊藤潔『台湾—四百年の歴史と展望』中央公論社、1993年

上杉忍『公民権運動への道』岩波書店、1998年

王甫昌 [松葉隼・洪郁如訳]『族群—現代台湾のエスニック・イマジネーション』東方書店、2014年

大江健三郎『持続する志』文芸春秋、1968年

大橋健三郎『フォークナー研究2』南雲堂、1979年

大橋健三郎『フォークナー』中央公論社、1993年

岡部達味編『中国をめぐる国際環境』岩波書店、2001年

岡本勝『禁酒法』講談社、1996年

尾崎秀樹『近代文学の傷痕』岩波書店、1991年

何義麟『二・二八事件—「台湾人」形成のエスノポリティクス』東京大学出版会、2003年

何義麟『台湾現代史—二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』平凡社、2014年

外務省情報部編『現代支那人名鑑』外務省情報部、1924年

外務省政務局編『現代支那人名鑑』外務省政務局、1916年

川島真『近代国家への模索』岩波書店、2010年

川西政明『新・日本文壇史 10』岩波書店、2013 年

木村陽子『安部公房とはだれか』笠間書院、2013 年

許菁娟『台湾現代文学の研究』晃洋、2008 年

呉濁流『夜明け前の台湾』台北・学友書局、1947 年

呉濁流『ポツダム科長』台北・学友書局、1948 年

呉濁流『アジアの孤児』新人物往来社、1973 年

黄昭堂『台湾総督府』教育社、1981 年

サラ・M・エヴァンズ [小檜山ルイ・竹俣初美・矢口祐人・宇野知佐子訳]『アメリカの
女性の歴史』明石書店、2005 年

史明『台湾人四百年史』音羽書房、1962 年

支那研究会編『最新支那官紳録』北京・支那研究会、1918 年

周婉窈 [石川豪・中西美貴・中村平訳]『図説台湾の歴史 増補版』平凡社、2013 年

ジュリア・クリステヴァ [原田邦夫訳]『記号の解体学』せりか書房、1983 年

ジュリア・クリステヴァ [中沢新一、原田邦夫、松浦寿夫、松枝到訳]『記号の生成論』
せりか書房、1984 年

ジョン・フォークナー [佐藤亮一訳]『響きと怒りの作家—フォークナー伝』荒地、1964
年

菅野敦志『台湾の国家と文化』勁草書房、2011 年

隅谷三喜男・劉進慶・涂照彦『台湾の経済—典型 NIES の光と影』東京大学出版会、1992
年

戴國輝『台湾—人間・歴史・心性』岩波書店、1988 年

台湾総督府警務局編『台湾社会運動史』龍溪書舎、1973 年

高野斗志美『安部公房論』花神社、1979 年

田中久男『ウィリアム・フォークナーの世界』南雲堂、1997 年

谷真介編『安部公房評伝年譜』新泉社、2002 年

- 陳芳明 [下村作次郎、野間信幸、三木直大、垂水千恵、池上貞子訳] 『台湾新文学史
(上)』 東方書店、2015 年
- 陳芳明 [下村作次郎、野間信幸、三木直大、垂水千恵、池上貞子訳] 『台湾新文学史
(下)』 東方書店、2015 年
- 鄭清文・李喬・陳映真 [中村ふじゑ・松永正義・岡崎郁子訳] 『三本足の馬』 研文出版、1985
年
- 永井均ほか編 『事典 哲学の木』 講談社、2002 年
- 中島利郎・河原功・下村作次郎編 『台湾近現代文学史』 研文出版、2014 年
- 西川正身編 『フォークナー』 研究社、1966 年
- 日本ウィリアム・フォークナー協会編 『フォークナー事典』 松柏社、2008 年
- 野沢豊 『辛亥革命』 岩波書店、1972 年
- 平石貴樹 『アメリカ文学史』 松柏社、2010 年
- 廣松渉ほか編 『哲学・思想事典』 岩波書店、1998 年
- フォークナー 『フォークナー全集 5 (響きと怒り)』 富山房、1969 年
- フォークナー 『フォークナー全集 7 (サンクチュアリ)』 富山房、1992 年
- フォークナー 『フォークナー全集 9 (八月の光)』 富山房、1968 年
- フォークナー [高橋正雄訳] 『世界文学全集 45 フォークナー』 河出書房新社、1961 年
- フォークナー [高橋正雄・佐伯彰一訳] 『世界文学全集 41 フォークナー』 講談社、1968
年
- 藤井省三 『台湾文学この百年』 東方書店、1998 年
- 藤野陽平 『台湾における民衆キリスト教の人類学』 風響社、2013 年
- 彭瑞金 [中島利郎、澤井律之訳] 『台湾新文学運動四〇年』 東方書店、2005 年
- 本田善彦 『台湾総統列伝』 中央公論新社、2004 年
- 前田愛 『文学テキスト入門』 筑摩書房、1993 年
- 松田康博 『台湾における一党独裁体制の成立』 慶應義塾大学出版会、2006 年

村松定孝・武田勝彦著『海外における日本近代文学研究』早稲田大学出版部、1968年
森岡裕一『飲酒／禁酒の物語学』大阪大学出版会、2005年
山口守編『講座台湾文学』国書刊行会、2003年
吉本隆明『吉本隆明全著作集4』勁草書房、1969年
若林正文『台湾—分裂国家と民主化』東京大学出版会、1992年
若林正文『台湾抗日運動史研究 増補版』研文出版、2001年
若林正文『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房、2001年
若林正文『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、2008年
渡辺広士『安部公房』審美社、1976年

[日本語論文] 原則として著者名の五十音順、同一著者名の中では発表順

安部公房「砂の女」、安部公房『安部公房全集16』新潮社、1998年
石橋佐代子『『デンドロカカリヤ』論』『名古屋近代文学研究』(第19号、2001年)
磯貝英夫「砂の女」『国文学—解釈と教材の研究』(第17巻第12号、1972年)
ヴラスト・ヴィンケルヘーフェロヴァー [竹田裕子訳]「チェコでの安部公房」『すばる』
(第15巻第6号、1993年)
大江健三郎「安部公房案内」、大江健三郎・江藤淳編『われらの文学7—安部公房』講談社、1966年
大江健三郎「解説」、安部公房『他人の顔』新潮社、1989年
何義麟「戦後台湾抗日運動史の構築—羅福星の革命事績を中心に」、五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における「日本」』風響社、2006年
何義麟「台湾二・二八事件」、和田春樹ほか編『東アジア近現代通史7—アジア諸戦争の時代』岩波書店、2011年

- 何義麟「戦後台湾における検閲制度の確立」『Intelligence』（第14号、2014年）
- 加藤弘一「解説」、安部公房『（霊媒の話より）題未定』新潮社、2013年
- 北川透「メタファーとしての変身」、佐藤泰正編『文学における変身』笠間書院、1992年
- 紅野敏郎『『砂の女』』『国文学—解釈と鑑賞』（第36巻第1号、1971年）
- 蕭新煌「工業化・都市化と社会変動」、戴國輝編『もっと知りたい台湾』弘文堂、1986年
- 周金波「私の歩んだ道」『野草』（第54号、1994年）
- 白井浩司「解説」、カミュ [窪田啓作訳]『異邦人』新潮社、1995年
- 白川正芳「夢の象徴」『ユリイカ』（第8巻第3号、1976年）
- 「台湾基督長老教会について」、日本基督教団台湾関係委員会編『台湾基督長老教会の歴史と苦難』日本基督教団、1982年
- 「台湾基督長老教会の受難2」『福音と世界』（第35巻第8号、1980年）
- 「台湾基督長老教会の受難4」『福音と世界』（第35巻第10号、1980年）
- 高野斗志美「新たなコンセプトによる作品案内」『国文学—解釈と教材の研究』（第42巻第9号、1997年）
- ドナルド・キーン「解説」、安部公房『砂の女』新潮社、2003年
- 陳正醜「台湾における郷土文学論戦」『台湾近現代史研究』（第3号、1981年）
- 陳正醜「台湾における『中国意識』と『台湾意識』—最近の文学・思想界での論争を中心に」『中国研究月報』（第439号、1984年）
- 陳培豊「台湾の文学と歌謡」『中国21』（第36期、2012年）
- 鄭兪玉「台湾のキリスト教」、呉利明ほか『アジア・キリスト教史1』教文館、1981年
- 沼野充義「辺境という畏」『すばる』（第15巻第6号、1993年）
- 沼野充義「世界の中の安部公房」『国文学—解釈と教材の研究』（第42巻第9号、1997年）
- 檜山幸夫「台湾初期統治の歴史的問題について—台北保良局設置条件の分析とその日本植民地統治上における意義」（『史叢』第19号、1976年）

平岡篤頼「安部公房における小説の方法と文体」『国文学—解釈と教材の研究』（第 17 巻
第 12 号、1972 年）

松崎寛子「鄭清文『旧金山一九七二』における在米台湾人留学生表象」『東方学』（第 122
輯、2011 年）

松永正義「『中国意識』と『台湾意識』—揺れ動く中国/台湾イデオロギーの構図」、若林
正文編『台湾—転換期の政治と経済』（田畑書店、1989 年）

三木直大「解説」、李喬 [岡崎郁子、三木直大訳]『寒夜』国書刊行会、2005 年

三尾裕子「〈鬼〉から〈神〉へ—台湾漢人の王爺信仰について」『民族学研究』（第 55 巻第 3
号、1990 年）

ミコワイ・メラノヴィッチ「『砂の女』を再読して」『すばる』（第 15 巻第 6 号、1993
年）

武者小路実篤「八百人の死刑」、武者小路実篤『武者小路全集 3』（小学館、1988 年）

山口守「書評 李喬著三木直大・明田川聡士訳『曠野にひとり（李喬短篇集）』」『植民地
文化研究』（第 14 号、2015 年）

楊逵「一台湾作家の七十七年」『文芸』（第 22 巻第 1 号、1983 年）

「【李昂インタビュー】台湾のフェミニズム文学」、李昂 [藤井省三訳]『夫殺し』宝島社、1993
年

若林正文「語られはじめた現代史の沃野」、鄭清文・李喬・陳映真 [中村ふじゑ・松永正
義・岡崎郁子訳]『三本足の馬』研文出版、1985 年

[英語文献] アルファベット順

A-chin Hsiau, *Contemporary Taiwanese cultural nationalism*, London ; New York, Routledge,
2000

David Der-wei Wang, *The monster that is history : history, violence, and fictional writing in twentieth-century China*, Berkeley, University of California Press, 2004

Kuo-ching Tu and Terence Russell (eds.), *Taiwan literature English translation series 36*, Santa Barbara, US-Taiwan Literature Foundation, 2015

[学位論文] 著者名の五十音順

王志仁「台湾客家小説移民書写之探究—以吳濁流、鍾理和、鍾肇政、李喬作品為例」高雄
・国立高雄師範大学客家文化研究所修士論文、2009年

高幸玉「日本小説在台湾的翻譯史」、台北県・輔仁大学翻譯学研究所修士論文、2004年

黄琦君「李喬文学作品中的客家文化研究」新竹・国立新竹師範学院台湾語言與語文教育研究所修士論文、2003年

黄小民「歴史的謊言・郷土の眞実—李喬小説創作研究」台北・中国文化大学中国文学研究所博士論文、2012年

李惠珍「美国小説在台湾的翻譯史」台北県・輔仁大学翻譯学研究所修士論文、1995年

林吉洋「敘事與行動—台湾客家認同的形成」新竹・国立清華大学社会学研究所修士論文、
2007

楊素萍「李喬『寒夜三部曲』之客家女性形象研究—以葉灯妹為核心」台中・国立中興大学台湾文学研究所修士論文、2010年

[インターネット文献] 原則として五十音順

「心靈的尋索、文学的旨趣—文学大師の信仰対話：李喬與宋澤萊」、「台湾教会公報新聞

網」

<http://www.tcn.org.tw/news-detail.php?nid=6831> (2016年7月4日アクセス)

「第十屆國家文藝獎得主 (2006 年) 小說家／李喬 得獎理由」、「財團法人國家文化藝術基金會」

http://www.ncafroc.org.tw/award-history.asp?Prize_year=2006&Prize_no=%A4Q (2016年7月4日アクセス)

林濁水「【鄉巴佬異芸錄】十、 遮在 228 和平運動上的菁英面紗」、「想想論壇」2013年5月10日

<http://www.thinkingtaiwan.com/content/790> (2016年7月4日アクセス)

[映像資料]

李喬『長篇小說自剖』台北・台大出版中心、2009年